

奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

8月号

スミエヤ 錦語の隠微とその断面
緊縛フォト撮影の実際 亀甲縛りの一例



奇譚クラブ

KITAN CLUB

8



定価 百五十拾円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseiaya

Osaka Japan



**限定版
特別号**

マブヒズム特集号

美女にしいたげられ、佳人に騎乗され、麗人に責められる男の姿。マゾストの見果てぬ夢を、ズバリ具現する画筆の牙えとレンズのリアルさ……。

|| 卷頭豪華口絵 ||
マゾヒスティック画廊

滝
れい子・画

グラビア・フォト・セクション

“マゾ・フォト・ギャラリー”

ドミナのポーズ
怠慢奴隷譴責

室内黒に好適

珍 璧 出 現
ドミナの専門マツト
スナツプ集

服従の宣誓

絢爛マソ読物満載

マニアを驚喜させ、熱狂させたマゾヒズム小説の真髄。美女の足下に悶えながら幸福感に酔い痴れるマゾ男性の生態を描き出した数々の問題作……。

二百字讃歌……………真砂十四郎
あわれ誠一郎……………日文卅古六
浦島の能見……………出入 言男

美しい暴君……………馬族……………保

あるマゾ男の告白……………才 昭吾

幸福なる隷属の告白……………鐘坊

祭壇に君臨する脚……………馬族 保

ガイナスの重石……………真砂十四郎

囚獄の思ひ出…………… 真木不二夫

実験室にて……………角田 平八

牛乳風呂の饗宴……………馬族 保

サジズムの女……才 昭吾

被虐哀歎……………真金鑑次郎

挿絵・カット……北原純子、杉原虹児



第二口絵

- 1 大曳きショール
2 鬼畜の鎖
3 耐苦のハシゴ
4 墓地に揺れる奴鼠
5 迫り来る涼簾器
6 木立ちの中の囚女
7 畑に咲いた麗顔
8 非情の鞭
9 電灯に揺れる苦悶
10 回転木馬
11 刺青される女
12 苦悶の宙吊り
13 アクロバチスト急進
14 恐怖のコンクリート部屋
15 空倉庫の怪事
16 暴虐の部屋

- 17 屏風の幸哉
18 古紐との闘い
19 受難の麗顔
20 変形舞踏 棒縛り
21 消えぬ灯
22 森の精
23 強まりゆく痛覚
24 迫り来る羞恥
25 妻と
26 姐と
27 組われる英囚
28 車中のもがき
29 踏みにじられる女
30 ハンモック椅子
31 耐苦の座褥
32 蠟燭と蠟肌

表紙裏 第二表紙 第三表紙 姫君登壇之図 新製品苛慮機

第二表紙 燈君囃子之図
第三表紙 新製品苛慮機

新製品苛慮機

大阪市阿倍野郵便局
私書面第十四号
天 星 社
振替口座 大阪五〇〇四二番



絢を競う艶姿115ポーズ

限定版特別号 第三弾!

『緊縛写真グラフ集』

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

画題「縛り人形」

絹川文代
花坂道子

◎豪華な内容とモデル陣◎

巻頭裸身緊縛一頁大扉

ながしめ……………絹川文代

荒縄全裸緊縛……………大塚啓子

落ちた腰巻九態(野外)

円い乳房……………愛川悦子

浴室におびえて九態……………愛川悦子

縄の陶酔……………絹川文代

恍惚境悦虐の末……………絹川文代

いためられた乳房……………桜井葉子

耐えられる?……………桜井葉子

月経帯の強制二態……………大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態……………大塚啓子

全裸悦虐態……………大塚啓子

白痴美の誘惑……………大塚啓子

はねかえす縄……………大塚啓子

うろう許して……………大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて

六態……………大塚啓子

優姿ハダカ縛り……………絹川文代

忘却の彼方……………絹川文代



股間縛り背正面二態……………絹川文代

捕われの麗人二態……………絹川文代

湯責め一態……………大塚啓子

浴室にて責める四態……………大塚啓子

何にをしようと言うの……………桜井葉子

新人替態集八景……………桜井葉子

いじめぬく二態……………絹川文代

メンスパンドの猿轡……………絹川文代

観念横臥の図二態……………絹川文代

変形手足しぼり四態……………愛川悦子

裸身をさらして六態……………愛川悦子

豊満くらべ九態……………桜井葉子

亀甲縛り正背面二態……………愛川悦子

怨めしき縄目二態……………大塚啓子

後手首腰縄四態……………大塚啓子

新人緊縛ポーズ集六態……………桜井葉子

隅から隅まで四態……………愛川悦子

鏡面万華模様(裏と表)……………愛川悦子

四十項目 百十五ポーズ

限定版特別号、第一弾!

『緊縛フォトアラベスク』

略号(あらべすく) 特価 五百円

△収載内容△二十六項目、写真七十七葉

1、鏡……………愛川悦子

2、銘花二輪……………花坂道子

3、鉄鎖……………大塚啓子

4、諦観……………大塚啓子

5、庭園にて……………絹川文代

6、謎の微笑……………田中芳代

7、田中悠子表情集(一)

8、誇る脚線美……………田代悠子

9、この足どうかしら……………田代悠子

10、裏と表と……………愛川悦子

11、落陽の丘……………愛川悦子

12、ポリウムの花園……………大塚啓子

13、緊縛美の綾……………大塚啓子

14、奔放な肢体……………大塚啓子

15、鏡台と腰巻……………花坂道子

16、腰巻と鏡台……………花坂道子

17、奇妙な休憩……………絹川文代

18、田代悠子表情集(二)

19、脱がされた高手小手……………愛川悦子

20、亀甲縛り……………愛川悦子

21、吊責折檻……………村井知可子

22、立木縛り……………村井知可子

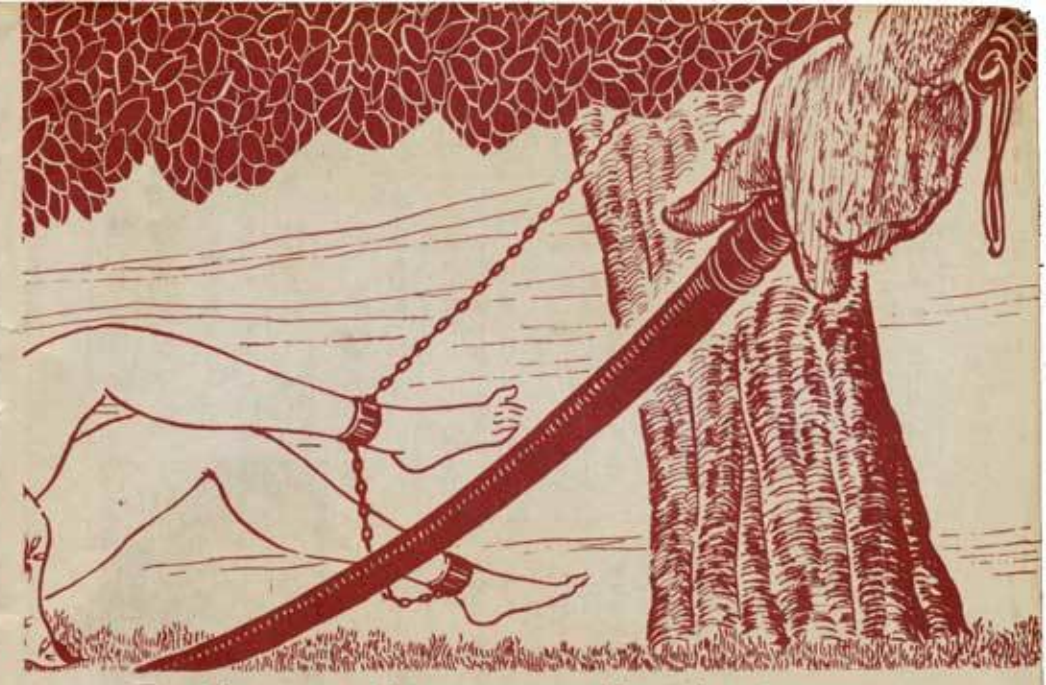
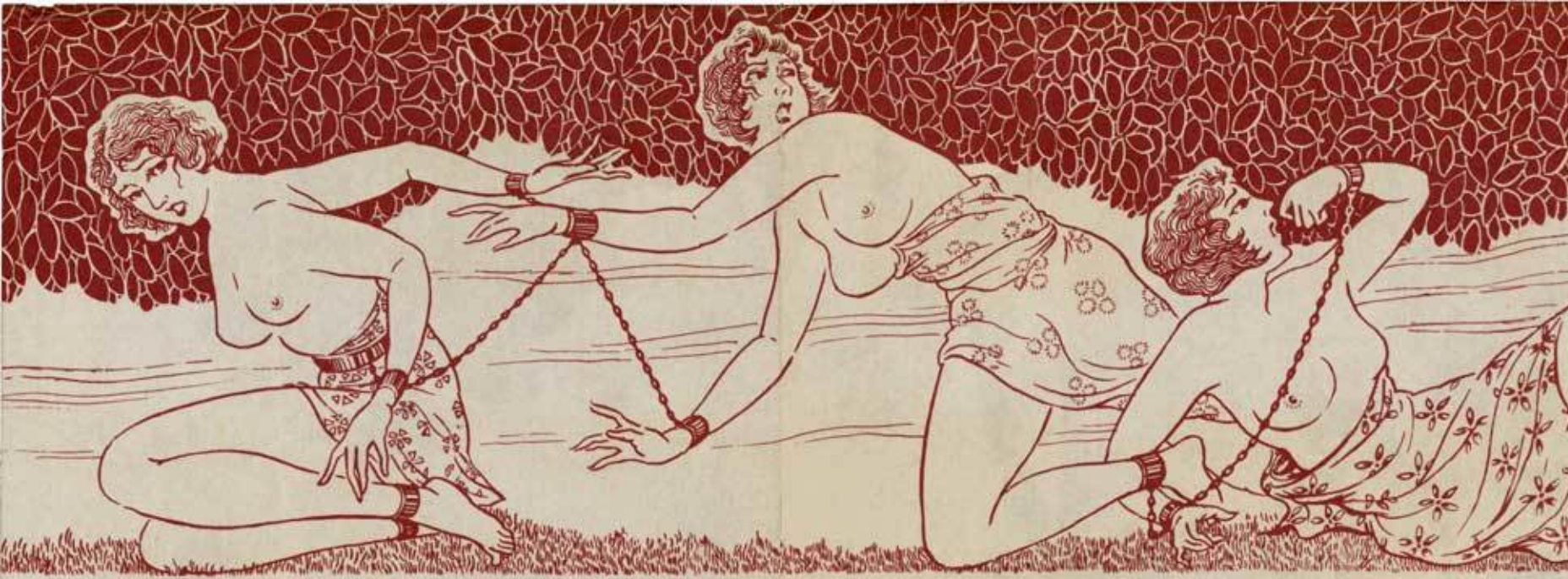
23、豊醇……………愛川悦子

24、乱れ髪三景……………大塚啓子

25、椅子と絨緞……………愛川悦子

26、俎上の美鯉……………絹川文代

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います)



奇譚クラブ 八月特大号 目次

目次裏：「当世風流川柳選」……佐保忍・作 滝れい子・画

第一グラビヤ

春 愁……相川文代	耽 溺……大塚啓子
陰 騷……大塚啓子	虞囚の強制診断……桜井葉子
美富三十五号の觀察……相川文代	座敷牢の麗 軀……梨花悠紀子
ホールのさらしもの……山路ミヨ子	オシメカバの悪用……大塚啓子
激痛に耐えて……四方清美	

第一口絵

相對死（あいたいじに）……滝れい子・画
オフィスガールの残業……四馬 孝・画
庭池に咲いた一輪の花……四馬 孝・画
新刀の試し斬り……牧 高志・案 滝れい子・画
馬乗りグラマと人事課長……滝れい子・画
実験用チュウチュウとウサちゃん……南村俊平・画
遠藤春一画廊
「ビジネス・ガールのアパート」……御用聞と女子大生
「トクホン強盗現わる」

雨装束とチューリップ……梨花悠紀子	落花一輪……梨花悠紀子
-------------------	-------------

第二グラビ

喘ぐ柔肌断片……大塚啓子	ハンガーを用いての縛り経過……東浦ひかる
女性切腹 連続ポーズ……梨花悠紀子	「楽しき奉仕」……足下の悦楽」
女体逆吊り図絵……梨花悠紀子	滑車宙吊り……梨花悠紀子

色 頁 緊縛フォト撮影の実例	塚本鉄三
第二口絵「亀甲縛りの一例」	

奇態体験小説「J」……（まんじ）	正宗五郎
アブへの通歴「鼻責めの道程」	辻村 隆
懸賞告白入選作「白豚」	交野 弘
告白「口を聞く犬」	左江木 勝
女斗美小説「夢の闘舞夫人」	圓山景三
告白隨筆「魅惑の灸痕」	水木清一
告白「白と緑と」	小島洋一郎

奇クサロン

平和時代と攻撃的意欲の充足	「私を責めて下さい」に応えて
おムツにまつわる手記	絵物語習作二題（可憐な動物）
「マニヤの散歩記」	通信マゾ・モデル志願
いよいよあらわれた妊娠ストリップ	連作倉庫に隠われて
大塚啓子嬢の亀甲縛り札賛	家出娘の売買
鼻責めによる被虐体験報告	映画通信若者のすべて
伊藤晴雨翁を偲んで	好色一代男（少年時代）
江戸時代の女責考	白足袋狂楽について
	KK四月号を手にして
	馬化 狂 通 信
	（ふんどし）

連載小説「狩獵者」（第八回）	佐度 槐
告白小説「ママと私」	主田良江
連載小説「宇宙のどこかで」	佐治麻造
アパート残酷記	水田真紀子
告白「女学生を組数く」	三隅千恵子
誌上紙芝居「被虐花」	越野春夫
禪 夢 譚	柳井敬子
告白「縄と猿轡」	川端多奈子
蒼い廃墟「白い女家具達」	氷見龍也
女斗美給巻シリーズ第2「稽古場の女力士」	雪崎京人
告白「切腹心中体験記」	大竹武雄
創作「和解」	市川 透
当代表女武勇列伝	諸岡堅雄
愛好者の記録	とやま・かづひこ
川端多奈子を想う	近藤 一
奇譚クラブ既刊号総目次	
読者通信	

當世風流 川柳選

佐保忍作
淹れい子玉



心中は切腹にきめ胸はだけ

夕立
見はし
折ッ

村芝居
おしづの陰

影の
絵に※

※金切声の悲鳴出し

怖
いもの見たさに

誠胆会

灸院の※

田舎に

※赤い
ワンピース

吊責

色は
がえ

裾乱し

会社では威張る
家でいじめられ

餘韻の陰微とその断面

構成 塚本鉄三



春 愁

絹 川 文 代

大塚 啓子



耽

溺
(たんでき)





陰

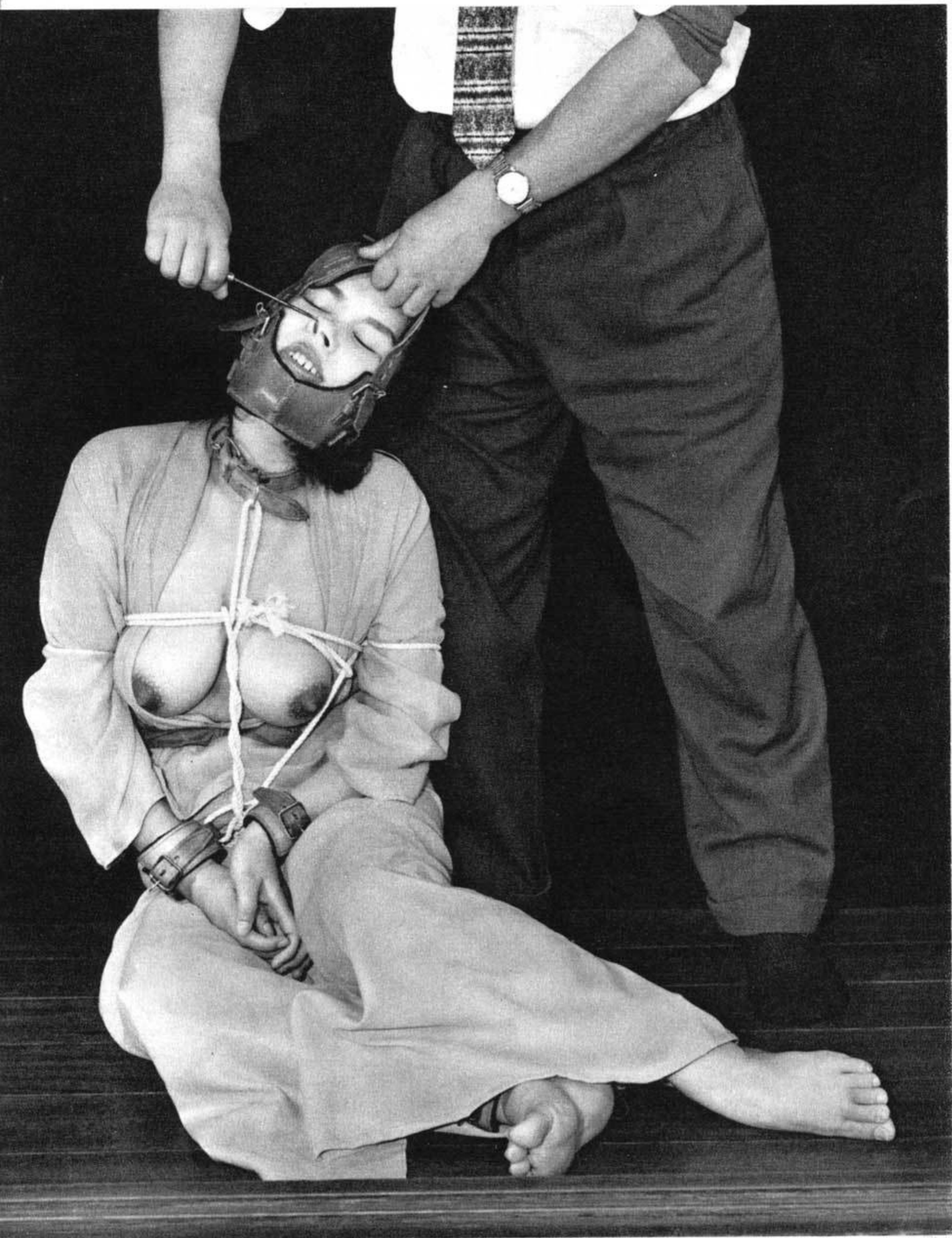
翳 (いんえい)





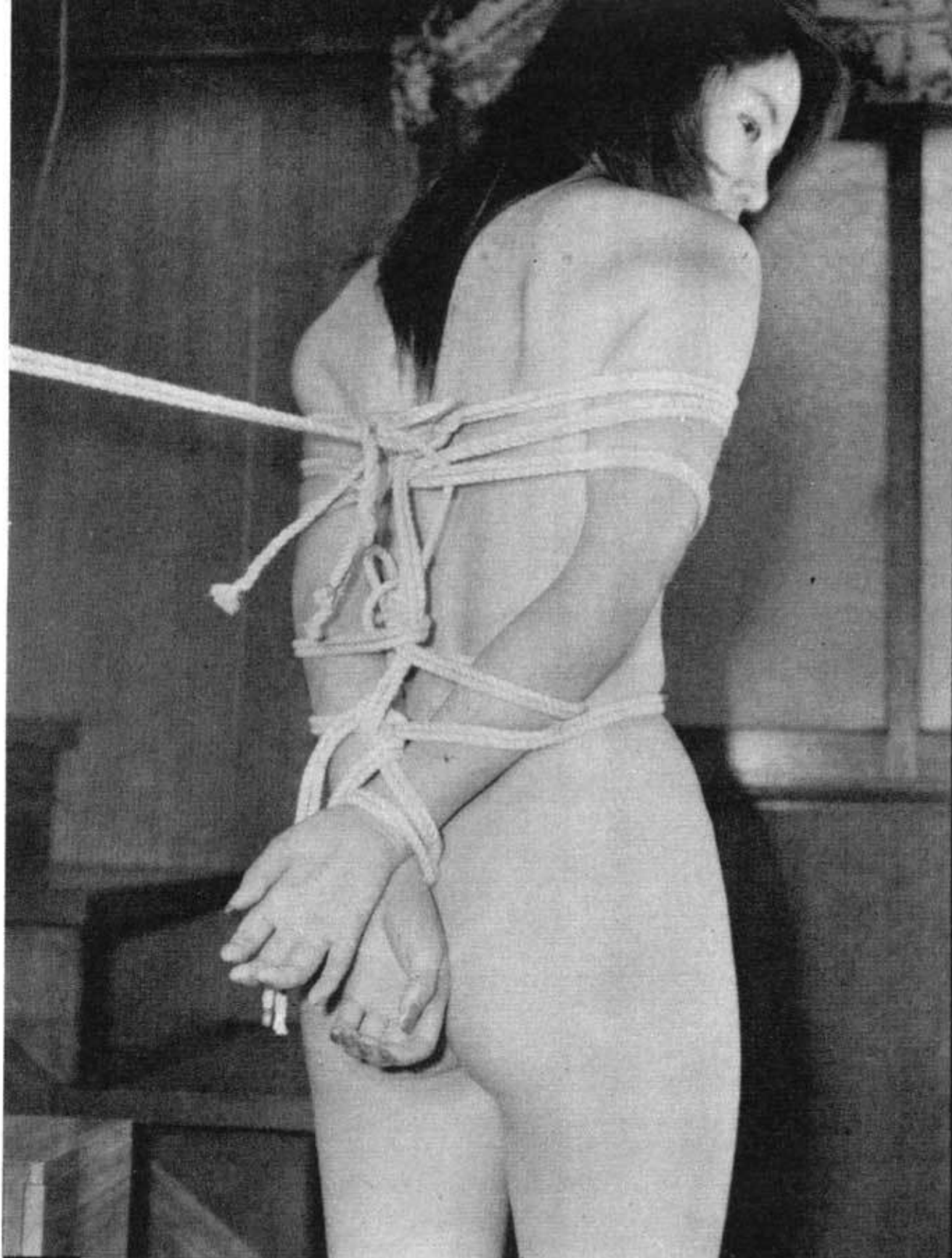
虜囚の強制診断





桜井葉子

美畜第三十五号の観察



絹川文代



麗 軀 の 牢 敷 座





梨花悠紀子



ホールのさらしもの

山 路 ミ ヨ 子





オシメカバの悪用



激痛に耐えて





相 対 死

あ い た い じ に

所詮生きて添われぬ二人の仲、腹を切った
そなたの後を追って、妾も深く自害し果て
よう。



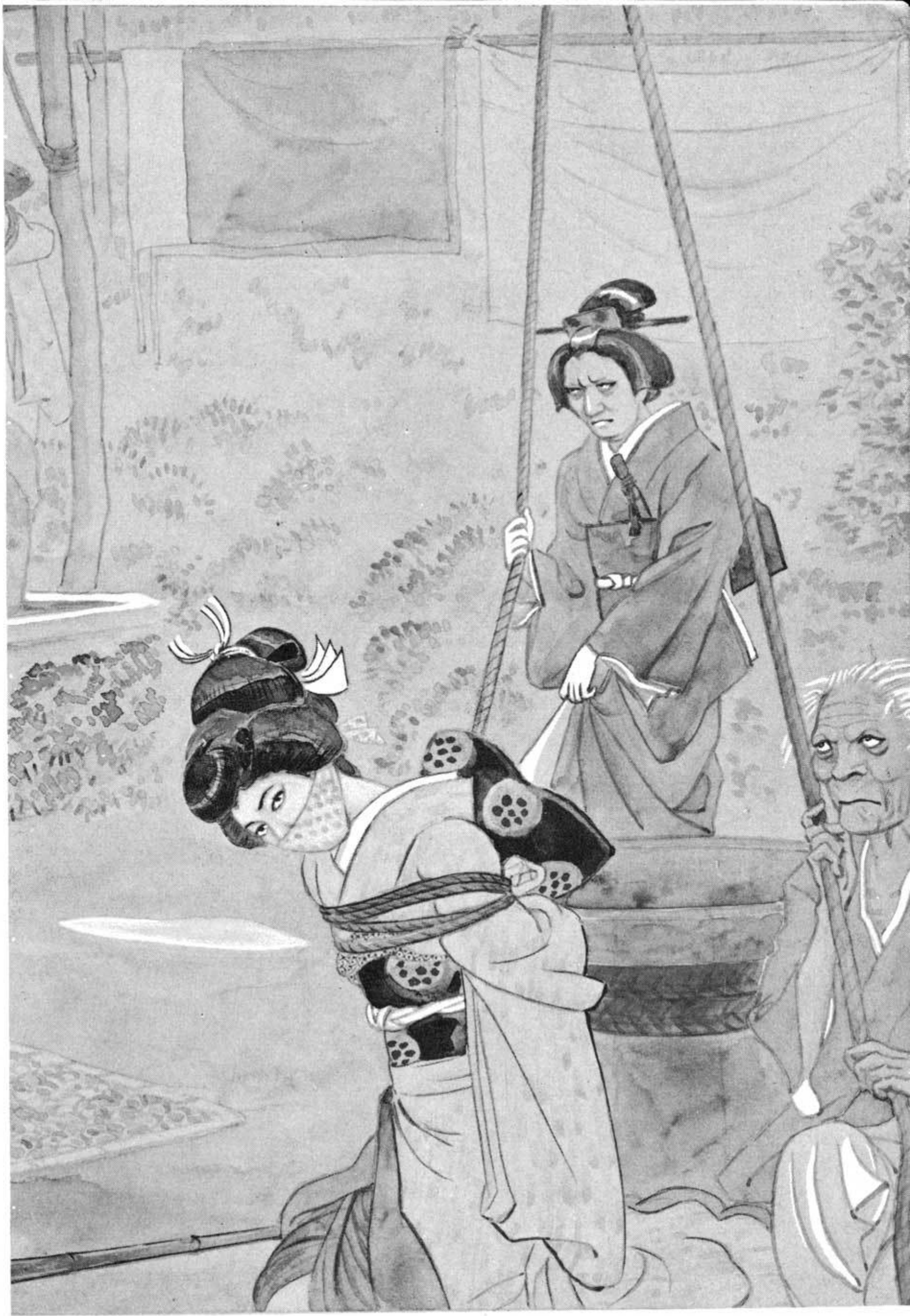
オフィス・ガールの残業

思いもかけぬ彼女の受難の一日。その日の残業が、こんな結果になろうとは。

庭池に咲いた一輪の花

池に浮かんだ美しい浮袋一つ、そこに咲いている花は、
今にも消えいりたげに可憐だった。





(殿お待ちかねの新刀二振りが出来たので腰元二人を試し斬りにするところ)



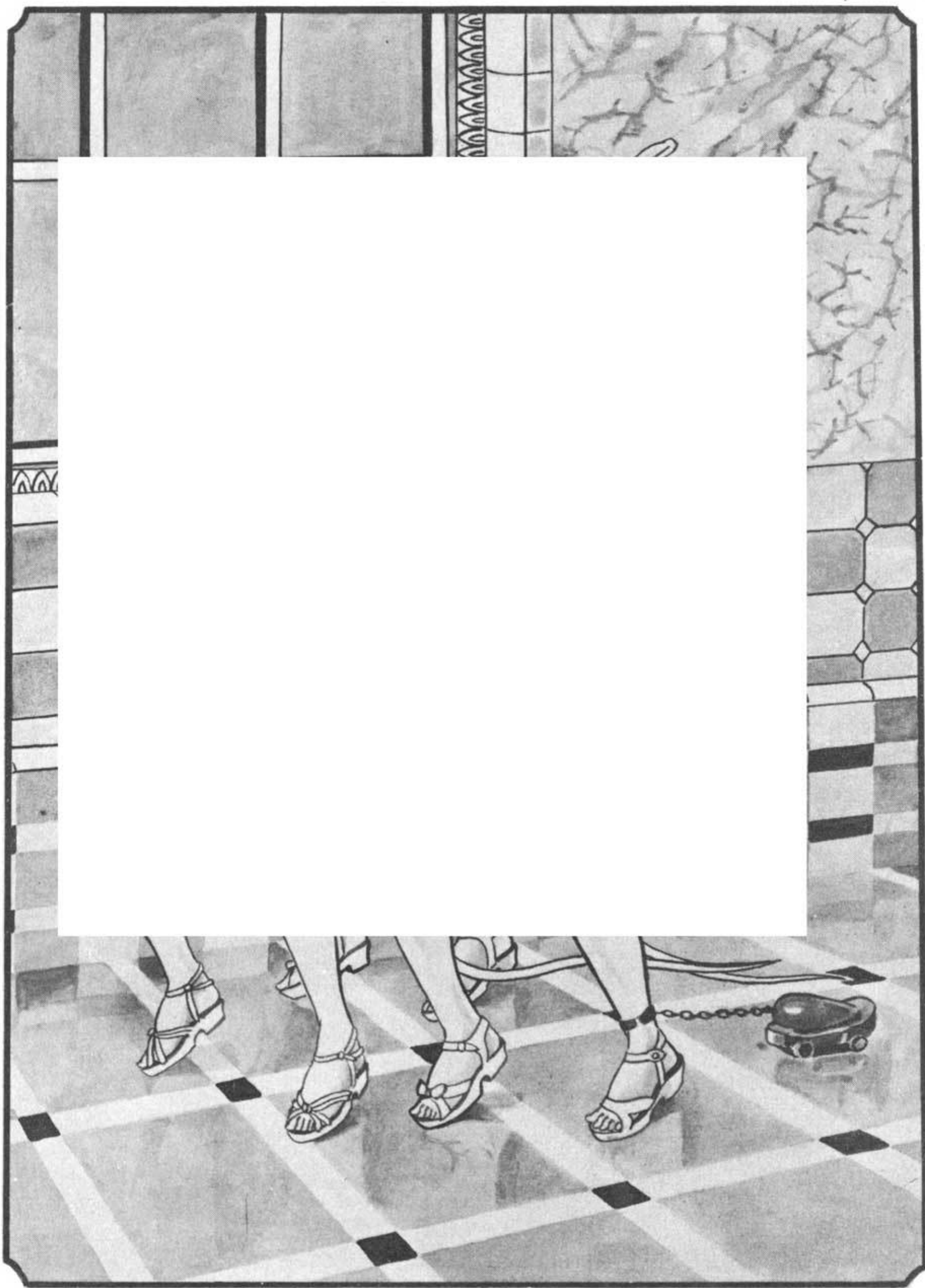
新刀の試し斬り

牧高志 案. 滝れい子・画

馬乗りグラマと人事課長

「もう私を餌にするなんて事は絶対に言わないわね」





遠藤春一画廊

ビジネス・ガールのアパート



御用聞と女子短大生



トクホン強盗現わる

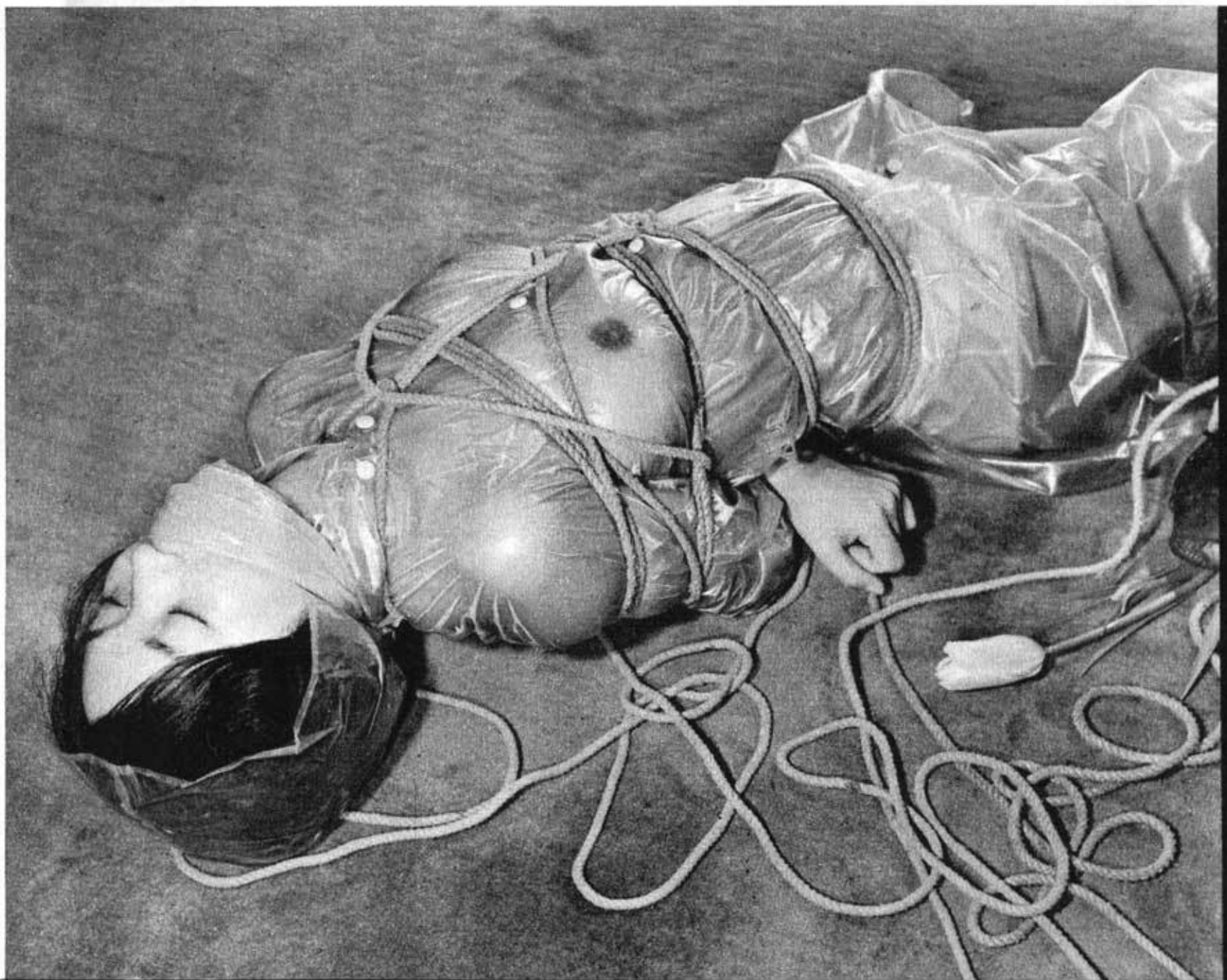
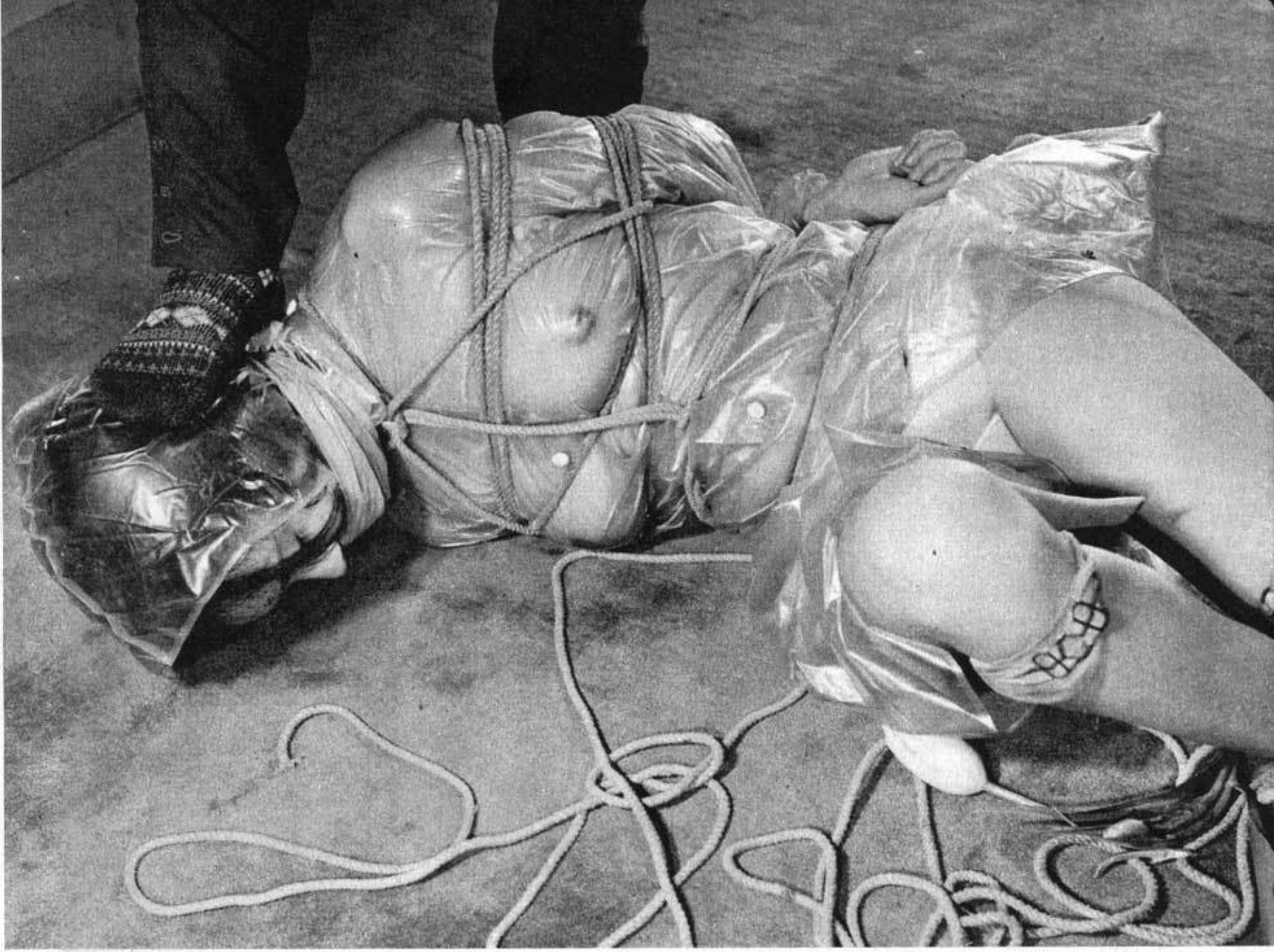


雨装束とチューリップ

構成 辻 村 隆



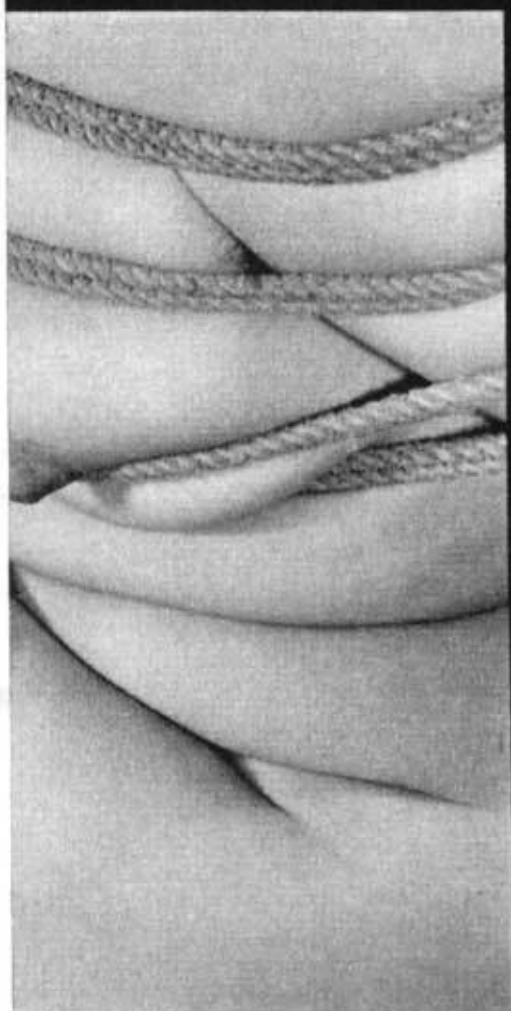
梨花悠紀子



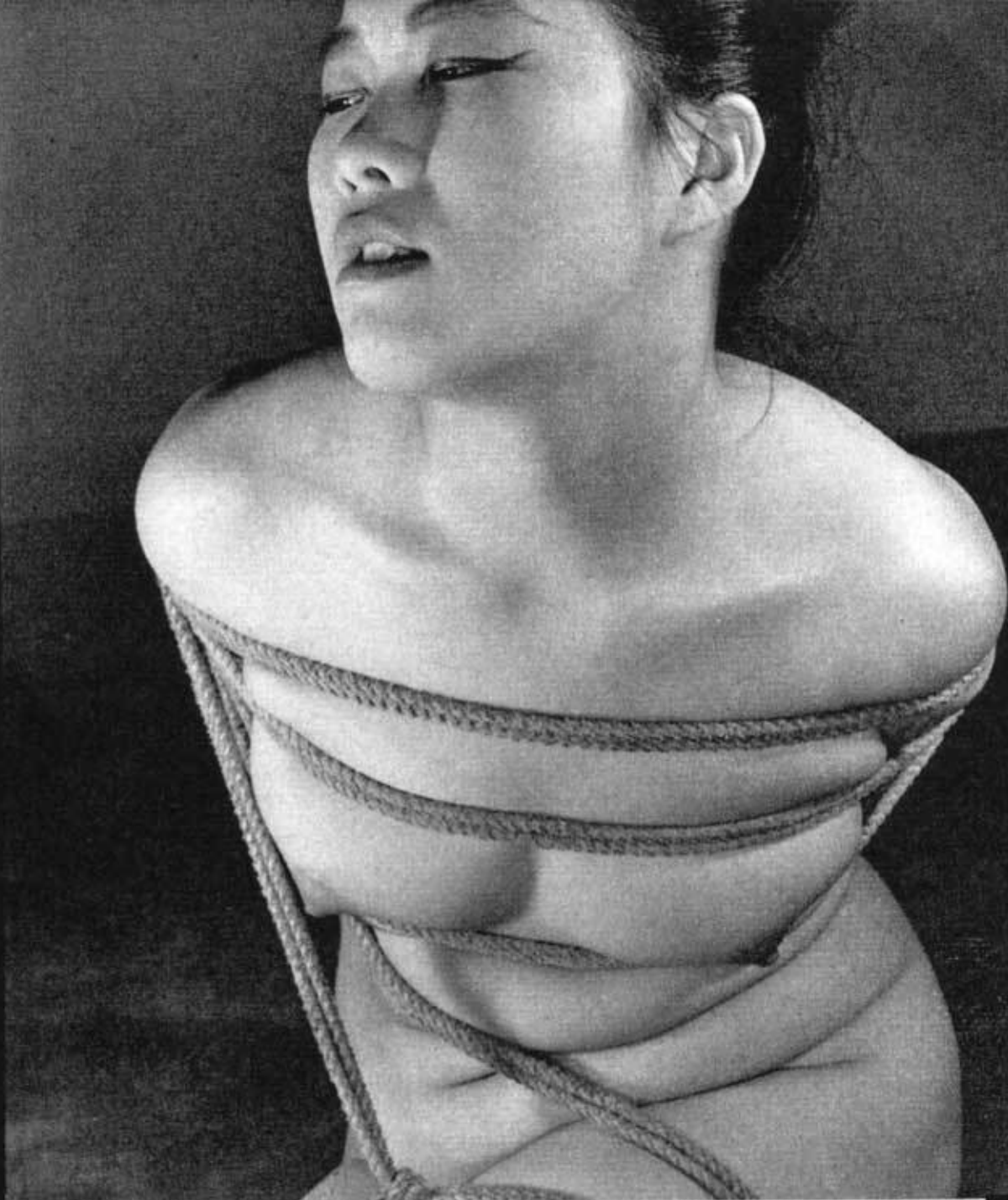
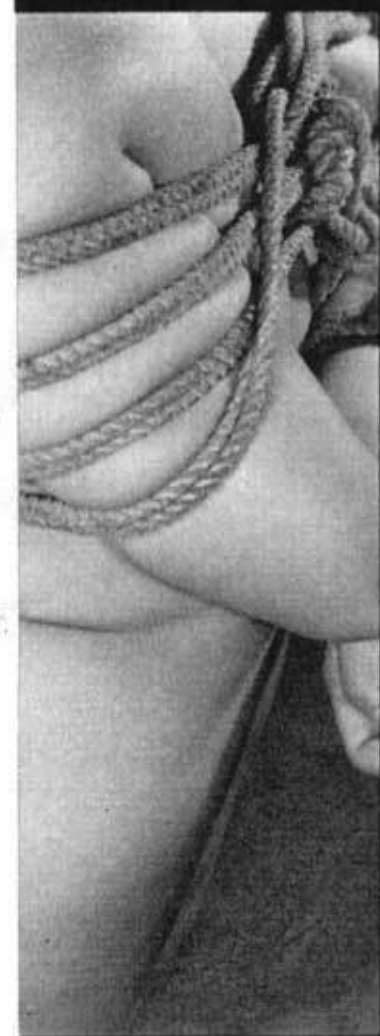
落花
一輪



梨花
悠紀子



肌断片



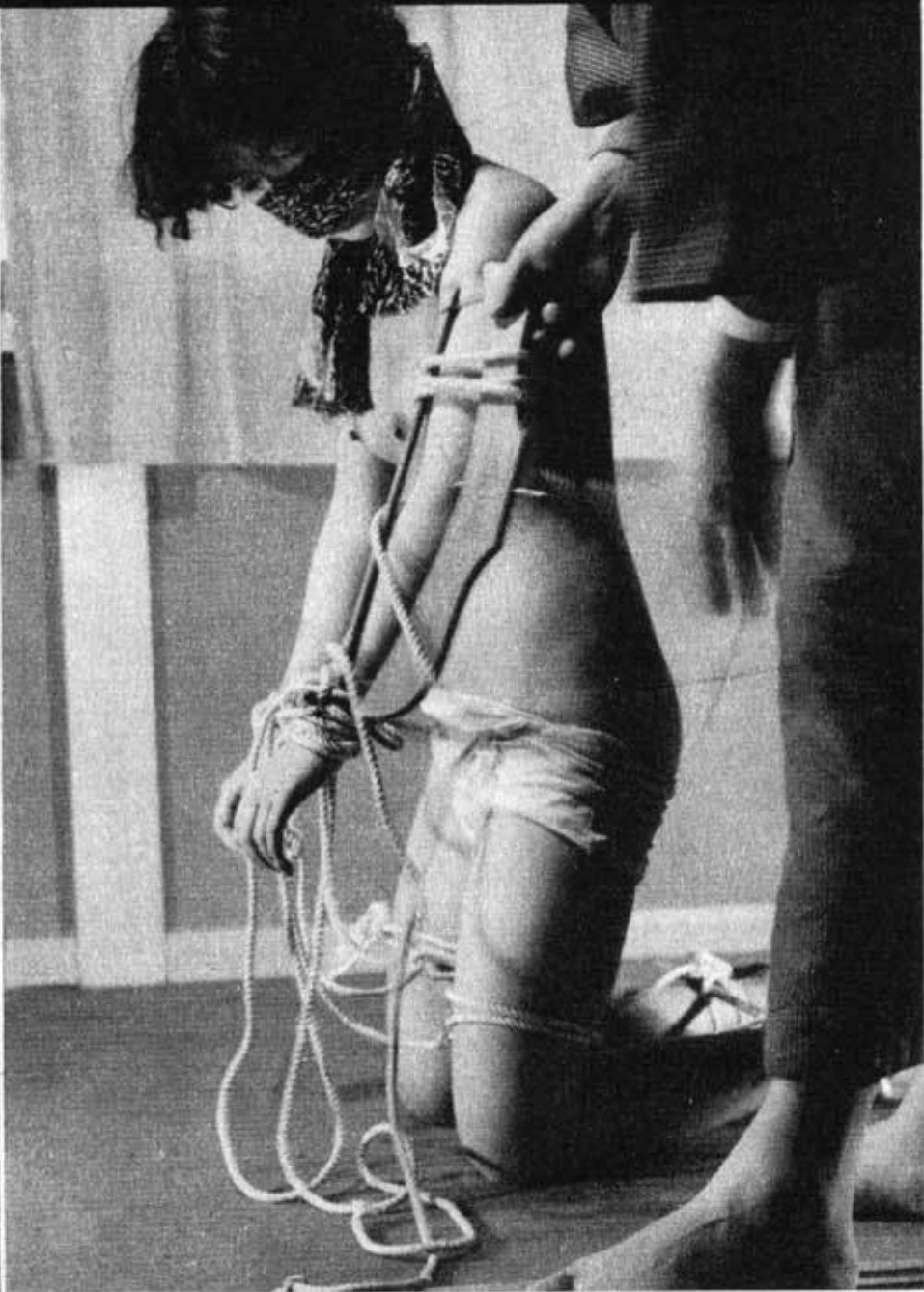
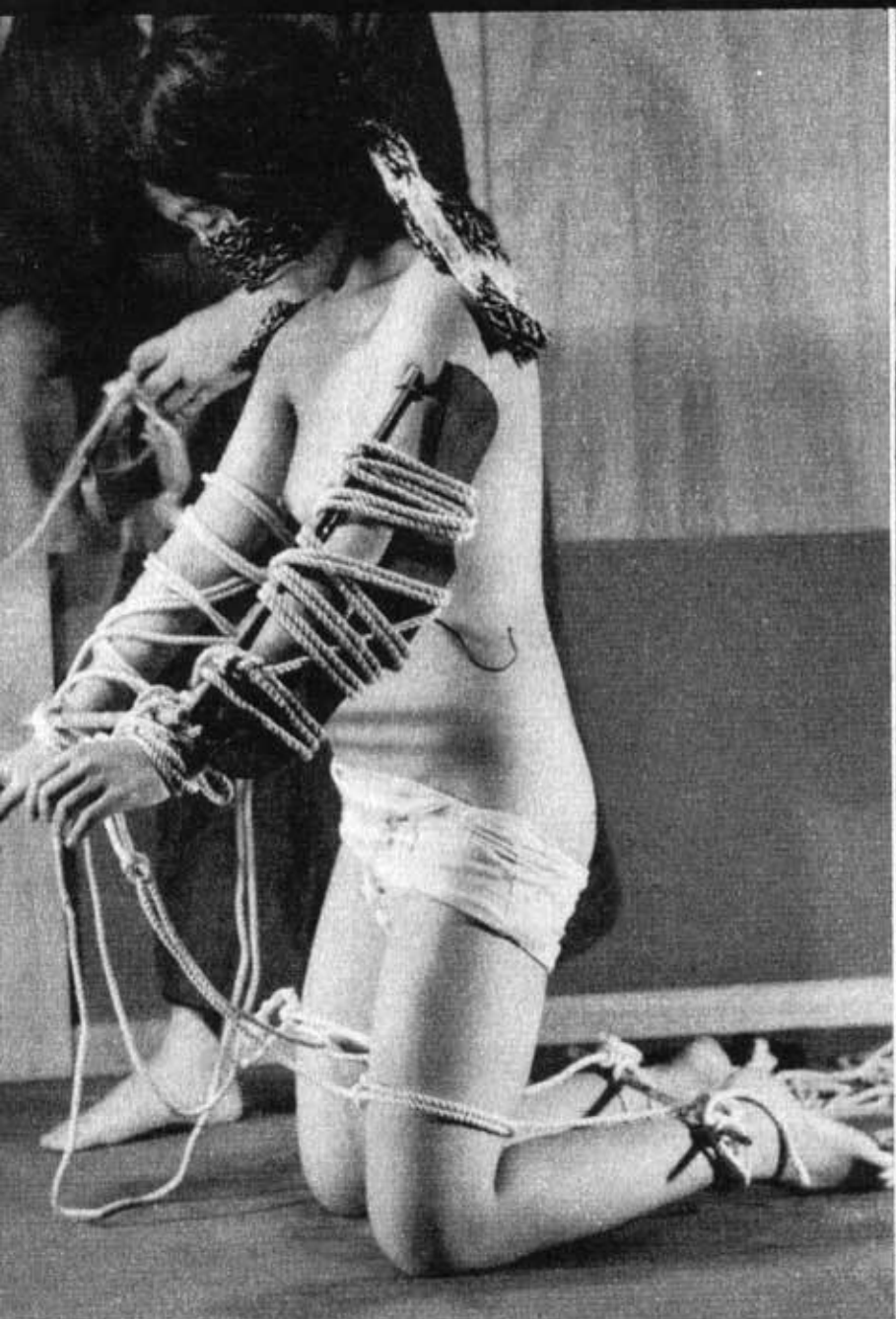


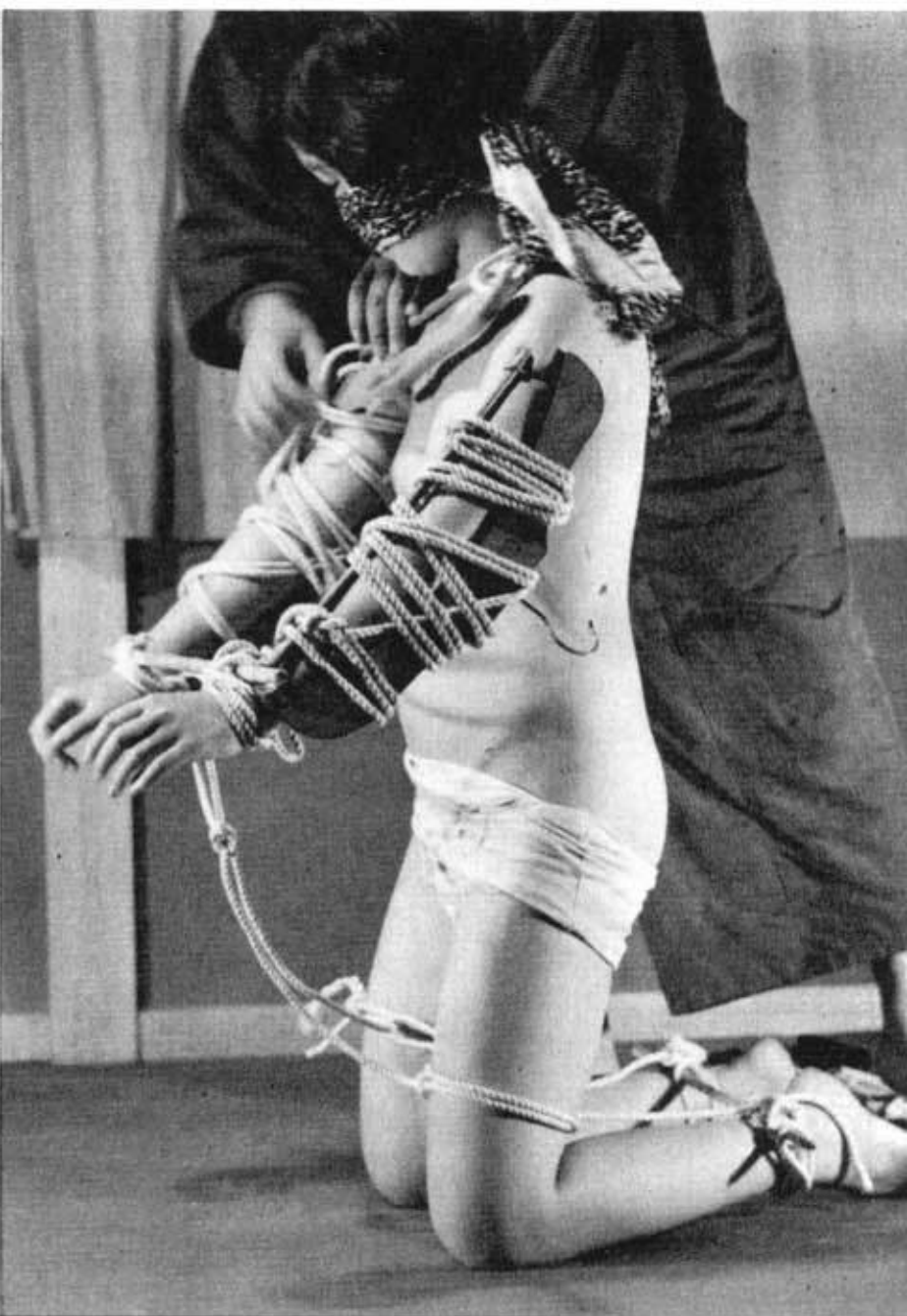
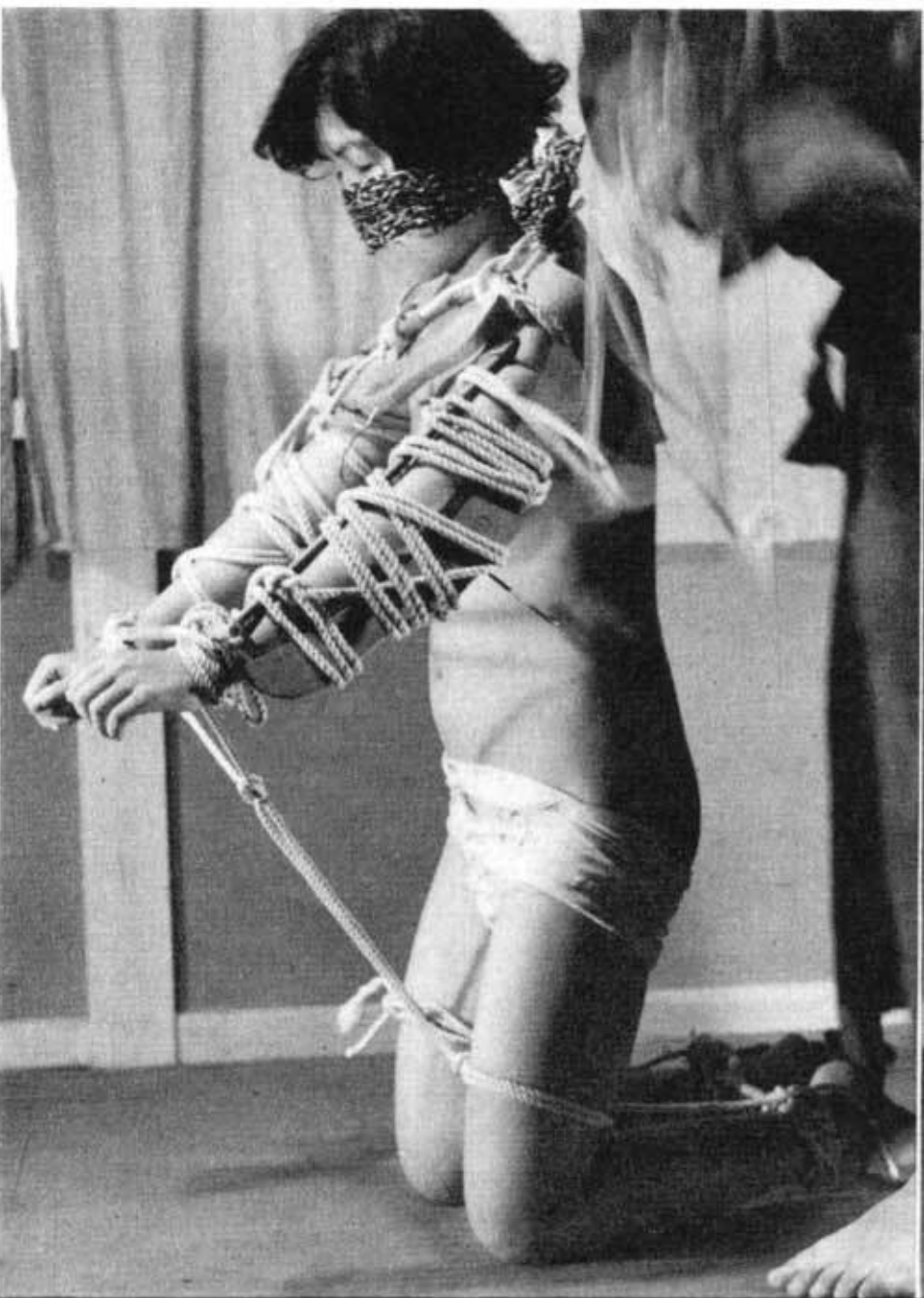
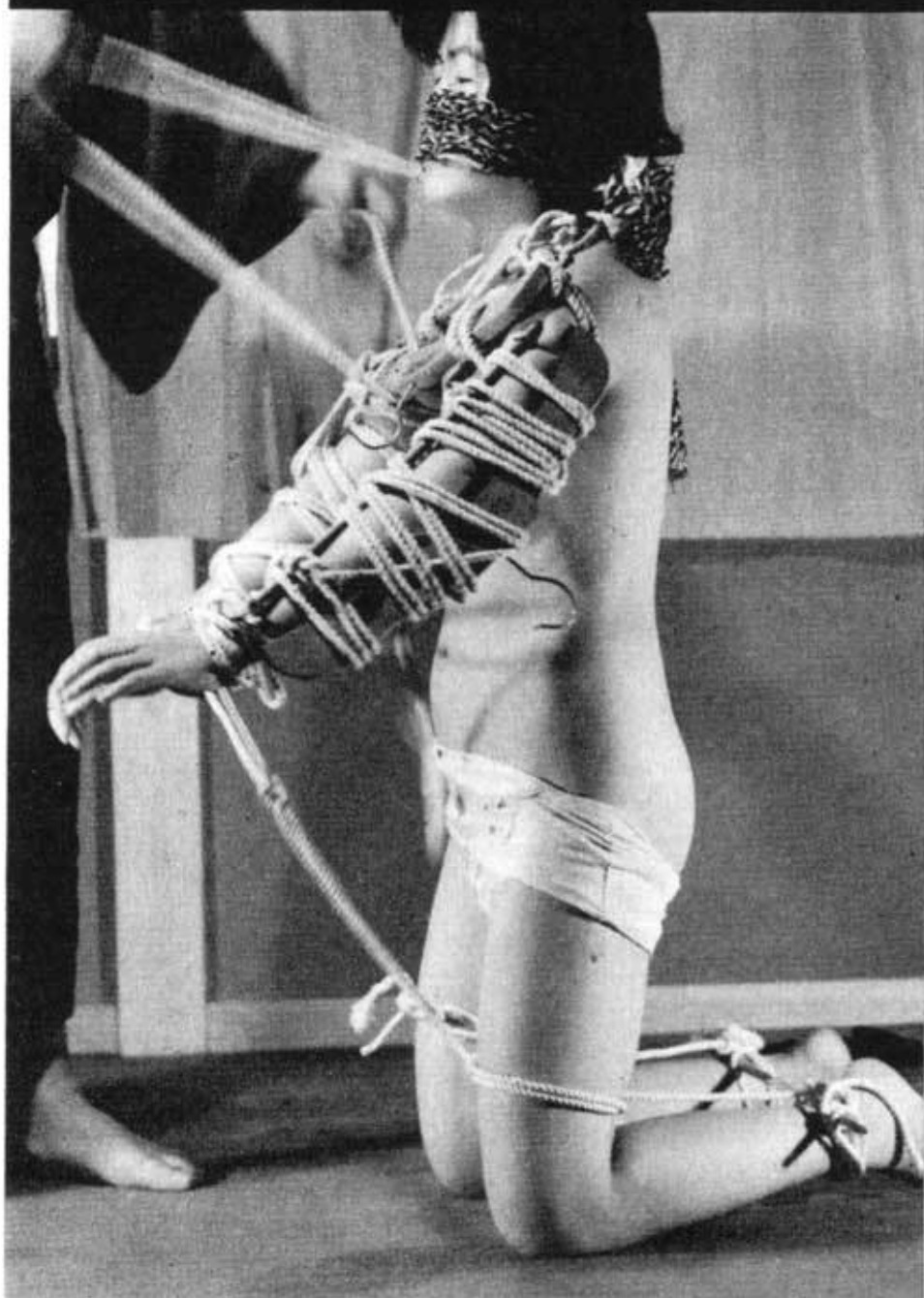
喘ぐ柔

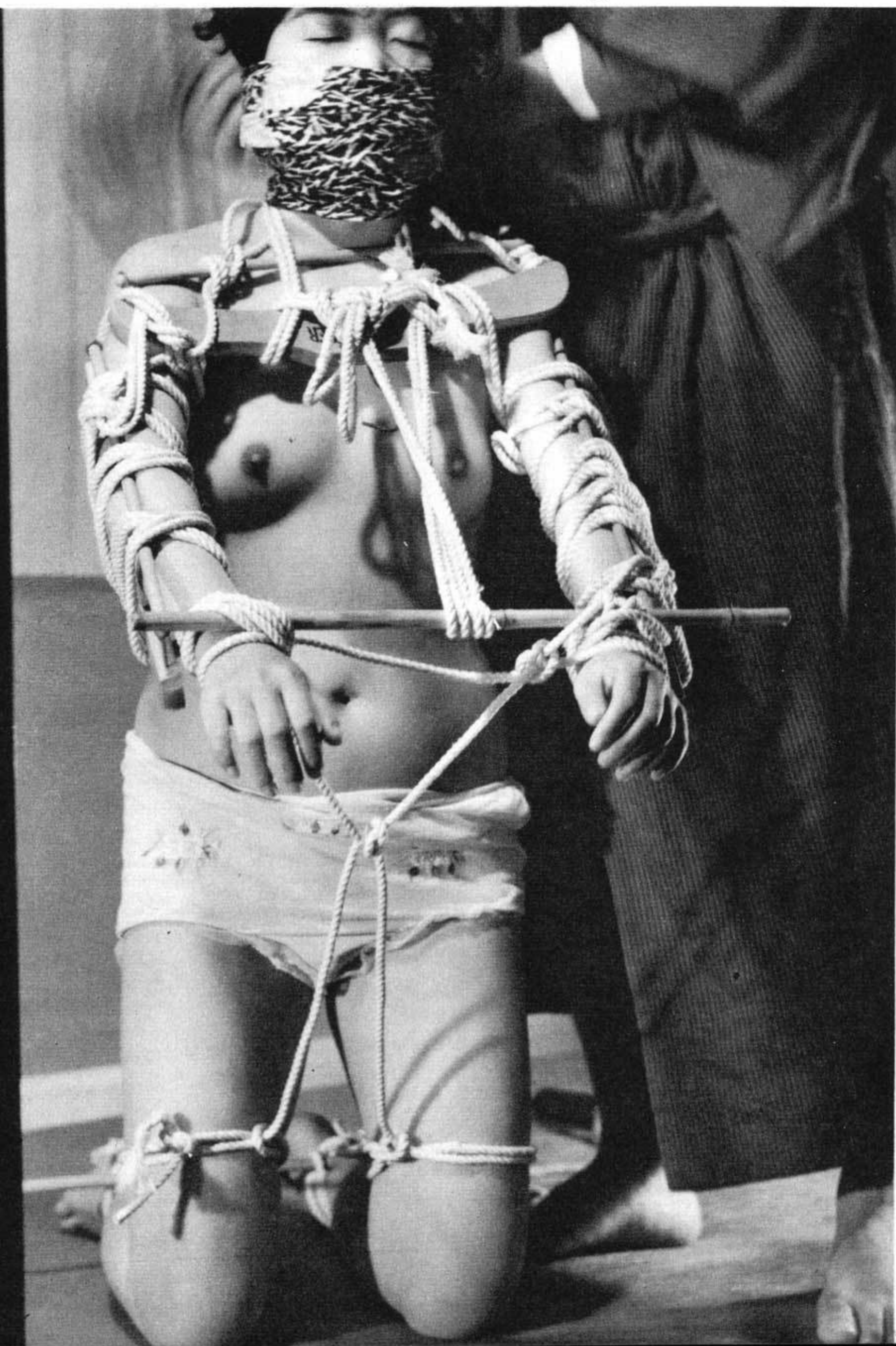


ハンガーを用いての縛り経過









女性切腹連続ポーズ

左脇腹へぐさりと短刀を思いきり突き立てる



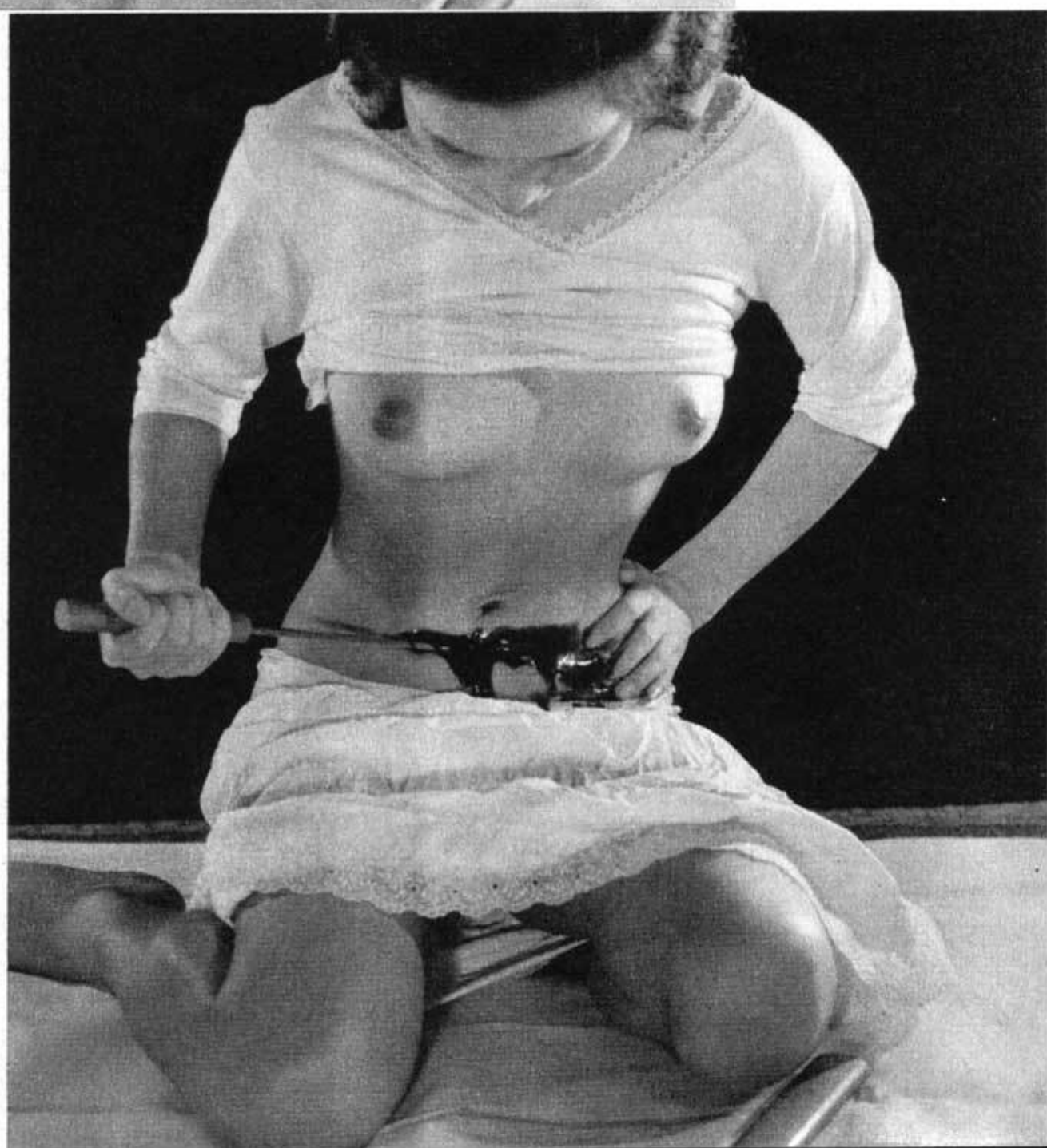
右へじりじりと臍下まで切りさばき血汐にじむ



溢れる血をものともせず更に右へ切りまわす



右脇腹まで真一文字に切り血が下腹に溢れる



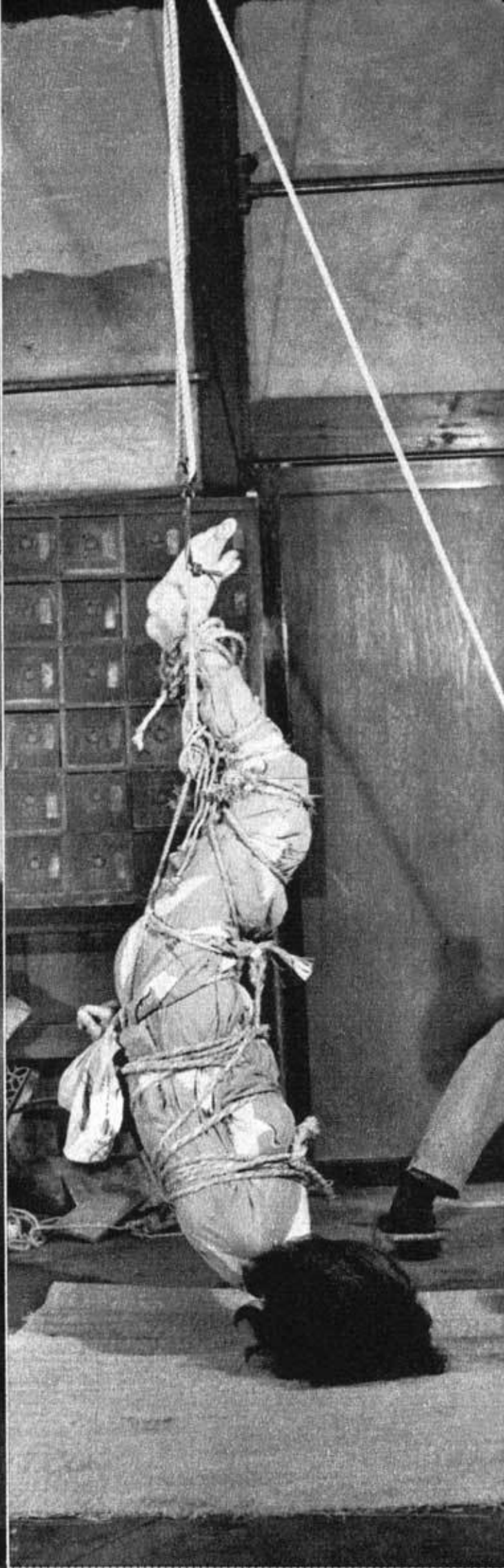
楽しき奉仕

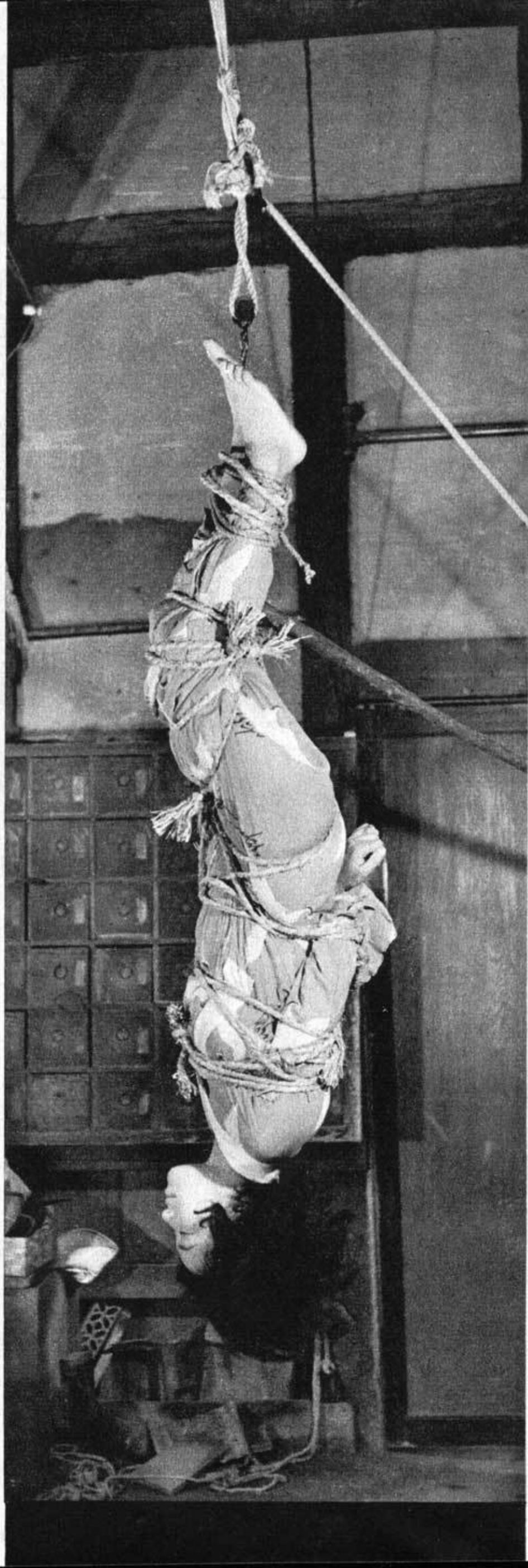
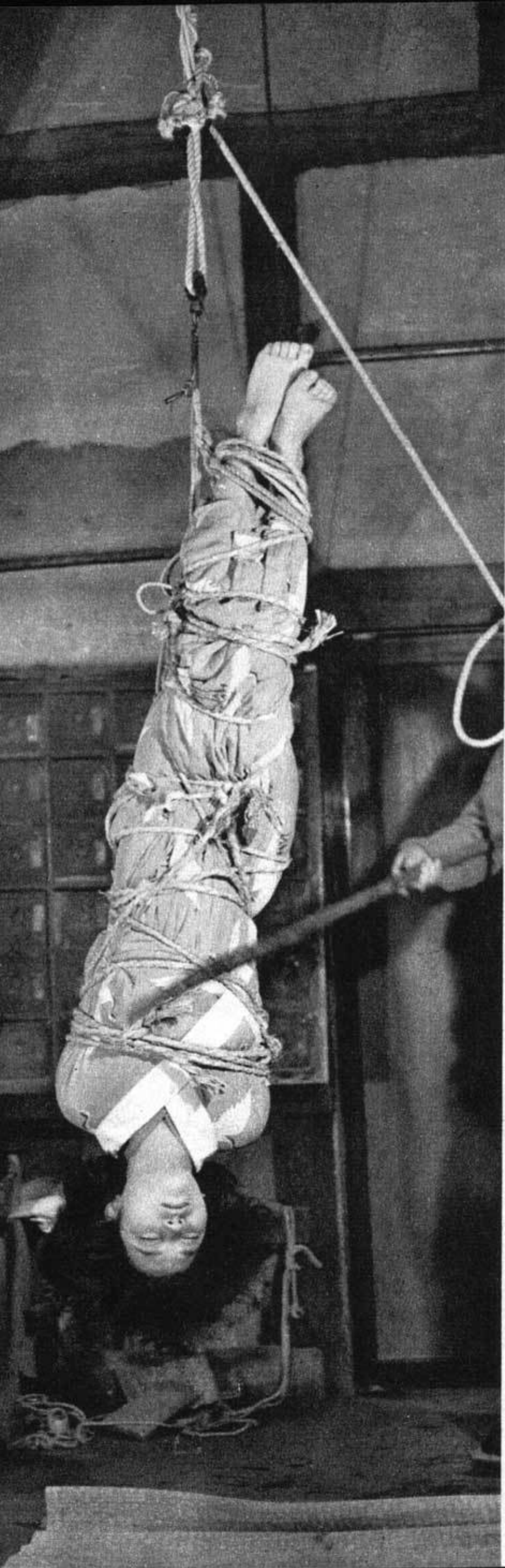
足下の悦楽



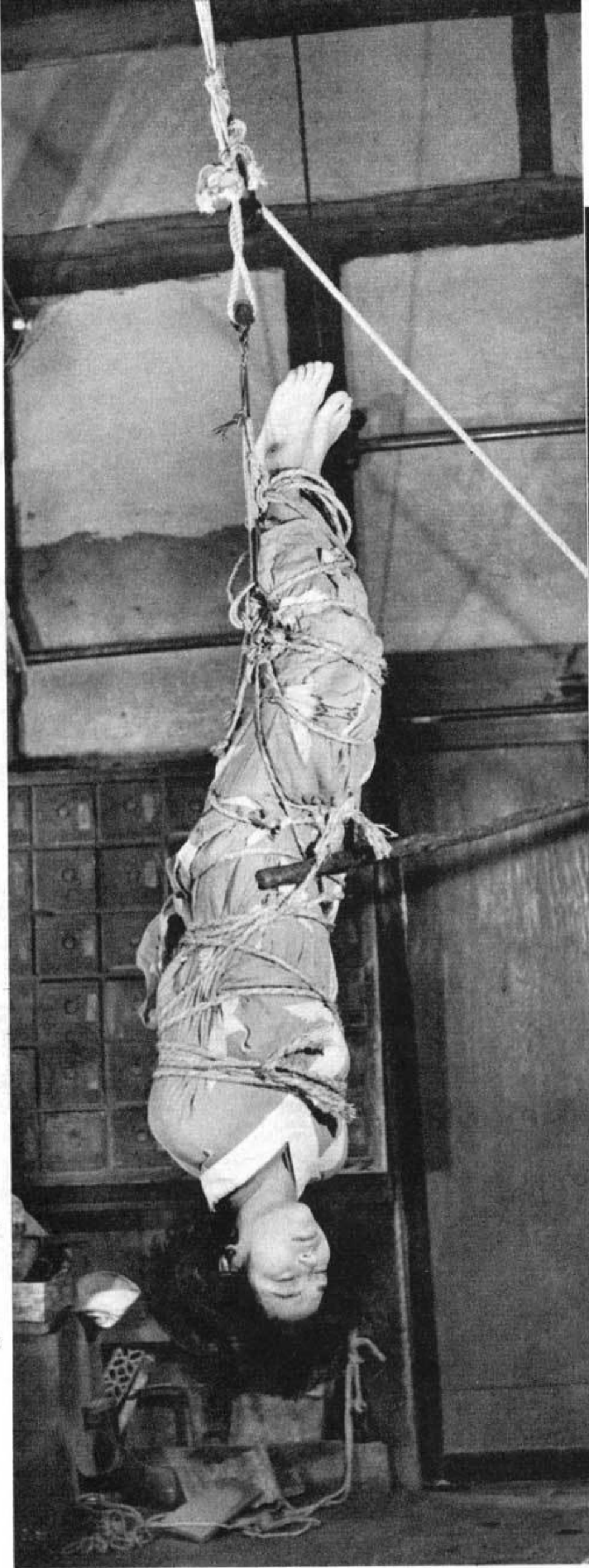


女体逆さ吊り図絵

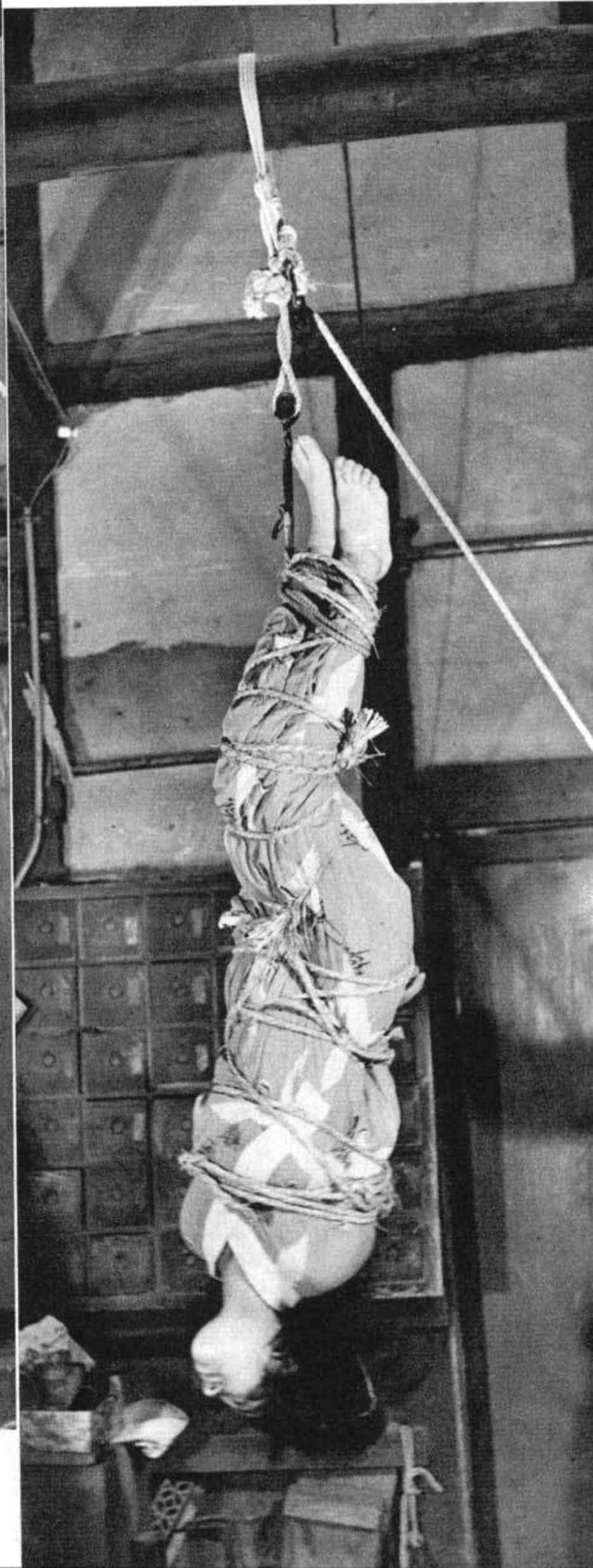


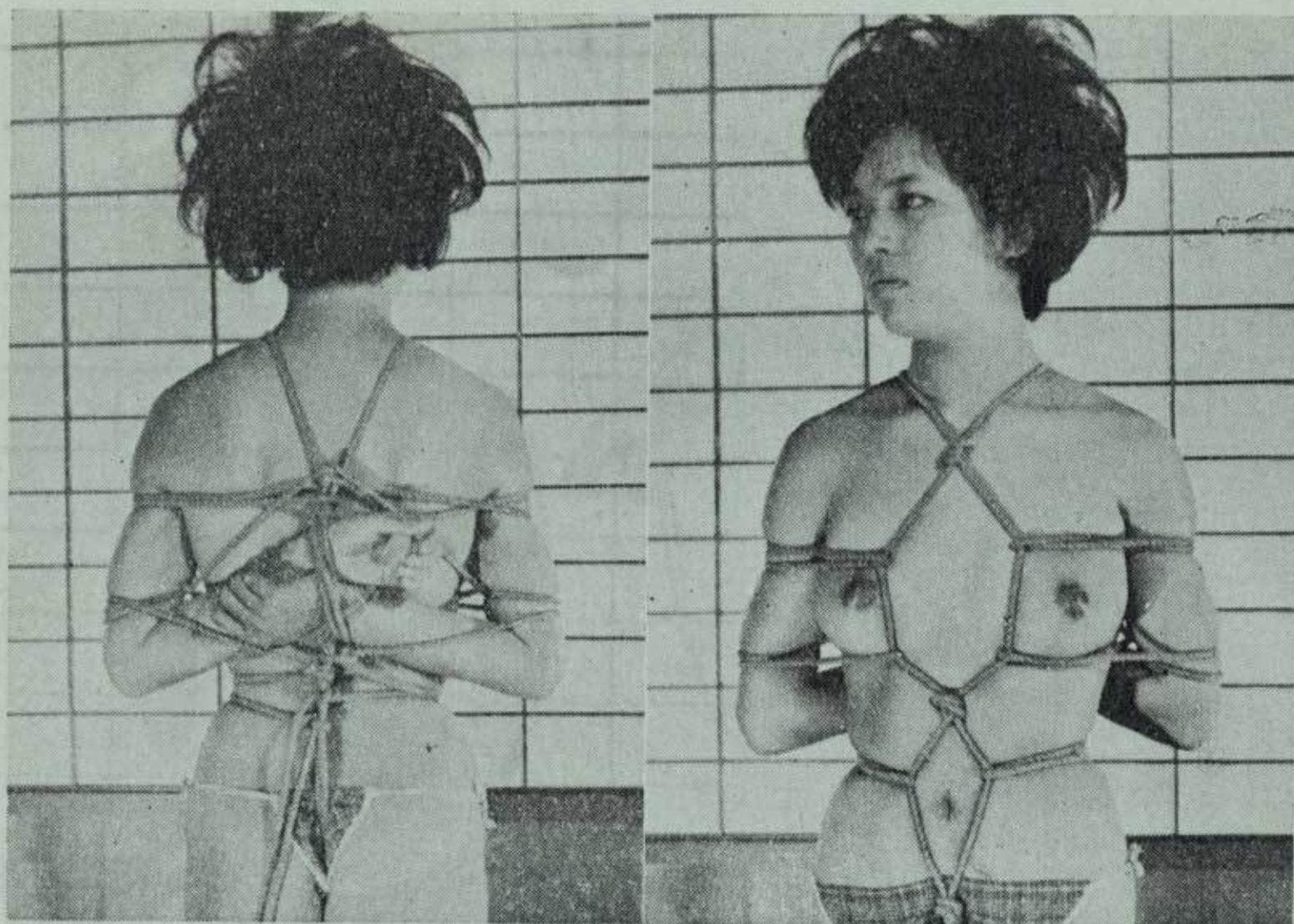


滑車宙吊り



梨花悠紀子





緊縛フォト撮影の実際

— 亀甲縛りの一例 —

塚 本 鉄 三

○モデル……………梨花悠紀子

○撮 影……………塚本 鉄三

○カメラ……………アサヒペンタックス S 2

○レンズ……………タクマー八十三ミリ F 1.9

○フィルム……………ネオパン S S

○現像液……………D 76とD 72

○印画紙……………シーガル F 2

○照明用具(ウエスト・シネライト一個、レ

フレクター・ランプ三〇〇W三個、クリップ

三個、スポット・ランプ一個、ベビー・フラ

ッド二五〇W一個、コード五本等)

○小道具(六米綿ロープ一本)

五月二十二日(月)朝から快晴で、すっかり初夏の気候、午後二時半に悠紀子さんに来て頂くよう約束してあったが、私の急用のため、少し待って貰って午後三時半、車を駆って大阪の南郊羽衣まで足を伸ばす。

本日の予定は、亀甲縛りのやり方の一例を写真で示すことにある。

上に掲げた写真は、その完成図の正面と背面である。縄の掛け方をよく判って頂くため上半身には何にも着けないで、縄の順序を逐次カメラに収めた。ライカ判三十数枚を一応撮影し、その中から約半数を選んだ。



○ 先ず縄であるが、約六米強の使い慣れて、手垢や脂汗なんかで相当汚れて黒ずんだ綿ロープ一本。この一本のロープを使用して、亀甲縛りを実施しようというのである。

ロープはごらんのように、中央から折って二本とする。そして、一つ、二つ、三つの結び目を作っておく。これで三つの輪ができたのだが、その一番端の輪をすっぽりと首に通す。第一段階はこれで終りである。

一寸見たところ 犬の首輪のような 恰好である。逃げようと思っても、手元にある縄尻を引っぱると、首が締まるので、もうこれだけで手足は自由であっても、捕われ人といった



感じが濃厚である。

悠紀子さんは素直に両手を自分から後へ回して待機の姿勢でいてくれる。さて、この従順きわまりない悠紀子さんを人身御供にしてこれから、生きた人間を荷物のように荷造りする亀甲縛りを初めよ

うというのである。

そもそも、亀甲縛りというので、最後になって、ロープの結び目と結び目との間へ縄を通して締めつけ、荷造りをより完全にするので、最初の縄の掛け方がきつきに過ぎると、締めつける余地がなくなり、所謂、美しい亀甲目を作ることが出来ないし、第一、試験台になるモデルがたまらないだろう。

第二段階では、首に通した縄の輪を背の中の方へ引いて、首が輪の中心へくるようにする

のだが、余り背後へ引きすぎると咽喉を締めつける恐れがあるので注意を要する。結局のところ、この最初に首から前の方に垂れた縄が、荷造りの心になるタテ縄というわけだ。

股をくぐって背中へ回ったタテ縄は、首縄と連結される。これは余り締める必要はなくゆるくダブダブとしてよい。括り方は首縄へ二重のままのロープを通して男結びにすればよい。これでタテ縄が完成し、縄尻はこ

らんのように、背中の結び目を中心として、このように余っている。

左の写真は首縄に通しているところ、ここに結び目を作ると下の写真の背面図のように



なるわけである。ここではまだ手足に至っては極めて自由である。

しかし、身体をタテに括られてしまった悠紀子さんは、縄尻をとられては走り出すことも逃げ出すことも出来ない。そして、その結び目が背中中央にあ

るため、自分で解くことも出来ない。『ビザ一誌』にあったポニーのような恰好である。

こんな恰好の美しいポニーに黄金の馬車を輓いて貰って走れたら、どんなに楽しいことだろう。速力がおそくなると、長いムチをふり上げて、ぴしりぴしりと柔肌を鞭うつ。ポニーは脚線美をふりかざしながら、ここを先途と駆けまわる。緑の芝生に白い素足のコントラストも美しい絵である。

と、こんなことを空想しては、三十幾

枚かの写真が中々進展しないので、夢は一応お預けとして、いよいよ、第三段階に入って両手首を背後で固定することにする。後手首の固定ということは、もっと後になっても出来ないことはないが、この次の段階では、二の腕に縄が掛ってくるので、先ず簡単にタテ縄に連続しておくことにしよう。

両手を背後へ回し、手首を揃えて背中で組合わし、結び目から出た縄尻で挟みつけるよ



うにしてタテ縄に通したところが左の写真である。

ここで結んでしまったら、さっきのポニイの話ではないが、足だけ自由で、さあ、駆けろ駆けろというこ



とになるのだが、亀甲縛りでは、そうはやらない。このままでは両手首に縄を通したことは通したのだが、がさがさで抜こうと思えば大した苦勞をせずとも両手を自由にすることが出来る筈である。

そこで、有るだけの縄を最大限に活用する

意味で、右の写真のように、左右両方の手首に二重のままの縄を一回宛巻きつける。これで、一寸手首を抜くのが困難になってくるだろう。この両手首へ駄目押しの括りをするのは、充分に締めつけておいた方がよい。これがぐさぐさであると折角の緊縛感が画竜点睛を欠くことになるから、写真のように、手首は肘から上に位置するように、しっかりと締めつけておく。タテ縄の方は、これから追々と緊縛感を高めてゆくから、ゆるくしておいてよいことは先に述べた。

六米強のロープを二つ折りにして、その縄を二重のまま用いてきたが、この後手首に対する駄目押しの縛りを最後として、ロープは写真のように左右に振り分けられて、これからは、いよいよ一本宛の一本立の縄となって

っておくと、縄がゆるまないから、これから以後の縄さばきに大いに便利だ。今回は別に結び目は作らなかったが、助手がいなくて一人でやる時なんかは、結んでおくと緩まなくて楽である。

これから第四段階に入って、亀甲縛りの第一歩になるわけだ。まず右側の一本のロープをするすると伸して二

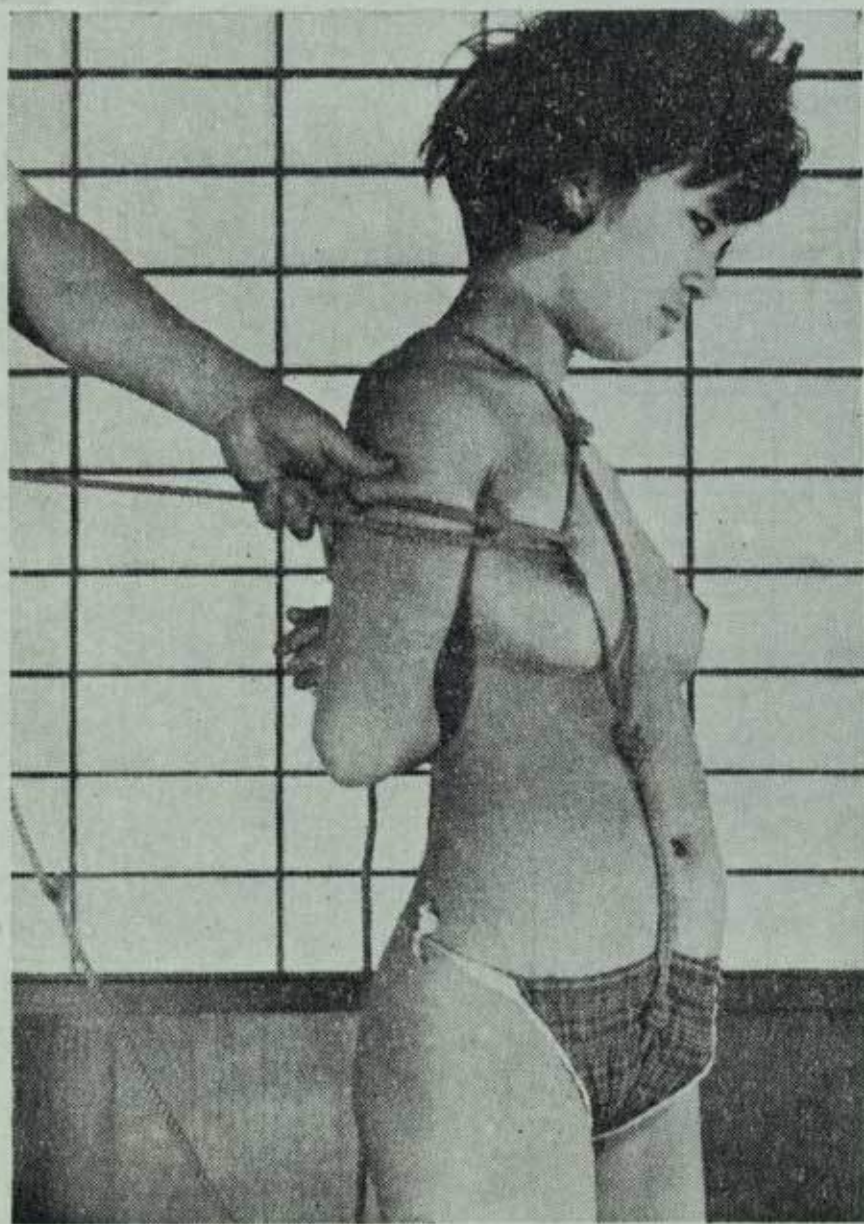
タテ縄には、これから、まだまだ何本ものヨコ縄が掛ってくるのだから、シンメントリカルな美しい亀甲模様を作るために、適当な締め方で止めておかなければいけない。そうしないで、最初に余り強く締めつけてしまうと、折角の亀甲型が歪になってしまう恐れが多分にある。それから、前後に振り分けられた首縄が、次第に緊張して肩胛骨を圧迫するため、この部分に非常に苦痛を訴えるから注意しなければいけない。



活躍することになるわけである。

この左右に振り分けられた一本宛のロープこそが、亀甲縛りの締めつけ役をするので、この縄の締めつけ如何によって、如何様にも緊縛感を高めてゆくことが出来るわけだ。このところで、念のためもう一つ結び目を作

の腕を通り胸のタテ縄に通して締めつける。と、いつでも、これは無茶苦茶に力をこめて引く必要はない。





さて、右側が完了すれば、同様にもう一本の縄を用いて左側もタテ縄に引っかけて左右平均のとれる程度に引きしめておく。そして背面に返ってきた縄は、両手首の上を通して適当に止めをし、再び二の腕の上側を通して前面へ縄を返す。先のロープは乳房の上部を通過しているの、これは乳房の下部を通るようにすると、より美しい縄の配り方ができるのである。只、プレイで厳しく縛り上げるといった場合でも、美しい縄の掛け方が見た目にも感じがよいものであるが、写真

ンメントリカルな美しさの縄目を表すことを最終目的としているので特に、こういった点に注意をしたい。

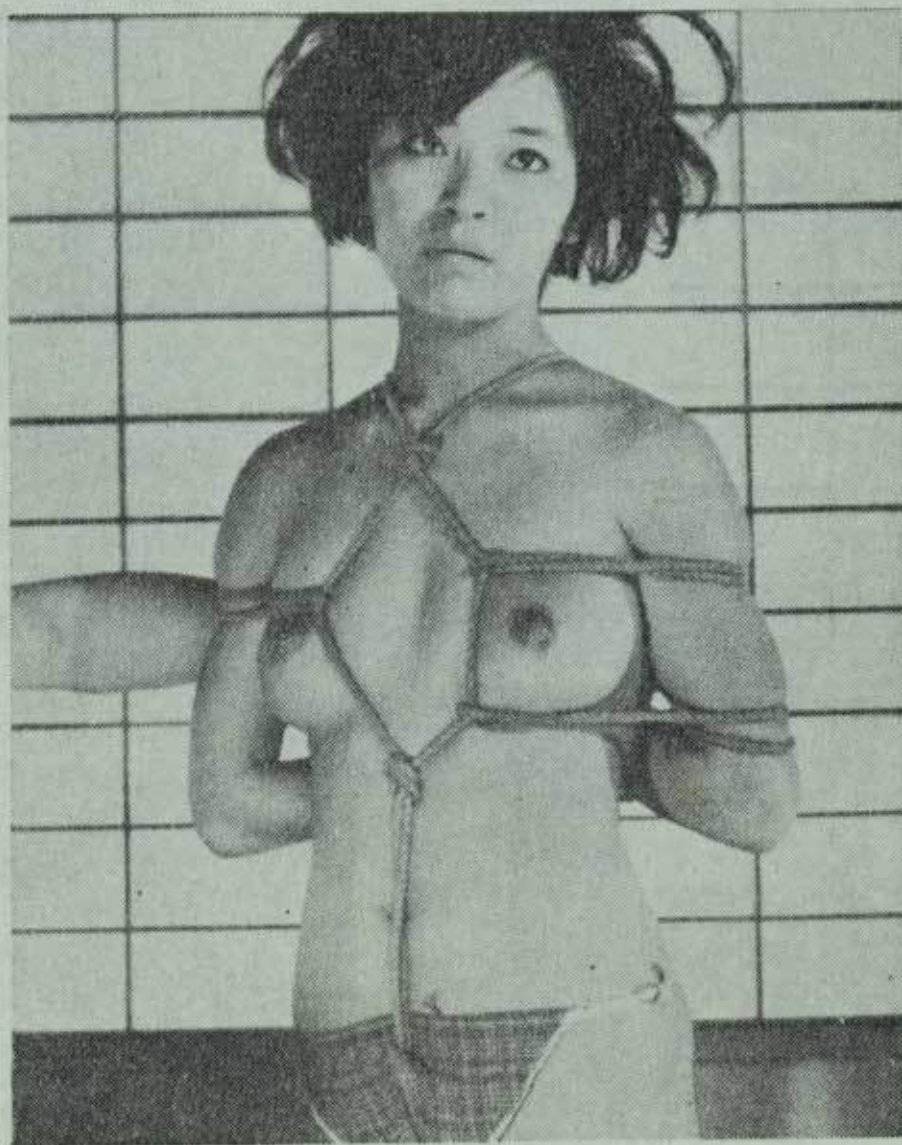
縄の配り方で、左右に振り分けられたロープは一本宛用いるのであるが、二の腕の上を通過するのは往復するので計二重となる。左

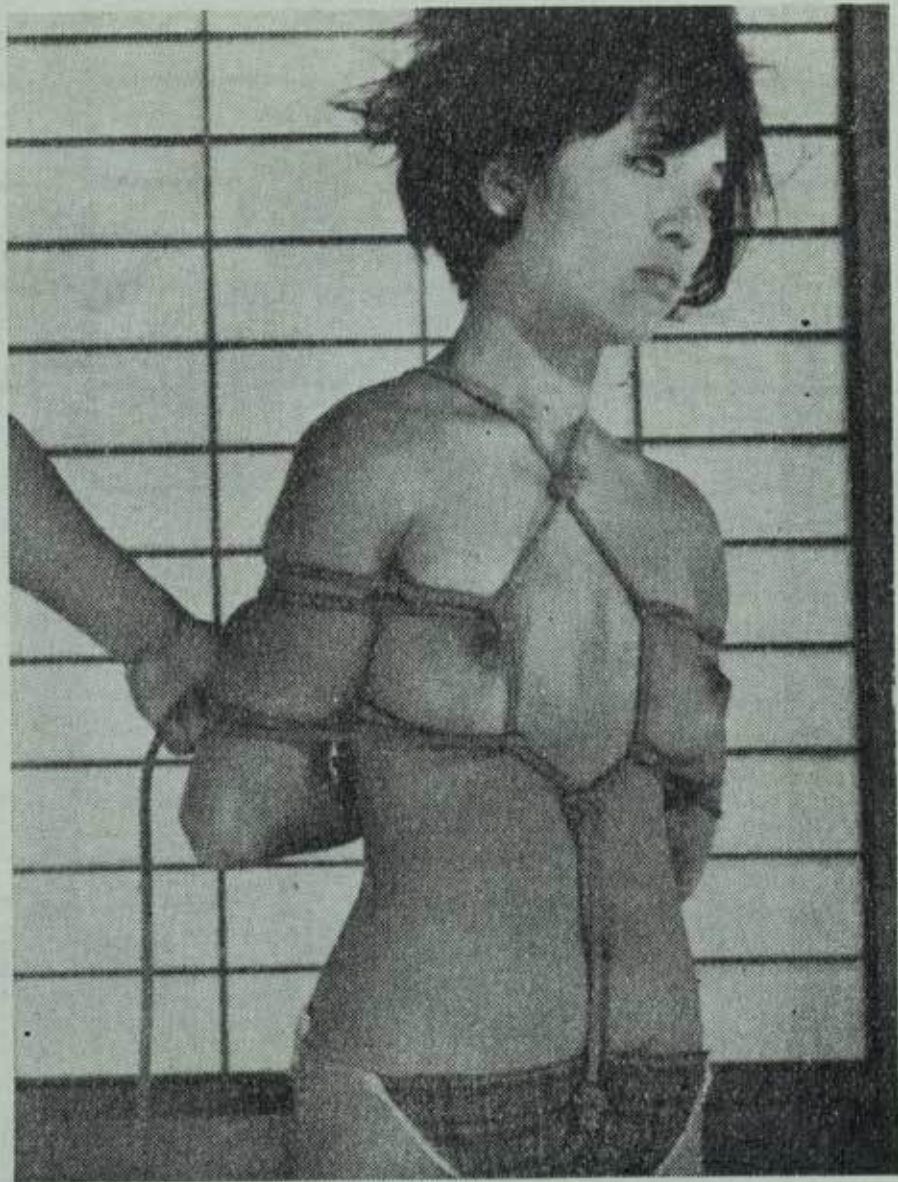
に残すよう場合であなったら、特にこの配慮が必要であらう。

もっとも、早縄で乱雑な縄の掛け方を目的とする場合には別ではあるが、今回は、『亀甲縛り』としてのシ

側が終わると、縄尻を背後で止めるのであるが、止め方は、縄尻が次の段階で使用されるように長く残し、場所や括り方は適当でよい。

今回は後手首を中心として、一本縄が菱型になるようにしてみたが、これは必ずしも、こうではなくとも、手首に連結させてもよいわけである。変化をつけるために、乳房の下側の縄は、上側の縄とは少し変えてみたが、これも、上部と同じやり方でもよいし、肘に近いところで二の腕をもっと強く締めつける





ために、いろいろの方法がここで工夫される
ことと思う。

左側が完了すると、右側も同じように縄配
りをして第四段階の胸の亀甲縛りが完了とい
うことになる。もうこれだけでも、悠紀子さ
んの上半身に対する緊縛感は相当なものだと
思うが、残念ながら、まだその時の感想を聞
いていない。いずれ、何かの感想文とか告白
文とかいったものを書いて貰う機会があった
としたら、私達にとっても、大変参考になる

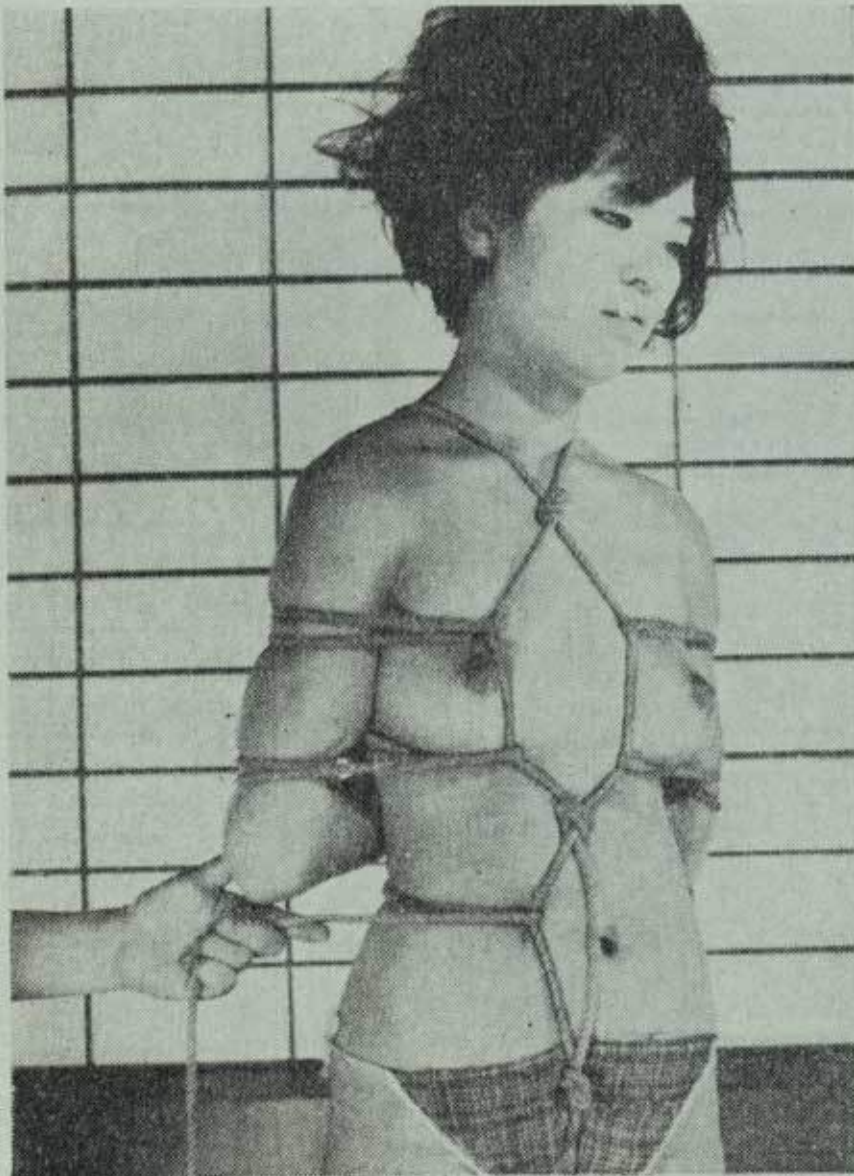
も厳しく緊張しすぎ
てきて、流石の悠紀
子さんも苦痛を訴え
て辛抱しきれなくな
ってきたので、縄の
方は、丁度もう一往
復掛ける位残ってい
たのであるが、残念
ながら、ここまでで
中止した。

のになァと思う。

愈々第五段階は腹
部に対する亀甲縛り
であるが、これは完
成写真をごらんにな
ったら、おわかりの
通り、菱形縛りまで
で、完全な亀甲縛り
になっていない。こ
れはタテ縄が余りに

背中のタテ縄から渡したロープは脇腹を通
って臍の傍で前面のタテ縄に連結する。ここ
は腹部で柔かいため、締めつければ締めつけ
るだけ、縄が肌に喰い込んで見えなくなるく
らいになるが、更に片方側にも縄が待ってい
るのだから、適度の張り方にしておこう。

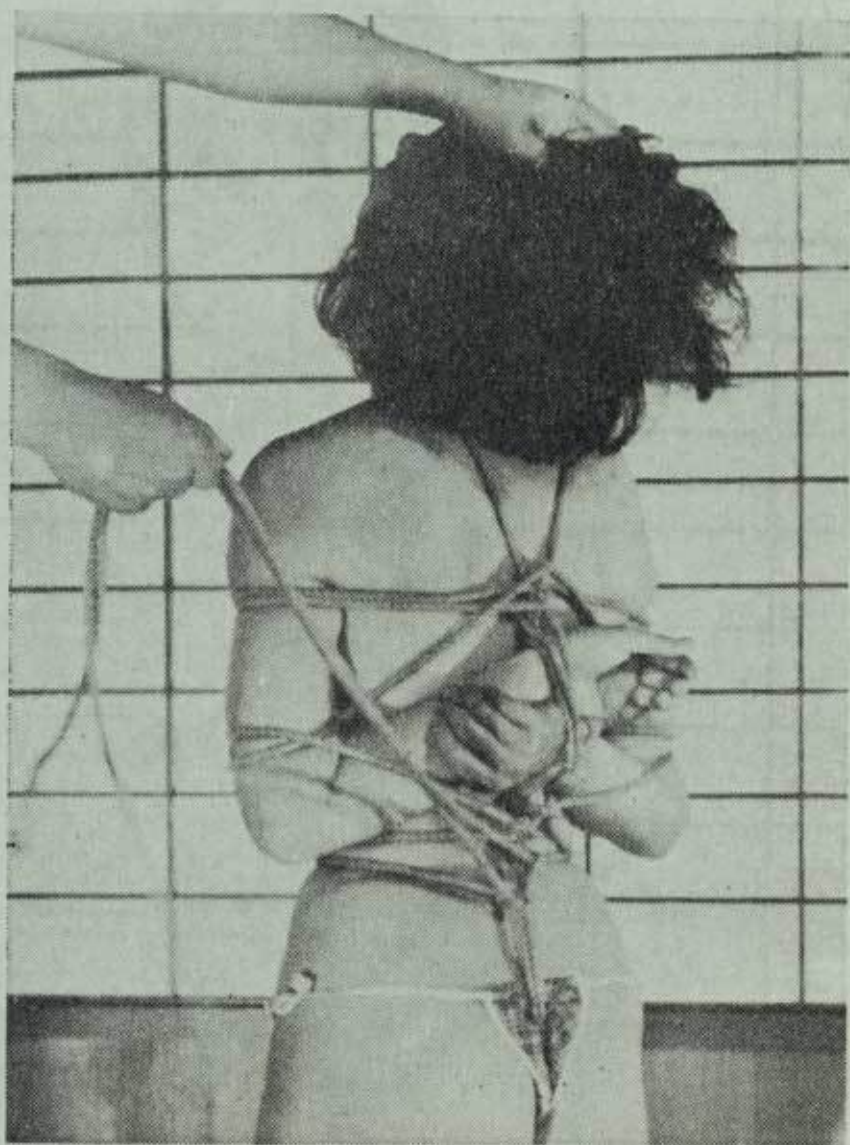
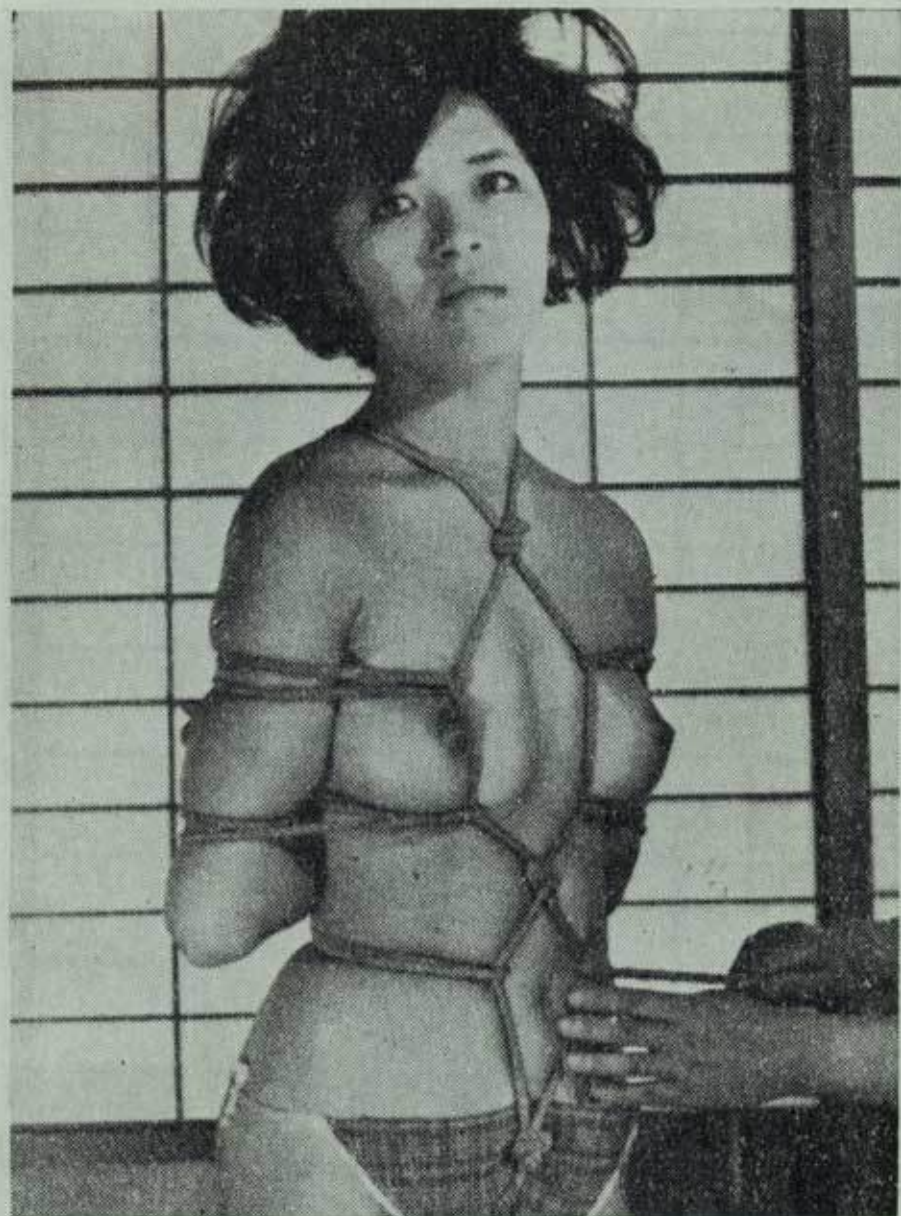
と、いうのは、ここで左右三筋、計六筋の
縄で引き締められているのであるから、タテ
縄の緊張度は極度になっているからである。
実際に今回の撮影実施に於ても、流石の悠紀



子さんも、タテ縄にヨコ縄を掛けてしめつけるたびに、「痛い、痛い」と全身をもがいていた。先にもいったように、肩甲骨の上に当る縄が一番痛いそうである。その点、柔い肌の部分は縄が喰い込んで一見厳しい縄の掛け方のように見えるが、その割に案外、辛抱し易いということだ。

長くなって辛抱に難いのは、肘の水平よりも上に吊りあがっている両手首である。最初の縄が次第次第に締まってくるところへもって

きて、後から後からと縄を掛けてくるので、もう指の色が変わって冷くなつて感覚がなくなるようになる。それから後手を高手に挙げていると、時間が経つに従って必然的に肘が痛くなってくるのだ。これで臍窩を中心と



した菱型の腹部縛りが出来上ったわけだが、腰のところにもう一個所ヨコ縄を掛けると、完全な臍窩を眼とした亀甲縛りが出来上り、胸部と腹部の二つの大小の亀甲縛りを描くことが出来るのである。

ごらんの写真の通り悠紀子さんの身体は、正面も背面も、きっちりと隙間なく括り上げられてしまっている。後手は高々と背中中に組み合せられ、腰縄を握って追いつて立られると悠紀子さんは上半身に対する厳しい縄目に喘えきながら、引回されねばならない。

今回は悠紀子さんの全面的な協力によって亀甲縛りの中の一例を写真化することが出来たが、次回は又変わった趣向をごらんにいれたいと思う。

新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装八月特大号

1961年 8月号

(第15巻 第8号 通刊第156号)





奇ク私見

……「エロとどまじいもの」……

千草忠夫

四月号の読者通信欄に小林氏が寄せられた一文に対して、中谷氏が六月号に反論を述べておられる。両氏以外にも奇クを読む事についての罪悪感を述べられた方も、これまでに多かった様だが、私もこれを機会に、これまで奇クに対して持ってきた感想などを発表したい気持ちに駆られた。この様な討論こそ我々の思想を深める手段として、又読者の原稿に多くのページをさいている奇クとして最もふさわしく、必要でもある事だと思ったからである。

一、エロについて

店頭に並べてある奇クを、何も知らない純真な人がふと手に取って開いて見たとしたら、その人はどんな感じを受けるだろうか。困惑、羞恥、嫌悪、そして何人かの人には、ドス黒い興奮を示すだろう。これは誰しも経験ずみの事だ。それとも私だけそうだったの

だろうか。この感情の動きは一般のいわゆるエロ本を手にした時のそれと同一のものだ。奇クはエロ本なりとする第一の原因はそこら辺に胚胎する。奇クには更にその上「異常」という事が追加されるから、与える刺激は更に強く、罪悪感まで加わる。

これは如何に強弁しようと、動かせない事実ではなからうか。成程、家に持ち帰ってゆっくりとひとくけば、奇クが如何に真面目な内容のものであり、如何に少数者の真実の叫びに満ち満ちているかは、誰にでも読み取る事が出来よう。エロ本の持つ単なるセンサー・ショナリズムなど薬にしたくもない事も直ちに取れる筈だ。だが、それだからといって、奇クにエロがない事にはならない。中谷氏は奇クからエロを感じ取る人は少ないのではないかと云っておられるが、そんな事は断じてない。若しエロを感じない人があるとするれば、それはすでにこの種の刺激に麻痺してしまったからであり、初心者にとってはいぜんとして大きなショックである筈だ。小林氏の奇クに対する不満は、刺激になれた人が、何か新しい刺激(エロ)が発見されはしないかと期待しながら奇クを買い、胸おどらせながらページをめくるが、その期待が満たされないという所から発したものと考えられる。

奇クはある意味での「エロ本」であるべきなのだ。それが当然なのだ。ヌードの緊縛写真(芸術写真というに程遠い)がある。揮マニヤ好みの記事がある。切腹の血を流している絵、コプロマニヤの手記、サジスム小説、マゾヒスト好みの読み物——これらが、それぞれを好む者のエロチックな心情を掻きたてないとしたら、いったい何の意義があるというのだろうか。

いったい、エロ(エロチシズム)とは何だろう。女性のヌードに

エロを感じるのはわかるとしても、それ以外の、先にあげた事どもにエロを感じるといふのは、どういう事なのだろう。

キチンと身だしなみ良くよそおった女性に対しては、一般にエロを感じないのが普通である。たとえ感じたとしても、ソコハカとないかすかなものに過ぎない(二人キリだとか、その他特殊な状況の場合は論外である)。ところが、スカートの裾からシェミーズがチラチラしているとか、ドレスのホックが一つ外れている、ストッキングにシワが寄っている、ノースリーブのブラウスの肩から、スリッパのツリ紐が外れてのぞいている、髪の毛に葉くずが引っかかっている等の、ちょっとした乱れがあった場合には、それが強いエロと、なって訴えて来はしないか。この乱れの最たるものが下着姿それからヌードという事になる。世にチラリズムと称するもの以上のたぐいに外ならない。なぜこんな事がエロを掻きたてるのか。それにはここに分析し切れない程沢山の要素が入り混っている事だろうが、特にここで問題にしたい点は(S愛好の私として)この様なエロが常に女性側における無秩序(衣服の乱れ等を指す)の徴候によって喚起される、ということである。相手の無秩序の状態を眼にした際我々の内部でも無秩序への情熱がよびさまされる。この無秩序への情熱が、取りも直さずエロチックな感情ではないのか。とすれば、ヌードで、しかも緊縛されている女性の姿は強烈なエロを感じさせずにはいないことになる。(以上のエロチシズム論は、ジョルジュ・バタージュ著「エロチシズム」の所論によったもの。私の理解の仕方間違っているかも知れないが、私自身は以上の様に信じている)世界一流の芸術にだってエロはある。ミロのヴィナスにエロを感じる事は、むしろその人の健康の証左となる。奇クがこの意味でも

エロであって決して悪い事ではない。我々はむしろ、芸術に見られるエロと、いわゆるエロ本から感じ取られるエロとの相違を問題とし、奇クのエロを芸術におけるそれに高めるよう努力すべきなのだ。エロ本のエロは単に我々の性本能をくすぐり、時によっては、必要以上にこれを刺激して、野卑な興奮にかりたてるだけに過ぎないが、芸術に現れたエロは美と結びつく事によって、それをより高いものに昇華せしめる。エロチシズムを罪惡視する時代は去った。我々は健康なエロチシズムを享受すべきなのだ。

奇クのエロもそんなエロであってほしい。より高い意味でのエロ本であってほしい。それには内容に美を盛り込まねばならない。遺憾ながら奇クの現状は美と呼ぶに程遠いのだ。雑誌として最も眼につきやすいグラビヤページについてのみ言っても、この事が当てはまる。いや、このページが最も甚しいとさえ言えるかも知れない。従ってこのページを洗練されたものにする事が、最も緊要な仕事だと思われる。

はじめはただ縛った写真だけでも満足できるだろう。だが、プレイには、それが何であれ、洗練という事が不可欠なのだ。何時までも泥くさくはアキが来る。どぎつくするのも満足は得られない。必要なのは洗練味なのだ。スマートさなのだ。これが一般の眼にはグロテスクとさえ映じかねない緊縛ヌードを、美にまで高めてくれる要訣なのだ。

二、どぎついという事について

小林氏は、もっとどぎつくと言われていた。
いったい「どぎつい」とは、この場合どういう事なのか。

切腹に全く無関心な私にとって、どろどろと臓腑のはみ出た絵とか、そういった描写などは、胸がムカムカする程どぎつく感じられる。又コプロ趣味でもない私には、そういった種類の話は全く読む気もしない。読めばかならず不愉快というか、のどのあたりがムズがゆくなってくるような、何とも言えない気分になる事がわかっていくからだ。

これらに比べれば、小林氏や私などを含めたS愛好者にとってはS関係の読物の内容は極めて上品といえよう。趣味とか、好みとかを抜きにしてこれらを比較した場合、どぎつい、グロテスクだ、という印象を強く受けるのは前者の方だと思う。

では小林氏の言っておられる、サジズムにおけるどぎつさとは、いったいどういう事なのか。私は次のように考えている。

サド侯爵の「悪徳の栄え」「ソドムの百二十日」を読んだ際、私はその中にどぎつさを充分に感じた。しかし、良く考えて見ればそのどぎついという印象も、サジズム以外の変態趣味に対して受けた印象であるようだ。これは私の趣味による事だから、いちがいに言えない。或る人にとっては、加虐の後の乱交、更に虐殺というサドおきまりのコースがどぎついと感じられるかも知れない。確かに奇クと同種の小説に比べたら、はるかにどぎつい事は私とて否定できない。

ポーリーヌ・レアーシュの「O嬢の物語」はどうであろうか。サド侯爵の作品の描写が甚だ即物的なのに対して、こちらは心理描写あり、責めの細かい描写あり（尤も大部分はケズられている事と思うが）で、読者の情感にうったえる所はサド侯のそれより可成り大きい。しかし、発禁をおそれて大分表現をセーブしているので、ど

ぎつさは読者が頭の中で想像するどぎつさといえる。ここにはこれだけしか書いてないが、おそらくこうなんだろう、と頭の中で想像をたくましくするのだ。

サドとレアーシュの作品を比較した場合、あらゆる変態趣味をどこまでもに似た前者が遙かにどぎつく、それに対して後者は「まっとう」な印象を与える。後者には虐殺がない。S趣味でほとんど一貫している。それに何よりも男女の愛が基調となっていて、事が大きな救いになっている。

とは言っても、これとて矢張り奇クの内容から見れば、どぎつと考えられるだろう。奇クには絶対といってよい位無いものが、ここには、ある。それは何か。もはや「どぎつい」という言葉を棄てて「突っ込んだ」という言葉を用いるべき時が来た様だ。奇クにないもの。それは突っこんだ描写だ。セックス。セックスに関する責め。そして虐殺。小林氏の不満も、奇クのこのタブーに対するものに違いないと思う。

奇クのサジズムに見られる上品さは、このタブーを堅持する所から発している。勿論、上品さそのものは否定するべき事では決していないが、奇クのそれは、きたないものを見て大げさに肩をひそめ口をつぼめる上流婦人の、取ってつけた様な上品さに墮落している様に思えるのだ。一言でいえばカマトトである。

だが、それとて発禁の脅威の前には致し方あるまい。私としても何から何まであからさまにさらけ出せとか、下品になれと、いっているのではない。ただ、描写はひかえるのも止むをえないが、真実はまげないでほしいという事だ。「O嬢の物語」に見られるような、想像のヒントとなる程度の描写はゆるさされていいのではないかとい

う事だ。現在の奇クは細心を通り越して、歪曲にまでいっていいやしないだろうか。小林氏が、奇クには週刊誌よりエロがないといわれたのは、こういった点を指摘されたのではないかと思う。

サジズムは本来セックスと固く結びついたものだ。プレイで昂揚した感情のままに、抱擁に、愛撫に進む事は、むしろ正常でさえある。女を責めるだけで満足して、セックスの結合は全然ダメという高症患者は果して読者の何パーセントになるだろうか。

だからといって私は愛撫の描写を長々とやれというのではない。ただ、当然起る筈の結果を強いて隠蔽しようとする所に、不自然さが生ずると言いたいのだ。少なくとも、その後を生ずる結果に対して、各自の想像力を喚起する程度の描写くらいはあって然るべきではないかと思うのだ。愛する男女の間であれば、それは不純でも猥褻でもない筈だ。

サジズムという現象は、それ自体、反ヒューマニズム、少なくとも男女平等思想に対する反逆を内に秘めている。それは暴力否定思想に対する公然たる挑戦ともいえるであろう。サジスト（空想的サジスト）がその大部分を占めるだろう（における抜きがたい罪悪感、自己の性向が異常であるという後めたさによると共に、このような現代思潮に対する反逆者であるという自覚の上にも生ずるのではないだろうか。そして、このような罪悪感が或る程度、ないしは全面的に払拭されるのは、サジスティックな行為が愛の名の下に行われ、しかもそれが両性の結合によって歓喜の中に終る場合に限られる。その場合においてのみ、被支配者は支配者と同等にまで高められ、ヒューマニスティックな満足を得られるのだ。若しこの昇華がなかったとしたら、サジストに何の救いがあるというのだろうか。

では加虐が一方的である場合、即ち、愛を基調としない場合はどうであろう。この場合、そこにセックスを持ち込む事は、必然的に強姦という場面を現出する事になる。これは確かにどぎつい場面である。だが反面、サジストの最大の関心事でもあるのだ。これを全面的にケズってしまう事はいかにもおしい。だからこれも細心の注意さえはらえば、何とか処理できる筈だ。例えば、花巻京太郎氏の「美しきが故に」などは、その事を充分に言外に表現し得ていたと思う。（この作品は奇クをこれまで読みなれていた者にはオヤと奇異の眼を瞠らせる位いセックスが表面におし出されていた）又「奇譚三十九夜」の第六夜で辻村氏は「〇嬢の物語」を引張り出す事によって、充分に読者の空想力にうったえる事に成功していた。この作品や他の作品で辻村氏がよく奇クのタブーをいまいましたげ語っておられるが、これが一般のいつわりのない気持ではないだろうか。再び言うが、私は奇クに多くを望んでいるわけではない。発禁になるなど勿論ゴメンである。ただ、セックス面をいたずらに忌避するというのはなく、細心な注意と工夫によって必要最少限の事は表現する方が真実味を与える事になるのではないか、又その方がむしろ自然ではないかと言いたいのだ。

「宇宙のどこかに」「蒼い廃墟」等は、何というあくどい、人間性侮辱の物語であろうか。それでいながら、セックスのにおいが爪のアカ程もないという理由で堂々と掲載され、反対に赤裸々な欲望にもだえる真にヒューマニスティクな作品が、ちよっぴりセックスの色がツいている為に忌避されるとは、何という矛盾だろう。文献誌と麗々しく銘打っている以上は、裸体にちよっぴりパンティの線を付け加えて見たり、あるかなきかのセックスの描写に朱を入れたり

するような、小児病的な事をしてもらいたくないのだ。

私のどぎつさに関する考えはセックス面についてののみ強調されたきらいがあるが、小林氏は、あるいは血を、虐殺を、考えておられたかも知れない。それも確かにどぎついことには違いないが、これに関するタブーは、奇クに於てはセックスに対するそれよりゆいと考えたのと、それらはサジズムと別個の、独立したひとつの分野を成していると考えたのと、以上二ツの理由からして触れなかったことを附言しておく。

ついでながら、最後に一言すれば、本来グロテスクであるべき流血を、真の美にまで高めた作品に、三島由紀夫氏の「憂国」がある（これは短編集「スタァ」におさめられている）。これは奇ク読者（特に切腹マニヤ）必読の傑作であると思う。これによって言える事は、作品さえすぐれておれば（勿論「憂国」が短編であるということも考慮に入れねばならないが）すべてが美に昇華して、これまでに述べて来た様なことなどは、何も憂慮すべき事ではなくなるというのである。

奇クにもっと美を——これが私の結論といえようか。

編集部 註V

本誌四月号の読者通信欄（二四七頁）にて小林孝氏が寄せられた一文に対して、本誌六月号巻頭（六二頁）に中谷正夫氏が「奇ク随想」ハエロとどぎつくということVと題して、意見を述べられました。本稿、千草忠夫氏の「奇ク私見」は、以上の二篇に関連して奇クのあり方についての見解を吐露していただけますが、反駁或は賛成等御意見をお持ちの方々は、どうかどしどし御寄稿下さるようお願いしております。

奇態体験小説



(まんじ)

正宗五郎

相愛譜

昭和二十一年――。

苦心して郷里へ引揚げた後、私は進学を抛って、当時県下で盛んに行われていた農業開拓に志した。

父は元の官庁へ、どうにか格下げして復職が適ったが、引揚げの際の心労が祟って健康

を甚しく損っていたし、郷里に残してあった母や兄弟との生活が手一杯だったので、私は当時食糧難の時代を慮って、一人の口でも減らそうと单身開拓に志したのであった。

幸いに私は、幼い時から自然が好きで、三度の食事よりも、動植物の採集実験、それに園芸が好きだったので、奥能登の山野に起伏した。鳥獣を相手に鎌を取る事が性に合っ

いたのか、発育盛りの身体は、みるみるうちに逞ましく鍛えられていった。

その頃の開拓者の食糧難のひどさは筆舌につくし難いものがあった。都会の食糧難もひどかったが、不毛の土地を汗水たらして掘り返す開拓者はみじめだった。馬鈴薯を毎日やった事もあったし、配給の唐黍の粉さえ購えなくて野山の草を喰い漁って、餓を忍んだ事もあった。

ランプを灯す油さえ買えない山小屋暮しに落伍者が相ついだ。私は十七才の智恵を絞って農家の手助けをしたり、山仕事、海仕事と大人達に混って汗みどろで働いた。

どうにか木板葺の家を建てて入殖生活が板についた三年目、突然、父が死んだ。私は憮然として母の元へ戻って、早速K市の土建会社へ就職した。四年後、架橋工事に足を痛める迄、凡ゆる肉体労働に携って馬車馬の様に身体を酷使した。しかし、工事で痛めた関節炎は、それ迄病いというものを知らなかった私を非道く痛めつけた。

錐を揉む様な発作は、半年後におさまったが、執拗な鈍痛がしぶとく残って私を苦しめた。私は重労働に見きりをつけると、不自由な足をひきずって、デパートの店員もやった

し、行商もやった。其の間、社会は大きく變動を告げ、あれほど逼迫していた食糧事情も好転した。

私の家庭でも、母だけでなく、大学を終えた兄も妹も就職すると、私が無理をする事もいらなくなった。二十四才になって暇が出来ると、私は初めて身の周りの淋しさを感じた。

死物狂いで働きぬいた数年の青春。その間村で或は町で、年の上下を問わず異性に愛を囁やかれたこともあったし、縁談や養子の話もなかった訳ではなかったが、その都度、私はすげなく断った。何故か異性が慕しくなかったのだ。その時、私の欲していたのは、心から許し合え馴染める親友だった。

あの南京の引揚寮で知り合った志摩を、不慮の災難で失って以来、私は依然として孤独だった。学校が外地だったので同窓生もなく更に家族と別れて暮す事の多かった私には、孤独を慰す何ものもなかった。

年少の頃から年輩者と過したせい、ここ数年間、同性から色々と親切な扱いや男色的好意を示された人もあるにはあったが、私が心服できる人としてなかった。

淋しさは日毎につのって、狂わしいまでの人恋しさに、私は人知れず涙で枕を濡らすこ

とも度々であった。異性に関心を持たず、かくまで同性を求める心は一体どうしたことだろうか、又、暇を幸い、図書館に通って自分のこの異常な傾向を知ろうと書物を繙いた。そこで私は、いよいよ自分がソドミヤであることを自覚すると、社会的にも自分の運命の岐路に立って悩む事も尠くなかったが、遂に自分の感情に忠実に生きようと固く心に誓った。

その頃から、私の書物漁りは益々激しくなった。単行本や雑誌も読んだ。奇クを知ったのもその時からだった。

奇クのMY生、風俗草紙のメロト生、その読者通信と交換室の記事が、私の関心をいたくひいた。私は丹念に二つの記事を見比べて同一人物なる事を確信すると、先方の求める要素が、余りにも自分にぴったりと当てはまるのに驚いた。

『僕は一人っ子、戦争で二人の兄を失ったせいか、兄に替って面倒を見て呉れる同性が欲しい。中肉中背、筋肉質で毛深い人、明朗で誠実なら申分なし……』

私は迷いに迷った末、便りを書いた。文通が五、六度重なるうち、Mは熱心に上阪を懇望してきた。私はとうとう積極的な彼の勧め

に促されて、昭和二十九年二月、大阪に足を刻むと、阿倍野にあるMの経営する販売店を訪れた。

彼の喜びようは大変なものだった。近くの温泉風呂へ私を入れると、自分はその間に整髪をすませ、その時は冷たい雨が降っていたが、彼は店を休むと私を伴ってタクシーで南へ出た。デパート高島屋から心斎橋を案内してくれてから大劇へ入った。初めて見る絢爛たる春の踊り、六層のデパート、道を埋める心斎橋通りの人の渦。

私は大都会の目まぐるしい息吹きに、只とまどうばかりだった。又、Mのピタリ身についた瀟洒なダブルに引換え、自分の父譲りの骨董品めいただぶだぶの背広が気になって仕方がなかった。彼は、そんな私を優しくいたわってくれて、遠路の疲れを感じさせなかったばかりか、私の事を「兄ちゃん」と親しみを込めて呼んでくれた。

その夜は、生野区の自宅へ一緒に帰ると、二階の部屋のベッドで私と並んで寝た。初めて逢って一日の交際であったが、溶けあう親愛感、薔薇色に二人を包んだ。

Mは無口で一見無愛想に見えたが、話しあってみると思いやりがあり、私に対する慈愛

は肉親以上で、今迄知りあった誰よりも優しかった。私と同年といっても、生れが四月程先んじている私を「兄ちゃん」と呼んでくれ

たが、実際には彼の豊富な知識と経験は、青春の殆どを山野に彷徨していた私を傾倒させるに十分だった。



別

離

結婚生活の経験、クラブに於ける男色歴もベテラン級で、男女両愛の総べてを知りつくした彼は、私の初心ぶりをいたく珍重した。

延々一カ月に近い爛れる様な同性のみの異常愛が営まれた。彼は店を忘れ、私は家を忘れた。私の手元へ書留による母からの送金と帰国を促す手紙が届いた時の彼の複雑きわまりない表情。

私は飽くまでも、このままの状態でいたいことを願ったが、彼は私をすすめて大阪駅のプラットホームに送った。

此の時の断腸の悲しみは、今でも忘れることは出来ない。愛の如何に美しく強いものであるかということ私に教えてくれた。

自分は汽車がホームを出た時、手を振った君の姿を一時も長く見収めたかったが、その勇氣はなかった。車窓に君の住む大阪の街が消えると、僕はデッキに出て泣けるだけ泣きました。

目をはらした僕が席へ戻ると、隣の人が、「見送りの人は良い人ですね」と言いました。「そうです。あんな良い人はいません」僕は窓を向いて答えました。

歎きの眼には景色が映らない。

別離の旅は夜汽車がふさわしい。

愛しているのに、何故、別れなくてはいけない。

雪のちらつく故郷の駅に

傷心の私は風に吹かれていた。

私は此の時、初めて作った詩だけをMに書き送った。しかし、彼の便りは私よりも早かった。速達便が私の帰郷を追っかけるように届いていた。彼が私の為を思って、自分の愛情を押殺して、私を母の元へ帰した後の寂しさに、店へ出る事も忘れたらしいMを私は憂えた。

卯月四日。

北陸の春は此の一月に凝固する。

梅、桃、杏、桜に藤と、長い長い冬籠りを済ませて百花繚乱と綾織る春風駘蕩の城下町に、突然、前触れもなく彼が訪れた。

重い口から一月程遊びに来たとしか聞けなかったが、私は咄嗟に彼の心中が手にとる様に分った。家出してきた彼の無鉄砲な愛情が私の痛む胸を切なくさせた。

花の兼六公園、緑の卯辰山、市内の映画館喫茶店。二人はしっかりと手を取りあって巡り歩いた。

有頂天の一カ月は瞬く間に過ぎた。しかし、新しい苦悩に彼も私も身を晒されねばならなかった。Mの長びく滞在に私の家族も不審を抱くようになった或る夜、私と母の言い争いを門前で立ち聞いたMは、翌朝、悄然と別れを告げた。

私は彼を引き止める術を知らなかった。金沢の駅で彼と別れると、以前にも増して空しい、砂を噛む様な淋しさが私を襲った。

又しても烈しい文通が交わされた。彼から過労で病に倒れたという報せを受けた日。私は家族の反対を押しきって家出同様トランク一個を提げて上阪した。

私の決意は固かった。懐しい彼のいる大阪を決して離れまいと思った。

その頃、彼の販売店は潰れていたが、病も癒え、梅田附近の造花店に職を得ていたし、私も又、鶴橋の近くの工場に検査員として勤めることが出来た。

二人の生活は蜜の如き愛情と尽きない信頼とに満たされていた。案じていた大都會での工場の勤務も順調にいった。しかし、私が余りにも正直に洩らした為、会社の人は皆、私とMとの関係を知っていたが、非難されることもなく、それを承知で親しんで呉れる女性もいたし、風呂で知り合った素晴しく美貌のゲイボーイと交際することもあった。

Mと私の二人は市内の盛り場歩きは勿論、郊外の宝塚、箕面、信貴山、京都等、名勝や遠く四国へかけて泊りがけで旅行することもあった。そうした楽しい生活の日々ではあったが、私は会社の仕事だけは骨身を惜しまずに働いたので誰からも愛された。

私達は夜が訪れるのが毎日毎日待ち遠しい程、幸福の絶頂に立っていた。だが、幸事魔多し、とはよく言ったもので、私達が知り合ってから五年。昭和三十四年の冬、世間の風は冷たく吹き荒んでいた。

Mは給料の安い割に休日の少い造花店をやめ、二十万円の元金で再び阿倍野に自分の店

を持って独立したのだが、そもそも、この無理な独立が躓きのもとだった。

Mは独立資本の高利の金を早く作りたばかりに、私に隠れて危い橋を渡っていたのだ。それも私を盲目的に愛するあまり、協同で新しい店を持ちたいという一心からであったのだが。

私は彼が単車の故買現行犯で警察に挙げられて、初めて事件の全貌を知った。真面目で温馴しい内気な程の彼が、一時にもせよ、悪に走ったのは何の為であったか、私だけがよく知っていた。自責の念が、ひしひしと身に迫った。関係者が多かった為、取調べは長びき私は仕事を休んで差入れに毎日通った。

保釈金を払って、間もなくMは帰って、私はホッとしたが、以後、彼の失業が続いた。裁判の結果、彼は初犯だったにも拘らず、弁護士の手際から一年を上まわる懲役刑が科せられた。

街には桜のちらつき初める三月、法律は冷たく二人の仲を分離した。潔く刑に服した彼の事を思っ私はひたすら仕事に没頭した。月に一度許された面会日には欠かさず彼を訪れたし、便りも二日と絶さなかった。

夏になると、私は皆からめっきり痩せた

言われた。実際、彼を失った心労と、彼を知ってからの不節制が祟って、私の身は綿のよう疲れきっていたのである。工場では、その年になって始めて健康診断が行われ、その結果、私は肺門湿潤の診断を受けた。胸部疾患の初期とのことだったが、私は上役にすめられて、不本意ながら故郷へ帰ることに決心した。

Mに対する最後の面会の日、私は人目もかもわず男泣きに泣いた。ひょっとすると、これが最後のMの見おさめになるかも知れないと思うと、たえきれない絶望感が身をさいんだ。最愛の友は鉄窓に呻吟する身であるし自分は今又、胸を病んで、病床に呻吟する身となるのである。

本当に心身共に打ちのめされた、というのはこの事だろう。敗惨の身を故郷に迎えてくれた家族の温かい手によって、私は近くの病院へ入院する事になった。

我が庭の片隅に一群の秋海棠咲けり

その葉の大きな事

その茎の太き事、その色瑞々しく

秋日に照り映えりたり

秋海棠の花は紅きなり

その色は支那美人の腕輪のメノーに似て

我が心慰さむ。

秋海棠はやさしきかな

やがて来る霜に消ゆるという

我が心いたく沈みぬ。

病床の徒然に書いた私の拙い詩である。

彼の精進が認められたか、仮釈放の恩典に浴して、年内に出獄することが出来た。Mから一日も早く病気を直して帰ってくるようにという手紙を貰ったとき、私はどんなに元気づけられ励まされたであろうか。お互い傷ついた二人には、あの楽しかった幸福な生活もすべて過去となって、現実には再び訪れることはないだろうと諦めきっていた私だけに、その喜びようは大きかった。

変らないMの熱意と愛情は手紙の隅々にまで行き亘っていて、私を涙ぐませた。今はもう専心、病と戦って、一刻も早く丈夫な身体となって職場に復帰したいという強い意欲が湧き上ってくるのだった。

やがてMは新しい職を得て、責任ある立場で働くことになった。彼の待っている大阪の空が、只、恋しくて仕方がなかった。

今度こそ、きっと、今度こそは、傷ついた二人が助け合って、世間の荒波を立派に渡ってみよう。私は病院のベッドで「まあちゃん待っていて、もう暫くの辛抱だよ」と呼びかけるのだった。

(第三部了)

第一部、六月号、第二部、七月号掲載

ア
ブ
へ
の
遍
歴

鼻責めの道程

辻
村

隆

——序にかえて——

昨年の十一月の末、久し振りに編集長を自宅に訪れた時、編集部気付で、私宛の通信が四、五通程溜っているというのをきいた。「どう？ 返事を出すかい。それとも相変らず放っておくかい？……」

私の筆不精を知っている彼は、ニヤニヤ笑い乍ら返事を促がした。

過去に読者通信欄で、私に対する返事を求めたものや、又、私の作品に批評をしたもの

には屢々接していても、未だ嘗って私は、一度として、通信欄に私の便りをのせた事がない。

それでも、こうして読者の方から、いろいろと御連絡を頂いて、実の所、私は衷心より感激しているのであるが……。

その日、私はどんな風の吹き廻しか、何とはなしに、それらのうち近くの方々に逢って見たい誘惑に駆られた。

私は、私の支持者の通信を、興味深く読み下した。

「読者通信で返事するよりも、実際に一度逢って見たいなあ——。どんな人物か……。ひょっとすると、面白い事があるかも知れない」

私は編集長にそう答えた。

A、B、C、D、皆夫々に個性の違う人々ではあったが、一様にサジズムの点で共通していた。

その時がきっかけで、私は自分の仕事の余暇を見出しては、根気よく連絡し合い、お互いの自由の許す時間を割いて、次々と彼等を訪れた。

「写真や参考品なら提供するよ。それに不便なところなら、僕のヒルマンを使ってもいいよ——」

という、編集長の助言にも意を強くして、私は冬から、この春にかけて、アブへの探求

を続けた。

五月現在までに六人——。

すっぱかしや出鱈目にも再度出くわし、女性であるべき筈が男性であったりしたが、兎も角も、膝と膝をつき合せ、胸襟を開いて語

り明した夜もあって、私の小説の素材にも、大いに役立つところはあった。

箕田氏から拝借した百数十葉の写真、責めのアイデア、挿絵の原画、読者より送られてきた貴重な資料等が、何よりも私の遍歴を円滑にさせた。

事実は小説よりも奇なる事もある又、事実の私達の対談は真実であるだけに一面面白くないかも知れない。而し、そこには、嘘も飾り気もない。 possibleの限界ぎりぎりの真実が語られてきたのである。

発表しにくいセックスの面や、猥雑に亘る個所は誌上適宜省き、些かの潤色は諒承して戴きたい。

——神戸に於て——

二月某日。川名達郎氏（三九才）

通信匿名、神戸Y・M子 美容院経営

阪急電車を神戸三宮終点で下車して、寒風の吹きすさぶ中を山手に少し歩く。○○○美容室の看板がかかっている瀟洒な家が川名氏の住居である。



奥さんは四年前に、子宮外妊娠で亡くなり、其の当時から勤めていた美容師の照代さんが現在美容院を切廻しておられる。

彼女は事実上、奥さんの地位に在り、亡妻との間に生れたお嬢さんが、もう少し成長された時、正式に籍を入れて、妻の地位にされるそうである。

照代さんは現在二十九才。美容院に勤めて既に七年だから、たぶん、川名氏が最初の人であろう。

他に住込みの見習一人、通勤のインターン二人という、ささやかな陣容であるが、照代さんの技術と愛想で、結構流行っているとみられる。

川名氏に定職なく、書道を教えておられるそうであるが、美容院の収入で生活しているとの事である。

「仲々、お店は忙がしいようですね。コールドパーマや、セットなんか、かなりボロいんでしょう。」

「必要原価は知れたものですね。原価一本二百四、五十円のコールド液一本で、大体五人から六人かけられます。一本四〇〇ccで、一人で八〇cc使用するのが普通ですが、最近一般に髪が短くなっているので、六人は充分使

えます。外にヘヤーダイヤ、カットも儲かりますね」

「婚礼には矢張り御出張で……」

「ええ、シーズンともなると大変です。それに協会割当の福祉会館への出張などもありません。私はもっぱら、運転役です」

「ところで、貴方矢張り男性でしたね。」

誌上匿名が女性でしたので、ヒョッとして、本物の女性かと、期待してたんだが……矢張り……（笑）

「私は書道の方をやっているので、女性らしく書けるんで、時々、家内（照代さんのこと）の代筆もしてやっているんです。あれは、何とはなしに女で書いた方が、読む人を惹きつけると思いました……。全然悪気なしなんですがね」

「多分、男性だとは察していましたが、文字があまりにも女性らしく、なよなよしているので、ヒョッとして……（大笑）」

「あら、かなんわあ——」（雁之助の口真似）

「鼻責めがお好きらしいですナ。お便りでは、貴方が女性で、御主人からされているけど、これ反対でしょう。」

「お察しの通り——。もちろん、私がやる方です」

「今の奥さんに？。それとも亡くなられた方に……？」

「それが両方共——。死んだ女房でやり始めて、それが、自然に、といっちゃあなんだが今の家内に継続したわけです」

「私も最近、箕田氏と一緒に、ニューフェイスのモデルに、鼻責めの構成をやりましたよ。」

「そう、それはそれは。で、モデルは何て云う名？」

「さあ、あれは確か四方清美とかいったかな。迎も温馴しい娘でしてね。なんでもこちらのなすが儘です。顔はね、日劇ミュージックホールで、今盛んに騒がれている、ホラ、共立女子大卒業の、インテリヌードの扇圭子。あれにそっくりの八重歯の可愛い小娘ですよ。」

「へえ——、まったく羨やましいみたいですナ。で……そのときは、どんな鼻責めをなさったんです」

「勿論、写真の構成だけですナ。本当に責めたりはしませんけど——。ドライバーを鼻の孔に押し込んだり、ペンチで柔かい鼻先を握じ上げたり、浣腸器を挿し込んだり、エネマシリンジを孔に入れたり。まあ、そんな

ところです。

「凄いじゃありませんか。で……勿論、縛りの方も？」

——ええ、襲われる女のシリーズなんか撮りました。私が、彼女を順々に縛ってゆくのです。いずれ誌上でこれをお目にかけますよ。ところで、貴方の方も、縛りはなさるんでしょう？

「ええ、いきなりすぐ鼻いじめも出来ませんしね。矢張り縛ったりもしますが、辻村さんのようなベテランにかかっちゃ、私の縛りなど、ほんの序の口でしょう。後手にして椅子に縛ったり、ベッドへ手足を縛ったり、そんなところですよ」

——あなたが鼻責めに興味をもたれた動機と
いうか、わけは？

「本当は鼻責めよりも、一番はアノムス。二番が鼻です。しかし、アノムスとなるとどうも書き難くってね。だから肝心かなめの、それには余り触れなくて、鼻責めを中心にして書き送ったというわけなんです。何しろネ、商売柄、美顔術や、マッサージで、よく鼻を摘んだりします。それも女ばかりのね。……ホラ、この窓から店を覗いて御覧なさい。ね、やってるでしょ」

——成程成程、されるが儘ですね。でも貴方はやれない。

「さ、それが残念ですが、見てみると、結構楽しいですね。どんな美人でも、鼻をあしめていじられているのを眺めていると、妙に可笑しくなってくるんですナ。驚鼻、どんぐり鼻、獅子鼻、あぐら鼻、ギリシャ鼻、段々鼻など、その他、皆それぞれ人によって違いますね」

——映画スターで大きい鼻なら、断然、山本富士子……。

「それに、新派の霧立のぼる、あれも立派です。私は、明け暮れ、女の鼻許り眺めているうちに、これを弄ったり、いじくったり、つまんだり、いろいろともてあそんだら、面白いなあと思うようになったんです。手始めが死んだ女房ですがね。あれは、小鼻の張った、鼻孔が天井をむいた、なぶるには理想的な鼻の持主でしたよ。そうそう、古いアメリカの女優で、マーナ・ロイというのがいたでしょう。あんなに尖ってはいないが、よく似ていました」

——ああ、よく、ウィリアム・ボウエルと共演していたですね。「影なき男」なんて、なかなかよかった。

「私がいうのもヘンですが、あれは、美人の方でした」

——そんな事して嫌がらなかった？
「始めは撥ぐったとか、なんとか文句をいってましたが……」

——あの通信に書いてあったけど、鼻孔に煙草やローソクを挿し込んだり、紙挟みで鼻の頭をつまんだり、鼻の孔に筆をさしこんで字を書かしたり……、そんなことを本当にやったの？

「あれは実際にやりました。あれなんか序の口です。仕事から、髪の毛クリップなんか、はくほど沢山ありますがね。これなんかよく使いましたよ。それに、真鍋三十六氏（奇巧投稿）なんかの鼻責め告白なんかも、大いに参考にしました」

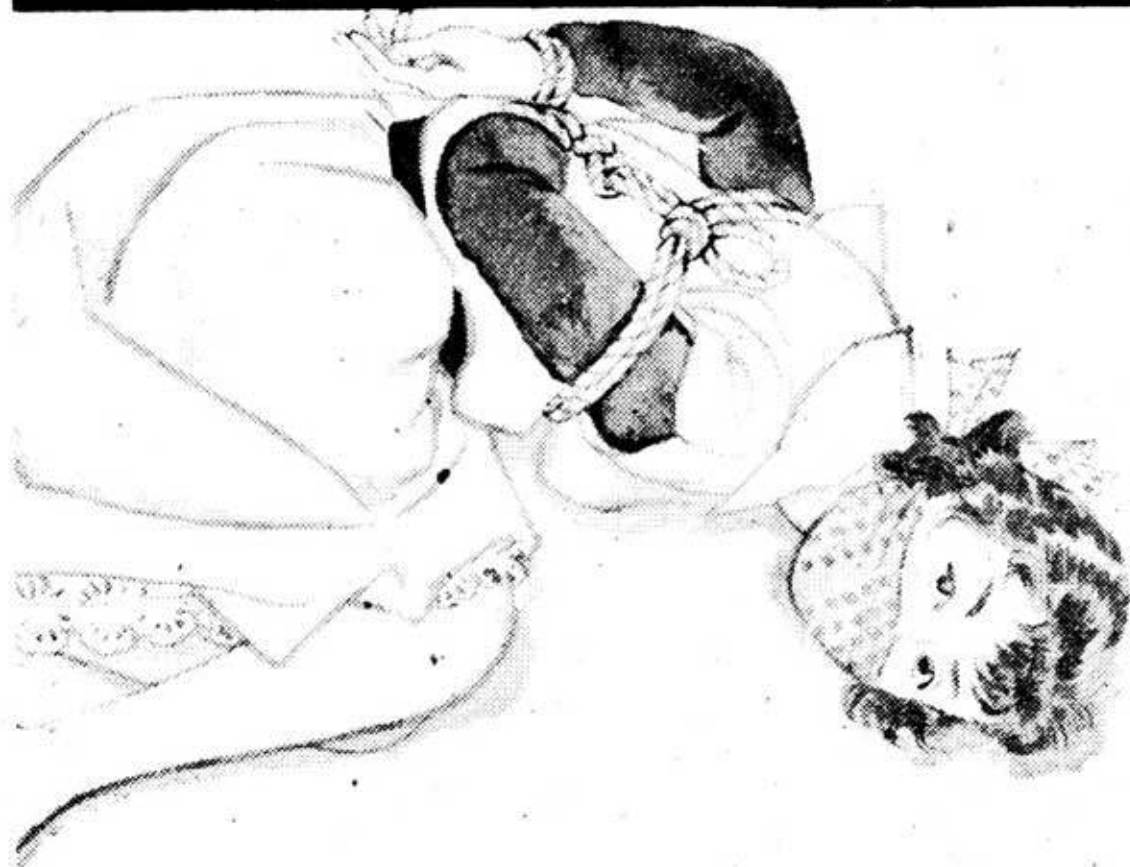
——それで、此の間もやったのですが、読者の中には、鼻責めの好きな人も可成りありますね。

「確か、昭和三十年の五月号に、伊吹真砂子が、鼻環に鎖を通され、鼻を吊り上げられているのがあって、どきりもしましたが、あれなんか、どうして撮ったんです？」

——あれは、カードに穴をあけて綴じておく円い、開く環があるでしょう。環の開閉の堅

いので、あの環を抜けて、鼻障子に両側からあてて、多少は肉に喰い込む程に閉じ、鎖を通したのです。彼女は少々痛くても、マゾだから辛抱しますよ。

「私は又、伊吹真砂子の鼻障子に、孔を開けたのかと思った——」



——まさか……。でもね、貴方が鼻を責められたい女性だなどと投書されたもんだから、随分反響があって、熱心に住所を訊ねてくる人が何人もおるそうで、編集長も大分閉口していましたよ。

「いや、私自身ね、あれ程反響があるとは思わなかったのです。何か欺したみたいで悪い事しましたな」

——欺した罰として、代りに奥さんにやって貰っては……

「いや、それは困ります。何しろ私の大事な女房なんだから。そうそう他人に触られちゃね。まして、浮気でもされて御覧なさい。サッパリわやですがな——」

——ハハ、ちょっと深刻ですな。我が身となると考えますね。

「でもね、私としてはあの文中の冒頭にも書

いたように、数年前から、奇クを愛読する二十四才の主婦なんて書けば、誰も、はなから本当にせんだろうと思ったんですがね。女性の奇ク愛読者は、本当は星の教程ぐらいに考えていますものね」

——そう一概にもいえませんよ。何れ対談する予定の松井頼子さんだって、真の女性作家ですし、以前私が『話の屑籠』に書いた、トランジスタ女性の、責め志願者だって、熱烈な愛読者でしたよ。

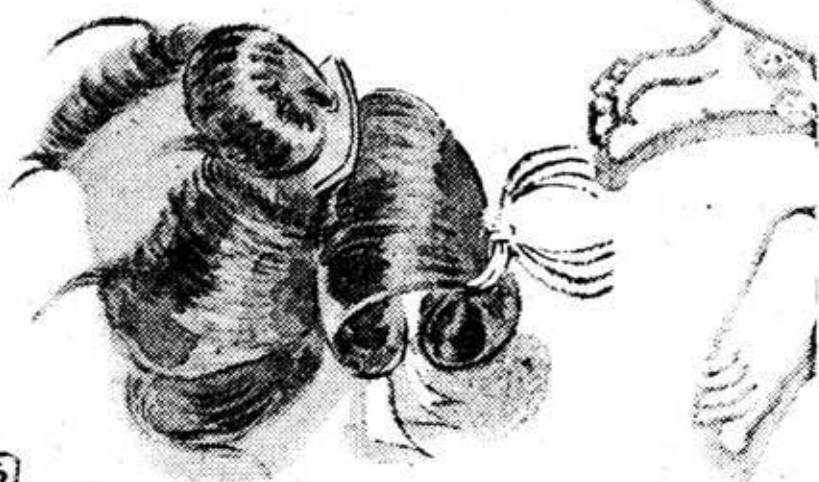
「私はあの女性に興味を抱いて、すぐに辻村さん宛に連絡したのに、とうとう返事をくれませんでしたね」

——いやあ、どうも。……あの時は私が、ありの儘に、痩せた、大して美しくもない女性だと書いた許りに、彼女からコッピどくやられましてね。それで、外にも二、三人の方より申込みがあったので、彼女に連絡したところすっかりお冠りで、返事もよこしてこなかった。女性は矢張り、自分を美化することによって、そこはかとなく、愉しい夢を抱いているんですネ。これが彼女の写真です。どう？——さして興味も湧かないでしょ。

「なるほど、痩せっぽちなあ——。聞くと見るとでは大違いですなあ」

——で、話は戻りますが、貴方はあれから後の通信では、大分子防線を張っていたようでしたね。

「それが、苦しい弁解でしたよ。鼻責めそのものより、マゾの一環としての鼻責めもあっていいが、鼻ばかり責められたら、女性の顔のシンボルだから困る——。確かそんな事を書きました。それで、通信欄で、私の事も一寸影を潜めました。そんな事から、旧誌の八月号だったかにのっていた、「私の体験談



して読んだイメージは、その儘そと残しておきたいから、女なら女でいいのじゃないですか。そこ迄せんさくすると味けなくなると思うんです。

「私はあの文中の、体験談のうち、省略されていた肛門責めが読みたかった」

——いやあ、あれは掲載出来るシロモノじゃない。羽村式の流腸や、又想像上の荒唐無稽なものならよくても、ああ生々しく、リアルに、微に入り細に穿って肛門責めを書いてあ

の鼻いじめのこと」を書いた花房孝子さんも或いはヒョットすると男性じゃないかと、カングったりしましてねえ。我が身にひきくらべて……」

——さあ、どうでしょう。逢いませんから、どちらとも判っきり断言出来ませんが、あの一文も可成り反響があった様です。唯、私

りの考えをいうなら、読んだ者は、折角、女と

ると……。」「と、いう事は、つまり全文を読まれたわけですか」

——編集長に読ませて貰いましたが、あれはグロですね。アーンヌを喜ぶ人にとっては、垂涎ものですが、一例をあげると、ギネの使用拡張器を簞入して、大きく拡張、糊を流しこむといった、誌上に発表出来ない事許りですし、又（以下十行削除）実際に不可能に近い事許りです。だから、あの鼻責めの一文も或いは想像じゃないかと思っていますがネ……

「あの文中には、そんな事は書いてなかったが、鼻障子を穿孔するなんて、事実上出来ませんね。唯、パイプの細いのなら挿入は出来ますが……」

——ということは、貴方の経験上から？

「ええ、まあね。あの時は店の椅子に手足を固定して縛り、ハンドルを廻すと、体がグーシと仰向いてしまったのです。いろいろの部分に刺激を加えることもありますが、その時は鼻責めが目的でしたから、女房はとても苦しかったです。ええ、これは死んだ家内の話です」

——あの散髪屋のような椅子は、責めにおあ

つらえですネー。

「でしよう。皆が寝静まってからです。最初柔かい紙の、細いコヨリを鼻孔に挿入し、咽喉に届くと、それをピンセットで引出し、次に鼻孔に出ているコヨリの先に絹糸を結びつけ、口からコヨリを引出しますと、絹糸が口に出てきます。最後に細いビニールパイプを絹糸に結びつけて、パイプを鼻から口に貫したのです」

——コヨリを入れるとクシャミしない？

「クシャミはします。でも、それは構いませんよ。そして、水を鼻のパイプから送ると口に流通して出てきます。ビニールは冬は堅いので、夏の方がいいようです。この口から出た長いパイプに導尿用のカテーテルをテープで連結させ、導尿したことがあるんですが圧力がありませんから、鼻からは出ませんでした」

——体の下半身から、顔までは、いくら何でも逆行しないでしょうな。それで今の奥さんにもやりますか。

「いや、鼻責めはやりません。その代り、縛りは死んだ家内など問題になりませんよ。白状しますけど、照代の鼻というのは整形手術で高くした鼻なんです。妙にいじくって、鼻

翼に注入したプラスチックが、万一変型でもするとコトですからネ」

——整形外科には鼻が多いようですが、これなども、とりようによっては一種の鼻責めとも考えられますね。

「整型外科医に、サジストが多いという話はほんとうですかネ」

——さあ？ それで縛りの方は？

「籍を入れる約束でね。云うことを聞かないと、それじゃ俺の女房に不向きだ、と脅してやる」

——一種の脅迫だなあ。

「脅迫じゃありませんよ。亭主たる私の縛りが厭なら、サッサと家を出ていったらいいんですよ」

——さあ、その弱身につけこんで……。

「こんな云い方もあるんですよ。死んだ女房は、ああもさせた、こうもさせたと凄いのをいろいろ云い並べるんです。女は負けたくないんでしよう、私だってそれ位なら辛抱出来るわ、ってことです。潜在的な対抗意識が強いんでしょうね。本当は死んだ女房を余り縛らなかつたんですがね」

——上手く考えたな。

「辻村さん相手に、あれこれ縛り方をいって

も始まらない。それより今迄最も素晴しかつたのは、内で見習中の、住込みの夏子って娘を、家内に責めさせた時です」

——ああ、先刻サイダーを持って来たあの娘さん？……

「ええそう。ホラ、今店でお客の髪をシャンプしててでしよう。広島山奥から、薄いつてを求めて出て来た娘で、新制中学卒業後、すぐうちへ来たのですから、もう二年半位いになりましよう。ええと、今年、十八才になりますかね」

——いい娘さんですね、素直そうで……。

「ええ、それで魂胆がありましてね。先ず予防線をはるため、家内に云いつけて、あの娘に、きびしく辛く当らせました。おどおどするだけで、滅多に辞めるといわない娘である事を見越しての上です。——家内も、これは反対で、大分嫌がりましたが、私はそっと秘密を打明け、あの娘に過失を起さすよう仕組んだんです」

——ひどいなあ——。

「いやまあ聞いて下さい。その計画というのは、夏子に保管させてある、婚礼用の高島田のカツラをそっと崩しておいたのです。——筋書通り、家内は夏子を叱責しました。これ

じゃ、明後日に迫った婚礼の式にどうするつもりだと、家内は日頃、命から二番目に大切にしているそのカツラを、夏子目掛けてパッと放り投げました。カツラは一層無慚に崩れて夏子はワッと泣き伏してしまいました。折檻の手始めに、家内は乱れ髪のカツラを夏子の頭にかぶせました。私はそれを次の間から、ソッと覗き見しています。それを知っているから、大いに熱演して、家内はとうとう夏子を腰紐か何かで後手に縛り上げてしまった。どうしてくれるの——と、乱れ髪を掴んで引き据え、お尻を出させてパチパチやり始めた。もともと優しい家内ですから、さして痛くもなかったでしょうけれど……。そこへガラリと襖を開いて私が這入って行ったのです」

——相手がなにも知らない子娘では、まるで赤子の手をひねるより雑作もない。愈々本番ですネ。

「私はとぼけて、どうしたんだと聞く。斯々如々と家内は報告します。そこで俄然、私は怒り出します。預りものの大切な娘を、こんな非道い目にあわせる奴があるか。お前の不注意からこうなったのじゃないかと、家内を叱責し、こんな非道いことをする女は俺が承知しないと、真蒼になって打ち震える夏子の

前で大芝居です」

——奥さんは全然まじやくに合わない。

「私が悪かったのだと、必死に夏子は詫言いますが、ここで、そうかそうかと聞いていたら話にならない。お前の日頃の仕込みが悪いせいで、いきなり家内の髪を掴んで引曳り廻し、着ていたネグリジェをむしりとり、やめて下さいと泣き叫ぶ夏子の手前、尚更荒々しく、家内を下着一つの裸にして、太い縄で犇々と後手に縛り、箒の柄を両の足首に括りつけて、両腿を開いた儘、身動きの出来ぬようにしました。どうせ家内の喋べる事もないと猿轡をかまし、どうだと云わん計りに夏子に家内のこの無惨な姿をとっくりと拝ませてやりました。夏子はおこりのようにガタガタ震えて、私が悪いんだから、責めるなら私を責めて——、奥様を許してあげて下さいと、縛られた体を這わせて私に縋りついて来ます。押問答の挙句、もしも大恩ある奥様が非道い目にあう位なら、死んでしまいますとの、大愁嘆場です。少しクスリが利きすぎたようだが、こちらの思う壺——。俺のハラは癒えないが、それ程迄に夏子がいうのなら、家内は許してもいい。その代り、このトバッチリはお前に行くよといえますと、どんな折檻で

も我慢するとの、かれんな夏子の言葉です。

私は渋々の顔付で家内の縄をとき、代りに夏子のワンピースをはいで、ようやく女らしく発育した、搗き立て餅のような彼女の柔肌に、太縄を犇々と巻きつけ、高手小手に縛り上げ、箒を使って、堅い腿をこじあげ、家内と同様の姿にして縛りました。震えの止まらぬ夏子を、心の何処かで痛々しく思い乍ら、私の嗜虐の念は充分に果されて、喰い入るように夏子の緊縛の姿に見入りました」

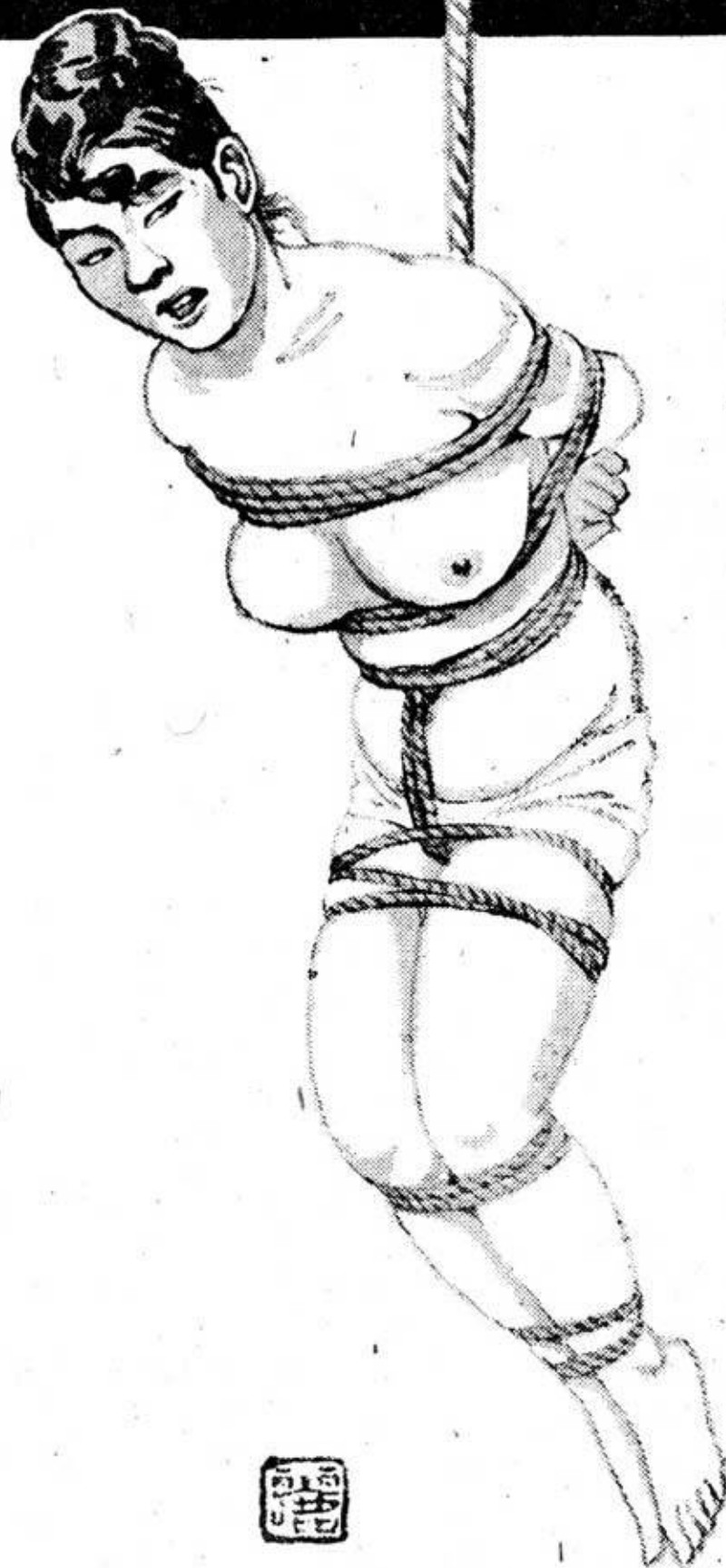
——心の疼くようなシーンですね。けれど、良心の苛責を覚えるね。

「だから私は云ってやった。私はお前がちっとも憎くない。むしろ可愛いからだよ。とチラリ私の本心を挟んで云うと、コクンとうなづいて、羞ずかしい姿を曝してうなだれているのです。私達は次の間へ引返し、そっと夏子の姿を、心行く迄垣間見ていました。家内の方が、私より遙かに激しい興味にとらわれていた様です。私の肩に力一杯、噛みついたからです」

——モデルは所詮モデル。その新鮮さはないね。しかし、こんな術で、あの娘を度々縛ったの？

「その後、余りにもまめまめしく働きますの

モデル啓子さん



「後になって、ああ失敗ったと思ったけど、時既におそして、その時は、全然考えつかないかったんです」

「これは一篇のストーリーだね。」

「そうですよ。ここで辻村さんに喋べらなければ、私は、又、女性名で、今度は夏子の立場から投稿してみようかなとも思っていたんだけど……」

「それは惜しい事をしました。」

「大体、体験談として最初は書き出しているも、次から次へと続けて書いていると、それに想像とフィクションが混り、いつしか迫真力に乏しくなり、ボロが出て、ついには最初の、本当の体験までが嘘のように思われてくるんでしょね。初めての自分の原稿が活字

になると、調子にのって、もう一度もう一度と書き、最後には苦しまぎれに、あちこちで読んだようなもので引張り出して来て、書きつないでますが、私の考えでは、最初の第一回——。これが一番読む価値があるものと

で、掛り手がなくて、やっておりますが、何か新手はないかと……」

「もう可哀想ですよ。……おききしていただきますと、貴方もとどのつまり、矢張りサジストですな。」

「そうらしいですネ。だから私は鼻責めと云

う事自体、本当はおかしいと思うんですよ。

緊縛は勿論のこと、耳も指も、アーンヌスも、すべて引くくめて、人体すべて責めの対象であるべきですよ」

「その時に、私なら、そこで一枚撮っておくね。」

考えますね。どうせシンからの小説家でないんだから、ボロを出さぬうち、いいところでサツと筆を止めるべきですよ」

「耳が痛いすなあ。が、実際その通りです。私の書くものだって、幾分は真実もあるんだけど、いつも私という主人公が主体になって、のさばっているから、ああ、又、辻村式だなど思われて、知っている人は本当にしてくれない。尤も、本当にされて困るものもあるけれど……」

「辻村さんは、今迄に随分、いろいろモデルを縛られたんでしょうが、そんな時、何ともありませんか？」

「どういう意味？」

「縛っている時に、激しい昂奮に感情を刺激されないかと……」

「写真の構成は何処迄も構成に過ぎませんからネ。箕田氏も私も、至って事務的なものですよ。モデルを連れて旅館に入って、お茶もろくろく飲まないで、準備が出来ると、さっさと縛り始める。時間がくると、さっと片付けて、ハイさようなら。そんなことです。」

「モデルも、縛られて許りおると、いつしかマゾになるもんでしょかね」

「なる人もありますネ。縛りモデル第一号

の川端多奈子、それに奇ク全盛期の伊吹真砂子。この二人なんか代表的で、どんな縛りにも耐えたし、事実、完全にマゾになってしまったね。その点、最近のモデルはビジネスに徹して、ハッキリと割り切っています。強いて挙げれば愛川悦子辺り、大分マゾの傾向を帯びて来ていましたが……。おとなしくって無口な、どちらかと云えば陰性な娘にマゾは多いようです。

「経験からいって縛り易い娘、縛り難い娘の違いはありますか——」

「——いつ迄も黙って我慢する娘、絹川文代なんかいいモデルですね。大塚啓子のように、なんとかかんと注文が多く、その癖、時間許り気になっている娘はやり難いです。まあ大塚啓子なんかは、いくら縛ったってマゾにはなりませんね。吊りや拷問と云ったものも撮りましたが、痛い痛いの連発で、未だ終らないかと催促許りです。川端多奈子は連続八時間縛らせましたし、伊吹真砂子は、自分から、こんな縛り、こんな責めはどうかと云い出したりしましたよ。」

「一度、そんなモデルさんを、思い切り縛って見たいすなあ——。夏子をもう一ぺん縛ってやろうかな——」

「けがれを知らないうぶな娘はおよしなさい。罪ですよ。ビジネスでやる縛りとか、夫婦和合の縛りなら別だけど、何も知らない純真な娘を、アブの世界へ引曳り込むこともないじゃないですか——。三角関係にでもなれば事ですよ……」

「その方に自信のある方でもなし、そうなる事も恐れているんですが——何だか一寸、惜しい気がして……」

「じゃ、この辺で。」

× × ×

川名氏と照代夫人に伴われ、中華料理Y楼に上り、いたく饗応された。

美容院の扉の前で、当の夏子さんが、恭々しく頭を下げて、私を見送ってくれたのには恐縮した。白く細やかなうなじが、とても印象的であった。

(おわり)

(追記)

同好の方と、共に春宵を語り合い度いと思いますが、なるべく関西の方なら、編集部で御連絡下されば、御返信の上、アブの遍歴を続けたいと念願しております。

-----懸賞告白入選作品-----

白

豚

交^{かた}野^の弘^{ひろし}

湿っぽい路地裏にも初夏の陽がカンカン射して、細い竹を這い上っているヘチマには黄色い花が咲いていた。

私は卑しい好奇心に胸を躍らせながら、川端の家を訪ねたのである。

川端は半年程前に私の会社に入ってきた二十三才の青年で、誰からも好感を持たれ、殊に私とは、とりわけ親しくしていた。

彼は痩せっぽちだが上背のある好男子で、人の噂ではひどいドンファンで、泣かされたオールド・ミスが何人あるか分らないと聞いたが、会社でも女事務員にはモテルし、確かにそんなタイプも見られないでもないが、一向に女にモテない私には、寧ろ彼を憎むどころか羨ましくさえ思われた。

私は或日、下街で、川端が見知らぬ女と連れ立って歩いているのを見た。彼は私の方に気付かないらしいので、私は秘かに電柱の蔭から凝視していた。

女は川端よりも四つ五つ、年上だろうか。和服がよく板について、大柄な仲々立派な夕イブをしていた。

女は歩きながらも頻りと愛嬌を振り撒いて川端の御機嫌を取っているらしかった。そのうちに、川端が水溜りに足を踏み入れ

泥水が靴に跳ねかかると、女はすかさず、「ちょっとお待ちになって下さい」

と言って自分のハンカチで手早く拭いてやっていたが、川端は「さあ拭け」と言わんばかりにソッポを向いて澄ましこんでいた。

翌日、会社で私が川端に昨日の女に就いて訊ねると、彼はさも得意気に話すのだった。

例の女は曾て観光バスのガイドをしていたが、肺を患い四年間も療養所生活を送った為治りはしたものの、会社とは手が切れて仕舞い、良い就職口が見付かるまでの踏台の積りで家政婦をしていたのだった。

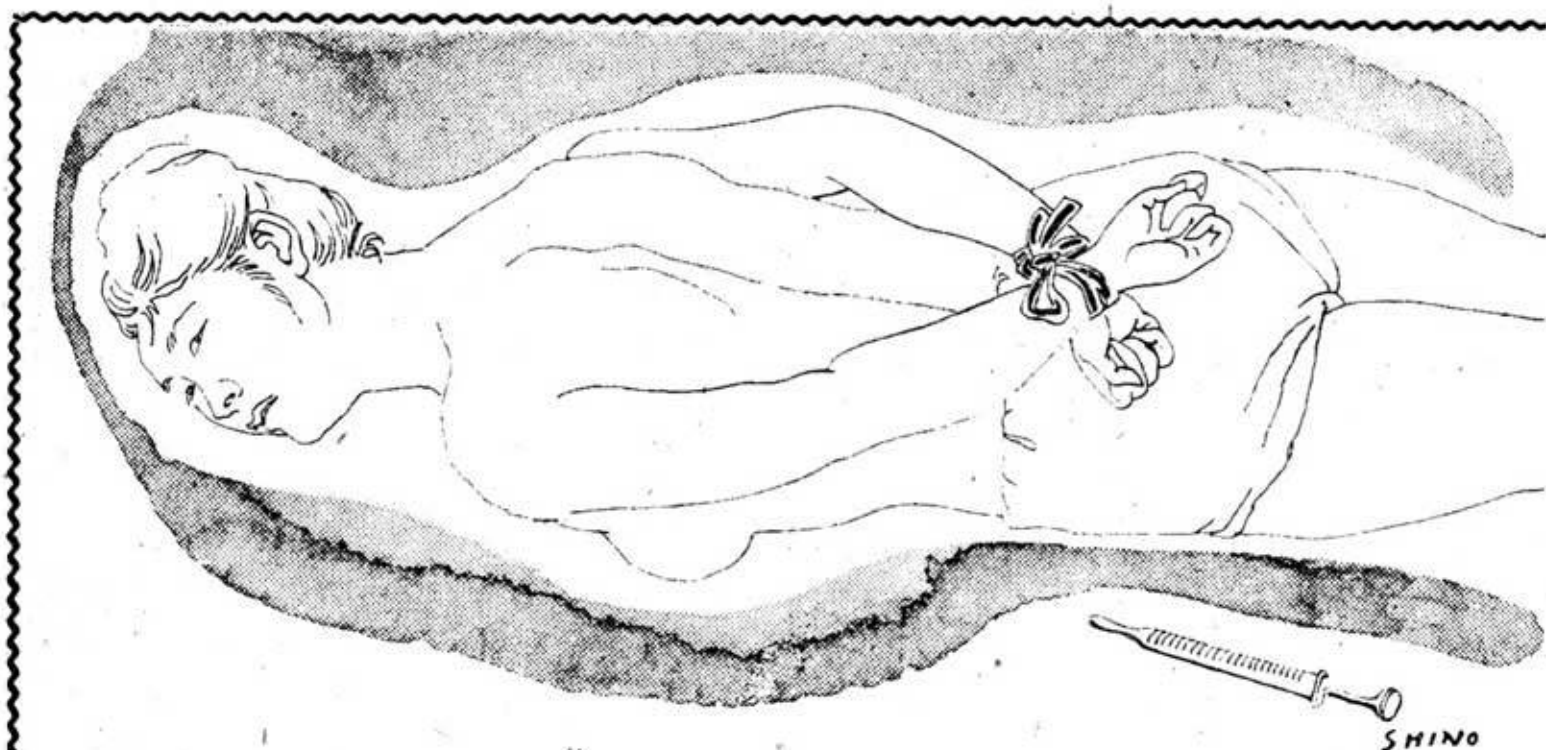
女は川端を慕っていた。「あなたの言うことなら何でも致しますから、偶にはお邪魔させて下さい」と言って、川端が休みの日には必ず家にきて、洗濯や掃除をしていた。

川端は女が色白で少し肥えているので「白豚」と呼び、無償の女中の積りで酷使していた。女も結構それで満足しているらしく、常に川端の歓心を買おうとして細い神経を使っていた。

「でも仲々の肉体美人じゃあないか？」

私が言うと、川端は笑いながら

「あいつデブなものだから、いつも着物ばかり着てデレデレしていやあがる」



数日経ってから会社で川端が競輪新聞と睨めっこをしていたので、私が後から「おい、どうしたい」と肩を叩くと、彼は頭を掻きながら、「やられちゃいました」と極り悪そうに言った。

私は川端には何度となく競輪の元手を貸してやったが、まだ一度も返したことはなかった。多分みんな取られて仕舞ったのだろう。

彼は新聞の字を指でつつきながら、本命だとか単穴だとかと説明したが、私にはよく分らず、また興味もなかった。金もやった積りで別に催促らしいことも言わなかった。

「川端、取られたと思えば腹が立つだろうが物は考えようだ。寄附してきたと思え。そのうちには好い運の芽が出るだろうよ」

私は彼の意を察して千円札二枚を黙って出すと、彼は無闇矢鱈に頭を下げた。そして暫くしてから、

「明後日の日曜には是非、私の家に来て下さいよ。良い目の保養になりますよ。普段お世話にばかりなっていますから、ほんのお礼の積りです」

と意味有り気に言った。

「目の保養って言うのは一体何のことだい」私が訊き返したら、川端は、この前の日曜

に女を待っていると、とうとう来なかったから、今度来たら、無断で違約した罰に、裸にしておいて、うんと仕置するから、私に押入れにでも入って見物して呉れと言った。

「いくらお前に惚れていて、何んでも聞くと言っても、真逆、裸にされて素直に仕置なんかされるもんかい」

すると彼は首を横に振って、真面目な顔で自信に満ちた口調で語った。

曾て川端が女を仕置しようとして「裸になれ」と命じたが、女は顔を紅らめてモジモジしながら仲々脱がなかったので、業を煮やした彼は、「そんなら言うことが聞けるようにしてやるぞ」と着物の上から両手を重ねて後手に括り浣腸した。女の顔は見る見るうち歪み、体は大きく波打ち、太腿は烈しく痙れんした。

「ごめんなさい。お赦下さいませ」

女は見栄も外聞も忘れて、子供のように声を出して泣き出した。

余程苦しかったとみえて、それから後はどんな無理なことを言い付けても、女は素直に言うことを聞くようになった。

「間違ひなく来て下さいよ」

川端は念を押した。悪魔的な好奇心が私の

心を妖しくそそった。私は明後日の日曜が待ち遠しかった。

川端の家は俗に家鴨部落あひよと呼ばれ、少し長雨があると、直ぐに水が出てしまう仕方のない低い処で、彼の家は路地の行き止りで傾いた古い二階家だった。何んでも彼の叔父という人が借りていたのを、彼が引き続き借りてその家に一人で住んでいた。

私が行くと、川端は階下の八畳で胡座をかいて何かしていたが、

「汚い所ですけど遠慮なく上って下さいよ」と笑顔で私を迎えた。

「何んだい、それは？」

彼がいじっている小さなバケツに入った乳白色の液に、私が目をとめて訊ねると、

「これですか、これは石鹼水ですよ。いま白豚が来たら浣腸してやるんですよ」

川端は平然として答えた。

「五、六合位あるだろう。一度にみんなするのかい。苦しいだろうな。第一そんなに入るか」

「そりゃあ、苦しいでしょうよ。それでなければお仕置の役に立ちませんからね」

川端は笑いながら、もうそろそろ白豚が来る時分だから二階に行こうと言った。

二階は六畳と三畳の二間で、六畳の間には六尺の押入れがついていた。隣は製材所で、やかましい丸鋸の音が絶えず四辺の雑音を掻き消していた。

その時、階下で「お早う御座います」という女の声が出た。

「白豚の奴が来ましたよ。あなたに其処で見物されていては一寸ばかりまずいですから、押入れに入っていて下さい」

川端は階下に下りていった。私は押入れの棚の上に寝そべって、板戸を中から閉めた。

丁度お眺め向きの節穴が開いていたので、そこに眼を当てて待っていた。

間もなく、女は先に立って階段を上ってきた。私は初めて彼女を目の前で見た。

桃色の鮮かな和服がよく似合い、眉にアイシャードなどまぶしてメカしていた。鼻が高くて面長の理智的な女のような。特に額縁の金歯が印象的だった。

今この女が、私の眼前でお仕置されるのかと思うと、妙に胸がワクワクする。

川端は、女がこの前の日曜に、来なかったことを怒気を帯びた声でなじると、女は優しい微笑を浮べて、どうしても多忙で抜けられなかったと言って、両手を突き額をひたいに埋め

て何度も謝り続けたが、川端は石のように動かない。

「それなら、何故、速達でも寄越さないんだ。一日中、俺は待っていたんだぞ」

彼は益々高飛車に出た。

「本当に申訳け有りません。」

「申訳けないで済むと思うのか。仕置してやるから、着物をぬげ」

女の雪白の頬がほの紅に染った。彼女は恐る恐る川端の面を見上げると、鋭い視線が自分に注がれているのを知り、モジモジしながら帯を解き始めた。

汗を流したような畳の上にそっと着物が置かれ、その上にシュミーズが重ねられた。女は肌にピッタリついたメリヤスの黒いズロース一枚になると身を縮めて「これでよろしいんでしょうか」と言ったような眼射まなざししで川端の顔を見ると、命じられたように川端に背を向けて行儀よく坐って両腕を重ねて後に廻した。

女の背丈は五尺二寸位だろうか、慾を言えど少し肥りすぎていて、十四貫以上もありそうだが、それにしても仲々の肉体美の持主だった。

川端は赤いシゴキで女の両腕を背中ひもとで縛っ

た。彼女は犬殺しに捕えられた野犬のように素直に縛られていた。川端は女に腹這いに寝ろと命じた。

曇硝子を透した初夏の陽は、女の牛乳色の肌に跳ね返り、太腿の附根の辺りにはうす紅くズロースのゴムの痕がのこっていた。

じっと見ていた私の心臓の鼓動は急に烈しくなってきた。

川端は自分の片膝で女の背中を抑えると、片手に持った一メートルの竹の物差しで彼女の丸い尻をピシピシ打ち始めた。物差しの雨が注がれると豊満な肉体を蛇のようにくねらせて、低い悲鳴にも似た声で、

「ごめんなさい。お赦し下さい。私が悪う御座居ました……」

繰返し哀訴したが、川端は籠耳に聞き流して尚も打ち続けるのだった。

川端は散々に打ち据えてから手を休め、肩で息をしている女の背中に馬乗りになって、悠々と紫煙を吐きながら

「どうだい。すこしは分ったかな」

「はい、分りました。これからは決して致しませんから、どうぞお赦し下さい」

女は益々低く出て一生懸命、謝ったが川端は仲々赦さなかった。

「お前は仕置されてどう思った。口惜しいかい、俺を恨んでいるかい」

「いいえ、みんなあたしが悪かったんです」

「悪いから仕置したんだ。で、どう思ったって訊いているんだよ」

「はい、迎も痛かったんです……」

「痛いように仕置しているんだ。お前は分りましたって言ったけど、どう分ったんだ」

女は返事に困って、へどもどしている、

「俺はお前が憎いから仕置をしたんじゃないんだ。だらしのない性質を矯正してやろうと思って懲らしめたんだ。苦しい仕置も有難いと思わなくちゃあいけないぞ。まだ本当には分っていないようだから、もうすこし仕置しよう。悪いことをして仕置されるときは、甘受するような態度をとるなら手心を加えてもやるし、途中で赦してやるかもしれないが、もし阻んだり逃げたりしたら益々烈しく仕置するからな」

川端は始めから浣腸する積りで石鹼水を溶かしていた癖に、無理矢理に口実をつくっているのだった。

川端は女の背中からおりと、浣腸液を取り出して小バケツの中の石鹼水を吸い上げた。彼はそれを何回も何回も繰返した。

女は全身を微かに震わせていた。多分、切齒して耐えているに違いない。川端は女の腹を平手で抑えてみてから、

「どうだい。苦しいかい？」

「はい、迎も強いんです」

「残りはまた後です」として、今はこの位にしておいてやろう」

女は縛しめを解かれやっと赦されると、後を向いて手早く着物を着てから、向き直って

川端の前に両手をついて詫びていた。

容器の中の石鹼水は、やっとコップに一杯位しか残っていなかった。川端はそれを捨てるよう女に命じて二人で階下を下りていったが、程なくしてから、また上って来て、

「白豚は今、使いに遣りましたから階下にゆきましよう」

と言った。

「白豚に一汗かかせてやりましたよ」

「随分酷いことをするんだな。あれで何んでもないのか？」

「ああいう女は、うんと仕置をすればする程従順になるもんですよ。それに、あんなでかい臀なんか、いくらぶったって何んでもありませんよ。浣腸だって、三十分も経てば治って仕舞いますから、苦痛はその時だけです」

「白豚どころか、立派なグラマーだよ。あの月経帯のような黒いズロースが一層魅力的だったよ」

「あんなデブが気に入りましたか。あのメリヤスのズロースは私が買ってやったんです。あれは子供ので小さいんですから、月経帯みたいでしょう。そして下ばきはあれの他はしてはいけないうって置いて置いたんで、家へ来る時はあればかりして来るんですよ。」

でもこの前、「一枚では困りますから自分で買ってでもいいでしょうか」って言うから、俺が与えたもの以外の下ばきは穿いちゃあいけないって言うのと、「でもお洗濯するときなんか困りますわ」ってモジモジしていったよ」

「そんなことまで干渉しているのかいまるで君の奴隷だね」

と私は言ったが、先刻の仕置から推しても川端の話は満更、出鱈目ではないらしく思われた。



女は態度といい、言葉使いといい仲々確りしている。この女が、川端にあんな酷い目に逢わされても彼の機嫌を取っている女かと疑われる。それにしても女の心臓を痺れさせてしまふ川端の魅力は大したものだ。

川端は女に目配せした。彼女は直ぐ「はい」と肯いて台所に下りて、白いエプロンに襷掛け、尻端折で甲斐々々しく山と積れた洗濯物を洗い始めた。実によく働く女だ。

「これから、ちょっといって中穴を狙ってきますから、先刻捨てさせた石鹼水をつくって置いて下さいよ」

川端の面には惨忍なケンが潜んでいた。

「もう可哀そうだから好い加減にしろよ」

とは言ったものの、私も彼女の躰と仕置には興味深々たるものがあった。

川端は俗に「ノミ屋」という私設の競輪の取次店に出て行った。女は洗濯が済むと畳へ雑巾掛けをしていたが、私が何を話しかけても五月蠅

とても思っているのか、能面のように無表情で、首を横に振るか縦に振るかは「はい」「いいえ」すら滅多に答えない。川端が居た時は、私に対してもこんな素振りはしなかったのに。

すこし癪に障った私は、台所にいって先刻石鹼水の入っていた小さなバケツに、石鹼水を溶かしてやった。水は先刻より多く七、八合も入れた。

すると女は私の傍に寄ってきて、急に笑顔を無理につくって、

「それ何をなさるんですの？」

と訊くから、

「何んだかしらないが、川端が先刻こぼしちやったから、こしらえという呉れて言ったからね、つくってるんだよ」

「それなら、ほんの少量でいいんですの」

女はこんな沢山浣腸されては大変だとばかり慌てて言ったが、私に対しても哀願するような優しい態度に変わった。そして、私が溶かした石鹼水を少し残して流しにこぼした。

女は昼の仕度をしながら、川端を待っていた。川端は十二時をすこし過ぎてからニコニコして帰ってきた。一レースが当って四千五百円儲けたそう。そして、私にも勧めた。

私が石鹼水のことを話すと彼は、

「じゃあ飯前に一発やっておきましょう。液は少量でも苦しめる方法はいくらもありますよ。余計なことなんか言ったりして」

彼は台所で女に耳打ちした。女は直ぐ階段を上っていった。彼も上ろうとしたので、

「俺もその『ノミ屋』にいつてみようかな」

とその場をはずした。

『ノミ屋』は川端の家から歩いて三、四分で

店は小さいがお客が満員で、いろいろな競輪新聞がたくさん出ていた。人々はそれと睨めっこしたり、首を傾げたりしていた。

「なければ三レースは切りりますよ」

と事務員が言っていたので、私も出鱈目に三枚買った。

人々は何れも神妙な顔で片唾を呑み、電話を待っていたが、私はそんなことよりも、川端が女を責めている状況を想像しては独り胸を高鳴らせた。

聴て電話が掛ってきた。人々は息をのんで待った。掲示板には出目と配当金額が書き出された。私の買った目が当たっていて、一枚に付き五千二百円の配当金をもらった。皆んなの羨望の視線が私に注がれた。

私は金を懐に無表情で表に出ると、川端が

迎えに来ていて、

「そりゃあ、よかったですね」

と自分が当たったように喜んだ。私は気になる女のことを訊くと、

「勿論やりましたよ。会社の人が帰ってくるまでに残りの浣腸をするから、と言ったら、あいつ観念して目をつぶって言う通りにしましたよ」

私達が帰ると、女はお昼の仕度をして待っていた。

それから二、三日経ってから川端は会社で、競輪ですっかり取られて仕舞ったと萎れていたが、真逆私に貸せとは言えないらしいので、私の顔色を見ながら、

「白豚の奴、金だけはどうにもならないから、可哀そうだけど客を取らせようかと思っているんですよ」

「そんな酷いことはよせよ。この前の儲けた金があるから、明日あれをそっくり貸してやってもいいよ」

「どうも度々済みません。では、今度の日曜に白豚を一日、貸しましょうか。僕がよく言い合っておきますから、何んでも言付けて下さい。言うことを聞かなかったりしたら僕が承知しませんよ」



私の間借りしている家は叔母の家で、未亡人になった叔母は、今丁度お産をした嫁した娘の処にいらっている、この広い家に私一人で住んでいたから、家政婦を頼もうかと思ったこともあるが、それよりも、例の女の躰に一しおの興味があつた。そして日曜が待遠しかった。

その翌日、私は約束の金を川端に渡してやった。すると彼は、昨晚、白豚が来て「今度の休みの日、静かな処に連れて行って呉れ」と甘たれたから、この前来た会社の人とこゝろへ日曜に行け。そして、あの人がよく働いて呉れたと言つたら連れて行ってやるが、もしそうでなかったら、また浣腸のお仕置だぞ

と念を押したと言つた。
私の目には、色白で肥り気味の例の女の姿がちらつきだした。
あの女は、どんな顔して何んと言つて来るだろう……、かと。

(おわり)

△告

白▽

口を聞く犬

左^さ江^え木^き

勝^{まさる}

つい最近までは自分の様な性質を持った不思議な人間は、私一人だと思つていた。だが、嬉しい事に、事實はむしろ逆であるといふことが、だんだん判つてきたのみならず、大部分の人達が自分の希望を押え、理性とい

うつまらない感情で社会的な生活環境から除け者にされないために行動しなければならぬ。無言の誓約のうちに生活しているのである。私の言う生活という意味は全く広い範囲である。その事は、それぞれ多少でも違つた考

えの人達がいるが、しかし私には、そんなものは豚にでも喰わせてしまつて、大いに自分の人生を楽しみなさい、と言いたい。

現に私は極めて自然に？最も合理的に明るく自己の生命の中に新鮮な生甲斐を感じ、これから述べる最上のスポーツ（私達はこう呼ぶ）をエンジョイしているのである。仮りに今私が此の告白のペンをとっている姿は、読者諸氏には想像もつかない程の恰好なのである。第一、私は丸裸、それだけではない。足には鎖のついた足枷、手は手で一尺の間だけ自由の効く手錠が重々しく掛っている。それのみではない、私の下半身には私の女御主人様御考案の皮製褌が喰い入っているのだ。

此の哀れな恰好で三月とはいえ、裸の寒さにガタガタふるえながらペンを走らせている男が即ち私なのである。目を横のソファに転じて見よう。均整のとれた長身を横たえ紫煙をくゆらせながら、勝ち誇った姿で私を見下している女御主人。

そうだ、私は彼女の犬なのだ。口を聞くことの出来る犬なのだ。右手には細くしなやかな竹の鞭を弄び、他方にラッキーストライクを白魚の指股にはさみ、ユラユラ立ちのぼる煙の中に、彼女の妖婉な姿はさながら王女の

如く気高く美しい。

豊満な胸部を僅かに掩うピンクのブラジャーは、はちきれんばかりに息づき、馥郁たる香りをただよわす腰から足に伸びる曲線は、牝鹿のように強靱である。ああ、これこそ、私が永い間求めていたサジスチンの出現ではなくてなんであろう。夢ではないのだ。女主人は、自分の傍にこの哀れな犬の仕置の楽しさを想像しているのだ。

私は今日の失敗の罰として受けなければならぬ犬の訓練（彼女はこう呼んでいる）の烈しさを心の中で恐れ、且つ期待している。

ゆらりと女主人は半身を起して右手の鞭の先で私の鼻柱をつつき呟く。さあ、いよいよ本当に覚悟しなければいけない。

「馬鹿犬、お前、今日やった失敗は自分で悪いと思っているのかい。それとも、どうせ犬だから分りっこないわね。なんとか返事できないの。ホラ、これが欲しい？」

ピシリ、

目の前で鞭が小気味よい音をさせる。私は返事が出来ないのだ。人間の言葉は犬の世界では通用しない。只、「キャン」と鳴くことが私に許された唯一の言葉なのだ。

「フン、何かすれば直ぐ鳴く。いくら鳴いて

も今夜は許さないよ。早くここへ這いつくばってお許しを乞うようにしたら、どうなの。早くおし、この間抜け犬め！」

女主人の命令は絶対な権力を持っている。私は反射的に素早く命令を実行する事を習慣づけられている。足元に四つん這いに平伏し女主人の白い足首に鼻づらを押しつけ、舐め接吻をして哀願する。それを軽く足の平で顔はすしたので私はぶざまに床の上を嘗めてしまう。彼女はそれを冷たく無視し、やがてゆっくりと吸い差しの煙草をそばの灰皿ににじり潰し、ピューピューと鞭の素振りをくれないながら立ち上って私の背後へ廻り、むき出しの尻の上に片足をかけて宣告する。

「お前は今から、今日の失敗の償いとして素直に罰を受けるのよ」

「キャン（ハイ、女主人様）」

「再び同じ失敗を繰返えさない様に私がお前の体に直接、苦痛を与える。判ったね」

「キャン」

「よし、先ず始めに鞭打ち十回、それから調教十分、最後に皮の褌を締めて朝迄寝る事、これがお前のお仕置の順よ。じゃあ始める。そらゆくよ。鳴き声を出すと、あとがひどいというの知っているね。それ一回——」

ビシリ——

声が終らぬうちに最初の鞭が激しく音を立てて私の尻に飛びかかる。もえる様な痛みが電痛のように私の身体を駆けめぐる。二回、三回、五回、ああ、だめだ。声を出さずにいられない。

「ヒー、キャン、キャン」

だが、どうだ。痛みの中にはぐんぐん盛り上って来る快さは、何んという不思議な感覚だろうか。私は鳴きながらウツトリと溶け込むように味う甘美の世界に身をゆだねた。

鞭打っている彼女も頬を染めて、私と同じように夢の国をさまよっているのではないだろうか。

「これでもか、まだか、ホラ」
今や彼女は平常のつましさは、どこへやら、理性をかなぐりすてて真剣になって鞭をふり下している。ヒイヒイと悲鳴をあげて、のたうつ私。やがて鞭打ちの刑は終る。
「どう、すこしはこたえたか



い。お前は私の命令に背いて鳴声を出したね。構わないよ。只、それだけ余計に罰を受ける義務が増えるだけだもの。サアこれにくわえて。調教よ。ぐずぐずしないで、ホラ、三遍回ってワンと鳴いてごらん。ヨシ、今度はチンチンよ。ホホホホ、良いざまね。そう

やって、そのまま、キャンと云ってごらん」
私は鞭打ちの刑で汗ばんだピンク色のパンティを床の上からくわて四つん這いに這い、女主人の調教に一生懸命だ。あらゆる飼犬の芸の基本的動作を仕込まれる事十分。

「いいわ。よし調教は終りだけど、さっきお

前が鳴いた罰に、そのパンティの汚れを綺麗にお舐め。ここんところ一番汚れてるのよ。終ったらお見せ。結果によっては、それをお前あげるわ。だって、お前の好きな遊び道具なんだろうからね。ホホホホ。」

薄黄く汚れた部分をかみしめ、唾液でベトベトにして舐める。汗と体臭にむせて、こういう時は本当に私は犬になって女主人にいじめられている様なサッカクに陥る。その時こそ、最高の瞬間なのだ。

此の広い人口九百万の大東京の一角、世田谷のアパートの一室で、かくも素晴らしいクリエーションが行われていようとは、かくいう神様でも知らないと思う。私は完全なマゾヒスト、典型的なアブノーマルだ。私の女主人は一体、誰だろう。こんな大胆に振まう女性、果してこの世にいるだろうか？ と、不思議に思ったり、疑問を持つ方々はもっといるだろう。

私達は夫婦なのだ。しかも、昼間は何ら他の人々と異らない正常なセンスを持ち、社会的には仲睦まじく平和な新婚夫婦なのだ。

話が妙なところで横道へそれてしまった。早速、本筋へ戻って続けよう。

女主人は私の行為を愉快そうに眺めながら就寝前の一杯のブルーマウンテンを飲み干しやがてお休みの用意をする。

お仕置き室（私達はこの室を防音状態にしてそう呼ぶ）の隅の抽出から、私の首輪とくさりを取り出し、南京錠のピチリという音と共にくさりと首輪につながれる。（首輪は勿論、犬屋で私の首に合ったものを妻が買ってきたもの。くさはりは二重になって猛犬用）

「何時まで、そんなものを舐めているのよ、さあ、ほしけりゃ、くわえておいで。私はいつまでも、お前と遊んでいられないのよ、お歩き！」

邪慳にくさを引きしぼられる。私は這いつくばって、いつものようにベッドの足下にくすぐまり、まばゆいばかりに美しい女主人の脚を見上げる。

「キャン、キャン、キャン（女御主人様、お休みなさいませ）」

と挨拶をする。

女主人はニヤリと笑って、私の馬鹿面を見下していたが、そばに落ちている例のパンティを見つけて何やら又いたずらを思いついたらしく、一人でうなづき、

「そうなの、そんなに、これが欲しいんなら一晩中、口の中に入れてあげてあげるわ。そうすれば、お前も嬉しいでしょう。サア、こっちをお向き。アーンしてごらん。早くおしよ馬鹿ね。ホラ、これでいいわ、こうすれば、お前も一晩中、御主人の事が忘れずに居られるものね。ホホホ、いい恰好なことね。さるぐつわとはよく云ったもんね。まるで猿だよ、お前は。じゃあ、お休み。静かにおしよ。此の前みたいに私を眠らせないと、今度はひどいからね」

やがて女主人はスヤスヤと軽い寝息をたてて天使の様に寝込んでしまう。

さあ、今日も楽しい一日だった。愛妻は温かいベッドの中、私は冷たい床の上に裸のまま手足を縛られパンティのさるぐつわ。皮の鞭をギリギリ一杯、尾錠の穴をつめられて、息をつくのにも苦しい程痛い。

犬の様に丸く身をかがめて、しばしの眠りにつく。

私は幸福だ。女主人のおそばに寝られる犬は、そんなに沢山、居ないだろうから。

女斗美小説

夢の闘舞夫人

円山景三

準急『くまの』は太平洋の黒潮洗う岸壁の上を走っている。新緑の明るい陽ざしのさし込む車内の一隅で私は妻の美恵と向いあっていた。今朝早く京都を発って、天王寺駅から白浜行の列車に乗ったのである。

「もう間もなく白浜だよ。どう？後悔していないかい」

と、声をかければ、浅い眠りにうとうとしていた美恵は、円らな眼をぱっちり開いて「何も後悔なんか、してないわ。でも、どんなことをするのかと思うと、少し心配になってきたわ」

「そう心配することは無いと思うよ。先生の

ことだから、何か芸術的なものを撮もうとして居られるのだろう」

「それはそうだと思うけど、只相手の人が、どの様な人かと思うと心配なの」

「まあ、何にも無理に勝たなくていいさ。負けてもいいから怪我のない様に頼むよ。しかし相手の人が美恵と釣合わない様な人だったら、僕から断ってあげるからな」

そう言っている中に「白浜口、白浜口」という駅員のアナウンスに急いで下車した。白浜口駅を降りると、駅前には先生が車を待たせて迎えに来て下さっており、私は久しぶりの対面ゆえ鄭重に挨拶を述べ、別荘まで直行

したのである。車は海岸沿いの快適な舗装路を走って白浜棧橋を左折、白良浜を右手に見て稍々しばらくゆくと海に面した見晴しのよい小高い岡の中の松林に囲まれた瀟洒な一軒家に着いた。

自然をとり入れて庭も広く、周囲には高塀をめぐらして静寂そのものの別天地である。此の別荘の主人、即ち完齋先生は、昔、女学校の国語の先生をしておられた方で、戦後、退職されて後、特殊な電気通信機器を製造されたのが当り、弱電ブームにのり、現在では資本金三億円の会社として発展途上にある。

先年、御子息に社長の椅子を譲られ、御自分

は会長として第一線を退かれてから、白浜のこの別荘を求められたのである。大阪から飛行機で三十分余りの近さなので、豊中の御自宅からは、散歩に行くようなおつもりで別荘へ遊びに来られるのだそうだ。

現在ここには石田という土地の老夫婦が留守番に居るだけなので、今日は沢山の客人が見えるというので、石田夫婦も息子の嫁や娘までかり集めての大活躍である。美恵も女学校時代、先生の教えを受けた一人で、卒業後も特別懇意にして頂いており、昨春秋に奥さんの御病気の時には手伝いに上り御世話した様な間柄で、私は又、先生とは以前から女闘美愛好者同志として交際している中、縁あって美恵との結婚には月下氷人の労をとって頂いたというわけである。

そんなわけで、今度白浜の別荘で女闘美を行うという催しに



は、イの一番に招待を受けたのである。「一度見物がたらに遊びに来ないか。出来れば、美恵ちゃんにも出ていただきたいが、如何なものだろう。君からも、よく話しておいてほしい」という添書きまでついていた。

美恵に話をする、京育ちの彼女は、是非、白浜の温泉へ行ってみたいわ、でも、お相撲をとるのは怖いみたい、どうしようかしら、と思案するのを、なんとか、納得させて連れてきて、というわけである。

私達が着いて程なく、一組の夫婦が見えたが、夫人は中々のグラマー振りで、美恵と比べても甲乙がつけられない位である。先生の紹介で藤原君夫婦とわかった。今迄藤原君とは女闘美マニア同志として互いに文通しておったが、顔を合すのが初めてで一層親しさを増し、いろいろと話し合ったのである。

無色透明の温泉がどんと

パイプで溢れるように注がれる湯槽につかって、湯上りのビールを飲みながらロビーで休息していると体格のよい美しい婦人が、車で次から次へと見えたので、邸内は急に花の咲いたように明るく賑やかになった。

一同打揃って会食の折、先生は「白浜見物は明日ゆっくりして頂くとして、今晚はK氏の連れて来られるメトマーズ八名と合同で女闘美を開く予定をして居ます」と説明され、「賞金を次のように出します」と貼り紙をされました。

賞 金	
優勝者	金二十萬圓
準優勝者	金五萬圓
第三位	金三萬圓
勝利者賞一番につき	金一萬圓
参加者全員に参加賞	金二萬圓

やがて宴が始まると、美恵と藤原夫人の春枝さんに対して「今晚の女闘美に貴女方お二人が出て下されば、当方も八名になるのです」と出場を頼まれたのである。美恵と春枝さんは共に覚悟してきたものの、さすがに角力をとるのは初めてなので躊躇したが、佐藤安子さんや隣りの婦人に盛んにすすめられ

て、とうとう、互いに顔を見合わせて、うなづいたのである。

これでK氏の連れて来られた婦人八名は、聞くところによれば、皆女角力の好きな方ばかりで平素は見る方ばかりであるが、今度は自分達で一度女同志の相撲をやろうとK氏に口説かれたそうで、皆素人ばかりである。

今日の女闘美は、そんなわけで勿論非公開ではあるが、婦人達の主人というのが私の外にも三、四人、見えており、又、先生、及びK氏の縁故で信用のある女相撲マニヤ女闘美マニヤの同志が二十名程見物に来ることになっていた。取組みは合同とはいえ、K氏の連れて来られた関東側と先生側の関西勢の対抗を主とした個人トーナメントが行われる。

土俵は中庭で芝生の中央に土を盛り上げ、四本柱はなく、四方より綱を張り渡して幕を引き房までつけた、急造のものとしては中々立派なものである。

婦人達の仕度の整うまで、角力気分を盛り上げるため、男の同好者有志の間で数番取組みが行われた。やがて、仕度の出来たメトマーズが浴衣に伊達姿で土俵のまわりに集まり完斎先生の開催の挨拶があつて、引続いて取組みの抽籤が行われ、黄色の声の騒音の中に

第一回戦の相手がきまったのである。

一番最初の取組みは、山田千鶴子さんと鈴木千代さん。ここで正面に本日の出場者のメンバーが貼り出されたので、記しておく。

素人婦人角力大会出場者一覧

K氏側

日高寿美子	二十四才	出身地	東京
山田千鶴子	二十五才	出身地	横浜
大山 花江	二十七才	出身地	東京
大塩貴代子	二十六才	出身地	横浜
畑中 光代	二十七才	出身地	東京
山崎 京子	二十九才	出身地	東京
堤 八重	二十六才	出身地	東京
奥村 芳子	二十八才	出身地	静岡

先生側

五尺三寸、十七貫

藤原 春枝	二十七才	出身地	大阪
五尺三寸	十六貫		
小山 美恵	二十七才	出身地	京都
五尺三寸	十六貫		
鈴木 千代	二十八才	出身地	京都
五尺三寸五分	十五貫		
照田 文子	二十四才	出身地	大阪
五尺四寸	十四貫		
佐藤 安子	二十六才	出身地	神戸
五尺三寸	十六貫		
佐々木豊子	二十九才	出身地	京都
五尺三寸	十五貫		
岩田 静子	二十五才	出身地	大阪
五尺三寸五分	十七貫		
山本加代子	二十八才	出身地	徳島
五尺三寸三分	十七貫		

岩田静子さんなんかは、一見して十八貫は十分あるうと思われるが、本人の言葉の通り十七貫になっている。しかし、誰を見ても、皆よく健康美に輝くはちきれんばかりの女丈夫の集りである。呼び出しは石山巴さんという四十才近い婦人であるが、年に似合わぬ若々しい、よく通る声を張りあげ、

ヒガシイー、山田千鶴子さーん、ニイーシ鈴木千代さーん、と呼び出したのである。

最初に呼び出された二人は、土俵下でもじもじしていたが、思いきって千代さんが、ぱっと浴衣を取れば、千鶴子さんも肩からずらして脱ぎすてたのである。一瞬の静寂、そしてウワーと喚声が挙ったのである。それもその筈、なんと浴衣を脱いだその下は、二人共素肌に禪一本の丸裸で、はりきった胸も、お尻もまる出しである。

角力をとるといったって、女性のことなのでパンツの上から禪をしめ、乳当てでもしてしまふのだろう位に思っていたので、私も驚きの眼を見はる。これでは、男の相撲とは何の違いもない。全くの驚きである。

肉体美の素人の婦人が非公開とはいえ、二十名近い男性の見ている前で、よく思いきって裸になったものだと思ひし、又、よほど角力狂の奥さんばかりだと思ひながら見物したのである。行司は、昔、草角力で行司をしていたというH氏が当り、装束も先生所有のものを着こなして土俵に上った。

「こなた、山田千鶴子さん。かたや、鈴木千代さん」

行司に差し招かれて土俵へ上った二人は、浪の花をまき、仕切る姿も体格がよいだけに中々立派である。四股をふみ、向いあった二

人の身体は緊張のためか小刻みにふるえている。いくら角力好きとはいえ、禪一本で土俵に上り、男達の目の前ですまうをとろうというのだから、ふるえるのも当然である。

一回、二回、と気合わず仕切り直してある。二人の眼も次第に熱を帯び、火花が散っている様に見える。

三回目、同時に立ち上ると突っ張り応酬からガッキと右四つになり、互に押し合い寄り合い、やがて始めの固さもしこりも解けて、なんとかして、相手を押し出そうと、懸命の大熱戦となった。見物人の拍手喝采。

千代さんがぐいぐいと寄り、千鶴子さんを土俵際に追いつめる。必死にこらえて、左へ回りこもうとするのを、そうはさせじと千代さんは身体をあずけて、浴びせるように寄り倒した。勝った千代さんは勝名乗を受け、勝利者賞を手し、にっこりと溜りで浴衣を着けたが、負けた千鶴子さんは、身体の砂を払うのも忘れ浴衣をひっかけたまま、真赤な顔をして控え室へ引揚げたのである。

次は東方は大山花江さんで、西方は藤原君の奥さんの春枝さんである。行司にさし招かれた二人は、浴衣を脱ぐなり一礼して土俵へ上り四股をふんだ。白い肌、見事に膨らんだ

乳房、むくむくと肥った太股、よく発達した臀部が四股のたびにビリビリと震動する。ぶるんぶるんと揺れる乳房、まことに素晴らしい眺めである。

大山花江さんは二十六才、五尺三寸、十五貫の均整のとれた身体なれば、藤原春枝さんも、二十七才、五尺三寸、十六貫で体重に於てやや勝り、司葉子に似た顔立ちで中々の美人である。一回、二回、三回、と仕切っている中、どうやら春枝さんの方が落着いているように見受けられた。裸になって角力をとる婦人とは思えぬくらいである。

四回目、ブチッという二つの女体の激しいぶち当りの音。すぐさま花江さんが双差しとなり、ぐいぐいと寄ってゆく。春枝さんは土俵に足をすべらして、ずるずると後退、あわや、このまま土俵を割るかと思われたが俵に足をかけて顔を真赤にしてこらえ両上手をしっかりと取って腰をおとせば、そこは素人女性のこととて、花江さんは寄りきれず下手投げをうてば、かえってこれが悪く、春枝さんを土俵中央へ戻す結果となった。

土俵中央でもみ合う中、春枝さんは左をまきかえて左四つとなり、投げのうち合いから寄りあい、二人共白い肌は汗びっしょりとな

り、電光に美しく光る。がっぷり四つになれば、やはり体重のある春枝さんに分があり、大きなお腹をしゃくり上げて寄れば、疲れた花江さんは、くたくたと腰くだけとなって土俵溜りへ仰向けに落ちた。

次は日高寿美子さんと照田文子さん、この取組みは共に二十四才の一番若い者同志だったので、呼び出しがあつて、わあッと喚声が挙って人氣があつたが、勝負は簡単にきまつて、寿美子さんが立ち上るなり、一気に文子を押して勝ち、次々と取進んで一回戦も最後の取組みとなった。

呼び出しは、美恵と山崎京子さんの二人を呼び上げたのである。美恵が二十七才、五尺三寸、十六貫の身体なれば、京子さんも二十九才で五尺三寸、十六貫と、全く互格の体つきである。待ったなしで立ち上るや、美恵は咽喉輪で攻めたて、土俵際で弓なりになってこらえる京子さん押し倒したのである。

勝った美恵は勝名乗りも上の空、只人の真似をして賞金を受けていたが、京子さんは、うつむいて走り去るように仕度部屋へ引揚げていった。これで一回戦も終り、次はいよいよ二回戦である。二回戦の組合せも済み、一旦控え室へ引揚げていたメトマーズも東西に

別れて土俵際に勢ぞろいしたのであるが、今度は浴衣もすっぱりと脱いで禪一本の姿であるので、中々見事な眺めである。

八人宛十六人の裸の女が向いあった様は、いずれも十六、七貫というグラマー美人ばかりなので素晴らしくボリュームがあり、実に圧倒されるような光景である。

先ず最初は、堤八重さんに佐藤安子さんの取組みである。共に夫君の堤君と佐藤君が見ているので、取組まれる奥さんもさることながら、堤君と佐藤君の胸中如何ばかりと慮りながら好奇心で見守るうち、すでに、この場の雰囲気馴れた二人は、悪びれずに土俵上に相対した。八重さんの五尺三寸五分、十七貫に対し、安子さんは五尺三寸、十六貫、いずれも二十六才であるが、安子さんが身長、体重に於て勝る八重さんに対し、どの様な角力をとるだろうかと興味を持たれる一番である。

仕切り直し三回、四回目、立ち上るなり頭を低くした安子さんは前禪をとり、右へ左へ回って八重さんにマワシを取らせず、引っかきまわし戦法に出た。最初、安子さんのペーすに巻き込まれ、土俵上を引きまわされていた八重さんはようやく安子さんを引きはなし



組むと見せて安子さんの出てくる処を猛烈な張手を二、三発かましたので、たじたとなつた安子さんが土俵際まで後退すると、その右腕を取るなり、抱えこんでふりまわすと安子さんの身体が半回転して、ずしんと地響を

立てて土俵上に叩きつけられた。

「うーん」と低い声を出した安子さん、さぞ痛かったことだろうと思う。

取組みは次々と進み、やがて、美恵と奥村芳子さんの対戦となった。芳子さんは美恵よ

り一つ上の二十七才、五尺三寸、十七貫、背丈は美恵と余り変りないが、ずっとよく肥つた奥さんなので、私も今迄二連勝してきた美恵だが、今度は難しいかなと思ひながら美恵に声援を送っていた。

立ち上るなり、お互いに相手の胸や顔を叩きあうような差手争いから、うまく双差しとなつた美恵は、弾みをつけ、急に芳子さんを追いつめ、腹にのせるようにして吊り上げそのまま土俵外へもつて出た吊り出しの勝ちである。一回戦、二回戦、三回戦と終つて、七敗した人は失格となり、最後は九勝四敗同志が四人残つたので、抽籤で準決勝及び決勝が行われたのである。

準決勝の最初は、堤八重さんに藤原春枝さんである。二人共、土俵上ではちきれんばかりの太股をでしんと四股をふみ、蹲踞の姿勢で向ひあつたところなど、さすが準決勝戦にふさわしい落ち着いた相撲ぶりである。

一回、二回の仕切り直しから三回目に立ち上り八重さんは右肩から体当りにぶちかまして、よろめく春枝さんの左腰に両手をあてがって送り出したかに見えた

が、身体の柔軟な春枝さんは土俵際で腰をひねってまわり込み、たたらを踏む八重さんを逆に土俵際へ追いつめた。ここで左の相四つに組みあい、腰を落して土俵中央で押し合、力量互格で中々勝負がきまらず、一呼吸。二人は上手下手を十分にとって、スキあらば投げに、寄りにと狙っているが、立ち上りの激しい応酬で、大きく腹は波うち、胸からお臍のあたりへ玉の汗が溢れて流れる。見物人も思わず、「八重ちゃん」「春枝さん」と声援を送っている。ぐっと窪んだ彫の深い臍が、締め上げられた禪の上でにらみあって、あわや、水入りかと思われた刹那、八重さんは二度、三度、右からの下手投げで春枝さんの態勢をくずし、そのまま、ずずずと寄り進めば、二人は組み合ったままで東の土俵溜りへどしんと落ちた。

準決勝の二番手は、山本加代子さんと美恵の取組みである。加代子さんは五尺三寸五分、十七貫という男勝りの堂々たる体格で、顔も体格に似合わず愛嬌のある美人である。年令は二十八才、美恵はこの奥さんに比べれば、背丈、体重ともにいささか劣っている。一回目は気合わず仕切り直し、二回目、美恵が突っかけたが加代子さんは待ったをして

受けず、三回目加代子さん十分だが、美恵待ったをし、二人共中々堂にいったものである。

四回目、同時に乳房をゆすって立ち上り、組んでは不利と、美恵は頭を下げて加代子さんの懐へ飛び込もうとするが、加代子さんもさるもの、後退しながら、左へ左へと回り込んで、はたいたので、美恵危いッと思ったが素早く立ち直って、足を送ってついてゆけば土俵中央に返って、ガッキと右四つ。互いにもみあっていたが、組んではやはり背丈、体重に於て勝る加代子さんに分があり、じりじりと寄って、美恵を土俵際まで追いつめた。

右へうっちやろうと、身体を弓のようにしてこらえる美恵、髪の毛は二筋、三筋、頬に乱れついて全身汗みどろ。精根こめて身体をあずける加代子さん。遂に二つの女体は重ね餅となって、どしんと土俵下へ転落した。

いよいよ最後は本日の一番、堤八重さんと山本加代子さんの決勝戦である。この一戦に勝てば二十万円の賞金を貰うことが出来るのである。ここで暫く休憩となり、芝生の上に並べられたパイプチェアに腰を下して冷たいビールやサイダー、ジュース等に咽喉をうるおす。完斎先生は御自宅から、急用の電話かとかで、席をはずされる。

午後八時三十分。陽もすっかり落ちて、電光の一きわ明るく映える土俵上に、八重さんと加代子さんの二人は姿を現わした。

五尺三寸五分、十七貫と、いずれも本日出場のメトマーズの中でも最もよい体格の持主である。さすがに決勝戦だけあって、殺気みなぎる土俵上である。ずしん、ずしん、と相手を威圧するような四股をふむときの筋肉の躍動ぶりも見事なものである。殊に、両手を下したときの臼のような大きい臀部には圧倒されそうであるが、しかし、何といっても女性だけに色気が漂っている。

一回、二回、三回、四回、と仕切り直し、五回目、体と体とが、どんとぶつかりあう激しい音。すぐさまガップリと右四つに組む。上手下手を十分にとって胸を合せたので、乳房と乳房が上になり下になりして揉みあっている。加代子さんが左からの上手投げを放てば、八重さんも下手投げに打ちかえし、二人の豊満なお尻が、その度に傾き、互に残しながら機を見て寄り進もうとする。

しかし、どちらも簡単に寄られるような弱腰ではないので、きまりそうにもない。肌と肌が脂汗でぬるぬるになり、ハアハアと口で大きく息をする度に、お腹の筋肉が波をう

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切
復刊第4号	(昭和31年5月号)	△売切
復刊第5号	(昭和31年6月号)	△売切
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切
復刊第8号	(昭和31年9月号)	△売切
復刊第9号	(昭和31年10月号)	△売切
復刊第10号	(昭和31年12月号)	△売切
復刊第11号	(昭和32年1月号)	△売切
復刊第12号	(昭和32年2月号)	△売切
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切
復刊第14号	(昭和32年4月号)	△売切
復刊第15号	(昭和32年6月号)	△売切
復刊第16号	(昭和32年7月号)	△売切
復刊第17号	(昭和32年8月号)	△売切
復刊第18号	(昭和32年9月号)	△売切
復刊第19号	(昭和32年10月号)	△売切
復刊第20号	(昭和32年11月号)	△売切
復刊第21号	(昭和32年12月号)	△売切

復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い廃院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦虐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	△売切
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第一集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	△売切
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第二集)	定価二百円

復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価三百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価三百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和35年6月号)	定価三百円
復刊第62号	(悦特第五集)	定価三百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価三百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価三百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価三百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

ち、このままでは水が入るかと思われたが、八重さんが腰を落してぐいぐいと寄り、加代子さんが押しかえすところを内掛けをかけたが、加代子さん切返せば鮮やかに決まり、二人はころんと土俵上に仰向けに転った。勝った加代子さんは皆に羨ましがられながら賞金の二十万円を完斎先生の手から貰い、

一同の拍手の中に控室へ引揚げ、これで本夕の素人女角力大会も無事終了したのである。海岸に面したベランダで話合っていると、湯から上ってきた婦人達が、和服姿もあでやかに集ってきた。此の婦人達が先程輝一本の姿で土俵上で格闘した人達だとは、どうしても考えられない上品で淑やかな奥さん方ばかりである。一同揃ったところで先生主催のパーティーが開かれた。

美恵に聞いたところによると、控え室で輝をつけるときは大変な騒ぎだったそうだが、だんだん勝負が進んでくると莫大な賞金の欲も手伝ってか、エキサイトしてきて、本当に真剣に取組んだとのことだった。



《告白随筆》

魅惑の灸痕

水木清一

僕は、女性が、殊にうら若き妙齡な美人が、お灸を据えているところを見たり、又その灸痕を期せずして、発見出来たりすると全く胸をはずませて、その女性に心惹かれるものです。性癖、といってこれは、僕の小学三、四年頃から始まった事です——。それでいて僕はお灸というものを、小さい時から一度も据えられた事はありませんでした。

その時分、前の家の正太郎という子があり、よくお灸のお仕置に合っているのを、偶然、遊びに行

って見たり、又近所の遊び友達の明ちゃんという子なども、虫が起きたといつて人差指か薬指だかの横腹へ据えられて、火ぶくれになっているのを見たりしました。学校などでも、手の指先などに灸痕と覚しきものがある子を見掛けたりしますと、いやが上にも一段と、僕の性来の素質を燃え上らせ、お灸というものに、興味をもたざるを得ないところへと成長して行ったものです。

「自分でも試して見よう。どの位、熱いのかしら——」そんな事

を想い、お線香をじかに指に押し当てたりして見ました。熱いが、ジーンと、そこに何ともいいよりのない、余韻をもった快感が疼いて来たのでした。

六年の春、肺門淋巴腺が腫れて注射のため、一日置きに病院へ通いました。僕は注射だけの処置だし、それにまだ子供なので、大人の患者を院長が診察している中にその横のベッドで、看護婦が注射をしてくれました。そのため、あらゆる患者の、裸の胸と背中を見て、お灸の痕も随分と眺める事も

出来ました。若い女性でも案外、背中に大きな灸痕があったりしました。

ある時、丁度、僕が診察室のドアを開けると、すぐ目と鼻の先にぶつかりそうな位に近くにいた女性の背中に、十円銅貨大の灸痕が行儀よく二列に並んでいるのを見つけました。余り間隔をおかず、恐らく、腰巻を締めている腰下までもある事には間違いないと想いました。僕がドアを開けたので、吃驚して振り返りながら、着物の袖を通そうとしますが、背中だ

け、だらんと後へ脱いだので、片袖が入っても後の片袖はうまくひっかからない。僕はだらんと下った片袖を揚げてやりました。

「アラノありがと——」といいましたが、色の白い、美しい女性でした。今想い出すと未だや々と廿二、三才位の歳恰好と記憶して居ります。背中の上の方に、これ亦大灸で、弘法様の灸痕らしき痕のある、赤いセーター姿の体格のいいお嬢さん——。その他、金縁の

眼鏡を掛けた中年の婦人で、背骨脇、左右三個処ずつ六個処、何の事はないトンガリの無い団栗のように、こんもりと褐色の火ぶくれになってゐる奇妙な灸痕にもお目に掛かったりもしました。医者はこの灸痕には、さぞかし聴診器を当てるのに、邪魔で苦笑した事と想います。

僕の家の前に船長さんの家が在りました。その女の子が、お仕置でお灸も据えられるところを見

て、僕は胸をドキドキさせ、唯茫然とそこへ突っ立っていた事を、今でも記憶しています。僕は、その子をなんとなく可愛いと思ひました。これが僕の初恋といつてもよいかもしれません。継母だったためと、父が永く不在するためか、よくお仕置をされました。それには、大概お灸を据えられていました。僕が、女の子でお灸を据えられるのを見たのは、この子が初めてで、治療以外では余り見ていません。その子は、その当時、小学校二、三年だったと憶えて居ります。名は、みどりといひましたが——、好い子でした。お寝しょの癖があったので、治療の目的でもあったのかも知れませんが、腰に三つと腹部に幾つか、そして両足の拇指と次の指との間に据えられました。多分このツボは、灸点師におろして貰ったのかも知れないと想いました。

中学二年頃の僕は、自分でお灸

を据える事にも、いいようのない快感をもつように成っておりました。家には艾がないので、桐のフカフカに朽ちたところをよく乾燥して、お線香の粉に混ぜてみたり父が万年青に使う水苔の乾燥したものや、後から知った、艾の原料となる蓬を乾燥して、手で揉んでフーフーと、かすを吹きとばし綿毛だけを採って、自分で即席艾を作って据えたりしました。据えるところは何時も定って、下腹部か尾骶骨の長強でした。それという

まいには、お臍にも据えて見たりました。大腸カタルや下痢、腹痛などに最も良く効くと、婦人雑誌には見られました。桐の朽ちたものとお線香の粉を混ぜたものは普通の艾の約三倍位は、燃え切るまでに時間が掛かり、焦熱の熱さを感じたものです。家の者が誰も居なくなるとやってみたくなり、そして何時も、この夢中でやる孤独な遊戯に耽ける間中、決つてみどりの事が、頭にちらちらとしました。

のは、その当時、母が読んでいた婦人雑誌に、よくお灸で病気を治した体験談と、そのツボの図解が載っておりしました。殊に婦人病などの女性の体験談を読んで、別にませていたというのではなく、やはりなぜかこの頃より女性のお灸には心惹かれ、そんなツボへ据える氣持に成ったのかと思います。それに、やはり一番に人に知られない個処を選んだ訳なのです。し

僕の母は若い時分、病弱だったため、人の勧めで灸点師に家へ来て貰い、背中だけでも廿五、六個処とかも、お灸をおろして貰った事があるそうですが、二、三回据えて、お灸が合わない體質とか何かで、止めてしまったという話です。僕が物心ついた頃には、もう背中に人差指位の二つの灸痕が残るのみで、綺麗な背中だけしか見られませんでした。



答

夏、海水浴などに行っても、女性の水着より出た背中の灸痕ばかり僕は気になって、探し見たりする事もあります。そういった視線

で見ると、案外、現代の女性でもお灸を据えた人はいるものだと思います。又、電車の中などでも、夏の薄物を通して、スリッパの上

も、旅回りでお目に止まる事ともいますが——。その他、背中——といっても肩に近いところに、大灸が左右、未だ薄紅色を呈して、

に大灸の痕が判ったりするものです。

ストリップ劇場で、ストリップパーの女体に残るわずかな灸痕を見つけるのも亦愉しい事ともいえましようか——。踊子の名は覚えありませんがスポット・ライトを浴びて、妖しくくねらす腰と腹部に鱗のような、にぶく光る幾つかの灸痕を、見せてくれるストリップパーもおりました。某劇場で三、四回、観ましたが、色白のリーダー格の踊子でした。現役

やや脹れた痕を、長い髪をふんわり後に垂らして隠していた踊子もいました。踊る度にロング・ヘアが揺れ動き、その隙間から、チラチラと覗けるのも、こよない魅惑のムードへ誘ってくれるものです。日劇ミュージックホールのR・テンプルも、確か脚の三里に灸痕がありました。しかし数多いストリップパーの中でも、ハッキリとした灸痕をもつ者は、やはり少ないようです。

これは、ある美術に関係のある雑誌で読んだ、あるモデルさんの話ですが——。そのモデルさんは素晴らしいモデルさんなのですが、背中にかなり大きな二つの灸痕がありました。自分では余り見えなところなので、それ程気にも止めていなかったのですが、写真のモデルのため、レンズは正直にそのもののズバリで、ハッキリと、その二つの灸痕をとらえてしまします。ライティングによっては、多

少なりともカバー出来るとしても、どうにも修整しなくては困るという訳です。芸術ヌードだから、背中の灸痕位をとにかくいう事もないと思うのですが、ある写真作家はいいました。

「君の背中の大きな二つの灸痕が邪魔して、僕には、君は使えないよ」

このモデルさんは、そこで初めてこの背中に残る二つの大灸痕にコンプレックスを抱くようになったてしまいました。とにかく写真モデルにすっかり自信を無くしてしまい、そこで絵画専門のモデルと成ったのですが、素晴らしいプロポーションがとれた体をもちながら絵画のモデルなら別段その灸痕なんか、いくらリアリズム画家といえども禍いにもならないものを、やはり大きなこの二つの灸痕に対するコンプレックスは捨て難く、とうとうモデル稼業をやめなければならなかったという事なので

す。何も、たった二つの灸痕位いに、と思うのですが、やはりこのモデルさんにとっては真剣な、笑えぬ話なので、人間のもつコンプレックスにも、色々なところにあるものだをつくづく考えさせられる思いがしました。僕ならば、こんなモデルさんこそ大歓迎して上げたいのだが……。

責のプレイにも色々とありますが、僕は、何といても一番に灸責に魅力を感じます。たとえば、縛り、鞭打、——等がありますが縛り、鞭打などは、非常な運動体により、かなりのエネルギーを必要とするものだと思います。そこへ行くと、灸責プレイの場合、責める側も、責められる側も、シワシワと灼熱の桃源境へ誘うムードを、お互いに落着いた気持で、静かに味わえると思うのですが——万一、人に知れても、治療の目的と逃げられるし、又、事実、健康

上にも適切なツボへ据えるのは一石二鳥という事にもなる訳です。若い女性で、やはり灸痕を気になさる方は、下腹部へ据える事が最適といえましょう。曲骨、横骨、氣衝、氣来、大赫、関元等々、お風呂屋でも、手拭を当てれば誰にも判る事はない個処です。それらに腹部に感じる熱さは幾分、弱いものです。

僕は、女性をつかまえて無理やりお灸を据えるなんて事は、絶対出来ませんが、お灸マニア女性の願望には、大なり小なりとご随意に注文に応じる事は、誠に以って光栄の至りとするところなのです——。

女性の美しい滑らかな背中、豊かなお尻、その麗しい柔肌をポツポツと煙をくゆらせながら燃えて行く文に、やがてシリシリと灼熱のとりことなる瞬間、その肌身に突き刺さる熱さに、腰、お尻を妖しくくねらせ、全身を打ち震わせ

ながら、ジッと、それに堪え入る女性の巧まざるポーズこそ、まさに何ともいいようのない、魅惑のムードをかもし出すものではないでしょうか。

幼い頃にお仕置などから度々お灸の味を体験した女性、又、一度お灸を据えて見て、熱さの中に疼く、恍惚とした桃源境を見いだした女性というような程、女性の心の奥底に潜んでいるマゾとしての素質から、必ず以後、お灸マニアとして成長して行くものと考えられます。

どうぞお灸に関心を持たれる方々の——とくに女性のマゾとしての立場から——赤裸々なご意見、告白、体験記等々を、発表して頂いて、お灸マニアの心からの熱望にお応え頂けますれば幸と思っています。

(おわり)

【告白】

白

と

緑

と

小島 洋一郎

白い世界

七色に輝く虹を美しいと思わぬ人は先ずいないだろう。忙しい日常生活に疲れ果てた神経にも、咲き誇る万葉の花は快い慰めを与えてくれる。このように目に映る色は、私達人間に、美的な感情を与えるばかりでなく、美しさは、こよなき慰めを与えてくれる。

しかし、これはあくまで一般を対象としたことであって、色を美としてではなく、性として感ずる人のあることを、ここに明記しなければならぬ。此の種の感覚は、別に特殊な例として挙げるまでもなく、殆どの人にある共通のものであるが、その強度の差は、万人異っていることはいなめない。

更に、その人によって、対象となる色の種

類も勿論異なるだろうが、赤、黄、緑、青、といった原色が、主にその対象になるらしい。らしい、という曖昧な言葉は、以上の推測は私の独断にすぎないからである。

かくいう私も、白と緑に強くひかれる一人である。これから述べる私の告白を読んで頂ければ分ると思うが、私の性向がフエチかマゾか、或はそれらの入り乱れた複雑なものであることは、いなめない事実である。

話は私の幼少の頃より語らなくてはなるまい。生来ひ弱だった私は、よく風邪をひいたもので、その度に、耳疾などの余病をおこして母を困らせた。小学校三年の時、感冒が流行し、桜の花の咲く頃、私も布団の中で花見をしたものだ。いつもの風邪よりタチが悪く一週間経っても十日経っても快くならない。その中、例の耳病が悪化しだした。

いつもの例では、シクシクと耳の奥が痛むくらいであったが、今度は耳の中に焼火箸をさし込まれる様な激しい痛み、じゅくじゅくと流れ出る胆汁、三十九度近い熱に、私は只うなされ、うめき、わけのわからぬ涙を流すだけだった。

母は父と相談して、近くの病院へ私を連れていった。父の背の上で、これから受ける病

院での治療の事を考えると、子供心にも不安と期待の入り混った妙な興奮にかられるのであった。しかし、病院での治療は私の心配した程痛くはなかった。耳の中をオキシドールで洗って、薬液を浸したガーゼを穴の中へ押し込まれ、この時少し痛く感じただけであった。

医師から独語で何か指図を受けた看護婦は私を隣りの処置室へつれていった。白いタイル張りの部屋で硝子の台の上には、ピカピカと光った金属製の道具が並べてあった。私は何をされるのかと胸をときめかせて、じっと看護婦の手元を見ていた。

ガーゼの一杯入っている金属製の入れ物から、二、三枚のガーゼと白い繃帯をとり出してきて、ピンセットに挟んだガーゼを黄色い薬液にひたし、私の耳のまわりに巻いて、その上にガーゼをのせ、ガサガサ音を立てながら油紙を当てて繃帯でぐるぐると頭一ぱい巻いてくれた。

この時、私は生れて初めて不思議な興奮にかられた。どす黒い血が全身を駆けめぐり、顔がほてって頭ががんがんに鳴り、自分でも不思議なほど身体が小刻み

にふるえて仕方がなかった。医者や看護婦と視線を合すのが恥ずかしく、只診察台の上で小さくなっていたのを覚えている。

私の特異な性向が、この時から徐々に異常な方向へ進んでいった。家に帰る道すがら、

行き交う人々の視線が私に向けられる度に、身体中、電気の走るような快感が走るのを覚えた。自分の繃帯姿をあの人にも見られた、此の人にも見られた。中には「どうしたの？」と訳を訊ねられ、そして同情と慰めの言葉を



かけてくれた。

私は自分の痛む耳に感謝したい様な気持ちになった。普段は私の存在等てんで意に介してない近所の人達迄、一様に私に視線を向けだしたからだ。こうして私は、真白い繃帯のとりことなってしまう。毎日の繃帯とり替えの通院が何より私の楽しみとなった。汚れた繃帯を取り去り、真白いガーゼと繃帯で顔を包みこまれて、独り喜びの血汐をわかすのだった。

一週間程通院して、病気を根治させるため入院した。外科関係の入院室で両側に五人宛一室に十人寝台をならべ、私もその中の一人になった。

足の悪い人、手を折った人、盲腸を切った人等、いろいろの症状の人達が好奇と同情の入りまじった目で私を迎えてくれた。一番窓に近い寝台が私の住家となった。白い病室の壁、天井、白いシート、白い布団カバー、看護婦の白衣、医師の白い手術着、白一色のこの世界、清らかな白の世界は、正に私のパラダイスであった。

翌日、私は朝から一切の食事を断ち、水分もとらず午後からはじまる手術に備えさせられた。昼頃、看護婦さんの一人が、手術の邪

魔だというので私の頭髮を刈ってしまった。

これから始まる手術に対する心配のため、私は朝から三度ほど小用を足さなければならなかった。思いきって毛を刈っている看護婦さんに、手術についてきいてみた。

「さあ、私はまだ一度も立会ったことがないので……」という心細い返事。心配はつるばかり。恐らく顔の色はなかった事だろう。同室の患者達も気の毒そうな眼で私の方を見るだけで、どうしようもないという顔付、おそらく断頭台に昇る心境は、これに似たものだろう。私は幼なかったから、一層強く感じたのかもしれないが。

しかし、反面、畏怖心のかげに手術に対する期待の様なものが存在して、私の心を二つにしていた。午後二時、とうとうその時は来た。三本の注射をうたれ、母と看護婦につれられて手術室に入った。

洋服をぬがされ白の手術着をきせられ、タイル張りの手術室の中央に置かれた手術台の上に寝かされた。

ひやりとするレザー、ぴかぴか光った大きな照明灯。此の人間を料理する特別室、忙しく働く人と料理される私。

身体に白布をかけられ、悪い方の耳を上

して頭を固定される。耳だけ出して頭から白布をかける。私の視界は白布で遮られ、手と足を革のバンドで台に固定された。

私の自由になるものは、悪くない方の耳で音を聞き、医者問いに答える口だけであつた。耳の周囲に立て続けに五、六本の注射をうたれた。ちくりとした痛み、しゅうという薬液の出る音が、悪くなった耳にもよく聞えた。更に数本、合計十本近くはうったであろう。「メス」という医者の声、ざりざりと耳の後の肉を切る音。全く痛みはないが、この時になって、私の全身の血が又々昂ってきたのである。

肉を切られ、骨をけずられ、全身汗みずくになりながら、私の魂は夢の世界をさまよい歩いていたのである。骨をけずる音も、器具のガチャガチャいう音も、天女の音楽の様に私の良き伴奏にすぎなかった。その間三時間半に亘る長い手術であつたが、私にはさして長くは感じなかった。

終り頃になって麻酔薬が切れ、痛みを感じはじめた。夢の世界は一時中断され、私は医者に痛みをうったえた。しかし、それも又もや別の快感となつて、私を夢の国へさそい込んでくれた。痛みは次第に強くなり、自由の



きかぬ体をくねらし、固くつぐんだ口からはうめき声が洩れ、全身から冷汗をたらして苦しむ肉体。だが、私の魂は其の肉体の苦悶に反して、恍惚とした夢の世界を彷徨していたのだ。

切開口へガーゼが押し込まれ、目も掩うくらいに繃帯をぐるぐると頭中に巻かれて運搬車で病室へ運ばれて寝かされたのも、全く夢の世界をさまよっていた中に行われた。

母の心配そうな顔。

同室の患者の慰めの言葉。それ等は私には必要ではなかった。なぜなら、私は楽しいからである。痛たければ痛い程、苦しむのはその肉体であって、魂は快

楽にむせぶのである。

こうして、白い繃帯につつまれて、白い病室で、白い布団にくるまり、私は半年の入院生活を過した。私の心の奥深く「白」の色彩が根強く印象づけられたのは、此の時からである。それ以来、私は白い繃帯を頭に巻いた人に出会えば、人知れず胸のさわぐのを覚えるのであった。

緑の陰翳

此の話も幼少の頃に戻らねばならない。

五、六才頃になっても夜尿症の私は、おむつを取ることが出来なかった。それは戦争前のことで、今のようなおむつカバーの無い頃で、風呂敷大の緑色のゴム布をおむつの上からくるんでカバーとしていた。

或る夜、どうしたはずみか、おむつがすっぽぬけてしまい、腰の回りにゴム布だけがまきついていった。肌に直接触れている緑色のゴム布、普通の布と違うゴム布の感触が、幼い私にも特異なものと感じたに違いない。

やがて、長じた私の視界から緑色のゴム布は遠ざかっていったので、いつとはなしに忘れていた私にも、ゴム布の厄介になる時が来た。それは前に書いた入院生活中に起きたの

である。耳を手術して三日目頃から三十八度以上の熱が続き、吐気がして食事咽喉を通らず、水を飲んでも直ぐ吐いてしまう有様だった。主治医も心配して内科の専門医にも診察してもらったが、どこといって悪い所もないとのことだったが、一応浣腸をしようという事になった。

腰の下に大きな緑色のゴム布を敷いて、長いゴム管のあるガラス罐に液体を入れたのを目よりも高く掲げた。やがて薬液の注入が終ると、「すこし我慢するのヨ」といって、五六枚のおむつを当てて緑色のゴム布を巻いて布団を掛けてくれた。この時になって、幼き日のゴム布を思い出し、なつかしさに手で触ってみた。すべすべしたゴムの感触、むちむちとした弾力等、昔のままだった。

身体中をかけめぐる熱い血汐で、いつしか赤面している私だったが、看護婦さんや母には、浣腸の恥ずかしさに赤面しているとは思えなかっただろう。

便意を耐える苦痛、おむつを当てられる恥ずかしさも、幾年ぶりに身につけたゴム布のなつかしさには及ばなかった。私はなんとかしてこのゴム布を自分のものにしたいと思ひ込んだ。

熱は相変らず下らず、食欲もなかったの心配した医者は切開口を見てくれた。傷口はまだ出血していたが、それより奥の方がすっかり化膿していて、熱と吐気はそれが原因だった。傷口を消毒液で洗って治療をしたのでやっと、二日目あたりから熱が下った。

その頃より別な病気が、私の身体に現れた。それは小用を洩らす様になったことである。いくら気をつけていても、知らず知らずの中、朝になると蒲団をしっとりと濡らしているのがあった。それでいて下腹部がはって一日中、尿意があり、便器にしても少ししか出ないのである。じまいには日中でも、自分の知らぬ間に洩らしてしまうのだった。

急性の膀胱炎とかで、私は又々おむつの厄介にならねばならなかった。私の希望する様に緑色のゴム布が腰深く包んで、幼き日の夢を再現してくれた。

一カ月経った頃、私の耳の方も大分快くなり、附添っていた母も家へ帰ってしまい、私は自分で食事の上げ下げをする様になった。でも、小用の方は相も変わらず、おむつの厄介になったままで、その頃はおむつの取替えも自分ひとりでする様になった。

当時の私の楽しみは夜、皆の寝静まった時

分に、寝台の上でおむつの取替えをする時だった。明るい電灯の下で、濡れたおむつを新しいのと取り替え、燃えるような緑色のゴム布を当てる気持。しげしげと眺めては、手で触り、果ては口づけしたいような衝動にかられる私だった。

誰に見られても室の者なら、もう皆、私のおむつの事は知っていたので、それ程恥ずかしいとは思わなかった。いや、誰かにそっと見られてはいないかと思えば、尚更、私の血はさわぎ、快い気持になるのであった。布団の中で、こっそりとおむつの上に当てるゴム布の感触は、私の辿って行く道をはっきり示しているように思われた。これを異常というかもしれない。異端者とさげすむかもしれない。しかし、これが為に私は、他人に迷惑をかけたり、世間に害毒を流したりした覚えは少しもないのである。むしろ健全なくらいに思っているくらいだ。

出発点の幼少期に、緑色のゴム布から受けた強い色の刺戟と、その特異な感触とが、私の心の一角に根をはり、長い年月、私の生活の一片として存在した次第である。

(おわり)



若くて美しい女性が、縄によって身体を縛られて悶え苦しむ様子を描いた絵や写真に、かぎらない憧憬をいだくと云ったら、世の多くの人は、きっと、その非常識を非難し、残酷で粗野で無様な気狂じみた男と思って、恐れるに違いない。

年輩の人なら、嘗ての太平洋戦線で或は大陸戦線で、無辜の民をその銃弾や銃剣の餌食にした悪鬼のような日本軍人を思い出すかもしれない。或はその頃のスローガンであった鬼畜米英という文句から、あのむごたらしい非戦員に對する無差別爆撃や一挙に数万人の生命を奪った原子爆弾と同じように恐怖をいだくかもしれない。日本は敗戦のお蔭で、現在では所得倍増、休日倍増、レジャーブームで太平洋を謳っている。平和

というものは本当にいゝものである。戦争中の苦しみや恐ろしさはすっかり忘れ去っているし、又、戦後生れた人は、そんな戦争があったことすら知らないでいる。

現在は主権在民の民主主義の時代であり男女同権の時代である。何百年か前の封建時代のように、女性を男性の道具か玩具にか位に考えていた頃とは違う。少くともレディ・ファーストの叫ばれている時代に、若い女性の苦んでいるの姿態を見て美しいと思うなどはもったの外だ、と排撃されることは当然だと思う。

しかし、現実には、幼少の頃よ

り女性の緊縛美に対して強い関心を持つ者が存在することは確かな事実である。では、彼等は何故生れついて、そのような性癖を持ったのであろうか。まだ蛇のなんたるかを知らない幼児でも、初めて蛇を見て恐れる。時には縄の切れ端を見て、蛇ではないかと叫声を挙げる女兒もある位だ。これは彼等の先祖が、度々蛇に危害を加えられたことから、その恐怖心が潜在意識となつて、その子孫に伝っている、と説明される。

同様に縄で縛られたいと願うマゾヒストの潜在意識も、遠く江戸時代に遡れば、彼等の祖先が封建的な支配者によって度々捕縛の経験を受け、その悲しい諦めが遺伝された、ということも考えられるが、先天的に自由を奪われた女性美に関心を持つということは、一体どこに由来するものだろうか。

平凡で平和なスリルのない生活を営む、例えばサラリーマンのような人は、探偵小説の中で殺人を犯したり、或は犯人を追跡格闘す

る経験を持ちたいと願う。日常生活が平凡であればあるだけ、彼等は空想の上では波瀾万丈を期待するものである。又、平和な時代には、スリルに満ちたストーリーのドラマや小説、映画などが歓迎される。滝沢一氏も「今日のような平和共存の世の中でとくに日本のように比較的経済状態の安定しているところでは、甘いメロドラマより、荒っぽい西部劇のほうが好まれる。悲惨な戦争の時代にはかえってメロドラマが好まれるのである。そうして平和の時代にはより刺激的な内容のものが求められる」と書いているし、テレビ番組に暴力的なものが多いことについて、「これも平和な時代のありがたさで、人々はこうした番組によって内心の攻撃的傾向を満足させているといえよう。テレビの西部劇ブームは、この意味で平和な時代のシンボルである。」と云っている。

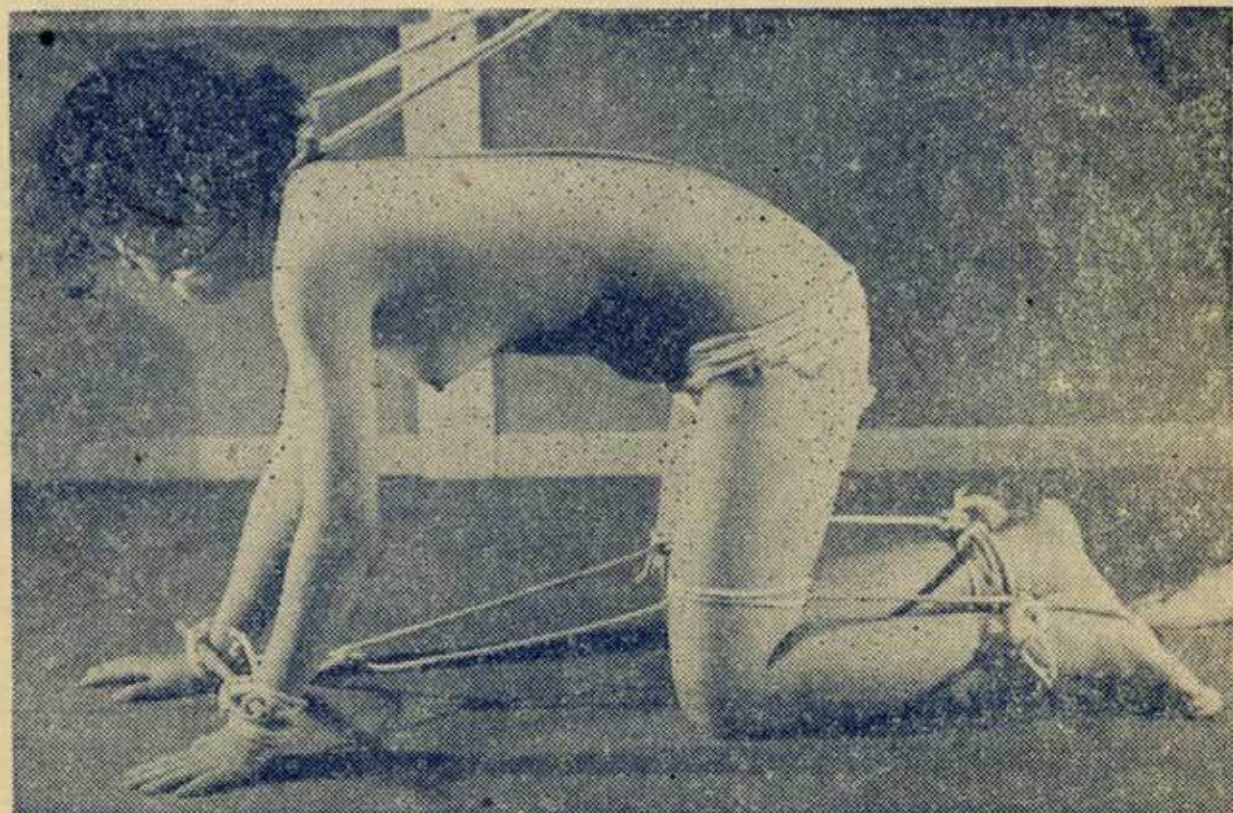
攻撃的傾向の満足、平和な時代のシンボル。これは本誌にとっても或る程度同じことが云えるのではなからうか。少くとも私はそのように考える。無事平和な時代にこそ、私達の趣味の花が咲くことが出来るのだ。と。

平和時代と攻撃的意欲の充足

井 阪 一 好

<誌上通信>.....近 藤

『私を責めて下さい』に就いて



東浦ひかる様。
私は貴女の出現を心から歓迎する一人です。私自身が自らの中に特異な性同を感じ、そのために今日までいろいろな経験を積みながら、奇譚クラブと離れ得ない関係

になつてしまつた者です。私の物の考え方など今更述べるつもりもなく、既に誌上を飾つた作品の共通の流れを汲取つて下さればよいと思ひます。読者通信を加えると何十回も私の文が掲載されている

ので、某週刊誌が奇譚クラブを組上にのせて紹介した折にも余り遠くない身許紹介をされたことさえありました。

奇譚クラブを愛する以上、貴女のような好ましい女性が、被虐のモデルとしてグラビアに登場して下さることは大きな喜びです。しかし、それ以上に私自身の嗜好として貴女の登場は嬉しいことなのです。

何よりもまず、貴女は見事は裸身を誇り、而もそれは私の好みにマッチしています。確かに「いい体」です。普通、均斉は身長と体重で表わされますが、これは最少限度の要素です。肥満体でも細いの乏しい人は体重が軽いし、細いようでも筋肉質で骨太の人は体重が多いのです。同じ体重でも、どの部分の肉が厚いかによって体の形は全く違います。バストの大きい人やヒップの極度に張り切っている人もいます。

写真で拝見する貴女は、いかにも新鮮な美しさがあります。身長は一六〇センチ前後でしょう。充分に肉がつきながら肥満体でなく、すんなりした柔らかみが見られます。貴女の裸身の持つムードには二つの特徴があります。一つは若

々しい艶ですが、これは貴女の年令からすれば当然のことと云えるでしょう。他の一つは身近な温かみです。これは貴女の長所でもあると同時に短所なのかも知れません。貴女の裸身の均斉は自然のまゝの美しさで、バスト、ウエストヒップに、鍛え上げられた人工の美が全くないのです。いかにも良家の子女らしい。職業モデルに特有の磨き抜かれたものが無い美しさ、何とも云えず好ましいのです。

身のこなしが柔らかく従順であり、服従と奉仕の姿態が実にリアルです。単に命じられた演技でなく、貴女自身の発意で奉仕に飲びを感じている姿が如実に表わされています。このことも当然かも知れません。一見、温和な花嫁修業中の令嬢であつても、自己の性向の命ずるまゝに、奇譚クラブのグラビアへ身を投じた貴女の積極性は何人も疑わないでしょうし、この被虐性が、本筋のマゾヒズムか否かは別として、このような健康な被虐性は大切だと思うのです。マゾヒズムは必ず受動的でなければならぬと思ひません。積極的で進取の気性に富んだマゾヒズムを私は愛して来ましたし、広い意



新人、牧村興次、絵物語習作二題

(可憐な餌物)

— 拐つてきた女 — 女スパイ —

味のプレイに該るマゾヒズムの明朗さを好んで書き続けて来たものです。

最近号では吾妻新先生が古川裕子さんに対する呼びかけの中で云われているように、男が女を無闇に責めつける「サディズム」には私も疑いを持っています。女を拷苦で屈服させ無気力な女奴隷にすることは空想のみの産物でしょう。本来は愛情を基調にして男女が、お互いの立場を最も高度に発

揮して結合する所にのみ、私の求める悦虐の境地があると思うのです。そこでは男女が共に積極的な意志を持ち、唯その悦虐の表示の差異が能動と受動を生むに過ぎない訳なのです。

貴女の持つ積極性は右に述べた明るく健康なマゾヒズムの要素であり、そしてそれは奇譚クラブの持つ明るさに通じるものなのです。私は貴女の持つムードが好きで、どうしても呼びかけずにはい

られませんでした。いつまでも御自分を大切になさって幸せにお過ごし下さい。

貴女の作品の内容については日を改めて意見を述べたいと思いますが、もしできれば誌上で貴女の体験や、その感想を承りたいと思うのです。

貴女のファンのために、奇譚クラブの愛読者のために、貴女の今後の活躍をお祈り致します。

○ 本誌に登場しているモデル嬢に對してのお呼び掛けをお待ちします。批評感想等を混えて文通できれば楽しいと思います。出来る限りモデル嬢の返信を求めて誌上を飾りたいと思います。支障のないときは直接の返信もつとめて依頼してみます。どうか、御遠慮なく長短に拘らず、どしどしとお寄せ下さい。

(読者係)



おムツにまつわる手記

マニヤの散歩記

赤井 茂

私がこの様なヌメヌメした柔らかいゴムの感触に心を惹かれる様になった動機は今でも解せないのです。よく思いかえして見ると、幼い頃体が弱く、四六時中、病床にあり、用便を便器では不馴れたため、後始末の良いおしめカバーをされた故かも知れません。又あの浣腸は勿論、病気には必ずと云って良い位いされて激しい苦痛に耐えられないためにされた事が原因かも知れません。

最近化学繊維の進歩に依り、あのヌメヌメしたゴムのおムツカバーが殆んど姿を消して来たことは全く淋しい事です。でも時折、アメ色だとか橙色のゴム膜のおムツカバーを見ると私の心は妙に楽しくなってくるのです。

先日の日曜日のことです。良一行楽日和とて郊外に出掛けた時の事です。あちらの軒にこちらの物干にと、洗濯物のオンパレードでした。特に浴衣地のオムツの満艦飾の様子は微笑しくも又楽しい光景なのです。然し、とある市営分譲住宅のそばを通った時、私は釘づけにされてしまったのです。それは一見して大人用のオシメと分る沢山の浴衣地のオシメが竿一杯に乾かれ、その端にレッキとした大人用のゴム製のオムツカバーが干してあったのです。

茶色のゴワゴワした張ゴム製のオムツカバーに、注文で作った物だろうかナイロンのピンク地にビニール張りのオムツカバーが公然と干されてあるのです。私の胸は

早鐘の様に鳴っているのです。オムツの主は女性らしい様でした、一緒に干してある花柄の浴衣から察して。ヌメヌメしたゴム膜が表側にあり中央部に白くシミが一面についているのです。

きれいな女性だろうか、それとも中年の女性だろうか。病気のためとは云え、パンティならぬヌメヌメしたゴムのオムツカバーをつけられ、カバーの下から赤ん坊のオシメと同じ柄のおしめをハミ出させて呻吟して居るのだと思うと五体がカーッと熱くなってくるのをおぼえるのでした。

私の心易くして居る薬局の奥さんに聞いた事です。最近大人用のオムツカバーが良く出ると聞きアレやコレやと聞いて見ると、卒

中(脳いっ血、脳出血)等の人が殆んどで、ついで婦人科疾患、夜尿症予防といった順序らしく、ウインドにあるグリーン総ゴムのオムツカバーを出して話してくれました。大型なので私が「ずい分、大きなですね」と云うと、奥さんは「そらそうよ。大人が使うのよ。子供と違って汚れる事もひどいから大きくなってはね。これならいくら太った人でも良い様にしているのよ」と云いました。このオムツカバーも何時の日かウインドの中から消えて行く事でしようが、誰の手に……と、いらぬ事を想像して見るのです。

名古屋のM百貨店へ行った時のことです。ぐるぐる廻って丁度ベビーセンターをのぞいて見たのです。当然、私はおしめカバーのウインドウの前に足を止めました。数人の女性達がアレやコレやと品定めして居るのです。その時の会話を。

若い母親と妹らしい高校生「お姉さん、これ可愛いワ」「どれ、本当ね。でも、これは小さくない?それに余りピッチリしすぎておしりがかぶれちゃうんじゃないかしら。そうね、これの方が良く

ない?"

一人の女(若い女性)友人へのプレゼントなのだろうか、少々テラ様な表情で女店員と応待。

"これは一番良く出ますね。洗ってもすぐ乾きます上に、おしめカバーらしくなくて洩れて汚れると云う事もありますよ"

"そうですか、これは、あれは"

と、ふところの都合もあるのだろうか、やっと品定めが出来ると手早くハンドバッグに押込み、足早に去って行きました。

他の二人は、ベテラン級なのです。中年の婦人

"まあ可愛いのはかりね。これどうかしら"

"良いワね、でも少し大きくないかしらね"

"そうかしら"

"余り大きいとおなかまでぬれて可哀想よ。オムツカブレも出来ちゃうワよ。うちの子がそれで困ったワ"

"これじゃ大丈夫かしら、ビニールもなにもないけど、ぬれちゃってはおむつカバーにならないから"

なんて話して居るのです。仲々マニアにとっては楽しいスナップでした。

〈誌上通信〉

マゾ・モデル志願

出口一夫

私は生来マゾヒズムの男性ですが、貴誌七月号の二四三頁でマゾモデル募集の記事を見て、矢も楯もたまらず志願するものです。

是非私をマゾ写真のモデルに使っていただけませんかでしょうか。美しい女性の下になっていじめら

れる写真のモデルになりたい想いでいっぱいです。こうして手紙を書いても、全身が昂奮と期待でブルブルふるえるようです。いやペンを持つ手もふるえて、ごらんのようになんてしてしまいました。お願いです。私のようなものでもよかったですら、どうか写真のモデルに使って下さい。

お金は一文もありません。只女性の下にひれ伏すことが出来れば満足です。どんな侮辱でも、どん

なひどいことでも甘んじて受けます。身長一七二、体重六三、醜男です。年令は三十四才、地方の公務員をしています。どうかお願いいたします。モデルに使って下さい。都合で返事は雑誌でお願い出来ませんでしょうか。

マゾヒズムの男 出口一夫

六月二日

◎お返事◎

出演して頂いて結構です。連絡先をお知らせ下さい。(編集部)



連作「少女」

牧村興次画

「倉庫に襲われて」

セーラー服の可愛い乙女両手首を背後で括られ、か細い両足首を揃えて括られているだけであるが、乙女は驚愕のために身動きすることすら出来なかった。遠く汽笛が聞えるのは、港の倉庫でもあろうか、そういえば潮の香がかすかに匂ってくるような気もするのだが……。

いよいよあらわれた

妊娠ストリッパー

羽村京子

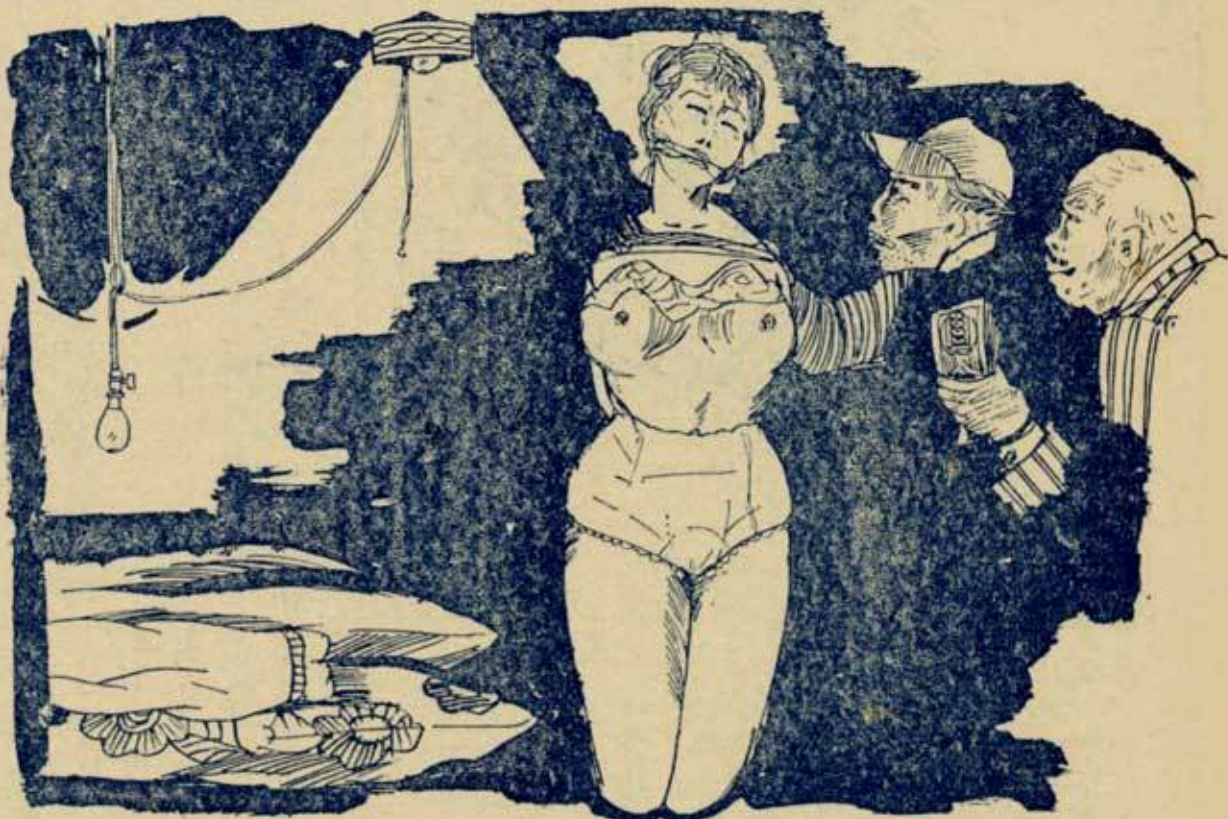
雑誌「笑の泉」の七月号に、内海突破さんが「ストリッパー礼讃」という短い随筆を書いていました。その中で、内海さんが最近、山陰の米子で実際に見たという妊娠のストリッパーの話が出ています。

内海さんが、「仲間の清水君と弟子の町くんを連れて街をブラブラしていたら裏通りの空地に掘立小屋のストリッパーが掛っていた」ので、入って見たら、次のような光景が展開されていた、ということです。

「さてその舞台では踊りとは名ばかり、下手なラジオ体操みたいに、ただ手を上げたり下げたり、しかもおよそつまらなさそう顔をした半裸の女である。——ところがどうもカーテンみたいなスカートの前がふくれ上っているの、衣裳のせいかな、

地腹が大きいのか、と思っていながら、そのうちブラジャーとスカートをはずしたら驚いた。妊娠しているのである。それも、二カ月や三カ月ではない。少なくとも六カ月か七カ月の大きさである。オッパイの先も勿論真っ黒け。それが世にも情ない顔をして下手な踊りを踊っているのである。」

内海突破といえば、世間に知られたコメディアンですし、場所が明記されている上、同行した二人の証人の名前もあがっていることです。まさか作り話とも思えません。事実その通りの見世物が行なわれていたのでしょうか。だとすれば、わたしのうぬぼれかも知れませんが、わたしが前に奇クに発表した、妊娠のストリッパーのアイデアに刺激されたのではない



家出娘の売買 (1) 村山勝作・遠藤春一画

都会のはなやかさを懂れて田舎から家出してきた娘は、都会の玄関で牙を研ぐ狼たちに捕獲されて、美しい夢は無惨にも打ちくだかれてしまうのだ。あとに残っているのは、彼女のピチピチとしたイキのよい肉体を餌食に喰い荒される日夜が待っているだけである。

か、という気がします。いよいよ本物の妊娠のストリッパーがあらわれたというわけです。

内海さんは「今でも全身鳥肌が

立つ」ということですが、わたしはむしろ非常に興味をもちました。何年か前に一、二度見たことがあるだけで、ストリッパー劇場の

雰囲気など本当には何も知らないくせに、わたしがその女の人であったなら、という空想が、頭にこびりついて、わくわくするような妖しい興奮がおこってくるのです。

週刊誌などを読むと、地方ではずい分いかかわしいこの種の見世物が行なわれているようですから「踊りとは名ばかり、下手なラジオ体操みたい、ただ手を上げたり下げたり」というのも、あたりまえかも知れませんが、踊れないでただはだかを見せるだけ、とい

っても、彼女の動作はあまりにも幼稚すぎるように思います。内海さんは、「それにしても何故早く手術をしなかったのか、毎日毎日の渡り鳥なので、そんな余裕がなかったのか。それともあの妊娠ストリップパーが売り物なのか——」

たろうと思う。僕も芸能人なら彼女も芸能人の一人かと思うと、複雑な気持ちになって、僕は入ったばかりで入場料が勿体なかったが、連れの二人をうながして外へ出た」のではないだろうか。

この原稿を書きながら、わたしは、今でも彼女が、一そう大きくなったお腹をかかえてどこかで踊って(?) いるのではないかと、という空想にとりつかれています。臨月の大きな腹をした、はだかを観客に見せているかも知れませんか。それとも、もう生まれてしま



口封じ

遠藤春一

ビジネス・ガール向きのお喋り封じのさるぐつわ。片足を挙げてみると、だんだんとだるくなってきた。さすがヤンチャ娘もこれには閉口です。

ったのでしようか。ひょっとしたら、本物のストリップパーではなくて、座員の細君か何かが、お腹の大きい間だけ、特別に出演した、客寄せの「売り物」で、だから踊りの下手なものあたりまえ、はじめから「手術」なんかする必要もなかったのかも知れません。

——妊娠ストリップパー礼讃！



家出娘の売買 (2) 村山勝作・遠藤春一画

都会の盛り場の裏通りには、表のはなやかさとは似ても似つかぬ陰惨な一角が存在している。ここが家出娘を取引きする狼たちの隠れ家である。彼女たちの無垢な肉体は、このようにして名も素性も知れぬ男の手から手へと売られてゆく。そして売買地獄の泥沼に喘ぐのだ。

(詩)

わが幻想の乙女

T・H生(大阪)

絞りに染めし帯揚げを
胸高に締め、お太鼓が
十九才の夢はらむ。
袂の長き振り袖の
八つ口赤き長襦袢。

両手は後ろに回されて
雁字搦目の縛り縄、
背中に高き両手首
犂と括られ、胸縄の
三重四重にきっちり
胸震わせて囚われの
乙女は柱に繋がれて
あわれ、空しく身悶える。
げにも厳しき縛しめよ、
許しを乞える口許に
白手拭いの猿轡
きりとはめられ、今ははや
悲しき姿、高手小手
縄目を受けし美少女よ。
ただ神妙に正坐する、
か弱きさだめ、後ろ手の
女の身こそ哀れなれ。
臉を伏せてうなだれし
長き睫毛の美しき。

(昭、三六、四、二九作)

或る感想

異端者の独り言

K・S生(京都)

○如何に男責が好きだといって、毛脛の男の縛られている写真ペーシなど虫酸が走る、といったら叱られるかしら。やはりK誌のような上品の方が味あいがあって好いものだとつくづく思う。
○サドの作品で「ソドムの百二十

「奇クサロン」の

原稿を募る

読者サロン向きの原稿を募ります。御遠慮なくドシドシお寄せ下さい。掲載の分には薄謝を進呈いたします。

日」が刊行されたので大いなる期待をもって読んだが、お膳立てばかりモノモノしくて、そして始めから終りまで糞尿嗜好者の話ばかり。バカバカしくて腹が立った。でも、とやま・かづひこ氏には貴重な書であるかもしれないが。
○南極探検者向けのダッチ・ワイフが作られたという話だが、吾々マニヤのためにダッチ・ボーイが出来たら……と思わない日はない。美少年愛好者のために一肌ぬいでくれる物好きはないか？
○写真のモデルに美少年を物色するよりも、絹川文代さんなどを起用しては如何？豊胸をサラシで巻き、学生服に半ズボンをはいて半靴下に編上靴、髪の毛は野球帽の中へ押し込んで色々なポーズで縛り上げる。或はボーイ・スカウトの制服による責めも好いと思う。彼等は四六時中腰にロープをぶら下げているのだから。



(映画通信)

若者のすべて

— 甘美な智慧の —

木の実 —

高木良一

南伊からミラノに移住して来たイである。

後家(カティナ・パキノオ)と五人の息子の物語りであるが、通俗的なメロドラマではなくて、強姦、殺人あり、好色淫蕩のシーンに富み、実に興味横溢の迫力篇である。只、感動的名篇と言いたいのが遺憾である。

篇中、三男のロリコ(アラン・ドロン)が入営中、街頭(正確には郵便局前)で、旧知のナディア(アニ・ジラルド)と邂逅し、母親に荷物を送って、持金の無いロリコが、ナディアから喫茶店でコーヒを奢って貰う情緒は、二人の隣人愛に芽生えた会話や所作と共に、全篇を底流する残酷ムードを凌駕して余りある程ヒュマニテ

イである。悪党の兄シモーネ(レナート・サルヴァトーレ)は不良仲間の力を借りて、ロリコとナディアとの逢びきの現場で、救いを求めるナディアを押えつけ、ロツコの眼前で、女の薄地のパンティをむしりと、唇を奪い、無残に犯してう。一時は兄の無法を怒ったロツコも、冷静な判断に立ってナディアを諦め、彼女をシモーネに譲る。然しシモーネの非行は依然改まらず、賭博に負けた憂鬱をナディアに向け、彼女の体を弄ぶ事にはけ口を見出す。満座の人々を尻目に孤独なナディアの唇を恣に貪るシモーネのどぎついキスの仕方此の映画ならではの趣であ

る。

若者ロツコは失恋の痛手より奮起し、怠惰から脱落したシモーネに代って拳闘界にチャンピオンの王座を獲得する。これでラストとなれば、まあまあハッピー・エンドなのであるが、(さにあらず)あらゆる悪徳を行い果ては自暴自業に陥ちたシモーネは、ナディアの女らしい優しさと、いじらしい媚態をふみにじり、彼女の魂迄も得んとのエゴイズムから、「死ぬのは厭」と黒いシュミーズ一枚のしどけない姿態で逃げもがくの容赦なく、何度もナイフで刺し、死に到らしめる。祝賀の席、まい戻ったシモーネより事実を聞いたロツコは悲涙にむせびつつも、天命と兄の罪を許す。勿論シモーネは逮捕されるが、暴力と智慧の相違をまざまざと見せつけられる映画ではある。

撮影所名——伊・テイタヌス作品。イタリフィルム配給

題名——若者のすべて(脚本、監督——キノ・ヴィスコンティ)

大塚啓子嬢の

亀甲型縛礼讃

太田好三

七月号の巻頭グラビヤで大塚嬢の「亀甲縛と姿態の変化」の写実は実に素晴らしい。むちむちと弾力性のある柔肌に喰い込んだ縄目、盛り上るように豊かな乳房を中心にして、きっちりときき間なく掛けられた亀甲縛の見事さ。全く今月号の圧巻といつてよい。

大きく揚げられた最初の一枚は髪を掴まれてのけぞった顔の口を半ば開けた表情のよさ、反りかえった若々しい全身の美しさもさることながら、次の二頁に載せた十二枚の写真の中で、脚に最高の魅力を感じさせるものがある。

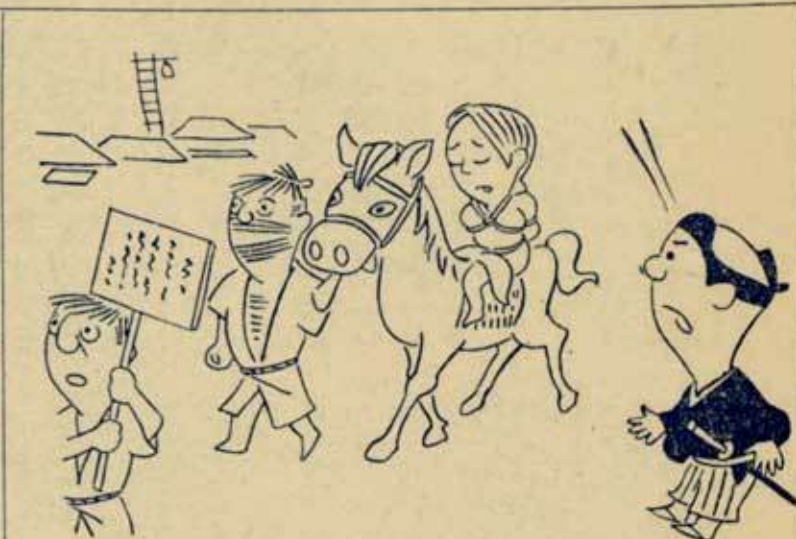
亀甲縛の胸を乳房もつぶれよとばかり、更に二重三重に縄を掛けただけか、胴から太股のツケ根にかけてギョツと締めつけたのは、たまらない魅力であった。これからも大塚嬢の亀甲縛と太股縛とを、是非どしどしと載せてほしいものである。

貴 好 一 代 男 <少年時代の巻>

左 次 朗 作並画



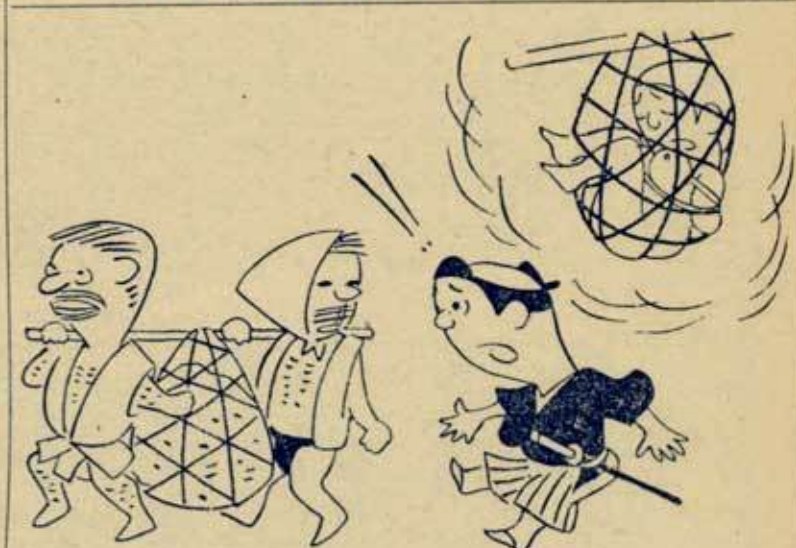
②寝ては夢、起きてはうつつ、まぼろしの想うは縛女のことばかり。



①サテ或る日、若い女の引廻しを見てからというものは……。



④これではならじと旅に出りゃ、石の地蔵も裸女に見え、両目おさえて一目散。



③人夫の運ぶ石でさえ、裸女に見えるに至っては、わがノイローゼも第三期。



⑥アワヤ逮捕と思いきや「そのアイデア気にいった。わしが所の責役に志願せぬか」と言いにけり。責めの上手とさわがれし青年時代の数々は又の機会にハイ、サヨウナラ。



⑤オヤ、待てしばし、こりや本物だ。助けんものと思いが、この縛りでは気にいらぬ、どうせやるなら、このぐらい、丁度その時来合せし、土地の代官責野責兵衛一。

△誌上通信▽

白足袋狂崇について

阿部能丸 (函館)

私、北国に住む白足袋フェチシストの一人です。K誌は古くからの愛読者ですが、最近になって内容もヴァラエティに富み、S・M女装・及び、各種フェチシズム等と充実して来ましたことは非常に喜ばしい限りです。今までは比較的フェチの記事が少なくて少々残念に思っておりました処、昨年あたりからぼつぼつと載り始め、特に私は『白足袋マニア』なので関係記事を探色しておりましたが、此の欄に、泉生氏、桜恵之介氏等の同好者を見出し、非常に嬉しく思い、それらに刺戟されて私も投稿した処、昨年十一月号の県賞愛読者原稿に『白足袋フェチシズムへの幻想と考察』を採用頂き真に感謝致しております。自分の記事が活字になることは嬉しいもので特にK誌の如き特殊文献等はその感激一入ならずで、私の記事の掲載されている新装十一月号は

さて、此の度、六月号の懸賞告白に「木ノ下明美氏」の『白足袋のこと』が載っており、頁を開いた瞬間、胸のとまる思いの感激で読まさせて頂きました。そして早速又々十冊のK誌を買溜めしてしまい、その『木ノ下明美氏』の気品高い情緒ある作品を毎日欠かさず読んで陶酔しております。近頃この私にとって此れ程感激した作品はありません。此れこそ『白足袋マニア』でなければ知られざる興奮でしょう。

あの文に依れば、木ノ下明美氏も、私の記事『白足袋フェチシズ

ムへの幻想と考察』をK誌にて読まれ、此の告白への動機になったことのように述べておられますが私としても真の心の知己を得たように、心から嬉しく感謝しております。『木ノ下明美様』差支えなければ是非御住所をお知らせ下さいませ。それから「足袋のサイズ」もお知らせ下さい。「特製白足袋」を一ファンとしてお贈り致します度く思いますので。

尚私は日本舞踊をやっており、白足袋は東京銀座の「大野屋(足

袋の老舗) 各界の名士及び日本舞踊家元等の注文品足袋の専門店です」を使用しております。今後のお便りを是非お待ちしております。

又、桜恵之介様、泉生様のお便りもお待ちしております。如何でしょうか、全国の同好者をつつて『白足袋フェチシストクラブ』を結成して大いに交歓致そうではありませんか。

(阿部能丸) — 「函館市」



首責めからく拷問用さるぐつわ>



連作「少女」

牧村興次画

“捕われて”

コンクリートの冷たさが下着を透してお尻に伝ってくる。華やいだピンクの布片が薄汚れた床の上に垂れて、奇妙なコントラストを示している。あたかも美貌の乙女がこのような哀れな恰好にされていることの奇妙さと同じように。私は捕われているの、彼女は心の中でそう反芻していた。

き締められ、苦痛と呼吸の困難のため二十分も経たない中に気が遠くなってしまう。それから「鼻石ぶらさげ石抱きの刑」をされた時、三角の木の上に坐って、背負い石をのせられてうめきました。身に覚えのないことでしたので（シット心、女のことでした）白状しないと云って膝をゆさぶられ身体中からポタポタ脂汗がしたり落ちて来ました。脚の痛みが頭にずうんと来て気が遠くなりそ

うでした。そして一時間近くもくらえて居ましたが、その中に脚の感覚がなくなってきた。未だ白状しないと云って遂に鼻環に三貫目の石をぶら下げることになりました。それでも白状しないで居りますと鼻環につないだ石を下げられました。脚の痛いのはすっかり忘れてしまつて鼻柱の激痛がつんと来ました。とたんに全身にしびれが来た様でした。気が遠くなりかけたら石はずしたのでし

よう。またまた膝をゆさぶられました。気がついてみると牛の鼻よだれのようにあお鼻をグシャグシャにたれ流して口からもよだれを吹いて居ました。又、石をぶら下げられました。今度は鼻石を振り子の様にゆられました。遂には小水をたれ流して鼻汁を両の鼻孔より吹き出して苦しみました。その苦しさに思わず気絶してしまいました。目が覚めて気付いたら三角の木より下されて矢張り高手小手

にくくられて横に転がされて居ました。遂に白状しないままに氣を失つて居たのでした。白状するまで刑罰をかけると云う事で股を開かされて足を固定して縛られ尻をついたままに鼻環を充分に吊り上げられました。少しも身動き出来ない様に固定されたのです。丸一日、鼻環をつけて種々の鼻いじめをされました。始めはそれ程でもなかったのですが、次第に苦痛が増大して遂に歩くことが出来なくなりました。此の鼻いじめのために音を挙げて白状をいたしました。鼻環を通して居るために種々変つた刑罰にて毎夜反省をさせられて居ます。以上のことは少しも誇張でもなく空想の話ではありません。皆、実際に行われている実験記録です。フィルムに収めておくと思つて居ます。嘘のことではないので、若し鼻いじめをしたいサドの女性が居られましななら実験してみて下さい。鼻環のついて居るドレイが居ます故、いためたり愛玩用動物として飼つても面白いと思います。では以上とりとめない記し方になりましたが、皆様に宜しく。益々の御発展を祈ります。

KK四月号を

手にして

近 藤 一

グラビアを開くと、若い女体の美しい悶えがズラリと並んでいて相変らず愉しさを醸してくれるのです。

R・悠紀子嬢のモンタージュは欲張りすぎて雑然とした感じ、折角の美女だけに幻想的な悦虐ムードが欲しいところでした。

四方清美嬢の体当り演技は佳良温かなマスクと共に庶民的な健康

なムードがあります。厳しい縛しめも一種の美容体操に似ていますし、器具を使つての責めにもプレイの匂いが強いのです。

加茂良子嬢の裸身の美しさは正に一級品で、殊に胸の隆起の形の良いことは巧まずして美術品と云えるでしょう。腹部に余分な脂肪の沈着がなくスラリとしたスタイルが見事です。マスクが実に可愛く印象的で明るさの中に女の意地が窺われ、黒い縄で巻かれて吊られた首筋の美形も申し分ありません。清潔な雰囲気を生かして大い

に活躍して欲しいモデルです。

絹川文代嬢と大塚啓子嬢はベテランの貫禄充分な好演で、お二人の揮姿はユーモラスな味があります。絹川嬢の肌の白さはトップクラスらしく、太目の黒い縄が良く映えています。腹部のヴォリユームが増して女の匂いがムンムンする程です。大塚嬢の首吊りのポーズは清潔で美しく、切腹などよりもこういうポーズの方が小柄でピチピチした彼女にマッチしそうに思います。

前本妙子嬢は、均斉もとれ、ヴォ

リユームも適度なモデルとして最近重用されていますがメーカーキャップにもっとリファインされたものが欲しく、表情も弱く平凡なので折角のポーズが生きていません彼女の場合、髪形を考え、全裸よりも和装の肌着姿の方が似合うのではないではないでしょうか。猿轡はあった方がよいと思います。

最近、囚衣やお仕置着が少いように思います。桜井嬢、津川嬢、萩嬢にあったような囚衣や拘束具を使つて絹川嬢や加茂嬢を飾り立てることを忘れないで下さい。

馬 化 狂 通 信

大映、京 マチ子



ロンドンのストリップパー、アナベラ・リー

禪
(ふんどし)

白山 緊

禪、なんという意味シンで我々の胸に動悸を起させる字か。衣へんに軍隊の軍、いくさという逞ましいそして最も野性的になれる瞬間の男がつける一片のあの悩ましいふくらみを持つ白い帯。

勿論、赤フンもあるが、なんといっても一般的なのは白フン。

大映の矢島ひろ子と水木麗子(右側)



禪、私はこのために如何に犠牲をはらい何如に情熱をかけて資料を集めたことか。十何年間も写真を取り近ごろではフンドシを締めた筋骨逞ましい男の動きに興味をもって8ミリに収めねば気がおさまらないまでに夢中になった。集めた写真は古くは支那事変の軍隊時代のものから新しいものでは銭湯風景に至るまで、ありとあらゆる機会をとらえて撮った写真は無数というに近く、このように飽くなき蒐集欲にかられるのも、あの

なんともいえない男の曲線をもちそしてフンドシをしようという男の気持の逞ましき、当然それに合った真の荒々しい男の体勢。これに私は力づけられるのである。

禪、私はこれに三つの要素が加わったのが好きである。それは野生的、逞ましき、そして素朴さである。禪は女性のそれと違って優美繊細はいらない。では、この三つをそなえるものは、それは六月の風かおる初夏の田園に白禪一つになって田植する男。上に紺のハ

イヴオンヌ・デ・カルロ



ッピを着け浅ぐろい尻にきりりとしめた純白のフンドシは、まわりの緑と調和して最も日本的な、そして禪のもつよさを一番よく表す風景であろう。昨年の夏であったが、中年の漁師が六尺禪一つで舟を漕ぐリズムカルななんともいわれぬ調和に夢中で写真をとりましたことがあった。後で親しくなり共に禪愛好者であることが分り快く種々のポーズをとってくれたんだものである。

伊藤晴雨翁を偲んで

江戸時代の女責考

史 研 同 人



既に本誌上に於ても発表され、万人の知るところであろうが、過日責画の大家伊藤晴雨先生が長い闘病生活の末、その八十年の生涯を閉じられた。責画一途に専念され幾多の名作を残された偉大な業績は、その名を史上に永久に止めることであろう。

の日本美人の責め絵が、より一層の美を彩り、手にとる者をして恍惚として夢幻の境をさまよわしたものである。では、あの責画にあるような残酷きわまる拷問が、当時（江戸時代）実際に行われていたのであろうか。

いわゆる江戸時代に於ける刑罰制度を考える前に、時の社会情勢の進展から説明する必要がある。

単に江戸時代といっても、前期と後期とでは二百年以上の開きがあり、人間のタイプも全く異ったものとなっている。

幕府創設以来、国内の統一と安定した近代社会への確立に山程の仕事を負いながらも、たゆまぬ前進が続けられた結果、外面的には一応幕府の政策は成功したわけである。

従って司法関係にも近代化への思想は当然吹き込まれ、当時大都市といわれた、京、大阪、江戸市中の取締り機関にも、現代法規の基礎が出来上り、容疑者の逮捕取調べに際しても、必ず事前に証拠を挙げてからという事に重点が置かれるようになって、明るい社会の建設に大いに貢献したのであるが、一方地方に於ては、それが遅々として進まず旧態依然とした拷問が屢々行われていたのである。婦人容疑者を取調べるに際しても、三大都市に限らず一応形の整った町の取調べ役人ならば、婦人の足の膝から上を故意にまくり上げて覗いたり、まして腰巻一枚の裸や全裸で白洲へ引き出すなどという下劣な真似はしなかったし、又、そのような実例も殆どないといつてよい。

しかし、地方藩下の偏境の地に於る取調べ機関となると都市と異って徹底さも欠けているため、婦女子でも成年男子と同様の扱いを受け、裸にされて苛酷な責め拷問を受けたという様な資料も少しは発見されるが、これとて僅かな例に過ぎない。婦女子が裸にされて拷問を受ける殆どの例は、使用人に対する主人の私刑である。

時代物責絵によく見る、あの凄惨な場面は、これらを基として描かれたのであろう。絵で眺める感じでは、拷問を受ける女の苦悶と色気がよく出ていて大変美しいものだが、仮に我々現代人が実際にその場面に立会ったならば、全く陰惨そのもので正視に耐えぬものと思う。又残酷な責めの犠牲者に若い女性が多いというのも、一つの特徴であるが、これは可弱い女性ならば、悲劇が倍加して、同情と関心が集中するという効果を狙ったものと思う。

いずれにしても、伊藤晴雨氏が奇々新年号の「地獄宿」で述べておられるように、我々マニヤにとつては、女責が比較的容易に行うことが出来た江戸時代は、或る意味に於ては、よき時代であったに違いない。



連載小説

狩
獵
者

佐 度 槐

新 川 工・画

(第八回)

有 刺 鉄 線

稲葉祐吉の全身に突き刺された五百本の針は、やがて、山科たちの手で、一本々々ひきぬかれはじめた。

チクチクと、間断ない痛みが、躰中を移動するが、刺されるときと違い、気分的には堪え易かった。

山科たちが作業を終了したことによって、針は全部がぬきとられたと判断できたが、躰の疼きはまだ治まらず、ぬき忘れがあるのではないかという危惧を感じさせた。

しかし、とにかく済んだと思うと、稲葉は「フウッ」と大きな溜息を洩らした。点々と肌に印せられた針穴からは、わずかな出血もあったが、恐怖が去ると、稲葉は、もとの元気をとりもどした。

稲葉の後へまわった杉田と南が、左右の手の縄を別々にときはじめてたが、それは、後手に縛りなおすためだった。

自由になると早合点した稲葉は、慌てて腕を動かそうとしたが、そのときは、もう、固く括られていて、いたずらに手首が締まるだけだった。

そのまに、足首の縄はとかれていたが、脚

だけが自由でも、逃げることの困難さは知れきっている。

だが、死の宣告をうけていたのを思いだし、た稲葉は、自若としているわけにはいかなかった。いきなり、扉に向かって突進した。満身の力で体当たりしたが、岩乗な鉄扉は微動だにしない。

「畜生！……」

呻いた稲葉は、追いつめられた獣のような絶望的な眼で、四人の男を見た。

「騒ぐな！ フフ、すぐに殺そうとはいわねえさ」

司慎之輔は、口許だけで笑うと、拳銃のあたりかを示すように、上衣の内ポケットへ手をさし入れた。

「嫌だ、嫌だ！ 助けてくれ。俺は、おまえらに殺される覚えはねえ。後生だ。命だけは助けてくれ！」

稲葉は、火のついたように喚きながら、部屋中を逃げまわったが、すぐに捕まり、両脚を揃えて括られてしまった。

「オット、しっかり立ってるんだぜ」

大きな人形を扱うように稲葉を立てておいて、杉田は、準備室から有刺鉄線を運んできた。

稲葉にとって、見馴れたというよりも、扱いた馴れた有刺鉄線は、それ自体は恐怖の対象とならない。しかし、最前の針責めを思いあわせると、針ほどは鋭くなくても、皮膚を貫くには充分な、無数の鉄の刺は、確かに不気味な脅威だった。

杉田は、自分の手を傷つけぬように、注意深く、その有刺鉄線を稲葉の裸身に巻きつけていく。

胸から下へと螺旋状に絡みついていく鉄線の刺を、弾力のある稲葉の皮膚は、かろうじて支えてはいるものの、それは、杉田がかげんしているからで、いくら鍛えた躰でも鋼鉄ではないから、いつプツリと突き刺さるかわからない。

有刺鉄線を足首まで巻きおわると、南が、黄色の真新しいヘルメットを、稲葉の頭にかぶせた。

稲葉は、文字どおり棒立ちになったままだった。もし少しでも動いて安定を失ったら、倒れるだけではすまない。数多い刺が皮膚を破り、肉を抉るのだ。だが、そんな心配がいかに馬鹿げたものであるかを、彼はすぐに知らねばならなかった。

いきなり、杉田が、稲葉の足をさらったの

である。

「あッ！」

叫びざま、稲葉の躰は、丸太を倒すように床へ転った。

「痛ッ！ 痛い、うう」

たちまち、プツプツと突き刺さる有刺鉄線が、みるみる血にまみれる。

頭を強く打ったが、ヘルメットが衝撃を緩和して、気絶はまぬがれた。いや、むしろ、稲葉にしてみれば、気絶してしまったほうがよかったかもしれない。

「起こしてくれ！ 頼む。痛い。お、起こしてくれ」

稲葉は、顔を歪め、悲痛な叫びをあげる。

山科が、櫓の長い棒を持ってくると、仰向けになった稲葉の躰の下に入れ、こじるようにして俯伏せにした。

「ああッ、うう、痛てえ……」

胸から腹一面を同時に刺される痛みに、稲葉は泣き声で呻く。

先が鈍くて太い鉄の刺は、針よりも疼痛が強く、出血も多い。

しかも、山科は、容赦なく棒を操作して、稲葉を転がすので、地獄の責苦さながらの苦痛に、稲葉は絶叫を止めることができなかった。

た。

「兄哥、かわろうか——？」

山科の額の汗を見て、杉田が云い、かわって棒をとる。

そして、南が交替する頃には、稲葉の呻きにも、ようやく力がなくなってきた。

充血した皮膚は、噴きだす血でヌメヌメと光り、全身が真ッ赤だったが、屠殺される鮪が、血みどろになりながらも、最後まで精悍さを失わぬように、稲葉の筋骨は、なお活力に満ちていた。

「もうそのくらいでいいだろう。鉄線をといてやれ」

慎之輔に云われて南は不満そうな表情をしたが、棒をおくと有刺鉄線ははずしはじめた。南がわざと乱暴にひっぱるので、稲葉の皮膚は刺に裂かれ、縦横に掻き傷が走った。

やっと、有刺鉄線がはずされると、足の縄だけとかれた稲葉は、立つことを命ぜられ、ホースの水を浴びせられる。

血を洗いおとした稲葉の裸身には、無数の傷痕が、刺青のように残っていた。

工事現場

二十分あまりののち、稲葉祐吉は、ついに

処刑室の磔柱に括りつけられた。

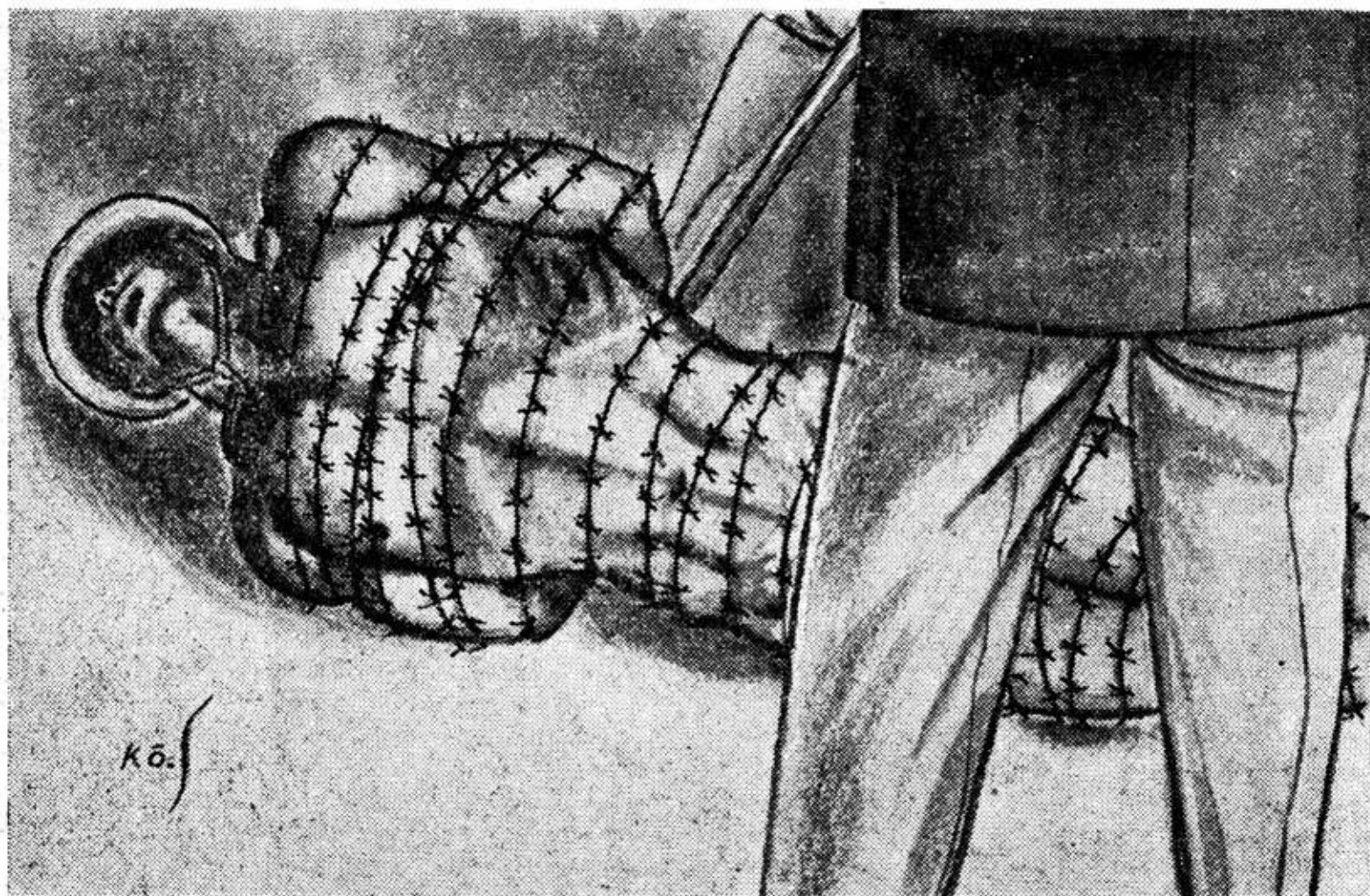
もちろん、観念しておとなしく処刑の坐についたわけではない。

稲葉は、もう、やぶれかぶれで、無駄と知りつつ、めっちゃめちゃに暴れまわった。その経過は、くだくだしくなるから省略するが、要するに、また同じことをくりかえしてその結果が磔となったのである。

山科が、用意の千枚通しを配り、慎之輔をはじめ銘々が一体ずつ手にした。

本来は事務用品にすぎない千枚通しだが、いままでの経験で稲葉には、それがいまわしい責め道具になることを察知できる。いや、畳針よりも長く、有刺鉄線の刺よりも太い錐は、人殺しの兇器にさえないうるのだ。

司慎之輔は、錐の先で、稲



葉の、褐色の広い胸板をつつきながら、

「いよいよ最期のときがきたよ。このかわいらしい千枚通しが、おまえさんの心臓を一突きすれば、それで、おしまいさ」

「助けてくれッ！ お願いだ。命だけは、助けてくれ。俺が、あんたに、なにをしたというんだ。俺は、殺される覚えはないぞ。嫌だ、嫌だ、死ぬのは嫌だ！ 助けて、助けてくれエ！」

「ハハハハ、泣くがいい。喚くがいい。俺はおまえのような男が、泣き喚くのをみるのが大好きなんだ」

軽い調子で云っていた慎之輔の声が、次第に粘りをおびてくる。

「まず、こてしらべだ。山さんから一人ずつ、好きなところへ突き刺してみろ」

進みでた山科が、稲葉の太腿にズブリと突きたてる。

「うッ！ 痛てえッ……」

稲葉の悲鳴がおわらぬうちに、今度は杉田が肩口を狙った。

「わッ！ 痛ッ、痛ッ、う、うう……」

千枚通しは、いずれも根元まで突き刺さり柄がブルブルと顫えている。

次は、南の番だ。

コリコリと締まった稲葉の腹筋を目がけて握った千枚通しの柄に力をこめ、一息に突きとおした。

「げッ！ くくく、うう……」

臍の少し下を貫いた錐は、腹膜を破り、深く体内に入った。素人眼には、当然、腸管をも傷つけたに違いないと思えるが、生理学の知識からは、腸には針状のものは刺さらぬ筈だった。

しかし、電撃のような痛みが続く重い鈍痛は、腹部全体に拡がり、稲葉の顔から血色が退いた。

「助けてくれ。助けてくれ。助けてくれエ……」

稲葉は、声をあげて泣きながら、呪文のように同じ言葉をくりかえす。

慎之輔は、左手を稲葉の心臓の上に当て、小刻みに強く搏っている鼓動をさぐってから慎重に標的を決めた。

「ぎャッ！」

声というよりは、音のような短い叫びがして、稲葉は、ガクッと頭を垂れた。

工事中の高層ビルに押しつぶされたように建っているバラックの飯場から、寝ぼけまな

こででてきた土工の石井は、明けがたの空気の冷たさに身顫いしながら、立小便をはじめた。用を足しおわると、もう一眠りするつもりで、戸口のほうへ歩きかけたが、妙なものを見た気がして、眼をこすった。

足場へくっつくようにして誰か立っているのだ。黄色のヘルメットをかぶっているところを見ると、仲間に違いない。

石井は、思わずプツとふきだしそうになった。なんだって、この寒いのに、真ッ裸でいるのか。

「オーイ、誰だア？」

彼は、野太い声で呼んでみた。返事がない。

（ヘンだぞ！）と感じると石井は、いっぺんに眠気が醒めた。

彼は、躓きながら駆けた。

「小頭ッ！」

石井は、とびつこうとして、逆にとび退くと、

「大変だア！……」

と喚いて、飯場へ転げこんだ。

半信半疑の土工たちが、ソロソロと石井に従いてでてくる。

死んだように静かだった早朝の工事現場は

たちまち騒然となった。

立っている姿勢で、足場に固定されている稲葉祐吉の死体は、ヘルメットの他はなに一つ着けていない。それだけでも異様なのに、裸体は、全身が赤黒く見えるくらい、幾つもの傷痕で彩られていた。

眠りから醒めやらずにいる都民は、けたたましく街並みを縫っていくパトカーのサイレンを聞いても（またか……）と思うだけだろう。それほど事件には不感症になっている。しかしそれが、いまだに正体もつかめぬ残忍な「狩獵者」の新しい犠牲がまた一人でて、現場に向かう緊急車だと知ったら、冷たい戦慄を禁じえないに違いない。

こうして、ついに、五人目の裸体の他殺体が発見されるにおよび、警視庁刑事部捜査一課は、ようやく、連続殺人事件としての捜査にふみきったのである。

花 形 投 手

オープン戦で予想どおりの好調を伝えられていた、シャークスのエース小諸洪介は、花形投手として、今年も人気のトップにたつことは疑いなかった。

ユニークな野球随想で知られる、作家の佐

川六郎は、個人的にも幾人かの選手と交際をもっていたが、同じ九州出身の小諸投手とは特別に親密だということになっている。

かつて、佐川は、某誌に、「プロ野球選手胸毛十傑」という漫文を発表したことがあるが、文中、小諸の毛深さを執拗なまでに礼讃して、一部の読者を（さては？）と苦笑させたものである。

風呂好きの小諸は、每晚、入浴をかかさないう。レース中は球場のバスにも入るから、一日に二回、入浴することになる。

下宿先の林氏夫妻も、それには理解があった、というよりは、林氏がやはり風呂好きだったので、充分な広さをもったタイル張りの内風呂に、小諸は、のびのびと入浴を楽しむことができた。

毎日、下着をとりかえても、小諸の若い体から発散する汗や脂は、すぐにジットリと汚れをおびせてしまう。彼は、肌にはりついた薄いナイロンのブリーフを、ひきはがすように脱ぎすてると、浴室にとびこむ。

熱い湯の感触が、筋肉に浸みわたると、爽快な刺戟が五体に流れて、新たな精力が湧きだしてくるようだった。

ペナント・レースが開幕して、後樂園での

第一戦は、小諸の完投で、終始、相手チームを制さえ、圧倒的な勝利をおさめた。

小諸は、浴槽に長身を悠々と伸ばし、愛しそうに逞しい右腕を撫でてみた。

熱狂したファンのスタンドをどよもす歓声が、潮騒のように耳の底に蘇えてくる。

充填された自信が、陽の匂いのする男らしい貌を和らげ、濃い眉を凛々しく気負いたたせていた。

子供のない林夫妻は、揃って旅行中だったし、通いの女中も帰ったあとで、家の中は静まりかえっている。

そのせいでもないが、いつもより少し長湯をした小諸が、そろそろでようかと体を浮かしかけたとき、突然、外からガラリと戸がひき開けられた。

小諸は見たことのない顔ばかりだったが、闖入者は山科・杉田・南の三人だった。

「誰だ？」

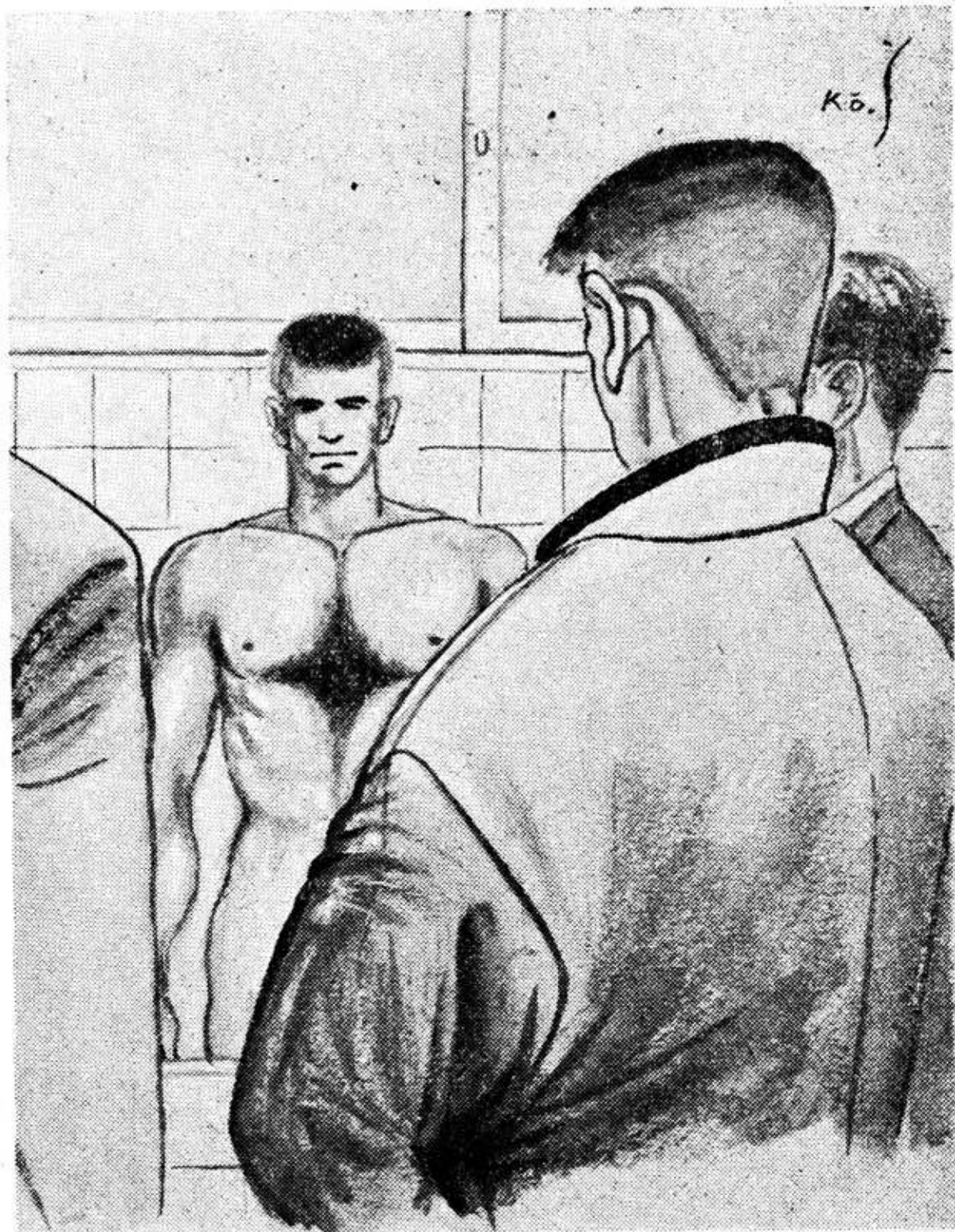
ザブツと湯をきって立ちあがった小諸は、

険しい声で咎める。

男たちは答えない。

「失敬な！ 君たちは、なんの必要があって無断で入ってきたんだ」

小諸は、浴槽を跨ぐと、流しにてて詰めよ



った。

胸から腹にかけて、旺盛な発生を誇る胸毛は、黒々と濡れて鮮かにきわだち、男の眼をも眩らせる見事さだった。

仁王立ちになった小諸の堂々たる体躯に、三人の男は威圧されたように無言を続けてい

たが、ややあって、山科が口を開いた。

「おまえさんの躰が入用なんでね。つまり、お迎えに参上したという次第さ」

「なんだと。いいかげんなことを云うな。貴様らの行動は、強盗だと推われてもしかたがないんだぞ」

小諸は、入浴中の不利にもかかわらず、弱身をみせぬ構えで対峙していた。

小諸独りと知って入浴中を襲い、金品を強奪するつもりだろうか。三人組とは大袈裟だが、小諸の体格では、それくらいの人数は必要とみてのことかもしれない。

小諸は、たとえ三人を相手にしても格闘ではひけをとらぬ腕力はある。しかし、明日にひかえた試合を考えると、大事な躰を怪我でもあってはならない。また、万が一、不覚をとって、裸のまま縛りあげられでもしては、新聞種になって、つまらぬ恥をかく。この際は、口惜しくても、おとなしく金をわたしたほうが賢明というものだ。

「まア、いい。金はやろう。とにかく裸じゃ恰好がつかん。服を着るあいだ待っている」と云って、小諸は、脱衣室のほうへいこうとしたが、男たちは動こうともしない。

「オイ、どかないか」

かまわず押し退けて進もうとした小諸は、なんの防禦態勢もとっていなかった。しかも山科が柔道の練達者であり、まして、不意撃ちをかけてくるとは計算していなかったから（あッ）と思ったときには、小諸は、したたかにタイルの床へ叩きつけられていた。

「乱暴するな！ 金はだすと云ってるんだ」
小諸は慌てて叫んだが、起きあがるまもなく、三人によってたかたか振じ伏せられ、ロープで縛られたうえに、猿轡まで噛まされてしまった。

「うまくいったな」
「早く運びだせ。親分^{ボス}がお待ちかねだ」
「これで、シャークスの優勝はパァか」
「いまはそんなことを云っている場合じゃねえ。急ぐんだ」

男たちが口々に云っているのが聞こえる。その内容には、確かに気にかかるフシがあった。最初に年長の男が云った「小諸の駄が必要」というのはどうやら本当だったらしい。彼らは強盗ではなく、俺をどこかへ拉致するために侵入したのだ。

小諸の脳は、忙しく回転する。

野球狂の中には往々にして、一ゲーム幾らと賭けに熱中する者があるが、そういう人種を餌食にして、大がかりな組織をもつギャンブルがおこなわれている事実もあるらしい。そうした場合に、まず狙われるのは選手である。簡単に金で買収できれば問題はないが、節操堅固とみれば、非常手段もとりかねないだろう。

自分よりも、チームにとって大変なことになるかと、小諸は、いまさらながら齒がみをする思いだった。

灰色のコロナは、林家の門前に停めてあったが、住宅街のことで、夜になるとほとんど人通りはない。

杉田と南が、小諸を車内に運びこむと、山科が自分のレイン・コートを脱いで、小諸の裸体を覆った。

乗用車の床へ、窮屈な姿勢で押しつけられている小諸には、どこをどう走っているのか見当もつかない。

やっと自動車^{クルマ}が停まると、小諸は、また二人の男に運搬されて、地下室らしい階段をおり、動物の檻のような鉄格子のついている小部屋にほうりこまれた。

(畜生！……)

猿轡の下で唸って、駄をものがかせた。すると、思いがけなく、後手の縄がわずかばかり緩んだように感じた。

(とけるかもしれない)

小諸が、なおも懸命に腕を動かすうち、とうとうロープがズルズルとはずれてきた。

腕が自由になった小諸は、猿轡をとり、足の縄もといた。

レイン・コートは、自動車からおろされるときとりのけられたので、身にまとうものはないもないが、そんなことよりも、いまは、なんとかして逃げる工夫をしなければならぬ。

三人の男は、すでにいなくなっている。

小諸は、鉄格子を揺ったり、壁を叩いたりしたが、結局、判ったことは、監禁されてしまったということだけだった。

(クソ！ 俺は負けんぞ)

脱出は諦めても、小諸の眉宇には、決意のようなものが漂っていた。

健全であるべきプロ野球を毒す賭博団とは断固として闘わねばならぬ。莫大な契約金でプロ入りした小諸だが、彼にとって、野球はどこまでも神聖でなければならなかった。どんな手段で脅迫されても、絶対に八百長はできない。野球を汚すくらいなら、俺は潔く死を選ぶだろう。

小諸洪介は腕を組み、肩さえ聳やかして、運命にたち向かうように、決然と檻の真中へ直っていた。

(以下次号)

告白小説

私 と マ マ

江 良 田 玉

その日は氏神社の祭礼の日で平常、昼前は寝呆けたような空気に包まれているママのお店（バーひなどり）一帯も、朝から華やかなお祭の雰囲気のみなぎっていました。

軒並に吊した提灯が揺れ動いて賑やかな人声や笑いが流れ、いままでも道路わきに集っていた人々がポツポツ散り始めていました。威勢のよい御輿が三台、通り過ぎたのでした。最初と二番目の御輿を担ぐのは屈強な若者たちで、酒気を含んだ逞ましい筋肉の裸体を波打たせて掛声をあげる後から、三番目の少々小型の御輿が続きました。

この三台目が町内の特別趣向で、この界限の姐さん達が揃いの染抜き紺の半纏に短い股引、練り鉢巻という出立で嬌声をあげて通り過ぎたところでした。それはまことに艶やかな風情でした。上気した姐さん達が真剣な表情のうちに白い肉体を躍動させ、涼しげな下半身を踊らせている楽しそうな様子に、佇んで眺めていた私は、さきほどから少なからず羨望を感じていました。

（私も御輿を担げばよかった。さっぱりと何もかも忘れて）

ママは勿論、みどりもひとみも加わっているのです。

（隅ちゃん、あなたも一緒に御輿担ぎをやりなさいよ。面白いわよ。誰が入ってもかまわないの。飛入り大歓迎よ）

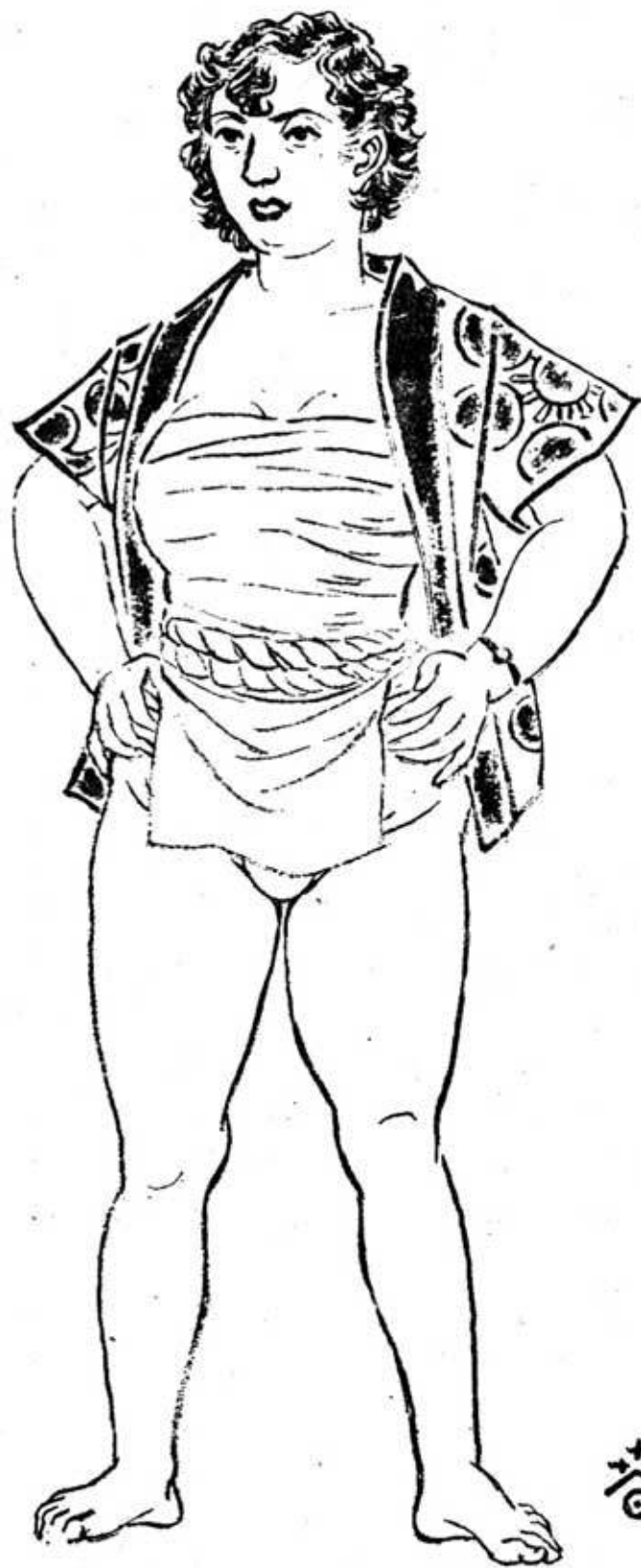
折角、ママが奨めて下さったのに、そんな茶目ッ気や大胆さのない私には、何か不似合なような自分に思われて、はにかんで応じなかったのを微かに後悔していました。

（でもどんなかしら？）という好奇心はありましたので、この街角に立って待受けていたのです。眼を瞞って私はママを見ました。一際目立つ大柄のママを一群のなかに見出した瞬間、私の胸奥に妖しげな気持が走り抜けました。

ママはみずみずしい肉感に溢れた白くふくよかな肉体を踊らせ、美貌の顔は生え際まで汗に濡れていました。ママに較べて小柄で華奢な体つきの私。——丸く肉づいた乳房も、あのぐっと盛り上って見事な隆起を示しているママのそれとは、ボリュウムに於て雲泥の開きがあります。

（あのママの肉体が私を責め苛んで下さったら……）

またしても私をゆさぶる悦虐の欲求。——体にのしかかってくるこの大きな眼に見えない意志に私はいつか眼を伏せ、またもや抑え



ることの出来ない悶えに身を苛まれるのでした。稍々興奮の静まるのを待って、やがて私はその場を離れました。

バーの二階がママの居室になっています。

小じんまりとして、しかもママの好みにマッチしたシックな装いの部屋で眠いをよそに私は一人ポツネンと待っておりますと、間もなく何をいっているのかキャッ、キャッと笑いあひながらママたちが帰ってきました。勢よく階段を上ってくる足音。

「ほんとよ、ママ。みどりさんの腰つきったら、おかしくって……」

「だって、はたの人が誰か私の脚を蹴とばし

たのよ」

「あまりお尻を振り廻すからよ」

「そんなことする人いたの？……その人もふらついたのよ。きっと……」

ドアが開いて桜色に上気した顔で胸元に高々と巻きあげた晒も露わに三人が転り込んできました。部屋の中は急に明るさがさして

「何だ、隅ちゃん。借りて来た猫みたい」

「おもしろかったわよ。あんたも来ればよかったのね」

「でも見てくれたの？ 隅ちゃん。私たちの勇ましい格好……」

いたずらっぽく笑ってママが云います。



「ええ。見ましたわ、ママ。……ひとみちゃんはお興にぶら下ってみたいよ」

私のからかいに、ひとみはつぶらな瞳をくりくり動かして怒って見せます。

「それ、ごらん。あんただって、その通りじゃないか」

打てば響くようにみどりが応酬します。

まだ御興を担っているような興奮で、それぞれ地下足袋を脱ぎ捨てると足を洗って上りこみました。すっかり開放的な気分になっている三人は、甘やかな香りを部屋いっぱいにぶちまけます。

「ふんどしまでぶくぶくになっちゃったわ」とママ。

「私だってショーツがびっしょり」

「いやだわ。よしてよ……そんなお下劣」

とみどりが、とがめるような口ぶりで笑います。

奇異な会話にびっくりした私は思わず顔を赫らめました。話のなりゆきはよく呑みこめないのですが、ママが平然と云い放ったふんどしという言葉に、私は妙なくすぐったい気持ちを覚えたのです。

「ふんどしって？……」

いぶかしげな眼を瞞ってママに視線を注ぎ

ました。

「そう、ママふんどしなさっているのよ。いやらしいわ」

ひとみがクスッと笑って答えます。

「何がそんなにおかしいの。お祭りでしょ、今日は。男装したときは、ふんどしを締めなきゃ気分が出ないわ。ねえ、隅ちゃん」

何事にも行動的なママは、何ら恥ずかしげな様子もなく当り前なことときめこんでいるのです。ちょっと間が悪いような気持になつて私は唯ニヤリとしていました。

「暴れすぎたので、すっかりゆるんじやってるわ。あんなにきつく締めておいたのにね」

そう云うとママは皆の注視の中で半纏を脱ぎ、腿に張りついたような真白な半股引をずり下しました。丹念に巻きあげた胸の晒が解かれて私ははじめてママの裸体を見ました。

なだらかに丸みを帯びた肩から腕の線、白く艶やかな胸の隆起、なめらかに肉づいていゝる長い太腿、すべすべした脛、魅惑的なその肉体が案外、肥り肉なのには私は驚きました。形のよい腰部から臀部はプリプリと顫えんばかりの逞しさを誇っていました。そしてその豊かな肉付を縦に割って、白い晒のふんどしが深く細く喰い入って締めあげられ、腰部で

丁寧なT字形に結ばれていました。それはママの腰の辺りからヒップ一面をぐっと引締めて、厚みのある肉の間で可愛い悲鳴をあげているように思われました。

美しい項をこちらに向けて心もち前屈みになったママは、前に垂らした晒の一端を両手で引っ張って、持上げたお尻を二、三度振りしました。必要以上に絞りあげたママは、

「おお、いい気持だこと」

と、いたづらっぽく笑って、しみじみとふんどしの感触を味わっているようなしななをつくるのです。下腹部は柔らかくプックリと弾んでいます。

「いやね。ママ、幻滅だわ。女のふんどしなんて」とみどり、

「痛くない? ……そんなにきつく締めて…」

と私が尋ねると

「ちっとも、かえってすがすがしいわ。あんたも締めてごらんよ」

私の顔は一時に赫らみました。

「男って羨やましいと思うわ。こんな勇敢な格好で歩き廻れるのですものね。しかし今時の男は駄目。ふんどしの締め方一つ知らないなんて、だらしがなさすぎるわ。ママが男だったら断然、愛禪党よ。ホホホ……」

余談になるのですが、私はママの言ったことに何か共感めいたものを持っていました。

と云うのは、ふだんショート・パンツを使用しない私は、ふんどしに近いような細いT字帯を愛用しているからなのです。私が穿いていますのは、股間を覆うだけのもので、脊面は全くT字形になっており、丁度ストリッパ―が舞台で使用しているようなもので、ふんどしと大差がありません。柔らかく薄い布地を用いて自身で好みのおり縫いあげたものなのですが、私はこの穿き心地がたまらなく好きでした。

人と何気なく話している時、喫茶店で腰掛けてお茶を飲んでいる時、或いは道を歩いている時などに、ちょっとした身のこなし様で、ふっと皮膚を通して微妙に感じられる快よさがたまりませんでした。

そんな私でしたから、言う迄もなく、ふんどしと云うものに好奇心を抱いていたのですが、愛用するところまではちょっとためらっていたのでした。そこまで羞恥心を抑えることはできなかったのです。

それで今、ママがふんどしを締めこんでいる姿を見て一種のスリルを味わうような気持でママの本心を探り出そうとしていました。

いまのママの言葉を耳にして私は心の奥底を射抜かれたようにギクリとしたのですが、

「そうね。女がしめてもそれほどおかしいと思いませんわ、別に。下穿きなんですもの」

そのママの瞳に同意していました。

「そうよ。隅ちゃんの方が話せるわ。意見一致よ。恥ずかしければ見られないようにすればいいじゃないの。女がふんどしを締めていけないって法律でもあるのかしら。……みどりさん。如何？ ひとみ？」

いたづらを愉しむようにママの眼は二人を捉えます。

「何云ってんのさ。そんなの屁理窟よッ」

ひとみは、いきなり平手でママのふくよかな臀部を叩きました。パチン！ と気持のよい音が鳴って、同時に飛びすさって逃げようとしたひとみの襟に、いちはやくママの手が掛りました。

「やったわね。このチビ助ッ」と云う声と一緒にママの腕にひとみは抱き込まれました。叫声をあげてもがくひとみの半纏は瞬く間に剥ぎとられてピッチリとまつわりついたピンク色のショーツ・パンツと胸いっぱい晒を巻きあげたひとみの身体が跳ねました。甘やかな香りが渦巻き、白くなまめかしい二つの

肉体が乱れあって、狭い部屋いっぱい相搏ちました。

俄かに起った取っ組みあいに狼狽した私とみどりは慌ててその場を明けると、この戯れを好奇の眼で見守りました。

押倒したひとみを腹這いに押え込んだママは、膝を開いて有無を云わさず、その脊に馬乗りに乗ったのです。肉づき豊かなママがどっかりと乗ったのですから、ひとみの小柄で細い体は文字通り蛙を圧し潰したような格好になり、「ウー」と呻いて脚を宙に泳がせましたが、一瞬の抵抗も許すものではありません。両腕は膝の下に組み敷かれていました。可哀想にひとみは息づいて滅茶滅茶に頭と脚を動かして身悶えました。

ひとみの動きを意地悪く封じたママは苦笑しながら大いに満悦の様子で、脊筋を伸ばしてひとみを見下しています。

「ユ……許してよ。マ……マ……」まだ少女ぽいあどけなさの残っているひとみは横暴なママの振舞いに、怨ずるような瞳をして涙を浮べています。悲しく訴えるようなひとみの言葉も耳に入らぬようにママは「みどり。その手拭かして……」

その威圧のこもった声に反射的に腰を浮か

したみどりの手から豆絞りの手拭を受けとると、ママは可憐の極にあるひとみのふっくらとした唇に咬ませて、手綱のように両端を持つと、ぐっと引っ張りました

容赦なく顔を引起されたひとみは「ウーウー」と声にならぬ呻きに唸るばかりです。「私の馬よ。ひとみッ。しっかり走らないかッ。……はいどうッ」

そう云ったママは平手でピシャリ、ピシャリとひとみの臀部を撲ちました。ママは妖しい興奮に燃えているようでした。ママは戯れているのしよるか。被虐者を見るその誇らしげな眼のひかりは、私には、いたずらの度が過ぎていくように思えました。胸をぐっと張って、ふんどし一つの姿で、手拭を手綱代りに引き締め、ひとみの脊に馬乗りになっているママの昂然とした姿態。どう形容したらよいのでしょう。異様な、しかも滑稽なこの二つの肉体の交錯。……それは、もはや完全に羞恥を捨て去った女の存在でした。

私は私でママがひとみの脊に跨った瞬間からギクリとして視線をママの姿に灼きつけるように注いで、脳裏は勇吉のことですっかり支配されていたのです。あの時子の鞭の下に少年に馬乗りに乗って責めぬいた自分の姿が

いや応なく憶い出されたのです。

小さな胸に跨って四つ這いで歩ませたときの快よい戦慄をどうして私の感覚からぬぐい消すことができませんでした。ママもまさしくその仕草を通して、私と同じように何事かを味わっているに違いないのです。さり気なく装っていても乗馬には異常な関心を示しているママのことです。

故意か、偶然か。またも私の血を逆流させる場面が目前に繰り広げられたのです。黙って息がつまりそうになって見入っている私はたにいるみどりも無言のまま全身を固くし

て目を据えておりました。

誰もが思慮分別を失っていました。おぞましい衝動に駆られて全身の血が煮えたった私は、遂に悦虐の性に撻ちのめされてしまったのでした。私は、やにわに立上ると

「許してあげてよッ。ママッ……」

絶叫してママの肉体に突っかってゆきました。馬乗りになっているママの身体がぐらっと重く揺れて、虚を衝かれたママは股を開いた格好で横倒れになりました。

「何をするのよッ。隅子ッ」

陶醉を犯されたママの瞳はキラキラと光っ

ています。すかさず立ち直ったママに腕を攔まえられて私はその場に倒されました。

突っ伏した私の脊にぐいっとママの膝頭がめり込み、両手首は握られたまま、強い力で脊中に振り合わされていました。

「クッ……ク……」

私は夢中で、自由のきかない体をもがいていました。

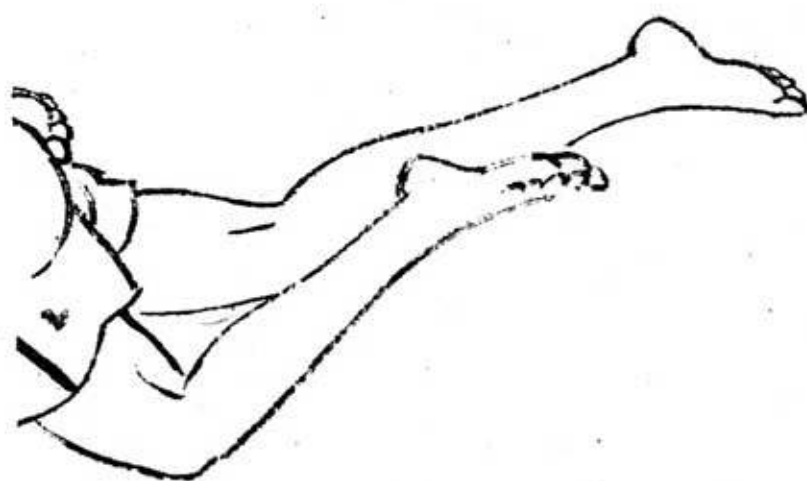
「ひとみ。その押入れに細引が入っているから出して」

ママは言葉鋭く、俯伏したままの姿態でしゃくりあげているひとみに云付けました。悄然として云われるままに黙って横座りに起き直ったひとみは細引をひっぱり出したのです。

ああ！ 私はママに縛られる。……

膝頭に一層、力が加わって、その苦痛に顔を歪めている私の体からブラウスとスカートが剥ぎとられると、黒いナイロン・スリッパと丁字帯を着けているだけの私の体は、ひしひしと後手に括りあげられました。

それは時子の縄目に慣れている私にも驚く程の正確さと無慈悲さをもった、厳格ないましめでした。両の手首は肩甲



骨の辺りまで引上げられ、腕の関節は、めきめきと音をたてるほどの厳しさでした。容赦なく皮肉に喰込む首縄とくびれた乳房、綾型に縄を掛けられた私の胸部から腹部にかけての苦痛に全身はただヒクヒクと悶え震えるのみでした。それもその筈でしょう。本気に怒ったママの力いっぱい縄目だったのですもの。何事も控え目に済ますようなママでない



ことを私はよく知っているのです。横倒しにされたまま、私はいつしか圧迫される胸部に激しく息づき、苦悶のうちに呻吟しつつも倒錯の甘美な味わいが皮膚や筋肉に泌みとおっていくのを覚えていたのです。一瞬、刃物のような鋭さをもって陶酔のあのきが脊筋をつらぬいて全身に走り抜けました。理性の限界を超えた私は、いまはもう

嗜虐者となって私を責めるママを痺れるような感覚の奥から仰ぐばかりでした。この場面を幾度、私は頭の中に描いたことでしょうか。

——遂に目的を達したのだ。——
心の底から嬉しさがこみあげてきました。

私は薄く眼を開きました。足許の肉体の微かな動きを楽しむように、ママは縄尻を手にして立ったままで私を見下していました。みどりは全身を硬直させて口も利けずに喘いでいました。ひとみも唇を噛んで重なるショックに凝然としていたようでした。

「隅子。……私は知っているのよ。あんた、こうして縛られるのが嬉しいのでしょう。ママはとっくから知ってたのよ。」

誰に括ってもらっているのか知らないけど、あんたの手首から痣の消えたことがないじゃないの。その通りでしょう……」

私ははじめて愕然としました。日頃、私に対して意外なほど優しく、型通りのママを見ていた私には、いまの言葉は微塵も推測されないことでした。愚かにも私はママの眼を欺しおおせるものと思っていたのです。あに図

らんや、その切長な美しい眼の奥で網にかか
る獲物を待ち受けていようとは……。

ママに対して懐いていた私の幻想が、あま
りにも見事に適中して、何もかも承知しきつ
たようなママの変容ぶりに私の心中は却って
当惑していたと云えるでしょう。私は自由の
きかない体で、ただ黙って頷くばかりでした。
そしてみどりやひとみの前に本体を明るく曝
け出された私は、却ってホッとした気持ちにな
っていました。

興奮が幾分、静まると、恐る恐るママの顔を
仰ぎ見ました。この美しい顔立のママの何処
にサディスティックな本能が隠されているの
でしょうか。誤魔化すことの出来ないママの
表情には容赦のない厳しさがありました。私
は身勝手にママを脳裏に描いて妄想と好奇心
にとらわれていた自分自身がおかしくなって
いました。ママは無言で、じいっと見下して
います。その眼は奥の方で薄笑いを浮べなが
ら、自分の試みの効果を確かめているように
思われました。

私をそのまま転がしておいて、ママは縄尻
を離すと、ふんどしを締めた上から器用な手
付で薄いピンク色の湯文字を腰に巻き締め、
裸の肌にじかにフワッと浴衣を掛けました。

そして再び私の側に片膝をついて屈んだママ
は、片手に縄尻を束ねて持ち、もう一方の手
で私の捲くれ上ったスリッパの裾を直して、
露わになった腿を隠してくれたのです。

「あんたも変った子ね、隅ちゃん。あんたの
そのふんどし、自分で縫ったの？」

「はい」囁くような小声で頷いた私に

「好きなのね。ふんどしの感じが。……私と
同じだわ」

一瞬うつろになった眼をあげて、ママは独
り言のように呟きました。

いつの間に寄ってきたのか、みどりとひと
みは私の側に坐って奇異な眼を瞪って縛られ
て転がっている私を凝視していました。呆れ
た表情のうちにも瞳は異様な光を帯びていま
した。苛なまれる私の肉体から、何かを仔細
に探り出そうとしているのでしょうか。或は
二人の眼には、私がただ単に不様な肉塊とし
て写っているのでしょうか。

日常、些細なことにも二人の眼を避けるよ
うにしていた私には、いまはもう、みじめで
情けないような気持や羞恥心はすっかり消え
て、心は却って大胆な余裕を持っています。
後手の腕も手首も既に感覚を失ってしま
って痺れきった皮肉に、なおも喰入ってくる

縄目の激痛に堪えている私に

「限ちゃん。ショーツ穿かないの？」

「ええ。私は……私は自分で縫ったのを穿いて
いるのよ。人並みじゃないのよ、みどりさん」

私は自棄的な言葉をはき捨てました。

（みどり、なんかに何がわかるもんですか。幾
つになっても、感受性のない女に性の真髄な
んてわかるもんか）

私は唇を噛んで眼を伏せました。

「可哀想じゃないの、……ママ……こんなに
非道く縛ったりして。……もう許してあげた
ら……」

痛々しそうにみどりは私の括り合わされて
いる手首の辺りに掌を触れました。ママは黙
っていました。

「触らないで。よけいなこと、云わないで頂
戴ッ」

払いのけるような私の身震いに、びっくり
したみどりは触れていた手を引くと訝しげな
表情で戸迷っていました。縄尻がぐいっと強
く引かれて揺いだ私は、手首と首の苦痛に顔
を歪めました。

「暴れるつもりなの？ 隅子ッ。もっと厳し
く括って欲しいの？」

冷やかなママの声が私を抑えました。

「い……いいえ。ママ……い……痛い。ユ……許して」

「隅ちゃんはね、これでいいのよ。縛られてるのが好きなのよ」

「そ……そんな……私には解らないわ。……ママ……もうよして、……解いてあげて、……」

呼吸も激しくみどりはママに迫りました。

そして激しく私の体をゆすぶると

「どうしたのよ。隅ちゃん。恐いわ。まるで悪いことした人みたい」

この言葉が緒になって、私の血液は一時に逆流しました。

「そうなの、私は変わった女なのよ。どうにもならないの、自分で自分の体が……」

身悶えて鋭く叫びました。どうにもならないこの私の血と肉体。

自由になるものならば、ママの胸倉にとりすがって訴えたい。

「縛られて死ぬほど苦しめて欲しいのよ。身体じゅう結わえて欲しいのよ。ママ、お願い。わかって下さる？。ユ、許して下さいわね」

声もかすれて私は叫びました。

俄かに胸底から突きあげてくる感情の波に打ち砕かれた私は、狂わんばかりに嗚咽し肩を震わせて身を振りしました。

「わかったわ。許してあげる、もう、いい子だから泣かないで、隅……ちゃん」

私の激情に反してママは落着を取戻していました。滂沱と溢れ出る私の涙をひとみはハシカチで拭ってくれるのです。そして自身も大きな黒い瞳をいっぱい見開いて、湧き出る露をせき止めているようでした。

ゆっくりと固く結ばれた縄目を解いてゆくママの手許を見付めているみどりも同じでした。無言のママは何か独り深く頷いているようでした。ママのみずみずしい唇が優しく開きました。

「何もかも……すっかり私に話して呉れるわね隅ちゃん。何もかもよ。約束して頂戴ね」
(この項おわり)

別冊奇譚クラブ

目下発売中！
御申込次第急送

定価三百円

(直送半額奉仕)

創刊号「告白・手記・体験」特集

リクエススト画廊(四馬孝画) 十六葉

食事責め、棒ぐつわ、皮袋、人質の乙女、

棒吊、厩、囚女繋留、苦痛の表情、鼻い

じめ、軽い責め、宙吊りダンス、心理責め

待ってろ、抜けてみな、詰問

グラビヤ希望写真集 五十一葉

勝気なおんな、私製拘束具、汗溜め、前手

縛りを望む、締上げ、葉子いじめ、

本文「告白手記体験集」二十八項目

あらゆる倒錯傾向を包含した得難き告白

体験の集大成、切々たる真実味溢れる血の

叫びは貴重な文献として価値あり。

第二集「松井籟子作品集」特集

口絵「狐灯」画集 滝れい子画

口絵「淫火」画集 北原純子画

四馬孝繋縛画集

グラビヤ 須川令子被縛独演集

(「淫火」にちなんだ繋縛ポーズ)

松井籟子女史の長篇傑作小説「淫火」四

百数十枚を北原純子さんの挿絵によって一

挙に掲載しました。中篇小説「狐火」と共

に妖しい倒錯の魅力は必ずや皆さまを甘美

な悦虐の花園へ誘い込んでしまうこととし

よう。美しい口絵並に挿絵と一緒にどうか

お楽しみ下さい。

連載小説

宇宙のどこかで

―或る無期懲役囚の告白から―

佐 治 麻 造

酒場の新入奴隷

女給の口から私が居ることを知った御客の中には、酔った座興に私を曳き出して辱ずかしめる人もありました。マダムは渋々私に後手錠を命じて曳き出します。度重なる中には慣れても来ましたが、最初の時の口惜しさ情けなさは忘れ得ません。床に撒かれた南京豆等を口で拾い食へることも叶わずに集めさせられたり、唇で床を拭かされたり、足の裏をしつように擦ぐられたり、全く屈辱の限りを堪え忍びました。

「私の道具を余り痛めないで頂戴」

マダムが、ほどほどに取りなして檻へ戻してくれますので、本当

に助かりました。

神妙に勤めた甲斐があり、半年程しますと辛かった膝枷の鋼管を普通の鎖にして貰え、更に三カ月程で労役中は手枷なしにして貰えました。

「よかったわねえ。嬉しいやろ」

白樺さんが、やさしい言葉を掛けてくれました。

「あの枷のあと！辛かったろ」

しかし乍ら外へ出る時は勿論、夜寝る時には矢張り後手錠は赦しては貰えず、第一種手錠を後手に嵌められねばなりませんでした。

「済んだかい？何グズグズしてるのよ。こっちへ来て……手を回して」

散らかされた店内をざっと片付け、ホンノリと酔に頬を染めたマダムは足許で、背に両手を回して跪きます。手にした手錠を怨めしく眺めますが致方ありません。

カチャカチャと鋼鉄の環が両手首を噛み、これで明朝迄どうすることも出来ません。

「可哀想に！もう括られてしまつて……」

イヴニングの裾を翻えす女給達に嘲けられ乍ら檻へ入りました。

「ママさんてば！私もう、ほんとに腹が立つわ。口惜しくて口惜しくて……」

「絹ちゃん、諦めなさいよ、あんな男なんか。他に立派なのが沢山居るやないの」

大分酔ってフラフラしている若い女給をマダムが慰めています。

「アア、むしゃくしゃするわ。手当り次第、投げつけてみたい位……」

「ホホホホ、まあ、いいじゃないの。今晚一晩ねれば気も変わるわよ。」

じゃ、ギロの奴を痛めつけてやったらどう？少しは気が晴れるわよ」不満の当り場所にされた私こそ、哀れなものです。再び檻から曳き出され、所かまわず散々に鞭を当てられました。

「アア、ちょっとスツとしたわ」

今度は蹴り倒されて無茶苦茶に踏みつけられます。本当に口惜しくし口惜しくて、手錠さえ嵌められてなければ手向いしてやるのに、とさえ思いました。

「どうだ！少しは思い知ったか？」

「ハ、ハイ、ヒー、ヒーッ……骨身にこたえましてござい……ます。お赦し下さりまし……ありがとうございました」

この様な理不尽な扱いを受けても、お礼迄いわねばならない身の

無念さ。せめて齒でも自由なら、足に噛み付いてやるのに、とさえ思いました。

男泣きに泣かない日としては少い日夜を送って、約二年程過ぎました。

お店は繁昌して、隣接地を買収したマダムは更に店を拡張しました。同時に更に一人の男奴隷が曳かれて来て、私の仲間となり、私は出世？して、カウンターの途中でバーテン達の下働きをさせられる様になりました。檻の中では前手錠になりました。

「君も辛抱しろよ。今は辛いだろうけどな」

隣の檻の中で呻吟している新参の奴隷タロを励まし、いたわってやって、ちょっといい気持です。

「戒具のきついのは辛抱するよ。けど所もあるうにさ、こんなところで使われるなんて……」

奴隷タロは債務不履行で此の境涯に落ちたのでした。

「けど君に較べりゃ、まだましだよ。五年だからな。君はあとまだ二十年以上あるんだなあ。くそっ、此の手錠め！ほんとに鋼鉄の鬼だな。けど顎が動かなくても割としゃべれるもんだね。感心しちゃったよ」

タロは今日もトップリ頂戴した鞭あとの痛さに呻きました。

「ああ、早く五年経たないかなあ。僕の家内がね、待っててくれるんだぜ、嬉しくて泣けたよ。あれを担保から外せたことだけで、もう満足なんだ。あの情報をもう三日早く知ってたらなあ！こんな目に会わずに済んだのに。ああ、早く自由になり度いなあ！くそっ、今夜はこの旦那、来てるんだろう。いまましいなあ」

四、五日経って、煙草をふかし乍ら顎で指図するマダムの監視を

受けつつ、私共は店の掃除に汗水流して居ますと、ベルが鳴って、一人の婦人がおずおずと入って来ました。

「どなた？何の御用なの？」

「ハ、ハイ、私、お宅の奴隷になった男の……」

タロの姿を認めた婦人は思わず走り寄りました。

「……あ、あなた……」

思いがけず妻の姿を見たタロも、思わず近付こうとして膝枷をもつらせます。

「お待ち！ タロ！ お前は後ろ向いて坐っといで。じゃ、あなたはタロの奥さんなの？」

「ハイ、左様でございます。一目だけでも会い度くて……。苦心して探して。今朝、夜汽車で着いたばかりなんです。あ、あ、あなた！」



こちら向いてお顔、見せてよ」

タロは身もだえして鎖を鳴らしました。

「そうお。それはそれは、大変ねえ。お察しするわ。けどタロも幸福な男ね。こんな奥さんもって……。それで何ですの、五年間もお待ちになっておやりですの？」

「勿論ですわ。五年でも十年でも。ね、マダム。お願い！少し話させて下さらない？」

嘗ては奥様として裕福な生活をして居たに違いない婦人は、今は着古した和服の手を合わさんばかりにして、酒場のマダムに哀願するのです。

「よし、いいわ。じゃ五分間だけよ。奥さんはね、ここから先へ行っちゃ駄目。もし一步でも出れば、可愛い男に鞭が当るわよ。いいわね？」

これ、タロ！お立ち」

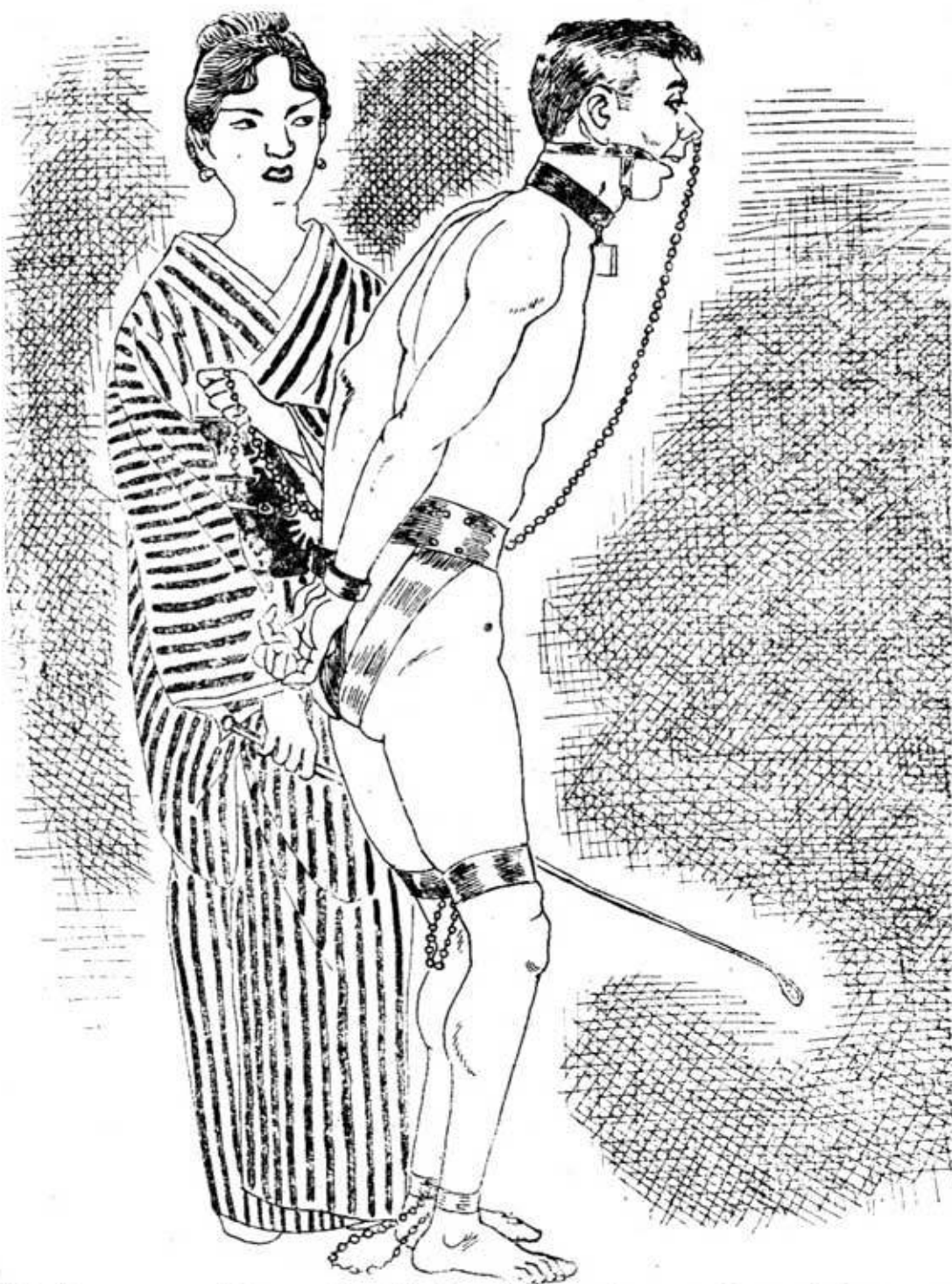
タロの鼻環にカチリと革紐がつけられ、マダムが短く握って、哀れな男は妻の眼前三米の所で浅間しい姿を向けて立ちました。

「お、織枝！ 会い度かった。けど、恥ずかしいよ。こんな恰好で」

「そんなこと……。ああ、あなた、辛いでしょね。お気の毒でお気の毒で。何故、私も担保に入れといて下さらなかったの？ そしたら少しでも刑期が短かくなかったのに」

哀れな夫婦は、御互いに眼と眼をヒシと見合わせて、身もだえしました。

「マダム様。お願い！此の人をこんなに縛らないでやっ



て。決して逃げたり暴れたりはしませんわ。あんなにしたままで働かせるなんて…。あんまりですわ」

「奥さん。お気持は分りますけどね。しかし私にも所有者として世間様に対して責任もございますし…。これッタロ、動くんじゃないよっ」

グッと引かれる鼻環の痛さにタロは涙さえ浮べて呻きました。

「タロ。お前はと思うの？お前の奥さんは、あんな風におっしや

るけど…」

「ハ、ハイ。ハイ。御主人様が必要と認められた戒具を受けるのは、奴隷として当り前のことでございます。おい、織枝。僕だってそりゃ辛いけど…仕方ないんだ。心配しないでくれ」

「でも、マダム。あっちの奴隷の人なんか、手も膝も自由にしてございますのに…」

「ああ、あのギロはね。もう、ここへ来て長いよ。よく勤めるから、先ずああしといっても心配ないのよ。あなたの旦那さんの方はね、まだまだもっと苦しまなきゃね。夜は後手錠にして鉄の檻へブチ込んどくの。ホホホホ…。奴隷なんですもの。当り前だわ」

「まあ、檻の中でも、外して貰えるどころか、後手に、ああ、何とひどい。ねむれないじゃありませんの？」

「ホホホホ…。ねむれようが、ねむれなろうが私の知ったことじゃなくてよ。それよりか、それ奥さん、大分、境界線より踏み出して来たわね。お約束通りタロを鞭打ちますからね。タロ！両手を一杯迄前で伸ばして膝を曲げて。腰はまっすぐにして。いいかい？」

妻の眼前で、鞭を貰う姿勢を取らされ、おののくタロの背に鞭が鳴り、妻は声を吞んで、顔を掩いました。

「ヒーツ、ウツウウ…」

「お礼は？」

床にひれ伏して鞭のお礼をいうや否や「それ、次よ…」

容赦なく立たされて再び屈辱の姿勢を取って鞭を待ちます。

ビシッ

「ウ、ヒーツ、ウウウ……ありがとうございます」

「さ、お立ち、早く早く。フフフ……」

四回、五回と繰返され、婦人は顔面蒼白となって失神せんばかり、唇をふるわせて鞭の下で苦吟する愛しい夫を眺めるのでした。

「もうもう……もう、やめて！　お願い。私をぶって……」

「ホホホ……人間様を鞭打つ訳には行かなくてよ。此れは奴隸！　奴隸には鞭と戒具はつき物よ。さ、出て行ってよ」

婦人は眼を泣きはらせて、包みを差出しました。

「あの、これ、此の人の好きなおすしですの。一口でも喰べさせてやって下さいましな」

「そうお。じゃ解いて、床の上へおいてごらん」

マダムは残酷な笑いを浮べて許し、婦人はいそいそとすしの包みを開いて、口惜しそうに床におきました。

「あなた、さ、おあがりになって」

床のすしの折を見たタロは思わず男泣きに泣いて身をもだえまです。齒枷を嵌められた身、どうして喰べることが出来ましょう。

「タロや、早くお喰べ。おや、嫌いなのかい」

冷笑を浴びせるマダム。漸く齒枷に気付いた織枝さんは、余りのことに茫然としました。

「そら、お食べよ。ホホホ……」

鼻繩を曳いて無理に口をすし折へ近寄せて嘲笑するマダム。織枝さんは身も世もなくテーブルに突伏して、よよと泣き崩れてしまいました。

窄衣の罰

「36M二八二五号……と。どう？　神妙に勤めてるか？」

年に一度の奴隸点検のため、やって来た奴隸管理所の婦人職員の前立って調べを受けました。額と背中の奴隸番号を確認し、いろいろな器具で健康状態を検査します。此の奴隸点検は、所有者の苛酷に過ぎる取扱いを防ぐ意味もありますが、主として寛大な処遇をされない様にする為のもので、何れにしても、奴隸達が法の庇護を受ける唯一の事柄でした。万一、不心得な縁故者等によって、分際過ぎた取扱いを受けたりすれば、刑執行の意義と平等とを失ふことになるますし、反対に私怨をもつ所有者によって甚しく虐待されて命を縮めたりしますと、これも又、完全な刑の執行とは申せなからです。

「先ず申分ない取扱いですわ。マダム」

檻等を点検した二人の婦人係官は、接待の飲物等を飲み乍らいいました。

「ホホホ、お賞めにあずかって恐縮ですわ」

「けど、こんな町なかでは、いろいろお氣ずかしいことでしょうねえ」

「ええ。それに女ばかりですし……。これ！　お前達、おみ足をお揉みして差上げなさい」

私とタロとは、二人の足下にうずくまって、ナイロン・ストッキングに包まれた足を、おそろおそろ揉みました。

「先月ねえ、隣の県で脱走奴隸が二人も続いて出たんですのよ。すぐ捕まったけど。戒具の鍵を盗んで逃げる途中にね、衣類を盗んだ

上、娘さんに乱暴したりして……。奴隷に逃げられた上に莫大な賠償金や罰金を取られた末、御近所から白い眼で見られて……。ほんとに馬鹿々々しい話ですわ。あ、こいつ！ 何見てるの？」

私は、したたか往復ビンタを喰い、蹴り倒されました。

「鞭はね、いくら当てたって、女性の力じゃ滅多なことはありませんけど、窄衣は少し注意して下さいな。内臓をいためますから……」
「ええ、うちじゃ窄衣は全然、使ったことはありませんのよ。あることはあるんだけど……」

「では……と。こっちの方にはノイロンも射っとこうかしらね……」

私共は尻にニヒロンを射たれ、私には更にノイロンが注射されました。

「あ、あの……私は、あと何年残って居るんでしょうか？」

「おや、お前、自分の刑期の勘定をしてないの？ のんきな奴隷ね。ホホホホ。えーと、お前はね、あと二十二年と一カ月と、ちょっとだね。まだまだ長い長い年月よ。フフ、悲しそうな顔したって仕様ないじゃないの？ 何も考えないで、只働いてりゃいいのよ」

嗚呼、まだ二十二年間！ 訊ねたのは、ただ念を押しただけのことでしたが、改めて残りの刑期の長さに打ちひしがれた私は、キリリとした制服の胸許から匂う香りを感じ乍ら、みじめな気持でうなだれるのでした。

女給も倍近くに増え、私共は毎日々々悩ましい光景と匂いに悶え乍ら、屈辱に満ち満ちた苦しい日夜を過ごしました。

閉店後、一しきり這いずり回った末、タロは自ら後手錠にしてマダムの検査を受け、私は両手を後へ回して膝をつきます。

「あ、ママさん！ あたしに嵌めさせてよ」

最近入ったばかりの二十才そこその女給が、酔いにフラフラし乍ら言いました。

「何か、縄みたいなものないかしら……」

カチャリカチャリと手錠の嵌まる音を口惜しく聞いた私の後手を更に首環に吊ろうとしました。マダムにされるのなら諦めもしますが、見も知らぬ小娘に、この様に扱われる無念さに、つい大きく身動きしてしまい、運悪く腰で女給の足を押ししてしまったのです。酔って居たので、バランスを失った女給はヨロヨロして床に手をついてしまいました。

「何すんのよ！ 奴隷のくせに……」

我に返った私は床にひれ伏して、全身をふるわせて赦しを乞いました。

「あんた！ 怪我しなかった？ ギロっ！ お前、反抗したりして……一体どうするつもりなの？ あかんあかん。何ぼ謝まっても赦さないから。お前、この頃ちょっとつけ上ってるんやないか？ よし。ちょっとネを上げさせてやるからね。懲らしめたらなあかんわ」

後手錠を外された私は、女給達に見物され乍ら、四つ這いになったり両手を差上げて立ったりして小桜から怒りの鞭を全身に叩きつけられました。足許にひれ伏してお礼とお詫びをいい、君子に鼻環を持って引き起されて、胸鎖をギリギリと締められます。

「まだ、おしまいやないんやで……」

マダムの手の窄衣を見て恐ろしさにわななきました。使用されなかったとは云え、常々手入れはさせられて居た窄衣の革や金具は冷酷に光って居ました。思わず、あたりの女給達に哀願の眼を向けますが、誰も何ともいってくれる筈もなく、胸鎖の上から着せられ

て、ヒシヒシと緊めつけられて行きました。久し振りの窄衣、しかも胸鎖の上からの窄衣は本当にこたえました。

「小桜さん、手を首に吊ってやってよ。此の革紐で……」

再びガッキと嵌められた後手錠を、グッと首に吊られ、苦痛はその極に達しました。そのまま檻へ蹴り込まれ、更に捕縄で軽度の海老にされたのです。全く無茶苦茶で、廿分も経たない中に目はかすみ、涎れは垂れ流れて止らず、全身、脂汗にまみれました。

「今晚中、そないしとりや！」

「アウ、ウ、死んで……しま……いま……す。死んで……」

「ホホホホ、大丈夫よ。お前は頑丈だから」

マダムは立ち去り、更衣室の女給達は、私の苦しみ方のひどさに少し驚きました。

「小桜さん、あんた、可哀想やないの？ 勘忍したりいな」

「だって。私ね鞭だけでおしまいかと思ってたのよ。マダムもね、今日は少し御きげん斜めなのよ。まあ此奴、運が悪かったのね」

「けど、あの苦しみ方ごらんよ。このままだと朝迄には死んでしまいうわ、きつと……」

私は声を立てる力もなく、皆の声を途切れ途切れにきき乍ら、マダムの御慈悲をひたすら祈りました。

「あんた！ これ、ギロちゃんや。可哀想に。耳きこえる？ あのねえ、今、ママさんにね、勘忍してやって云うて頼んで来て上げたんやけど……。あかんねん」

かすんだ眼に、情け深い白樺さんの白い顔が映りました。

「その縄やったら解いて上げれるんやから、解いて上げ度いけどなあ。苦しいやろなあ。けど、なんで又、手を括られる位のことです

向いなんかしたんやの？ おとなしゅうせなあかんやないの」
「白樺さん！ なんぼ眺めてても、どないもでけへんで。はよ帰ろうやないの……」

失神防止の覚醒剤ハイポンの注射をされませんでしたので、明方近くには絶え入る様に気を失ってしまい、気がついた時は翌日の夕方近くでした。あの恐ろしい窄衣も胸鎖も外され、手錠すらなしに檻の中でグッタリと横たわって居ました。全身虚脱した様で、身動き一つする力もなく、言語に絶した苦しみをボンヤリと想い起し乍ら、未だ生きて居るのが不思議でした。何回分かを一まとめにした恐ろしい懲戒を受けた私は、御慈悲に甘え気味だった自分を深く深く戒しめた次第でした。私の体の弱り方を見たマダムは、三日間程檻の中で休ませてくれ、少しは哀れんだ女給達から菓子等を投げ与えられ、白樺さん等は薬迄くれ、本当に有難くて嬉し涙がこぼれました。タロも体の始末などをして呉れ乍ら、しきりにいたわってくれました。

四日目には少し元気が出ましたので、檻の外に見えたマダムに、労役させてくれる様、正座してお願いしました。

「大分こたえたらしいわね。フフフ……たまにはいいことよ。分際の際が分ったかい？」

「ハ、ハイ、御懲戒ありがとうございます。その上、休ませて下さって……申訳ございません。もう……働かせて下さいまし……」

「ホホホホ……神妙ね。その気持、忘れないでね。まあ、いいから、明日から出して上げる」

「あ、ありがとうございます。御慈悲は忘れません。では、手錠でも嵌めておいて下さいまし。こんな……このままでは、あんまり勿体な

くて……」

「へーえ。益々神妙ねえ。そんなにこたえたの？ よしよし。では神妙さに免じて前で嵌めておいてやるわね。手を出して……」

鉄棒の間から差出した両手に手錠を嵌められ、漸く気分が落着きました。骨身に泌み込んだ囚われの習慣とは恐ろしいものでした。

奴隷タロの妻

女給達のはき物の手入れはタロの受持ちでしたが、白樺さんと其の親友の人々三、四人のはき物は仕事の合間を盗んで私がさせて貰いました。

「じゃ、これ、ギロちゃん、頼むわよ」

白樺さんは、いつも和服です。渡された草履を押し載いて底に唇を当てて頬ずりせんばかりにしました。

た。処が其の晩、片隅で心こめて磨いて居ますと、口汚なくパーテーションと呼ばれ、あわてた拍子に草履をそこらの金具に引っ掛けて傷をつけてしまったのでした。其の夜は情けなくて悲しくてへまばかりしてしまい、カウンターの隅でビンタを取られどおしてました。



「白樺様、お赦し下さいまし。どんな罰でも受けさせて頂きます。何卒お心の済む様にして下さりまし……」

帰り支度をして居る足許に身を投げ出してお詫びしました。

「どうしたの？ え。ア、これ？ 何かで引掛けたのね。いいのよ、

もう古いんだし……。気にしないでいいの。それよりも、早くマダムのとこへ行って手錠嵌めて貰わないと又叱られるわよ」

近頃は、彼氏の影響のせいか、標準語を使います。

「それでは、あんまり勿体なくて。お願いです、鞭を頂かせて下さいまし……」

「どないしたの？ 又、白樺さん、何かやったんとちがうか？ 甘やかしたらあかんで」

私に嵌める手錠を手に持ってマダムが来ました。

「何やて！ そんなことしよったんかいな。白樺さん、そりゃちょっと懲らしめたらなあかんで。鞭で三つ四つ、なぐったりいな」

「そんな、可哀想なこと。いいんですのよ」

「あかんあかん。そら、鞭渡すわよ。手向いせん様に手を括っとくよってな……」

「しょうないわねえ。ギロちゃん！ あんた奴隷なんだから辛抱してね。どこを打とうかしら？」

マダムの指示で姿勢を取らされた私は、尻と内股と両手の甲とに六つばかり、軽く鞭打ちされました。本当に嬉しくて嬉しくて心からの御礼をいいました。

「白樺さん、あんた、あかんなあ。撫でてる様やないか。ま、ええわ。ギロ！ お前、今夜は夜食抜きやで……」

「ママさん、そんなに苛めんとおいてやって。ギロちゃん、痛かった？ ごめんね……」

「阿呆らし！ 奴隷に謝まることあれへんわ。ギロ！ さっさと檻へ入らんかいな」

或日の午後、マダムはタロを足許に呼んで

「タロ！ ホラ、これごらん。織枝さんから手紙が来たわよ」

タロの眼の前でヒラヒラさせ乍ら、からかいました。

「読みたいやろ。ホホホ……」

タロは手錠の両手を合わせて哀願して身をもみました。

「あかん、あかん。大したこと書いてないわよ。ウン、そうそう。我慢できないから、矢張り別れ度いってさ。フッフ、どう？ 当りり前ね。手続は済ませたってさ。勿論お前の同意なんか不要よ」

タロは見る見るうなだれて、大きな涙をポトポト手錠の上へ落しました。

「ホホホ……うそ。待ってますって」

タロは歓喜の眼を輝かせ

「それで、それで……今どうしてるんでしょうか？ お慈悲でございませう、教えて下さりまし……」

「フッフ、お邸で女中奉公してるそうよ。けど、本当に感心な人ねえ」

「ああ、可哀想に。かんべんしておくれ」

彼は床に突伏して男泣きに泣きました。

それから半月程しますと再び織枝さんが、やつれた姿で現われました。タロは君子に曳かれて買物のお伴に出て居ました。

「織枝さん。夜行で来たの？」

「ハイ。そして今夜、又、夜行で帰りますの。お邸の方で一日しか、おひまを下さらないものですから……」

「ほんとに感じ入るわねえ。今ちょっと出てるのよ。今日はゆっくり話しさせて上げるわね。あれも段々奴隷が板について来たから、

そろそろ戒具をゆるめてやろうかと考えてるのよ」

「あ、ありがとうございます。ほんとに……お慈悲をかけてやって下さいまし……」

「そりゃそうとね。あんた、お金都合つかないの？ もうかれこれ一年になるし……。代金の半分でいいわよ。そしたら解放して上げるけどねえ。債務関係の奴隷だから、そのギロとは違ってお金で済むのにねえ」

「ああ、それが出来ましたら……」

織枝さんはハンカチを眼に当てました。

タロが君子に曳かれて裏口から帰って来ました。マダムに呼ばれて、背の荷物だけ下ろして出て来ます。床を引き摺る鉄丸の音。

「タロや。織枝さんが来てるよ。そこへお立ち。織枝さん、今日は傍へ寄ってもいいわ」

戸外から帰ったままのタロは後手錠、足錠の姿で身もだえして、走り寄る妻を迎えました。

「あなた、お元気？ ああ、お気の毒に……」

「織枝！ お前も元気か？ 少しやせたなあ。苦勞かけて……かんべんしておくれ……」

「そんなこと……ああ、こんなに縛られて……。鉄のおもり迄つけられて……」

織枝さんは、夫の浅ましい哀れな姿のまわりを回ってオロオロと涙ぐみました。マダムは姿を消し、私は床を這いずり回り乍ら此の哀れな光景に身をつまされました。

「ああ、外して貰えないの？ 方々すれて皮膚の色が変わってるじゃないの。辛いでしょ。ああ……こんなもの……取って上げたい！」

織枝さんは、夫の体に施された頑丈な戒具を撫で乍ら頬をすり寄せて泣くのでした。

「これ、鞭のあとでしょ。ずい分沢山あるのね。ああ！ あなた、辛抱して……おとなしくして……あんまり痛められない様にしてね」

「あっ、触らないで。ついさっき打たれたとこなんだ。ウツ……道の真中で鞭を当てられるのは、ほんとに情けなくて、こたえるよ」

「ど、どうしたの？ 何故、打たれたの？」

「歩き方がおそいって云いやが……おっしゃって……」

「まあ、こんなに鎖を短かくしといて、おもり迄つけといて……。ずい分ひどいこと……」

「見てごらん！ 足首の環、ずい分、締まってるだろ。痛くて痛くて……ああ」

「もう、ほんとに、残酷な道具ねえ」

「奴隷だから諦めては居るけど……。こっちも生ま身の体なんだから……。鉄の鬼だよ、ほんとに……」

「ね、私考えたんだけど。此のお店で勤めさせて頂けないかしら？ そしたら、毎日慰めてだけは上げられるし……」

「そんな。お前、恥ずかしいだろう。どうせすぐ知れることだし」

「ウウン、そんなこと平気よ。あなたさえよければ、マダムにお願いして見ようかしら」

織枝さんの哀願を受けて、マダムは困惑の体でしたが、情にほだされてとうとう聞き入れられました。

「けどね、織枝さん。あんた、こそこそ妙なことをすると、タロが痛い目に会うわよ。云っとくけどタロは私の奴隷なんだからね」

それから十日程して、織枝さんは喜び勇んで店で勤める様になりました。君子の口から話は忽ち知れ渡り、女給達の間でも、同情を寄せられる人、嘲笑して笑い興じる人、そして無関心な人等に分かれ、いろいろと当分の間は取沙汰されたことでした。

織枝さんは健気にも、齒を喰いしばって、毎日、アパートの一室から通いました。哀れな姿で檻へ蹴り込まれた夫を後を振りかえり振りかえり店を出る時など、心の中を察して、可哀想で堪りませんでした。しかし、同様の境涯の私には、さげすみの眼を投げつけるのでした。タロとは違って破廉恥罪の重罪人ですから仕方ありませんが、情けなく思いました。

「よかったわねえ。楽になったでしょ」

十日程して、タロの戒具が私と同様に弛められた時には、織枝さんは涙さえ浮べて喜び、檻の中のタロも靴を磨く手を休めて、手枷のあとを見入って居りました。

いろいろなこともあって屈辱と悲哀に満ち満ちた四年余りが過ぎ、私は新しい女奴隷と交替に処分されました。

当然のこととは云え、品物同様に売り飛ばされる悲しさ！以前の奴隷商店の独房に入れられ、誰か房の前に立つ毎に、体を動かして品定めされた末、買い取られて曳かれた先は炭坑でした。

炭 鉱 へ

酒場に居りました時、薄々は耳にして居ましたが、其の頃は国際情勢の関係で石炭の輸入が激減し、従って国内の各炭鉱は非常な好況を呈して居りました。それで私も直ちに或る石炭会社の出張所に

買取られた訳です。

品物同然に扱われ、小突き回され乍ら、奴隷登記所での手続きが済み、奴隷商の店員は私の鼻鎖を会社の若い婦人事務員の手に引渡しました。

「いや、どうも、お待たせしまして……。わざわざ御一緒に来て頂いて済みませんでしたね。なんなら、こちらでお届け致しますでしょうか？」

「ウ、ウン、いいわよ。今日のひる過ぎの汽車でやまへ帰る人が駅で待ってるの」

「左様でございますか。では戒具を外しますよ。持ってきていらるのでしょうか？」

「ええ。手錠と足錠と……重かったわ」

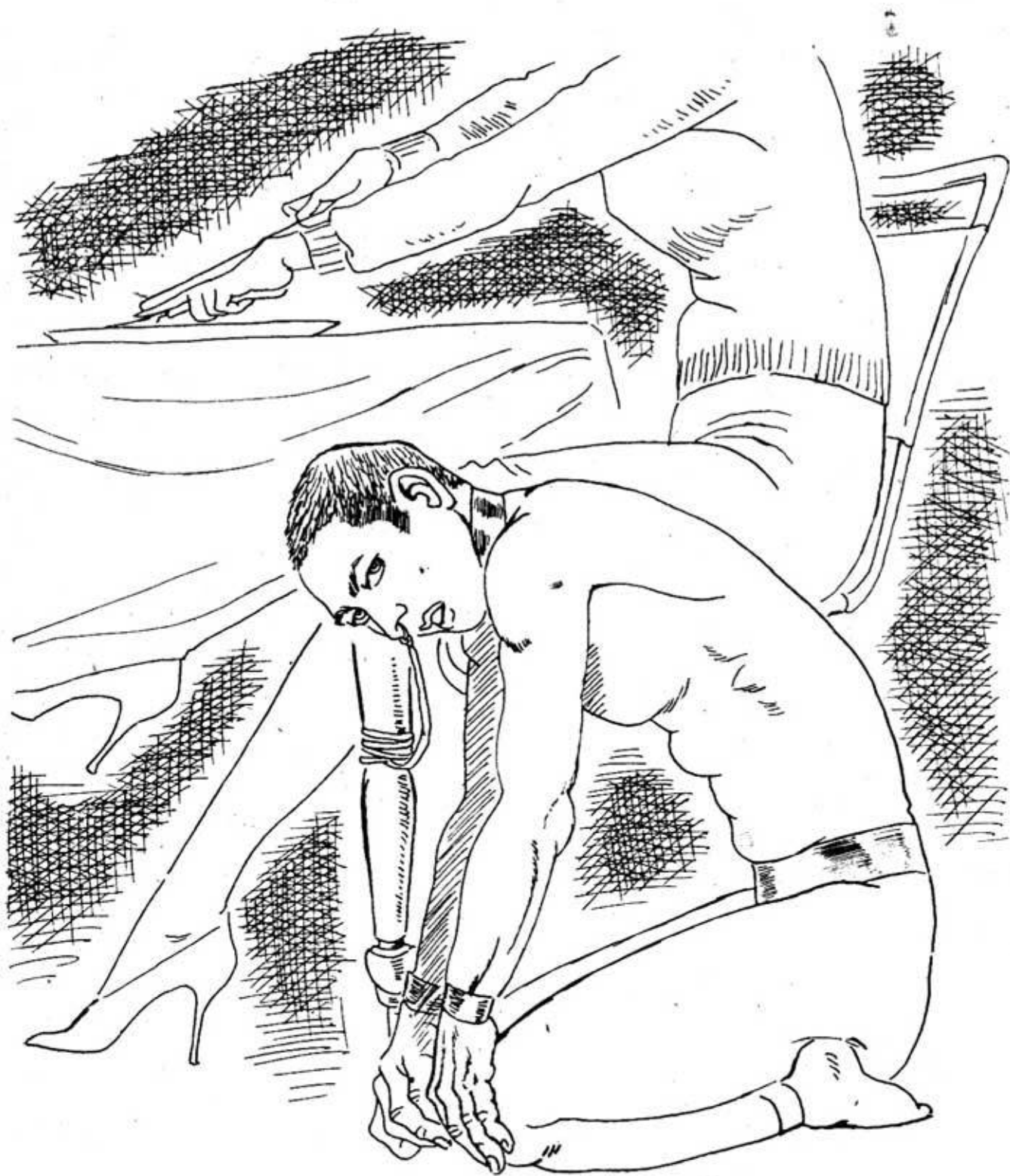
自分で、我が両足に足錠を施しました。そろえて差出す両手に、さも汚らわしそうな身振りで手錠を嵌められます。

「その手錠やなんか、少し変ってますね」

「ええ、うちの会社じゃ、これを使ってるのよ」

第一種の手錠、足錠を頑丈一点張りにした様なもので、鎖の長さは、手が二〇センチ足らず、足は四〇センチと少し位です。鎖の中央に南京錠の様なものが付いて居ります。各鋼鉄の環は開いた場合に環の半分宛が互いに重なり合う様にはなって居りませんし、従ってスプリングも無く、少し抵抗されれば嵌め難いだろうと思いが、どうせ無抵抗の奴隷達に施すには、これで充分と云う訳でしょう。鎖を引張っても緊まる様にはなって居ないと云う事は今迄の辛い経験上、すぐに分りました。会社のマークが刻まれて居ます。手錠の環を、これ以上は締まらないと云う所迄きつくきつく嵌められ

ました。
「おや、その足錠の嵌め方は何よ！ そんなガタガタだとずり上ってしまわない！」婦人事務員は手に持って居た三、四〇センチ



の鎖で、いきなり太腿の辺りを撲りました。鉄の鎖で打たれたのは初めてで、其の痛さもさる事乍ら、つい先刻会った許りの婦人に此の様な扱いをされて口答えすら許されない我が身が悲しくなり、足

錠の環を自分の手で、それも手錠で無慈悲に緊め上げられた不自由な両手で、更にきつく締めつけ乍ら涙を流しました。

「こんな事位で泣いてるの？ 泣いたって仕様が
ないじゃないの。そら、体を前に曲げて……」

手の鎖の両端が手足の鎖の中央の錠にそれぞ
れ結ばれ、これで体を前に深く曲げ、両腕を垂
らしたまま、どうも出来ません。鼻環に革紐が
つけられ曳かれます。歩き出すと、更に体を曲
げ、膝を屈めねばなりません。私の鼻縄を取っ
て前を歩いている婦人の恰好の良いふくらみは
ぎ、足首、踵、そしてハイヒールがチラチラ眼
に入り、時々スカートの裾が顔に頭を掠め、香料
の匂いが鼻に入ります。浅間しい姿を人様に見
られるのは、もう慣れて居りますが、歩き難い
こと歩き難いこと。とうとう足をもつらせて鎖
をガチャつかせて倒れてしまいました。途端に
グイと引かれる鼻環の痛さ。思わず悲鳴を挙
げ、道行く人々の失笑と嘲笑を受けました。

「しっかりおしよ！」

ハイヒールで頭を小突かれ、今度は婦人の前
を歩かせられます。

「アラ、N子さんじゃないの！」

向うから来た二人連れの若い娘さんが声を掛けました。

「奴隷買っちゃったの？ まさかねえ？」

「フフフフ、アパート住いで奴隷なんか使える訳がないじゃないの。これね、会社のよ。駅迄持っていくの。ノロノロするので腹立てるのよ」

「ね、丁度いいわ。三人で食事しない？ 少し早いけど」

「そうね。若し時間がなくなったら、バスに乗せるわ。奴隷は二人分でしょ。馬鹿々々しくて……」

レストランのテーブルの脚に鼻繩を繋がれ平伏して食事が済むのを待って居ますと腹がグーグー鳴ります。

「あッ、落しちゃったわ。それ上げるわよ、懲役さん。お喰べ！」

取落された肉片が私の鼻先へ蹴転がされて来ました。

「ア、喰べさせないでよ。これっ！ 喰べると承知しないわよ。フフフ……こいつ、懲役囚じゃなくて奴隷よ」

「どちらでも同じ様なものだわ。けど可哀想じゃないの？ 何故、喰べさせないの？」

「フフフ……。これから汽車に乗せてやまへ連れてくよ。だから何も喰べさせたり飲ませたりしない方が便利なの」

レストランを出ますと、しゃにむに急がされ、情容赦もなく引かれる鼻環と戒具の痛さ、そして不自然な姿勢に喘ぎ、彼女が自由に急ぐのを上目使いに恨めしく見て、歯ぎしりします。鼻がひきちぎられる思いで、転がるようにして駅に着きますと、待って居た夫婦連れの人に引渡されました。

「間に合ってよかった。未だ大分、時間はある様ね。じゃ、これ書

類……」

「御苦勞様でした。じゃ、お前、気を付けて連れて帰れよ。オイ、鼻繩を受取らんかい」

「あら、奥様だけお帰り？」

「ええ、私は又、少し用が残ってしまいましたので……。あ、鍵はないんですか？」

「ええ、要らないでしょ。確かC型の鍵で合う筈よ。向うにはある筈だわ」

私を連れて行ってくれるのは、ずんぐり肥えたおかみさん風の婦人です。

汽車の座席は満員で、通路にも数人が立っていました。

「仕方ないわね。これ！ お座り。背中を平らにして、もっと端の方へ寄らなきゃ邪魔になるじゃないか」

通路に平伏した私の背に新聞紙が置かれ、ドンと腰掛けてしまいました。

「よかったら、お掛けになりませんか？」

おかみさんが、横に立っている娘さんに声をかけます。

「すみません。けど二人も、のっかっていいかしら？」

「ハハハ……こいつはね、これから炭坑でこき使われるんですよ。こんなこと位い、生易しいことだわ」

更に若い娘さんの体重が背に加わり、私は歯を喰いしばって耐え忍びます。

「こら！ 動いちゃ駄目じゃないか」

タバコの火を尻に押付けられ、身をよじって呻く私に、背中の人

一時間たち二時間も過ぎ、私の全身は脂汗にまみれ、渴きと空腹で眼も昏みそうです。とうとう哀願の声と共に胸と顔を床に付けてしまいました。

「チェッ、そんなことじゃ、これから動まらないよ。仕様がなければ暫く休ませてやろう」

二十分許りあぐらをかかせて貰い、再び頭を小突かれて椅子代りを勤めます。

「お慈悲でございます。ほんの一口、一滴で結構でございます。水を飲ませて下さいまし……」

何か飲み乍ら話合っている背中の中に二人に哀願しました。

「おばさん、何か云ってる様よ。あ、水をくれて……」

「何だって！ 駄目々々。うるさいわねえ。嵌口具があるといいんだけど……」

西部の端の地方の炭坑街に着く迄、遂に座席は空かず、従って私は翌朝迄、此の苦役を耐え忍ばねばなりません。奴隷に対する人々の眼の酷薄さ！ 苦しみ喘ぐ私に、誰一人同情してくれる人もなく、それどころか、仮眠の邪魔になると、低く呻く度に罵られ、撲られるのでした。

ようやく着いた駅の近くの炭坑会社の本社へ連れて行かれ労務課へ引渡されました。

「身を粉にして働かねえと承知しないぞ！ いいな？」

赫ら顔の職員に怒鳴りつけられます。

「ハ、ハイ……ハイ。どうかお慈悲を……」

「なんだと、此の野郎！ 御慈悲だと、フラフラせずとシャンとしろやい」

罵声と共に痛烈な鞭を受け、悲鳴をあげる私に、送って来てくれたおかみさんの嘲笑が浴びせられました。

「ホホホ……。まあ性根を据えて勤めるんだね。じゃ、さよなら。

アア眠たい、眠たい」

「こら！ お礼を申し上げねえか」

頭を蹴飛ばされ、送って来て貰ったお礼をいいました。

「そこらで坐つとれ、やまから車が来たら積んでやるからナ」

ひる近く迄放っておかれ、渴と空腹に眼も昏みそうな私は、やまから来たトラックに追い上げられました。

「これなの？ 新入りは？」

ガッチリとした体つきの婦人運転手にグイと鼻繩を引張られますと嫌も応もありません。ヨロヨロし乍ら漸く立ち上がり、トラックによじ登ろうと致しましたが、戒具は昨日からのままですので、どうして登ることができましよう。

道行く人々の嘲笑を浴び乍ら何とかして乗ろうとしますが、立て胸の辺りの高さの荷台に、前屈みのいましめの身が登ることは出来ません。

婦人運転手の面白半分の鞭を受け乍ら、少し身を乗せ掛けては、ぶざまな恰好でもがき、そのあげくどたりと地面に落ちるみじめな有様を繰り返し、散々なぶられた末、漸く助けて貰い乍ら、文字通り積込まれました。

デコボコ道を飛ばす空トラックの上で、何度となく打ちつけられでは呻き声をあげて転げ回り、炭坑の現場へ漸くのことと到着しました。

ア パ ー ト 残 酷 記

水田真紀子

「お姉さま 私にアクトはバットさせて
逆さびにしばっちゃってよ」



狭山湖でB子さんとM子さんの二人がかりで、さんざんいじめられて、やっと解放されたときは、私もS子さんも、もうすっかりクタクタになって居りました。

いつものように最後は二人とも下着まで剥がれてしまって、女としてこれ以上の恥ずかしめはないと思えるほどのことをされて白日の下で、もだえ抜いたのです。そしてそうされるのが私にとって誰にも云えない恥ずかしいことではありましたが、今度はこれまでにない何と表現していいのか、一種のヒロインになったようなうづきを感じさせる一因になったようにも思えるのです。これまでは裸にされた身を晒されるだけでもう死んでしまいたい様な屈辱に全神経が集中して、それきりいっそ消えてしまいたいという気になったのですが、このようにしばられて数々のみじめな仕置をくりかえされているうちに、まるで物語かお芝居の悲劇のヒロインになったような錯覚にとらわれて自分の身がいたいといと

思うにつれて、こうして可哀想にいじめられている身が、何かその場の主導権をにぎってしまったような妙な気を起させるのでした。

M子さんもB子さんも、今まではしゃいでいたのが急に静かになって嵐のすぎたあとのように何だか気まづい思いが、あたりに広がっていたようでした。そんな中で着更えをした私は、S子さんをいたわって二人して互いに何も云いはしませんでしたが、自然グループをはなれて抱き合ったまま坐りこんでしまいました。

気まづいようなこの雰囲気支配されたのか、帰りかけても二つのグループに分れて私たちは少しおくれで歩きました。そのうちB子さんたちも

「あたしたち、さきに失礼するわ。二人であとから帰ってらっしゃい」

そう云ってM子さんと、どんどん先へ行ってしまうのです。私も今まであんなにひどいことをされていて、この二人と一しょに行動するのは、やはり何となく気まづいんですもの。当然S子さんと遅れて、そのうちどちらが云うともなく、どうせB子さんたちは池袋へ帰ってゆくのですもの、線をかえるといいんだわってことになって、私たちは少し歩き

ますが、西武園の駅にまわって電車にのりこみました。

やっこのことで腰をおろしてしまおうと、どこに疲れが出て身体の不ふしや腰の骨のあたりが身体を動かすたびに痛いのです。S子さんはとみると、ひざの上に置いた手首がブラウスの袖口からチョッピリのぞいていて、そこにうす赤く縄のあとがみえ、私も思わず袖口をひっぱって手首をかくしました。

電車は満員に近い客がのっています。私の前にも、アベックらしい二人が立っています。が、恐らくここに乘っている人たちはここに坐っている二人が、今まで山の中でさんざん責められたことなど、少しも気がつかないことでしょう。そんなことなど思ってもみる人はないはずです。でも現実には私たちはさき程まで同性の前とは云いながら太陽のふりそく青空の下で様々な姿勢で縛られいじめられてきたのです。こんなことってあるでしょう。でも私はS子さんがいて下さったから、少しでもこの恥ずかしめがうすらいで心強く思うのです。あのと私だけであんな目にあわされているのでしたら、たまらなかったでしょう。

S子さんは、私より、もっとひどいことを

されているのだわ……。こう思えばこそ、あのと、いくら辛抱出来たのです。それだけに今まで感じなかったS子さんに対する愛情と云いましょうか親近感といいたうかそんな気持があのとときから、この私の胸の中にふっと湧いてきたのでした。

レッスン場の地下室で初めて私が縛られ、S子さんと一しょにひどい目にあわされたときは、S子さんはまだ私の味方でなく、私は自分のあられもないポーズをみられる地位にあったのです。私はS子さんに対しても恥ずかしさで一ぱいでした。

勿論、今だってS子さんに、自分の身を晒すのは恥ずかしいです。でも今日はどうしたものか、S子さんが私の味方についてくれたように思えるんです。だから私はS子さんと急に打ちとけた気持になったのです。

事実、私とS子さんは帰りの電車の中ですっかり仲よくなってしまうました。西武新宿へついてから、私はどうしても、このままS子さんと別れてしまうのが惜しくなって、S子さんと約束してしまいました。

「待ってて、ちょっとうちへ電話してくる」
まだ、時間は四時をまわったばかりでしたが、駅の公衆電話から、うちの近くの酒屋さ

んをよび出して

「今日、帰りがおそくなるけど友達のうちにいるから心配しないで」

と母へ伝えて貰うよう頼んでしまったので、S子さんのおうちへ一しょに行く約束が出来たのです。S子さんのおうちは代田橋の近くにあるのだそうです。そしてS子さんが一人でそのアパートに住んでいることも知りませんでした。S子さんは東京から二時間少しでゆけるK市の方だったので高等学校から上京してバレーの勉強のためそのまま留まっていたのだそうです。

「ここよ。小さなアパートでしょう」

××荘と木の札がかかっているそのアパートはモルタルばりの二階建のおせじにもすてきなアパートとは云えませんでした、各部屋とも道路に直面していて、話にきいている管理人にいちいちかぎをもらってはいるようなアパートとは違って、これなら気がねはいりません。

「便利ネ。二部屋ずつ階段がついてるのね。これなら独立家屋と同じじゃないの？」

「独立家屋なんて、ずいぶん学があるのネ」

「アラ、いやだ、お姉様」

小さな土間があってふすまを開けると、こ

じんまりした室があります。

「まあ、お炊事も出来るの？」

「ええ、一応みんな揃ってるわ」

「アラ、こちらにもお部屋があるの？」

「そう、二間つづきだから」

「ちょっとみせてネ。あら、すてきだわ、お姉さまのお部屋」

次の間のふすまをあけると、六畳ぐらいのおへやがあって、洋服だんすがあって小さな整理だんすの上のガラス戸棚にはコケシがいっぱい並んでいます。

「いいわね、このお部屋。お姉さま、ここで一人で住んでらっしゃるの？うらやましいわ」

「どうして？」

「だって、誰に気がねがいる訳じゃないでしょ。好きなとき寝そべったり本を読んだり」

「そうかしら」

「そうですわ、うちなんか弟がうるさいの。それにやはりお父さんやお母さんがいると、わがままも出来ないでしょう」

私は、すっかりS子さんのアパート生活がうらやましくなってきました。

「あたしもアパート生活してみたい」

「そう？だけど一人でいると、つまらないときもあるのよ。さみしくて」

「そうかしら。でも、あたしいいと思うわ」

こんなお部屋で、思うままのんびり出来たらどんなにいいだろうと、つくづく思ったのです。

「何か食事しない。そうだわ、ひとつ今日はま、ちゃんに、ごちそうつくってあげる」

「アラアラいいわよ、そんなこと。でも自炊ってわけね。それじゃ、あたしも手伝うわ」

S子さんは洋服を脱いで着物にきかえてきました。そして私もS子さんのサロン前掛を借りて一しょに手伝って、二人して楽しく食事をすませたのです。

二人でお茶をのんでほっとします。もう暮れやすい秋の陽は、すっかり西におちて夕やけの赤い日ざしが流しの上のガラス窓を通して一面にさしこんでいました。

「果物でも買ってきましようか」

S子さんが立ち上ろうとするのを

「アラ、いいわ、いいわ」

行かせまいとして、あわてて立ち上りかけたS子さんの手首を押さえたのです。

「まあ、遠慮ぶかいのネ」

S子さんは、私の顔をみてニッと笑うのです。私は何故か恥ずかしくて眼を落しました。そして私の眼は自然、握っているS子さ

んの手首に止ったのです。しなやかなS子さんの手を握ってその手首に眼がとまりますと、そこに二筋、三筋と縄のまきついたあとが、かすかに残ってみえました。

「まあ、S子さん、こんなにあとが残って」

思わずいざりよって、もう片方の手首をひきよせました。両方とも私達だけが知る跡がのこっています。

「ひどいわ、B子さんたち」

私はS子さんが可哀想になっ
て、こんなきれいな手をしば
てしまうなんて、ずいぶんひ
どいことをするものだわ、と知
らず知らずにその手首をなぜな
がら、それにほほずりしてしま
たのです。アクロバットのずい
ぶんひどいポーズにさせられて
全身をしばられ、さんざんいじ
めぬかれたS子さんのあの姿態を想像して、
こんな美しいふくよかな手をして
いるこの方が、あんなにまでされて
たんだわ、そしてさ

「このままでいいから、しばってー」



るぐつわの下で声にならない悲鳴をあげてう
めいていらしたのが、この方なんだわ、と思
うと無性にかなしくなって私は、そのままS

るのに」と考えました。
「これじゃ、二の腕のところも、きつとあと
がのこってるわね」

子さんのひざに泣きふしてしま
ったのです。

「いいのよ、いいのよ」

S子さんは、そんな私を静か
になだめて下さいました。私の
髪をいじりながら

「私のことをそんなに気にしな
いでいいの。それよか、まこち
ゃんこそ、ひどいことされて。
ずいぶん無茶なことだと思っ
たよ」

逆に慰めて下さるのです。

「ほら、あんなだって、あとが
うすくみえるわよ。痛かったで
しょうね」

私を抱きあげて手首をさすっ
て下さいました。私はS子さん
のされるままに身をまかせてい
るうち

（ああ、こんなやさしいお姉さ
んになら、あたし、どんなにさ
れても、みんなこの身体を捧げ

S子さんの手が肩口から下へなせて

「可哀そうなまこちゃん」

S子さんが小さなお声でつぶやきました。

私はそれをきいたとたん、思わずS子さんにこの身をギュッと縛られてみたいと云う衝動が全身を駆けめぐるように起ってきました。

「お姉さま、あたしをもう一度」

「え？何あに？」

「あたしを……もう一度、お姉さまの手でしばってエ」

ワッと顔を伏せてしまったのです。

「まあ、まこちゃんたら」

S子さんは、驚いたように急に私の身体をはなしてしまいました。

「ねえ、しばって。あたしお姉さまに思う存分しばられてみたいの」

まるで駄々をこねた子供のようになう云ってグイグイS子さんのひざに顔をおしつけてゆきました。S子さんは、しばらくそんな私をじっと上からながめているようでしたが

「とうとう、あなたもこうなったのネ」

とつぶやいて

「ほんとうに、しばりたいの？」

と念を押すのです。

「お願い、お姉さまにしばりたいの」

私は自分でこんな気持ちになってきたのが分らないくらいでした。でも、このときはそうして思いきりS子さんに甘えたかったに違いないありません。S子さんは、それでもためらっているようでしたが「仕方ないわ」って、たんすをあけに立って行かれました。ひもをとりに行かれたのでしょうか。

「いい？ゆわえちゃうわよ」

私をたたみの上に押さえて手首をにぎりました。手首が背にもちあげられて

(ああしばられる) 全身がビクリと動く思いでした。背に合わされた手首に、やわらかいひもの感触が伝わって

(私はS子さんにしばられてるんだわ)

再びギュウっと、この身がひきしまるのを覚えました。手首をしばって置いてからS子さんは私の身体を仰向けにして抱きあげるように起して自分のひざにひきよせました。

「しばったわよ」

上から顔をまともにのぞかれて、まぶしくて眼をとじました。

「アラ、涙なんか出して」

ハンケチで、ふいて下さいました。

「どう？どんな気持ちになって？」

S子さんにきかれて

「いや、いじわる」

もう手がうしろへまわってしまっているとうことを意識しただけで私はたまらなかったのです。

(自分で涙もふくことが出来なかったじゃない？ほら、もう自由はきかないのよ。)

そう云って自分に云いきかせることが出来るのです。

「ここじゃなんだから、ちょっとまってて。」

「いい？ホラ、可愛いいまこちゃん」

S子さんは私のほったをつついて次の間に行って何かゴソゴソしていましたが、

「歩けないでしょうから、抱っこして行っただけのわね」

私を抱きあげてお部屋に運んで、そっと寝かしてくれました。

「まあ、おふとん敷いてあるの？」

「ええ、そうしとけば下になっても両手が痛くないでしょ」

お部屋には寝床につかうふとんを二枚も重ねてのべてあったのです。私はその上にそっと寝かされました。

「お姉さん！」

私はまぶしいものでもみるように眼をあけて下からS子さんのお顔を覗きました。

「なあに？」

S子さんは私の傍に坐って、ほほえんで居ます。私は、こんなにまで気をつかって下さるS子さんの気持が、たまらないのでした。

「どうしたの？もうほどくの？」

S子さんは、私のひたいの髪の毛をなぜあげながらのぞきこみます。

「ううん、そうじゃないの」

「なら、どうして？」

「お姉さん！」

「え？なあに。云ってよ」

「あたしね」

「ええ」

「あたし嬉しいの、こうしてお姉さんの手でしばっていただいたのが」

「まあ、まこちゃんたら」

S子さんは、ちょっと眉の間にしわをよせました。

「あたし痛いって云われるのかと思ったわ」

「ううん、痛くなんかないわ。もっときつくしばってほしかったくらい。それに手くびだけじゃなく胸もギュッとしばっちゃって」

「えっ？そんなことしていいの？」

「してほしいわ。あたし、お姉さんになら、どんなことされたっていいわ。ね、胸もしば

っちゃって。さ」

「そんなこと云ったって」

困ってしまったという様子でした。

「あたし。しばられたことはあるけど、まだ人をしばったことないもの、分ないわ」

「ご自分がされたようにしあればいいじゃない？ね、お願い」

「仕様のない子ねエ。だけど……」

お姉さんはちょっと考えて

「このままじゃ、お服がしわになるわ。じゃあ、あたしの普段着にきかえなさい」

そういつて私の手首の縄をほどきました。

私は自分で服を脱ぎました。坐ったままシュミーズの肩をはずしてふと腕をみますと、やはり縄のあとがくっきりとまだ残っていました。手首よりずっと鮮明に。

「さ、早くこれを着るのよ」

私は自分で二の腕をさすっていましたが、

そのまま手をうしろへ廻しました。シュミーズがずり落ちて乳房がパツとあらわれましたが、そのまま眼をつむって

「このままでいいから、しばって！」

よほど、この手で乳房をかくしたいのをグツとこらえて、手をうしろへ組んだのです。

「まあ、まこちゃんたら」

お姉さんはメリヤスの肌着を、その上からかけて下さいました

「いいの、このままでしばっちゃって」

それをゆり落してしまいました。

「だって、まだ、こんなにあとが残ってるのよ。せめてこれだけでも着ないと」

と云うのを、無理に私は駄々をこねたので

す。S子さんも仕方なしといった風情で、私の胸に紐をまわします。でも、その紐は柔らかいS子さんのしごきでした。

「あら、これでしぼるの？」

「そうよ、でないと、またあとが残るわ。そんなの困るでしょう」

でも巾の広いしごきでギュッとしばられてみると、胸一面がひきしまって余計、緊縛感が感じられました。乳房の上をしめつけると

苦しくなるのを知っているの、S子さんはそこをさけて上と下へしごきを分けて縛り

ましたが、このまま倒されるとまるで乳房だけがよけい目立ってきました。

S子さんにされているんですもの、何も恥ずかしくなんかありません。自分云いきかせましたが、それでも、ひきしめられた上半身がともしびれるようです。お姉さまは

そんな私の姿態を真剣な面持でながめている

のです。

「お姉さま」

「え？」

「スカートはとらないでネ」

「ええ、とるもんですか。そんなことしないつもりよ。こうやっているだけ」

「でも」

「でも、なあに」

「ううん、でも、それじゃ、あたしのわがままネ。こうしてお姉さまに、この身を委せてしまったんですもの。どんなにされたって文句は云えないわ」

「馬鹿ネ、そんなひどいことしないわ」

お姉さまは、私をじっとみつめています。

「いやあ、そんなにみつめちゃ」

「だって、あたし人をしばったりしたの初めてなんですもの。いつも自分がしばられてるのに、ま、こちゃんがこうして私の目の前にしばられているのを見てると変に思うのよ」

「いやだわ。だって、あたし」

じっとながめられていないで、このままS子さんの腕の中に抱かれてしまいたい衝動にかられるのです。しばらくして

「それじゃ、いいものを見せてあげるわ」

とS子さんが整理だんすのかぎをあけて何

か出したようです。

「これよ」

「なあに？何の本」

S子さんはパラパラと頁をめくって

「ホラ、みてごらんさい」

「まあ？」

みると、それは若い女の人がしばられているグラビア写真だったので、びっくりしてしまったのです。

「ホラ、これもよ」

頁をめくると次もそうでした。立木に、やはり女の人がしばられています。雑誌にこんなところを写されているなんて。S子さんは頁をパラパラくりしました。どれもこれも、しばられている若い女性の写真ばかりでした。

私はこのとき始めて奇クを知ったのです。

伊吹真佐子さん、萩千恵子さん、村田那美子さん、川辺砂登子さん、坂口利子さん……。

その女性の名前までが、はっきり印刷されているではありませんか。

「まあ、こんな本があるんですの？」

「ええ、ま、こちゃんには毒だったかしら」

「まあ、あたし知らなかったわ。でも自分の縛られた写真をこんなにご本にのせられたりしてるこのモデルになっっている方なんか、ど

んな気持でしょうね」

「さあね」

S子さんは笑っていましたが、私は生れて初めて『K』と云う雑誌をみせられて只もう驚いてしまったのです。

「ね、もっとみせて」

私はS子さんに上半身を寝床の上におこしてもらい、グラビアの写真を次々とめくってもらって喰い入るように見ました。どの写真もリアルに、そして鮮明に写っていて、初めてみる私には大きなショックでした。

思わず、うなりたいたいようなしづられ方をしているのもありました。中でも特に感銘に残ったのは確か川辺砂登子さんだったでしょう。豊かな胸に二巻三巻、後手にされたところを後から恐らく異性のものと思われる黒いアミの手袋をはめた手がグッと乳房をつかみ悶えるようにさるぐつわをされている顔を仰向けているポーズ。下半身は写っていませんでしたので分りませんが、恐らくこの分では全裸にされているに違いないと思うのです。そんな姿態でしばられて異性に背後から抱かれるようにつかまれていると云ったこのポーズ。黒い手袋が異性だけに私は瞬間ドキッとなってしまうのです。

異性の前で全裸にされる。
そして、しばらくして自由の許されない身を
こんな……。

それと思うだけで、もう私は眼がくらむ思

いがするのです。私なら、とてもこんなにさ
れて失心しないではいられません。今までも
B子さんたちに、さんざんしばらくもしまし
た。そして今もこうしてお姉さまにしばらく



ています。勿論、私だって最初は恥ずかしく
て死んでしまいたいくらいでした。今でもや
はり恥ずかしいのです。でも、それらはみん
な同性の前でした。それをこんなに川辺砂登
子さんのようにされて……。それと思うだけ
で胸が早鐘をつくように高鳴るのでした。

私も今この川辺さんのようにしばらくしてい
るのですもの、若しここに居るのがS子さん
でなく知らない異性であつたら？

思うだけで、身の毛がよだつ思いでした。

「まあ、お姉さま。この方だったら、こんなに
されて」

そう云ったきり、あとが続けられません。

お姉さまは私の視線をたどって

「ああ、これネ。股間しばらく云うしほり
方なのね」

これも私には刺戟が強すぎました。だって
この方も完全に裸にされてるんです。写真は
うしろ姿ですが、このままでクルリとこちら
へ向けさせたら、この方どんなに……。私
までがカーッと顔に血が昇ってくるのを覚え
るのでした。お姉さまが次の頁をめくろうと
するのを

「いやあ」と云って視線が合うと思わずお姉
さまの胸にくずれて行ってしまいました。

「どうしたの？」

S子さんがいぶかるようにのぞきこむと

「ああ、この写真？」

どうやら私の意図を察したようなのです。

「こんなしばらく方がしてみたいの？」

「いやあ、いやだ。お姉さまのいじわる？」

益々恥ずかしくなつて、お姉さまの胸に顔をねじけて埋めこんでゆきました。

「大丈夫よ、こんなにしないから」

「だって、だって」

「いいわよ。サ、こっち向いて」

でも私、しばらく顔をあげることが、どうしても出来ませんでした。そんな私をS子さんはじっとみつめながら、やさしく肩をさすってそれから後手にされてゆわかれていた私の手首を曲げてみたり指先をまさぐったりしていました。でもお姉さまのことですもの、きつと私の心の中を見ぬいていらっしやる。

それがたまらなくて、あたし

「お姉さま、私にアクロバットさせて、逆えびにしぼっちゃってよ」

甘えて行つたのです。

「まあ、逆えびに？」

「そうよ、私の手足を一しよにしぼって。お姉さまのようにアクロバットをさせてみて」

「それは、まだ無理だわ」

「いいから、やってみて」

「かまわない？」

押問答の末、S子さんは私の身体をふとんの上にうつ伏せにねかせると足首をしばらく始めました。そのひもの端でしよう、手首にひもがかけられた感触がして、そのまま次第にたくられてゆきました。ひざが曲って太ももが次第に上にあがってゆき、その肉がひきつれてくると、今度は手首にひっぱられて両肩が床からはなれてゆきました。

「痛くない？」

S子さんの心配そうな声。

「いいの、もつとして。手足が一しよになるまでして」

「痛いわよ」

「かまわないわ、お姉さまにされるんですもの。あたし辛抱する」

そう云いましたが、さすがに次第にひきしぼられると二の腕と胸にまわしたしごきまが身体をしめつけて太ももがやけつくようになり、顔を歪めてそれに堪えました。

「あら、思ったより柔らかいのね」

私が悲鳴もあげないで身を委せているのでS子さんは半ば驚いているようでした。グー

ッと身体が逆にしぼられて、やっとの思いで手足を固定されますと、こらえていた息がもれ、

「苦しいの？」

「ううん、苦しくなんかない」

殆んどお腹の部分だけで体重をささえている格好になってしまいました。ちょっとつかれてそのまま横倒しになると、あごを思いきり上にあげて苦痛に堪えました。身体をそらせてヒシヒシと緊縛感が感じられます。

いつかB子さんに私の部屋で椅子を使って無理に身体を反らされてアクロバットをさせられたことがありましたが、あのときは身体の苦痛よりも、この姿を家族の者に見られやしないかと云う心配で一ぱいでした。今こうしてS子さんと二人っきりで存分に身体を曲げられていると、身体全体に緊縛感が感じられて、もうしびれるようにその感触に浸ってゆくのを覚えるのでした。

おふとんの上に半裸体の女が、こんな姿にしぼられているのを若し誰かがみたらどんなに思うでしょう。

「まこちゃん、辛抱しなくてもいいのよ。もう解いたげましようか」

S子さんは、そんな私をまだ心配そうに眺

めているのです。

「いや、もっとこのままで居たい。あたし、お姉さまに何だかもっともといじめられたいように思ってきたの」

「まあ、ま、ちゃんたら、いけないわよ」

「ううん、いいのよ。何なら、もっときつく逆に反らせてエ」

お姉さまは私が駄々をこねるのに驚いていましたが、

「そんなに云うと、ほんとに痛くするわよ」

半ば怒ったような表情で私のうしろにしゃがんだかと思うと、手足を一しよにしばった縄を持ちあげ再び私を俯伏せにさせて腰のところに片足をのせ、力をこめて私の手足をグーッと上に吊りあげるように持ちあげてゆくのです。

「あっ、うーッ」

思わずその苦痛に顔を歪めました。

「どう？ほら、痛いでしょ？」

S子さんは、それ見たかと云うようにおっしゃるのです。S子さんの足の裏が冷めたく私の皮膚に感じられます。

その感触に何故か私自身、虐げられた弱みと、ひどいことをされても、じっとそれに堪えてゆかねばならない運命に置かれているよ

うな気がして、ただ歯をくいしばってそれに堪えたのでした。

「もう、かんにんって、おっしゃい」

そう云われても、まだ私が返事をしなかったの、更にS子さんは本当に怒ったように力を入れました。

「ウーッ」

全身につっぱる苦痛に、このまま失神するのではないかと思われました。そのままた力をゆるめて下さらないので

「ううう、うーッ」

私は声をこらして、只もがくばかりでしたが、やがて

「強情っぱりね、あなた。あたしがくたびれちゃうわ。だって重いんですもの」

ドサリと再び横ざまになげ出されました。

無意識に手足を伸ばそうとして私の身体は依然として逆えびしぼりにされているので、手首と足首がギュッと縄につられてもげそうに思いました。

せめて胸をしぼったしごきがなくて両腕がまっすぐに伸ばせたら、いくらかでも楽なのでしょうに。そのまま大きい息をつくばかりでした。

お姉さまは、そんな私の足首だけほどいて

くれましたので、やっと身体がのばせて楽になりましたが、今度は仰向けにねかせられました。そして足首を揃えて持たれると、そのまま上に、まっすぐに持ちあげられました。スカートがパリりとまくれ上って

「いやン、お姉さま！」

そのまま両肩だけで身体をささえるまで、まっすぐに両足をもちあげられると

「こうすると身体の上り下りが、ずいぶん楽にほぐれるでしょう」

と云うのですが、私には太腿まで全然あらわになった自分の姿が恥ずかしくて

「早くおろして」

と、せいたものです。でも、これでほんとうに、いくらか身体の節々がほぐれてきたように感じられました。私はまだまだいつまでもしぼられていたかったのに、

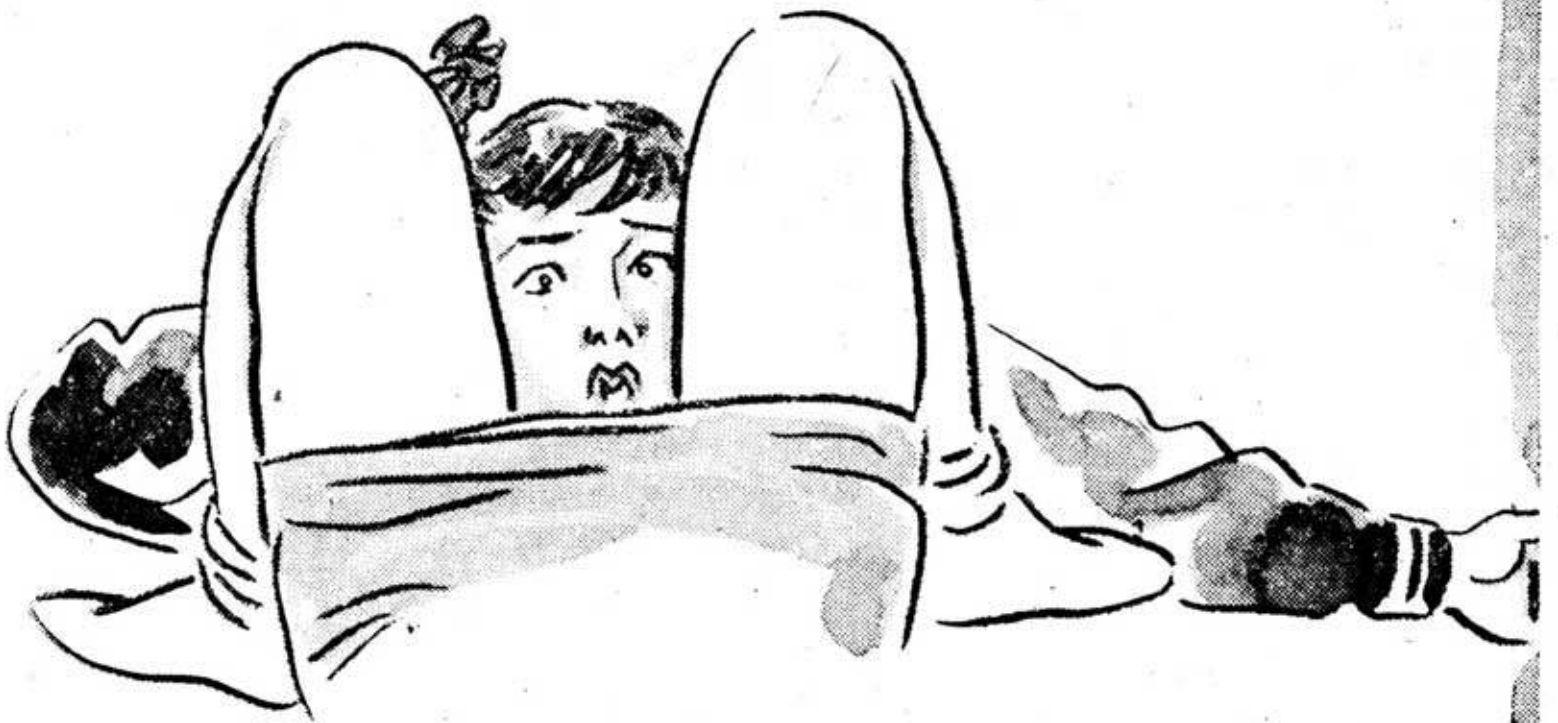
「少し休みましょう」

お姉さんは縄をとかれました。

私は自由になった両手で身体をなぜながら少し不満で

「今度はお姉さま、しばってみようかな」
って云って見たのです。

(この項おわり)



告白

女学生を組み敷く

三隅千恵子

「ね、澄子さん、面白いもの見せて上げましょうか？」

と、私が無気ない風を装い乍ら話しかけますと、何も知らない彼女は無邪気ににっこりして、

「ええ、何ですか？見せて頂だい」

と、答えるので。

「でも秘密だから、絶対誰にも云っちゃいやよ」

「あら！何でしょう。いいわ、決して

云いませんわ」

「ほんと？きつとよ。若しいったりしたら承知しないから」

「まあ！こわいのね。大丈夫、いいません」

「じゃ見せて上げるわ」

私はそう云うと、机の引出しの奥の方から『奇ク』の三月号を取り出しました。そして頁をくって西田仁様の『白痴いじめ』の挿絵の所を開くと、

「此れなのよ、珍しいじゃない？」

と、彼女の眼の前に差出しました。彼女は勿論、何の気なしに視線を落したのでしょうが、その挿絵に見入るなり、

「あらッ！まあ！」

と、とんきょうな声を挙げて、見る見る内に白い頬をぱっと桜色に染めるのです。無理ありません、未だ女子高校の三年生で、満十八才になって間もない澄子にして見れば、こんなあられもない絵を見せつけられたのは生れて初めてのことでしょう。私が見せた挿絵というのは、ウェイトレスのみどり、が新米のウェイトレスを仰向けに捻じ伏せて、胸のあたりへ両脚をふんばって、どっしりと馬乗りに跨り、ロケットのネックレスを引き千切る様にして奪い取った一瞬の光景が美しく画かれている絵なのです。彼女がびっくりするの当然でしょう。それでも澄子は矢張り好奇心はあると見えて、真赤になって恥じらい乍ら、時折りちらっと瞳を上げて、挿絵に見入るのです。ややしばらくしてから、

「まあ！これ何をしてるんですの？」

と、不審そうに尋ねます。

「あら！お分りにならない？」

「喧嘩でしょうか？」

「ホホホ……喧嘩じゃないわよ」

「じゃ、何でしょう？」

「この押え付けられてる方が新米のウェイトレスでね、ロケットのネックレスをしていたのよ。その中に彼氏の写真が入ってるって思ったものだから、みどりって云うウェイトレスが取り上げようってしたんですって。所が中々渡さないものだから、力づくで馬乗りに押えつけて奪い取ってるの。ほら、指の間にネックレスをつまんでるでしょう」

「あら！ほんと」

「でも、中を開いて見たら、空っぽで何にも入ってなかったんですって。それでみどりは「あんた案外、力がないわね」って笑い乍らやっとなげしてやったそうよ」

「あら、まあ、いやね」

「でも、みどりって云うウェイトレス、随分おてんばで勇ましいわ。ほら、右脚では腕を踏んづけて、左脚で首絞めてるのよ、きつと」

「ほんとに」

「押えつけられたウェイトレス、苦しがつて悲壮な顔してるわね」

「ええ、でもそんな人って、ほんとに居るんですの？」

「みどりの様な人？居るわよ。女ばかりの職場では珍しくないって、ちゃんと書いてある

わ。もっともって意地の悪い人だって居るんですって」

「あら、いやだわ。でも、どうしてそんな意地悪するんでしょう？」

「まあ！お分りにならない？」

「ええ」

「じゃ教えて上げるわね。女は自分より弱い者を負かすと、とってもいい気持がするものなのよ。だから馬乗りに跨って押え付けたりすると、ほんとに素敵なの」

「あら、まさか」

「まさかじゃないわよ。貴女そんなことなすったこと一度もないんですの？」

「ええ、ありませんわ」

「あら、惜しいわね。一度、誰かを押え付けて御らんになればいいわ」

「まあ！恥ずかしい」

「いいわよ、人に見られさえしなければ」

「だって、そんなこと」

「恥ずかしい？やっぱり」

「ええ」

「じゃ、いいことがあるわ」

「あら、何ですか？」

「今から二人で真似して見ましょうよ。私が新米のウェイトレスになるから貴女がみどり、

になるの」

「まあ！そしてどうするんですの？」

「ホホホ……みどりの貴女が私を押え付ける
のよ、馬乗りになって」

「あらっ！いやだわ」

「いいのよ、遠慮なんかなさなくて」

「だって、いやよ」

「そのかわり、それがすんだら、今度は私が
みどりになって、貴女を押え付けて上げる
わ。かわりばんこで面白いじゃない？」

「まあ！」

「ね、いいでしょう？」

「だって、恥ずかしい」

「大丈夫よ、二人だけなんだから。絶対秘密
よ」

「いやねえ」

「そんなこと、いいっこなしよ。じゃ私、横
になるわね」

私はそう云うと、座ぶとんを横の方へ押し
やって、机の前に仰向きになって寝転びまし
た。澄子は恥ずかしそうに真赤になり乍ら、
うつむいたままどうしてよいか分らず、もじ
もじしています。

「ね、これでいいわ。さあ早く押え付けて頂
だい」

「いやねえ」

「あら、まだそんなこと仰言るの？さあ、い
らっしゃいったら」

私も少しじれったくなって、横になったま
ま右手を伸ばすと、澄子のセーラー・スカ
ートをつかんで手元へ引き寄せようとしまし
た。その拍子に彼女の愛らしい丸い膝頭が、
めくれたスカートの下からちらっとあらわに
なるのです。そうまでされては、彼女もこぼ
めなくなったのでしょう。割に素直に膝をず
らせて、私のすぐ右側にすり寄ってきました。

「さあ！馬乗りになって」

「でも」

「まあ！はがゆいわね。私の云う通りにすれ
ばいいのよ。脚をふんばって跨るの」

「いやねえ」

彼女は未だしばらくはためらっていました
が、私があまりしつこくいうものですから、
とうとういやともいえず、

「こうですの？」

と、恐る恐る右膝を浮かして、私のおなか
のあたりを跨ぎます。と同時に彼女の全身の
重味が、そおと重苦しくのしかかって来ま
した。

「そうよ、それでいいわ」

私は澄子に馬乗りに組み敷かれた恰好で、

下から彼女を見上ると、彼女は耳たぶの付け
根までぱっと赤らめ乍ら、まともに私を見る
ことも出来ず、横の方へ瞳を向けています。
セーラー・スカートの下から、可愛い膝が両
方ともものぞいていました。

「あら！貴女、案外重いわね」

「いやですわ」

「さあ、みどりの真似をするのよ」

「まあ！どうですの？」

「ほら、右脚で手を踏んづけていたでし
ょう？遠慮しなくていいの。あの通りにして
よ」

「あら、いやねえ」

「そんなこと、いいっこなしよ。ねえ早く」

「そう？」

澄子は又ためらいを見せ乍ら、仕方なく膝
を僅かに持ち上げて、私が差し出していた左
腕の上に乗せかけます。それでも矢張り遠慮
をして、ぐいっと強く踏み敷くというのでは
ありません。

「そうよ、そうよ。そして反対の脚で首絞め
るのよ」

「あら、そんなこと出来ませんわ」

「まあ！どうして？」

「だって、そんなこと」

「そう、残念だけど仕方がないわね」

「もう、いいでしょうか？」

「あら、だめよ、今からなの」

「あら、何ですの？」

「だって私、新米のウェイトレスの真似して暴れるわよ。貴女、跳ね返されないように用心してね」

「まあっ！いやですわ」

「ホ……私跳ね返したら、今度は私がみどりになって押え付けて上げる。私だったら貴女みたいに遠慮なんかしないわよ。ギューギューひどい目に会わせて上げるから覚悟していらっしやい」

「あら、いやよ。こわいわ」

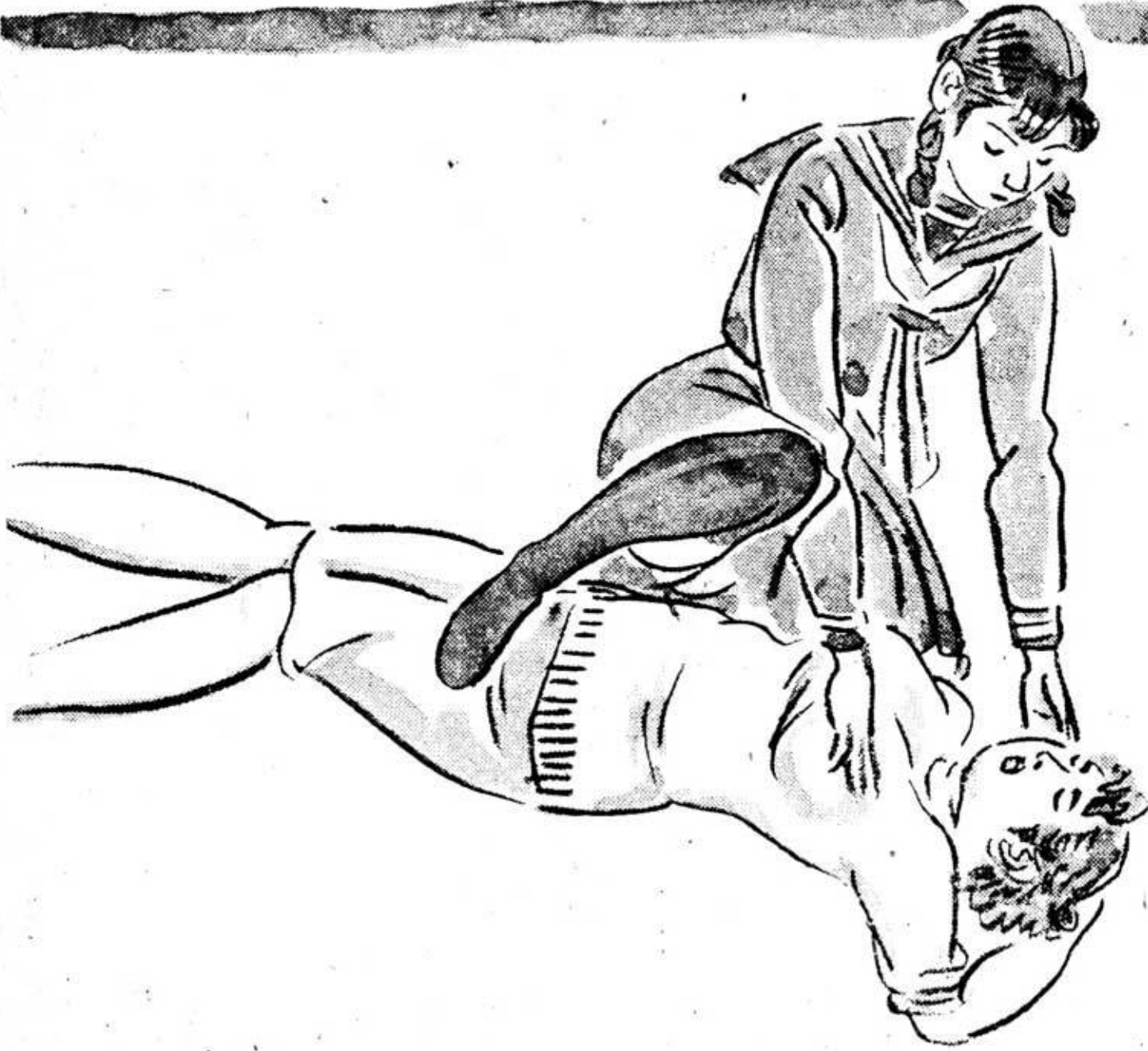
「だったら、私に跳ね返されないように、しっかり押え付けてくっちゃだめよ」

「まあ！そんなこと」

「ねえ、馬乗りってどう？いい気持？」

「いやですわ」

「あら、かくさなくてもいいこと



よ。素敵でしょう？」

「いやよ、ひどいわ」

「ね、跳ね返してもいい？」

私はそう云うと、二、三度、身体を左右に捻じって澄子の膝の間で身もたえする真似をして見ました。彼女は本気になって私を起こすまいと押え付けてはいませんし、膝に敷かれていた左腕も直ぐにするりとすり抜けてしまいます。私は最初から、彼女を跳ね返すのはそれ程六ヶ敷いとは思っていませんでしたから、別にあわてる様なこともなくすっと右手を伸ばすと澄子のセーラー服の襟のあたりをぎゅっと掴んで置いて、左手では彼女のセーラー・スカートの腰のあたりを強くにぎりしめました。すると、

「あらッ！」

かえって私の上に跨って

いる澄子の方がびっくりしたのでしょう。何をされるかと不安な表情で、ちらと私を見下しています。

「さあ、思い切り暴れるわよ」

私はぐっと腕に力を入れて、彼女の襟元を手元に引き寄せます。彼女の上体がそれにつれて前かがみになり、上気した顔が、私の顔の直ぐ上に近付きました。私は内心しめたと、思っ、今度はスカートから放した左腕を、彼女の首の後ろへ廻して巻きつけます。続いて右腕も。もうこれで彼女は私の上に両脚を拡げて跨ってはいるものの、身体は完全に私の胸のあたりへうつぶせに重なったまま、両腕の間にがっちり首を抱きすくめられて、逃げようにも方法がありません。

「ああッ！いやよ！放して」

彼女は顔を私の胸に押しつけられ、首を絞められるのが苦しいのでしょう。そんなことを云い乍ら、しなやかな腕で私の腕を振りほどこうとします。でも勿論、私は容赦しません。ここぞとばかり、両脚でぱっと畳を蹴って反動を付け乍ら、えいっと力一ぱい全身を横にひねりました。

「あッ！」

すると、折り重なっていた二人は、そのま

ま横に転って、一瞬の後には巧い工合に私が上になり、仰向きになった澄子の首をかいこんだまま、押しかぶさる様にのしかかっています。此うなれば、彼女を組み敷くのは雑作もありません。先ず両脚を開いて、膝と膝の間に彼女をはさむ様にして跨ってから、やっ、と両腕を首から外して、上体を真すぐに起しました。

「どう？とうとう跳ね返したわ。今度は私が、みどりになる番よ。ごらんない」

私は澄子のおなかの上に、どしっとお臀をのせて、完全な馬乗りの姿勢で組み敷くと、ほっと一と安心、得意な気持で上から彼女を見下していました。

「まあッ！ひどいわ」

彼女は、同性に押え込まれるのは初めてなのでしょう。可哀そうな位に真赤になって、恥じ入り乍ら、はしたなく抵抗も出来ず、殆んどされるがままになっています。私は少しずつお臀をずらせて、にじり上って行きました。「さあ、みどりの真似をするわよ。手を借してね」

澄子の左の手首をつかんで畳の上に押え付け、右の膝頭をのせかけて、ぐっと踏み付けにします。私の場合、彼女と違って遠慮などは

しませんから、きつと痛がることでしょう。「あッ！痛いわ。よしてよ」

案の定、彼女は眉を寄せ乍ら、一瞬、苦痛の表情を浮べます。もうその時には、私は澄子のおなかの上からずり上って、何時の間にか、ふっくり盛り上った乳房のあたりへ、まともに跨っていましたから、その痛さが加わっていたのかも知れません。でも、そんな事位で彼女を許してやるわけには行きません。続いて私は左脚を突き出して、足先を彼女の肩の上まで踏み出しました。両膝を開いて馬乗りに跨った時よりも可成り全身が不安定になった気持がしましたが、こうしなくては、挿絵のみどりの通りの姿勢はとれないのですから、仕方がありません。それから左脚を右の方に倒して見ると、澄子の細っそりした首に巧く脚首がかかって、挿絵そっくりのポーズになっています。でも、自分でやって見ると、あまり楽ではありませんし、左脚に力を入れて彼女の喉首を絞めようと思っても、中々力が入りません。その上、未だ澄子が烈しく抵抗しないからいい様なものの、必死に暴れ始めたら忽ち私は跳ねのけられそうな気がするのです。それでも私の左脚で幾分かは、彼女の喉首が絞められたのでしょう。

「苦しいわ。放して」

二、三度、私のお臀の下で彼女の肢体が、くりくりと動きました。もう此うしては居られません。私は素早く伸ばしていた左脚を折り曲げて、もう一度、思い切りにじり上って行きます。私のあらわな太い膝頭が、彼女の両肩を乗り越えて、柔い二の腕のあたりを踏んづけていました。それにつれて彼女の上気した顔が、私の太ももの間にはさみ込まれます。そして次の瞬間、私はついに彼女の細くくびれた喉首の真上に、どしとお臀をのせて、馬乗りに跨っていました。彼女の顔は、私の太ももと太ももの間に、ぎゅっと完全にはさまれて、丸味のある顎のあたりが、私の股の間からのぞいています。

もうこれで私の大好きな押え込みが出来上がったわけですが、高校生の澄子が、此んな目に合わされてどうするかが、私には大変な楽しみでした。彼女だって、きつとじつとしてはいられないでしょう。何んな風に、あばれもがくか、考えただけでも、ぞくぞくする程嬉しくなって参ります。

「どう？恥ずかしいなら、目かくしをして上げるわね」

私はそんなことを云い乍ら、たくれ上って

いたスカートの裾を持ち上げる様にして、私の太ももと、その間にきっちりにはさまれている澄子の顔を、すっぽりと蔽いかくしてやりました。もう彼女の顔は全然、見えません。ただ両ももの中央がふくらんで、そのありかが分るだけなのです。でも澄子は何んな気持で居るでしょう。私のスカートの中で何一つ見えず、全身の重味で喉首を絞め上げられるのも、たまらないかも知れません。

「さあ！くやしかったら、じたばたしてもいいわよ。貴女が跳ね返せたら許して上げる」
「まあ！ひどいわ。よしてよ」

澄子は脚をばたつかせて、もがき始めました。こう来なくては面白くありません。私は彼女の喉首の上に跨ったまま、そっと後ろを振り向いて見ました。思った通り、紺のセーラー・スカートが見るかげもなくめくれ上って、薄桃色をした愛らしい素足が、白いズロース一枚のお臀のあたりまでむき出しになり、ドタンパタンと畳を蹴っています。でも私はそんなこと位ではびくともしません。

「あら、頭かくして、脚は丸る見えよ。面白い恰好だわ」

私は態と意地悪くからかってやりました。

「いやっ！いやっ！放して！」

「ホホホ……跳ね返さなくちゃだめよ」

「ひどいわ」

「あら、もっとひどいことして見るわね」

私はそんなことを云い乍ら、つと右手を伸ばすと、太ももの間にはさんだ彼女の顔の真中、丁度、鼻のあたりを、かぶせたスカートの上から手さぐりで、ぐっとつまみました。もうこれで彼女は、鼻で息をすることは出来ません。スカートにかくれて見えませんが、きつと彼女は唇を開いて「ハア、ハア、ハア」と苦しがつていることでしょう。見れば丁度口のあたりのスカートが、ふわふわと上下に波打っている様です。そこで今度は、左手を伸ばして掌を拡げたまま、唇の真上をぎゅっと押え付けてやりました。とたんに、
「あ……あわっ！うっ……うっ」

苦しそうな呻き声が、スカートの下から聞えて来ます。と同時に彼女の肢体が、私のお臀の下で、くねくねと烈しくもだえるのです。

無理ありません。鼻をつままれ、唇をふさがれては、彼女だって息が出来ず、声は出せず、苦しまぎれの抵抗なのでしょう。勿論私だって、ほんの二秒か三秒位の間で、両手を放し、呼吸をさせてはやりましたが、その一瞬の快さはほんとに何とも云えません。内

股にはさみ込んだ顔が僅かに動く度毎に、丸い顎が、くりくりりと烈しく動くのですから、私は思わず、ずーんと全身がしびれる様な錯覚を感じます。ですから私は、同性を首尾よく馬乗り組み敷いたら、必ず喉首の上に跨って、相手の顔を太ももの間にはさみ込んで見たくなるのでしょう。

それに私だけでなく、女性は大抵こうするのが好きらしいのも、当然なことに思えてなりません。

澄子とは見れば、息をとめられたのが、些かこたえたのでしょうか、スカートの下に顔をかくしたまま、早い呼吸をくり返しています。私は可愛い彼女を完全に屈服させている一種の優越感に得も云われない満足を覚え乍ら、一層サジスチックな興奮にかられて来るのをどうすることも出来ません。もう後になって彼女から怨まれても、構わないと思いましたが。そこで私は両手を前に伸ばして、彼女の頭をすっぽりとスカートで蔽いかくしたまま、両手を頭の後ろへ廻して、指と指をしっかりと握り合います。それから上体をぐっと起して、その力で、うんと彼女の後頭部を両手で持ち上げて見ました。彼女は、「うっ！」

と一声呻いて、やっきになって私を下から突き上げようとはしますが、彼女のか弱い力では何うすることも出来ません。何故って彼女の首の上には、五十キロ余りの私が、まともにどしりと全身の重味をかけて跨ってしまし、両腕までも私の太い膝頭に、ぎゅっと踏み敷かれているのですから、上半身はまるではりつけにでもされた様に、身じろぎ一つ出来ないのです。そこを頭だけを持ち上げられては、彼女の顔はいや応なしに、うつむきになって、私にびったり押し付けられてしま

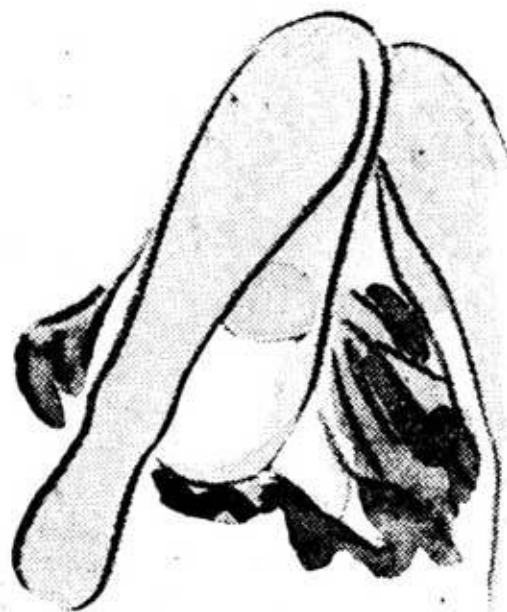
います。

「うっ！うっ！うっ……うっ」

もう一度、彼女の苦しまぎれの呻き声が、スカートの下から聞えました。と同時に今までの彼女が未だ見せたこともない位の烈しさで、必死に暴れ始めます。

「う……うっ！」

かすかな呻き声が聞えました。彼女にして見れば、苦もんの余り声を出そうとしているのかも知れませんが、それすら許されず、僅かな呻き声がせい一ぱいの所なのです。どん



なに苦しいことでしょう。何んなにいやらしいことでしょう。同性に、口や鼻を蔽われて息の根をとめられる位、耐えがたいことは無いかも知れません。何一つ見えないスカートの中で、彼女は私からそんなひどい目に合わされているのだと思うと、私は云い様もない誇らしさを感じます。彼女の苦しまぎれの呻き声で、僅かな息がスカートの中で、むうーっと熱く伝わって来ます。

「どうだ、参ったか」

私はやっと両手を放し、それから、彼女の顔の上にすっぽりかぶせていたスカートをうんとたくし上げて見ました。見ると澄子の可愛い顔は、まるでゆでだこの様に真赤になり何時の間にか半泣きになって、汗ばんだ頬には涙のあとが光っています。余程の苦しきだったのでしょうか。未だ唇を開いたまま

「ハッ、ハア、ハア、ハア」

瑞ぎ瑞ぎ呼吸をくりかえしています。でももうじたばたする元気はないのでしょうか。やよしばかりすると、たまりかねた様に、

「ううっ……ううっ」

と、しゃくり上げて、とうとう泣き出してしまいました。私はそうした彼女を眼の前にしますと、何となく矢張り可哀そうな気がして



もう此れ位でよさなくては、と思いました。

完全に屈服させるだけは屈服させましたから、思い残すことはありません。

「だめね、泣かなくてもいいわよ」

「ううっ、うっ」

「どう？いい気持だった？」

「……………」

「じゃ、もう一度だけで許して上げるわ」

私はそう云うと、たくし上げていたスカ

ートの端を、ウエストにはさみます。少しく残酷すぎるかも知れませんが、最後にとどめをさす時だけは、脚もあらわに、彼女の悲痛な表情を見たいと思ったからなのです。用意は出来上りました。今度は膝に敷いている彼女の腕に両手を添えて、幾分、前かがみの姿勢で、ぐっと押え付けてやります。

「いいこととして上げるわよ」

私は少しお臀を浮かせました。そして一歩

膝をずらせて前の方ににじり上ります。これで私の大きいお臀は、両脚を開いたまま、丁度、彼女の顔の真上に来ています。私は得たりとばかりに、そのままぺたっと一と思いいお臀を落としました。すると巧い工合に、私のお臀は完全に彼女の顔の上に、まともに乗っかってしまいます。

ほんとに他人が見たら私を気狂いさだと思いかも知れません。

優しくて美しいはずの女性が、同じ女性の顔をお臀の下に敷きつぶして、馬乗りに跨った姿は何んなものでしょう。自分乍ら恥ずかしくて、かあとなる位なのですが、いざ同性を組み敷いて見れば、最後にはこうせずに居られません。それ位い私は、同性の顔の上に跨ることに、無上の喜びを感じているのです。

勿論、私だって始めから、此んなあられもない真似が出来たわけではありませんが、もう大分前、友人の首の上に跨っていた時、烈しく下から突き上げられた拍子に、お臀が前にずって、無意識に相手の顔にどっしり跨ったのが、きっかけとなって、同性の顔を敷きつぶすことに最高の喜びを満喫する様になりました。澄子にしても、此れ以上の屈辱は

ないかも知れません。

「さあ、どうだ」

私は上からお臀に敷いた彼女の顔をのぞき込みました。

今度は前以てスカートをたくし上げて置きましたから、彼女の顔は直ぐ眼の下に見えますが、鼻から下は私のお尻に完全にかくされて、眼から上だけがやっと私の股の間からのぞいているだけなのです。

「う……………」

彼女は必死になって呻こうとするのでしようが、それすら声になりません。僅かに、くりくりと彼女の顔が、右に左にと動きまわりました。

火の様に真赤になった彼女の額には、じっとりと脂汗が浮び出て、青い静脈がかすかにすけて見えています。つぶらな瞳は何時の間にか血走って、涙が流れ出しています。唇も鼻も私のパンティー一枚のお尻にぴったりふさがれて息はつまり、声にもなりません。彼女がワッと泣き出したのは、私にもよく分りました。

断末魔のあがきと云うのでしうか、私はジーンとしびれる様なくすぐったさをお尻のあたりへ直かに感じ乍ら、ぱっと彼女の顔の

上から飛びのきました。其の瞬間、

「ワッ！」

彼女の泣き声が一度に聞えて来ます。

私も少し気の毒な気がしないでもありませんでした。首尾よく彼女を屈服させた一種の優越感と満足感に酔っていますから、それ程にも思えません。むしろ「いい気味！」と云う気で、スカートの乱れをかき合せ、ゆっくり息を入れてから、彼女の方を振り向きまわりました。

彼女は、すっかりふらふらのグロッキーなのでしよう。上体を起こす元氣もなく、両手で顔を蔽ったまま、肩をふるわせて泣き入っています。セーラー・スカートは未だめくれ上ったまま、すんなりと形のよい薄桃色をした素足が、白いブローズ一枚の丸味のあるお尻のあたりまで、しどけなくむき出しになっています。もう此れで澄子も、私が馬乗りに組み敷いて、顔をお尻に敷きつぶした同性の一人になりました。

流石に私も疲れて脚をくずして座ったまま、暫くはぼんやりと、そうした彼女に見入っていました。

(おわり)